

先進エイジフリー社会を目指して

～自画像からの提案～

【経験豊かな高齢者も活動力豊かな若者も共に協力し合って、
自然と共生しながら生活していく活力ある社会】

2003年5月

人間環境活性化研究会
ワーキンググループ WG3

はじめに

この報告書は、人間環境活性化研究会（以下 HEART の会という）ワーキンググループ 3(以下 WG3)が、平成 11 年 11 月 18 日～平成 15 年 5 月 11 日の足掛け 5 年の長きに亘って、発足当初 16 名、最終的には 11 名のメンバーで、都合 39 回の集会を重ね、メンバーからの資料提供、参考文献、参考になる見方・考え方などの文書提供を見ながら、“先進エイジフリー社会を目指して”をテーマに、「少子高齢化などの新時代の転換構造を探り、夫々の社会参画、適応について考える」ことを課題として、まとめ上げたものである。

本ワーキンググループは、上記のテーマで、HEART の会が第三弾として立ち上げたものであるが、平成 8 年 7 月に“人間活性化と環境～自立社会を目指して”をテーマにまとめ上げたワーキンググループ 1 (HEART の会 WG1：藤田慶喜主査)、平成 11 年 4 月に“汎用材料と環境問題～プラスチック材料が環境問題を克服するための方向を探る”をテーマにまとめ上げた (HEART の会 WG2：石岡領治主査)に続く HEART の会 WG3 である。

また、本 WG3 の発足に当たっては、HEART の会理事会と WG2 メンバーの有志(石岡領治、圓山壽和、藤井 勲、荒井康全)との間で何度も会合を重ね、そこで高齢者を課題とした新たなワーキンググループを発足させる結論に至った。

発足当初は、第 1 章にあるように、高齢者に関する問題の投げかけと共有する話題などを討議し、WG3 としての共通認識を図るため、「予備コンテキスト」として、

- (1) 問題の投げかけ、
 - (2) 取り組み方について、
 - (3) 通産省ガイドラインが示す切り口について、
 - (4) 自己紹介に現れたキーワードは何を語るか？
- を討議する会合を重ねた。

その結果、第 2 章にあるように、「参考になる見方・考え方」を中心に、メンバー各位よりの資料提供を受け、

- (1) ワーキンググループが展開する作業、
 - (2) 参考になる見方、
 - (3) 参考になる考え方(私のワンポイント)、
 - (4) 定義など(言葉との出会い、エイジフリーの定義)、
- をまとめることとした。

第 1 章及び第 2 章の進行につれ“先進エイジフリー社会を目指して”を語るためには、WG3 参加メンバーの「私のエイジフリー、私の自画像」を率直に浮き彫りにして見るほうが良いということになり、第 3 章では「私のエイジフリー、私の自画像」を中心にまとめ上げることにした。したがって、第 3 章には、参加メンバーの“誕生から幼年期、小学、中

学、高校、大学時代、社会人になってから、定年を迎えてから”の経歴(自画像)を綴ったものを掲載した。自画像については、結果的に、参加メンバーが HONEST(誠実)に語ることにより自らの充実感を得る事になったと思う。

第4章では、第1章の「予備コンテキスト」、第2章の「参考になる見方・考え方」、第3章の自画像と関連付けながら、参加メンバーから折に触れて「私の提案」を提出して貰うことにした。

第5章では、WG3としては、今までのWG1及びWG2の約2倍以上の長きに亘り討議を重ねてきたことから、「長い旅の末；学習の感想」を書き綴ってみることとした。平成11年11月～平成15年5月とは、あらためて「長い旅」であったと思う。

まとめの段階で、テーマを内容に合わせて、「先進エイジフリー社会を目指して」、副題を「自画像からの提案」とし、「経験豊富な高齢者も活動力豊かな若者も共に協力し合って、自然と共生しながら生活していく活力ある社会」の実現を目指すことにした。

最後にはWG3の世話役であった荒井康全が「まとめ」を書き添えることにより、長い旅の末の世話役として総括することとした。

HEARTの会WG3の参加メンバーは次の通りである。

HEARTの会WG3（本文では[ハートの会WG3としているところもある]

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・主査荒井康全・副主査石井登喜男・副主査圓山壽和・安達勝雄・植竹敏夫・北島道俊・北島道教・栗原 一・寺川 彰・藤井 勲・森山憲夫 [敬称略] |
|--|

また、WG3の参加メンバーでの討議の中から、今回の検討成果を後に残すべく、まとめを行っている段階で、このような報告書に仕上げる事が提案された。この報告書をまとめるに当たって、HEARTの会の安立一郎代表理事及び関係各位には格段のお世話になり、心より感謝申し上げます。

平成15年5月吉日

HEARTの会WG3 主査
荒井康全



WG 3 総括終日集会 (於・代々木倶楽部／新日鉄)

(後列)

北畠道教

安達勝雄

植竹敏夫

荒井康全

北畠道俊

寺川 彰

藤井 勲

(前列)

栗原 一

森山憲夫

圓山壽和

石井登喜男

目次

はじめに	i
第1章 ワーキンググループについて	1
1.1 本ワーキンググループの意図	3
1.1.1 問題のなげかけと共有	3
1.1.2 ワーキンググループを進める上での共通意識	4
1.2 予備コンテキスト	5
1.2.1 問題のなげかけ	5
1.2.2 取り組み方について	5
1.2.3 ガイドラインが示す切り口について	5
1.2.3.1 社会的な環境	5
1.2.3.2 キーワード	6
1.2.4 自己紹介に表れたキーワードは何を語るか?	7
1.2.4.1 キーワードの構造を見る	7
1.2.4.2 視点のサンプルについて	8
参考図	9
第2章 参考になる見方・考え方	11
2.1 ワーキンググループが展開する作業	13
2.1.1 社会環境問題構造と人間環境問題構造	13
2.1.2 身の回りの事象をみる、参考になる考え方を紹介しあう	13
2.1.3 自分を観察すること、自画像を描く	14
2.2 参考になる見方	15
2.2.1 身近の事象と感じ方 アンケートAの分析	15
2.2.2 参考になる資料	19
①文献	19
②メンバー作品	27
2.3 参考になる考え方～私のワンポイント	32
2.3.1 荒井康全「こころの解毒剤はあるか？」	32
2.3.2 荒井康全「戦場に架ける橋」と「虹に架ける橋」	34
2.3.3 荒井康全「エイジフリーの脳内景観」	36
2.3.4 荒井康全「歌曲「いわしの」歌ってありますか」	38
2.3.5 寺川 彰「個と全体」	40
2.3.6 石井登喜男「コンサルタント失格の弁」	42
2.3.7 北畠道俊「規範、そして規範なき社会の問題」	45
2.3.8 植竹敏夫「自由論」	47

2.3.9	栗原 一「ある教育者の悲劇」	50
2.3.10	藤井 勲「人生の教訓」	52
2.3.11	藤井 勲「環境消費の勧め」	55
2.3.12	藤井 勲「有害化学物質削減に向けて」	58
2.3.13	圓山壽和「公共的理性」	60
2.4	定義群	61
2.4.1	言葉との出会い	61
2.4.2	エイジフリーの定義について	71
第3章	私のエイジフリー、私の自画像	73
3.1	北畠道教「私の自画像と私のエイジフリー」	75
3.2	安達勝雄「私の自画像」	83
3.3	北畠道俊「わたしのエイジフリー、わたしの自画像」	91
3.4	寺川 彰「私の自画像」	100
3.5	栗原 一「私の自画像」	107
3.6	石井登喜男「時代の影響を受けた私の仕事」	113
3.7	藤井 勲「わたしの自画像」	117
3.8	森山憲夫「私の出来事と日本の出来事」	126
3.9	荒井康全「習作自画像」	132
3.10	圓山壽和「私の自画像 サブタイトル…最近の心境」	151
3.11	植竹敏夫「個人歴」	156
第4章	先進エイジフリー社会を目指した私の提案	165
4.1	「エイジフリー社会実現のための私の提案」まとめ	167
4.2	北畠道教「先進エイジフリー社会を目指して私の提言」	168
4.3	安達勝雄「エイジフリー社会に関する私の提案」	170
4.4	北畠道俊「エイジフリー社会実現のための私の提案」	173
4.5	寺川 彰「先進エイジフリーへ向けて私の提案」	175
4.6	栗原 一「エイジフリー社会の実現のための私の提案」	176
4.7	石井登喜男「エイジフリー社会実現のための私の提案」	177
4.8	藤井 勲「先進エイジフリーに向けて私の提案」	178
4.9	荒井 康全「ハイデッガーの三つ退屈とゲーテのミッシング・リング」	180
4.10	圓山壽和「私の提案を書くにあたって」	182
第5章	長い旅の末 ～学習の感想～	185
5.1	北畠道教「学習の感想」	187
5.2	安達勝雄「WG3に参加して」	188
5.3	北畠道俊「長い旅の末；学習の感想」	189

5.4	寺川 彰「学習の感想」	190
5.5	栗原 一「長い旅の末；学習の感想」	191
5.6	石井登喜男「WG3に参加して学んだこと」	192
5.7	藤井 勲「長い旅の末；学習の感想」	193
5.8	圓山壽和「学習の感想 -WG3に参加して得たもの-」	194
5.9	荒井康全「長い旅の末(主査としての感想)」	195
第6章	主査のまとめ	199
添付資料	ハートの会WG3資料	203

第1章 ワーキンググループについて

第1章 ワーキンググループについて

1.1 本ワーキンググループの意図

1.1.1 問題のなげかけと共有

われわれは、いま、時代の大きな境目にあり、自らの将来の姿である「自画像」を描けずにいるといわれる。いつの時代にも、その時代特有の課題をその時代が投影するであろうが、われわれの場合は、少子高齢化の進展、環境制約の深刻化、世界規模での市場単一化、技術革新に伴う経済社会の変容などが上げられ、また、2001年9月11日を契機とする国際テロリズムによる防衛に基づく、新たな枠組みの危機にも直面している。

さて、少子高齢化に焦点を当て、労働白書（平成12年度）を眺めると、65歳以上の人口は1999年で16.7%、2015年には25%を超え、国民の4人に1人は高齢者になる。

また、1999年まで、完全失業率は4.8%台で推移してきたが、これを60～64歳の数字を取ると10%台となっている。従来の中心的労働力であった年齢層の労働力は将来確実に減少し、各種社会負担は増加の方向であるから、わが国の持続的な発展を考えると60歳以上の層の社会参加が不可欠となる状況にあると思われる。

そこで、この世代のひとたちに焦点を当て、その人たちが蓄積した知識や経験が有機的に結合され、また多様な選択肢を持った社会参画・就業などの機能と構造を持った社会を想定してみる。それをいま、仮に「先進エイジフリー社会」と呼ぶ。そのような社会を描く方法は二つ考えられよう。ひとつは、社会経済制度上で実現されるべき像であり、もう一つはそこに生きる人間の像パラダイムである。

本ワーキンググループは、上の二つについてのいくつかの検討を経たが、最終的には後者の人間に焦点をあて、そこに生きるであろう自画像を描き、メッセージとして伝えることを試みる。これは、現在「この世代」にある個人が、自らを同時代的歴史材として、みずからを観察し、ワーキンググループという共通の場で考察し、その結果 それらの未来的延長として、描像をしてみるものである。これにより、これらの実現のための意味と方向性を獲得することを期待するものである。

1.1.2 ワーキンググループを進める上での共通意識

メンバーの多様な背景のなかで、どのような「土俵」を設け得るであろうか。幸いなことに HEART の会は、平成 8 年の WG 1（藤田ワーキンググループ）以来の「土俵」形成の経験があり、また今回の課題の特異性をも考慮して以下の 7 項目を共通意識として合意し、作業をすすめた。

- *自由に話す。話したことは、かならずドキュメントで残してもらおう。
- *これまで生きてきたことにおいて、これから生きることにおいてを意識する。
- *自分の中で認める自分の価値・評価と他人が認めるそれらを意識する。
- *いま、話していることは、誰の視線を通したものであるかを意識しておく。
- *強者と弱者問題の視線をもつ。
- *意識と非意識問題の視線をもつ。

そして

- *可能なかぎりにおいて自分にオネストであることをひそかに誓う。

1.2 予備コンテクスト

1.2.1 問題のなげかけ

最初の段階で、自由討論によりその結果を図.1「WG3 自己紹介からの KEYWORDS 構成－1～3」（資料 WG3-029）を作成した。

社会構造問題とパラダイム転換問題のふたつのグループ分けによる討論を目指した。しかし、回を重ねるに従い、「エイジフリー社会」への到達方法は一定の方法があるわけではなく、また専門の研究機関が行う種類の体系構築的な方向より、むしろ各人が持っている考え方を基本にした方が分かり易く、このワーキングの特質に適しているという結論に至った。各人自身を観察し、また概観を行い、これをエッセイ（これを「自画像」と呼んだ）として提供しあうことにした。これを使って、そこに上げられた話題項目の問題としての共有、検証、理解そして方向性・方策を考えることにした。

ここに至る思考の課程は、実に試行錯誤的であったが、以下に「予備コンテクスト」として作業のながれをまとめておく。

1.2.2 取り組み方について

本 WG の発足にあたり、HEART の会理事会と WG2 メンバー有志(石岡、圓山、藤井、荒井)との間で会合を重ね、高齢者を課題とした新たなワーキンググループを発足する結論に至った。その折に高齢者問題の切り口を、広く概観しておくための参考資料として、通商産業省産業構造審議会「21世紀経済産業政策の課題と展望～今後の検討のたたき台」を利用し、ガイドラインを作成した。(資料 WG-000) ただしこの資料自体がひとつの提案であることから、逆にこれによってメンバーの自由な思考が拘束を受けることを懸念し、単に考える対象になるであろう項目を上げ、全貌をみておく程度の紹介に留めた。

ちなみに、原本をメンバーに(資料 WG-095)として配布したのは、初回からほぼ1年を経た第10回集会(平成12年9月)であった。

1.2.3 ガイドラインが示す切り口について

ガイドラインが示す切り口を西暦2000年と2025年と対比して(社会的な環境)とそのための(キーワード)を取り上げる。

グループの意見としては、認識上は多分異論のないところであるとして、むしろ近未来(過渡的な時期)をどう捉えるかに、作業意識上の焦点が置かれた。

1.2.3.1 社会的な環境

<2000年での現状について>

- ・資源の大量摂取・物質の大量廃棄排出型システム
- ・高成長前提の若者依存型職業システム
- ・自己完結型経済システム

(個別に人材、技術、情報などの諸資源を保有し、評価、リスク対応などを独自に措置するシステム)

(国家単位市場枠組み)

- ・技術革新に伴う経済社会システム

< 2025年の状態として >

- ・資源の最小摂取・物質の「ゼロエミッション」型システム

(地球規模での問題の顕在化)

- ・創造的稀少価値のエイジフリー型職業システム

(少子高齢化の進展)

- ・解放連携型経済システム

(機会、情報、評価がオープンで、社会全体がリスクと費用分担を最小化するシステム)

(世界単一市場枠組み)

- ・技術革新に伴う経済社会システム

(バイオ、情報、新材料、など)

- ・参考資料：資料 WG-096

通商産業省産業構造審議会 「21世紀経済産業政策の課題と展望～今後の検討のたたき台」

通産公報 No.14312～14315 (平成11/6/14,15,16,17)

1.2.3.2 キーワード

- * 「超高齢化社会」 (労働力の高齢化は不可避)
- * 「ワークフォース」
(老人福祉負担問題 (welfare) から高齢者就業負担問題 (portfolio 社会))
(‘希望すれば ‘働ける’)
(弱者がはたらく権利保護など)
- * 「会社 NPO」
(‘仕事場’ は生きがいの場)
(なぜ、会社が好きなのかの掘り下げが必要)
(さらに、ひとの生きがいとは？へ思考を及ぼすこと)
(‘ハッピーリタイアメント’ (万歳定年退職) の掘り下げ)
(‘自分の時間’ について)
(ゲゼルシャフトとゲマインシャフトなど)
- * 「セーフティネット」
(事前の就業機会創出 ‘敗者復活’、教育負担軽減 ‘機会の平等’)
(能力開発 ‘バウチャー’：ボランティアでの活動関与を得点化し、自分が
必要なときにサービスを受ける貯蓄とする。これを ‘敗者復活’ の機会

獲得または職業教育権利に適用してみる)

(情報の進展に対応したセキュリティ 例 帰属不明の責任からの予防保護)

*「2025年型社会ストックとフロー」

(生きがいを見出すストック整備のある社会)

1.2.4 自己紹介に表れたキーワードは何を語るか？

<作業1>

会合参加者13名から、自己紹介と本WGへの期待を述べてもらった。そこで出されたキーワードをKJ法的にまとめ、図.1-1,1-2,1-3(先進エイジフリー社会を目指して)を試作した。(P9~11)これを<作業1>とした。

1.2.4.1 キーワードの構造を見る

主な項目を挙げると以下のようなになる

*先進エイジフリー社会構造の認識(図I-1)

高齢者就労の制度とシステムの状況を見る。

例 ハローワーク

社会維持の保障について考える。

例 社会のブラックボックス化

高齢者就業負担の現状を見る。

例 新しい仕事の適応

介護問題等福祉の状況を見る。

例 人と場

*高度就業・社会参画機会の構造転換を考える(図I-2)

エイジフリーを考える客観データを集める。

例 高齢者のNPO/NGO

今後の人口構成での社会システム上のシミュレーションを試みる。

例 エクセレント・マージン

高齢者が発信する方法を考える。

例 ジ・エルダーとジ・エイジド

シティカレッジを考える。

例 セーフティネットとしての「大学」

高齢者情報ネットを考える。

例 情報弱者

高齢者就労制度を考える。

例 バウチャー雇用訓練保障

*エイジフリー、内在する問題点を考える(図I-3)

自分を客観的に見る。

例 自分史

自分自身の内的なレビューから社会参加への発信を考える。

例 定年挨拶状

高齢者、これまでの人間像を論じてみる。

例 ハイデッガーの3つの「退屈」

エイジフリー理想像を描く。

例 ヘンリーライトクロフトの手記、帰去来の辞

イソップ物語などからの例題をさがす。(身の回りの事象を集める)

例 アリとキリギリス

意識していないが、存在している問題を考える。

例 歌曲「鯛」？

1.2.4.2 視点のサンプルについて

* いろいろな視水準で見る（探るための切り口を探してみる）

- 1) 自分の未来の状況を探る
- 2) 自分の世代でみる
- 3) 他人の世代でみる

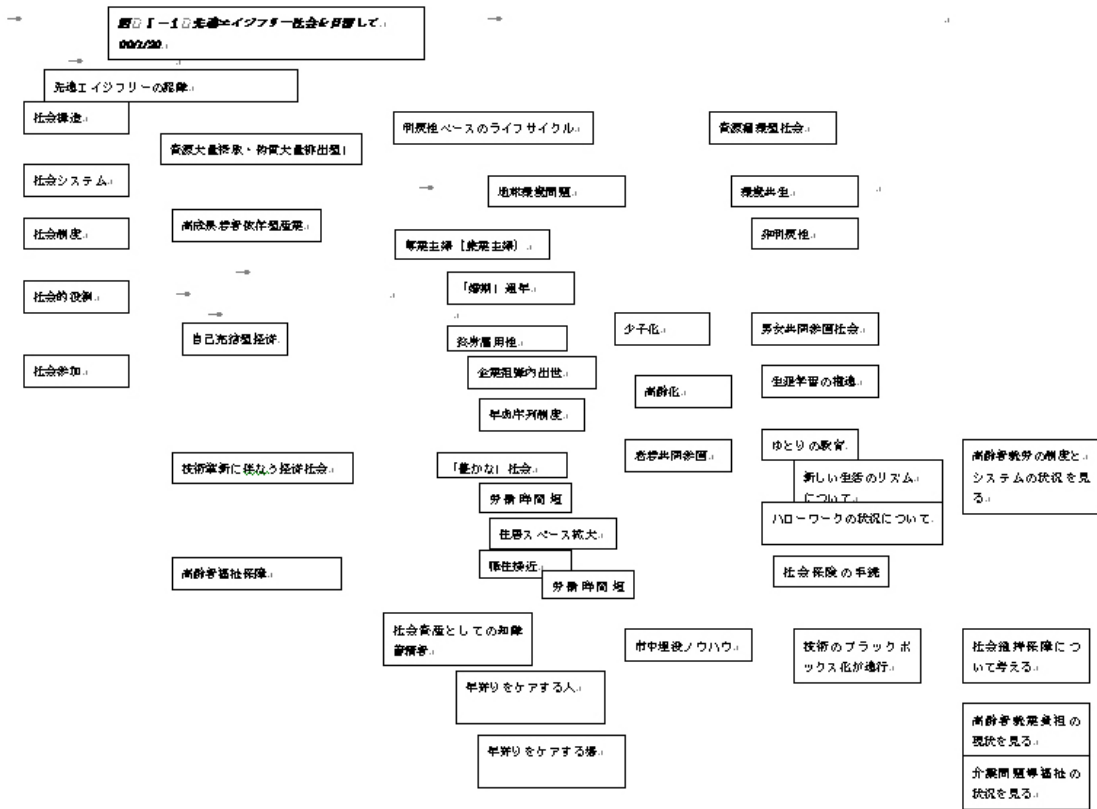
* 高齢者が置かれている現状の解析

- 1) 社会的環境でみる
- 2) 世代に内在する問題点

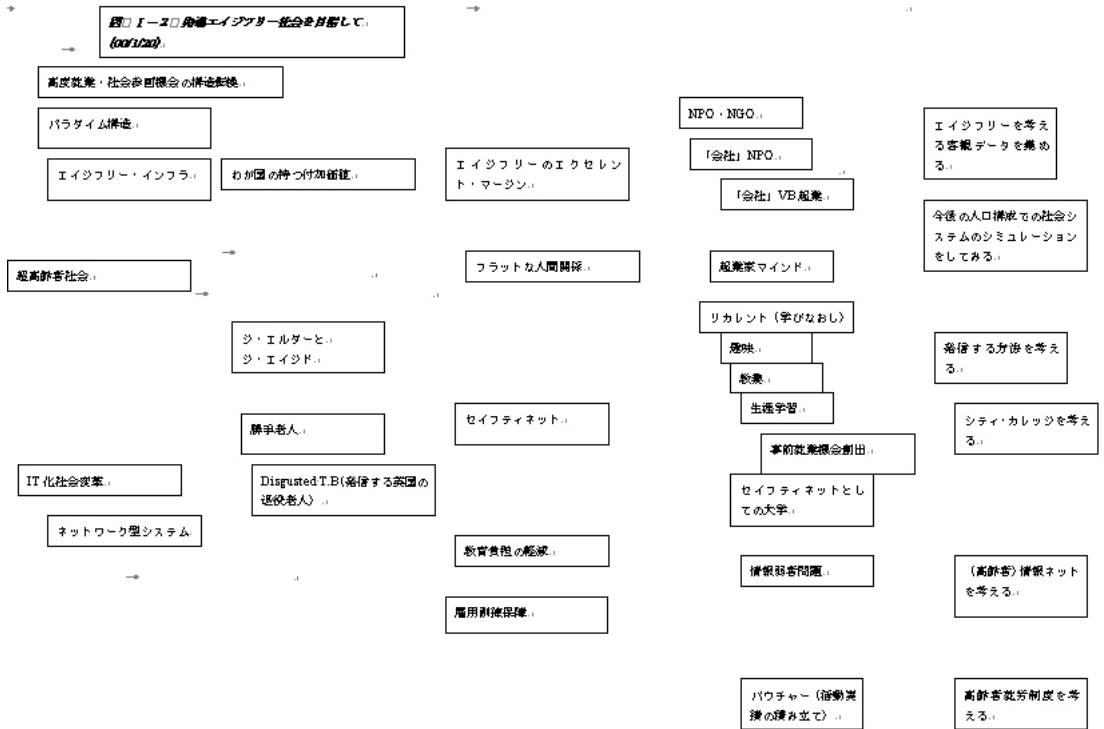
* 近未来における60歳代～世代の社会的役割

- 1) 期待される役割
- 2) 実現するための手段
- 3) 実現するための社会的なしくみ、活動の場

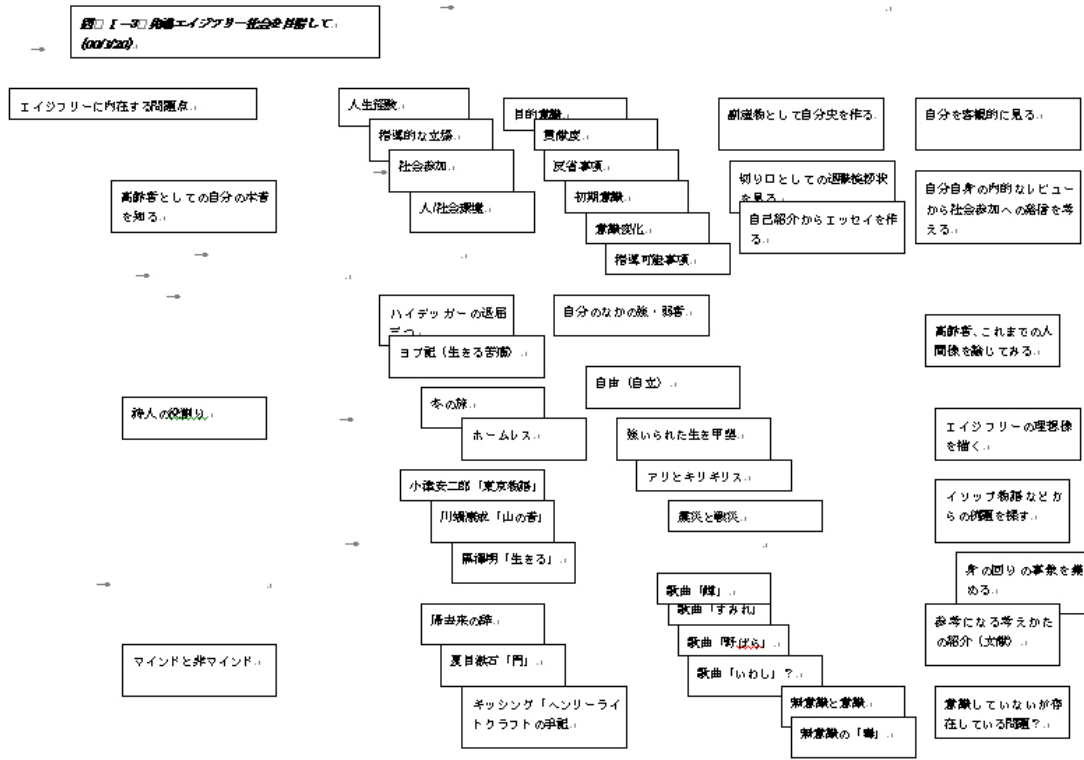
参考図 I-1



参考図 I-2



参考図 I - 3



第2章 参考になる見方・考え方

第2章 参考になる見方・考え方

2.1 ワーキンググループが展開する作業

2.1.1 社会環境問題構造と人間環境問題構造

第1章の〈作業1〉で作成した図.1の問題の括りとしては、結局 高齢者の社会制度上の問題（社会環境問題構造）と生きがいの問題（人間環境問題構造）にまとめて、いったん、以下の第1と第2サブグループに分けて作業することになった。

しかし、この形態の作業は、深追いせず、第2サブグループの人間環境の問題構造に集中することにした。

第1サブグループ

社会構造の問題構造を考える

高度就業・社会参画セキュリティネットを考える

第2サブグループ

人間環境の問題構造を考える

情報化時代の問題構造を考える

2.1.2 身の回りの事象をみる、参考になる考え方を紹介しあう

サブグループ作業と平行して、高齢者問題と関連する、または関連するであろう現象や事象を身近なところから抽出してみた。

〈作業2〉[身近な事象と感じ方を集める]

（あら！あれ？と素朴に見た事象・視線，と感じ方・・・その世代での素朴な印象）を、事象20字X3行程度、印象1行程度にまとめて、メンバーに適時提出する事を求めた。その回答の集約分析結果を第2章の2.2.1に記す。

〈作業3〉[参考になる考え方を集める]

メンバーより積極的に参考になる文献や意見を集めたので、2.2.2として

①文献類、②メンバー作品に整理をした。

そのうちのいくつかを2.3「私のワンポイント」として収録した。

〈作業4〉[言葉との出会い]

各人から提案された用語定義群（GLOSSARY）を、2.4.1としてまとめた。

〈作業5〉[エイジフリーとは？]

エイジフリーの定義については何回か激しい議論を行い、その結果を2.4.2にまとめた。

2.1.3 自分を観察すること、自画像を描く

メンバーは、これまでの社会的キャリアの蓄積から、むしろ自分自身を調査研究対象とすることが、的確であると判断した。

つまり、各人が持っている考え方を基本にしてエイジフリーを捉え、自身を観察し、また概観を行い、これをエッセイにまとめることにした。これを第3章としてまとめている。この部分は本報告の中核になるものであるので、読者は十分に楽しんでいただきたい。

第4章は、”わたしたちへのメッセージときみたちへのメッセージ”である。エイジフリーの観点は高齢者のみずからの生き方についての提言であるが、同時に人生のシニアである立場から、若いひとびとに残すメッセージがここで語られることは、また当然であろう。

5年にわたるこの作業は、メンバー各自にとっても実は大変愉快的な思考と学習の場であった事を確認している。第5章では、その所見とつぎの出発のための芽が語られよう。

第6章は、全体を通じての提言とした。

2.2 参考になる見方

2.2.1 身近の事象と感じ方 アンケートAの分析

北嶋道俊

* (アンケートAについて)

WG3 作業計画レジュメの中で (あら! あれ? と素朴に見た事象・視線, と感じ方・その世代での素朴な印象) を、作業2として、事象20字X3行程度、印象1行程度にまとめて、メンバーに適時提出する事を求めた。その回答の集約分析報告である。

2.2.1.1 回答アンケートA (001~044…欠番005, 009)

(回答は、WG3-079, 113, 118, 119に集められている)

2.2.1.2.内容の要約

要約に当たっては、まず、アンケートの生資料のあら! あれ?の対象を記し、ついで…の後に、回答者それぞれの感じ方や印象からの意図のポイントを簡潔に一覧紹介することに努めた。なお、各項末尾に回答者名を記した。

「要約の一覧」

- 001 : 単独行動と集団行動の男女間差異…高齢化男性は仲間づくり必要。寺川
- 002 : 鳥社会の個と集団…集団を生きながら個を生かしている。 寺川
- 003 : 社会問題での個と集団…個人と公共(自他)の対立…価値観のバランス必要。
寺川
- 004 : 新薬の消痛効果で明るい生活を得る…延命治療よりはホスピス治療充足開発
を、価値観の比較選択も必要。 寺川
- 005 : (欠番)
- 006 : 自己中…陥りやすい問題の心理状態。 栗原
- 007 : 人と環境が共生する都市…共生という言葉がおこがましくなく謙虚にすべき。
栗原
- 008 : 循環、輪廻の思想…環境, 人間, 経済, ISO. も循環。栗原
- 009 : (欠番)
- 010 : テレビドラマの中で、老舗のつぶれた責任はみんなにある?…責任の明確化、
トップが一番ある。 石井
- 011 : 警察に関する一連の事件…責任不在が問題。石井
- 012 : テレビドラマの中のせりふ「子供のために自分の幸せになれる結婚諦めたら子供
が成長した時にきっとそれが重荷になる」…新しい感じ方、新旧。石井
- 013 : 待たされる病院診療…公共機関の気配り工夫不在。 北嶋
- 014 : 乗り継ぎサービスの無いバス…公共機関の工夫不在、企業努力不在。北嶋
- 015 : 車内と携帯電話…公共機関の安直な対応、サービスに不熱心。北嶋

- 016：携帯電話のペースメーカー使用者への影響…論議なくポイント不明確。北畠
- 017：ITも量の豊かさを追う…豊かな心の社会づくりがIT革命に必要。北畠
- 018：老人の特権化…エイジフリーの邪魔に、各年齢層との接触を。安達
- 019：足腰のたつ老人でも入院患者に紙おしめで寝たきりに…動けること、フリーの根本。安達
- 020：核家族化で老年家庭と壮年家庭それぞれが不便…大家族主義の見直しを。安達
- 021：開花など生物での同時性…観測、再現性不能の問題を現代科学は無視または否定。そのため生命現象が理解出来ない。寺川
- 022：東西文明の800年周期での興亡…社会、人間にも一定方向の必然性があるのか。寺川
- 023：人間社会での弱者と強者と権力と…集団の中の監視機能と個人の自立心が必要。寺川
- 024：核家族化、団地内ジジババ所帯の増加で安全管理に問題…大家族化見直し要。安達
- 025：3K職場、単純肉体労働職場に海外労働者導入…技術改善、老人職確保なし。安達
- 026：介護保険認定…理想の家族による介護の考慮なし。介護不要の体力づくり施策を。安達
- 027：インターネット万能…人と人との関係をどう考えるか。安達
- 028：正義とは、貧、弱者はいつも正、豊、強者はいつも醜？…シルバーの知恵は？安達
- 029：人は現世のことのみ、坊主は葬式坊主に…循環の思想再構築を。石井
- 030：公園のごみ箱の指示無視…あと一步がたりない。石井
- 031：国体の会場にするため四万十川の清流に護岸工事…環境か地域の事情か。石井
- 032：若乃花の引退、気力の限界…体力より気力充実が必要。石井
- 033：タイミング良く紅葉の美に出会う…旬の美と残された伝統美、日本の美にこだわりたい。石井
- 034：プロゴルファーのプレー中の喫煙…プロや主催者は注目されている。厳格に。石井
- 035：携帯電話での安直連絡…どうでも良いと思われる需要をうみだす。石井
- 036：自衛隊ジェット機操縦士の事故墜落時民家衝突を避け殉死…有難うと言いたい。石井
- 037：日本の産業経済活動低迷にも拘らず温暖化ガス排出量増…政府無策、だらしない。藤井
- 038：都公害防止条例にビル開発計画者の土壌汚染調査義務…拡大生産者責任を果たせ。

- 藤井
- 039：産業廃棄物不適正処理防止広域連絡協議会設立…逆行対応策、最終処理施設推進を。藤井
- 040：二酸化炭素減量策で京都の路面電車導入案…燃料電池自動車と自転車がベター。藤井
- 041：民間資金使用の社会資本整備（PFI）導入の広がり…民間主導型ローカル会社で。藤井
- 042：世論と称する数字の一人歩き…数字構成の母集団の根拠、条件からの注意必要。寺川
- 043：情報機能がデジタル化され、断片思考で判断が偏向し易い…アナログ連続思考の方が本質に近づくか。寺川
- 044：根がなくても花芽の出る植物の観察…不可能が無いような遺伝子多様性の驚異。寺川

2.2.1.3. 視点の分類

視点には共通の対象がある。関心の所在を見るべくキーワードで整理した。

- ①個と集団 001, 002, 003,
- ②医療 004, 013,
- ③心情, 心理 006, 007, 008, 012, 017, 036,
- ④環境 008, 031, 037, 038, 039, 040,
- ⑤責任, マナー 010, 011, 034,
- ⑥公共機関 013, 014, 015, 039, 041,
- ⑦工夫・サービス 014, 015, 016,
- ⑧IT, 情報化 015, 016, 017, 027, 043,
- ⑨年代, 老人 018, 019, 020, 026, 028,
- ⑩価値観 019, 020, 029, 043,
- ⑪欠落・無視 021, 024, 025, 026, 042,
- ⑫経験・過去 022,
- ⑬社会 007, 023, 028, 031,
- ⑭評価 023, 024, 026, 037, 038, 039,
 040, 041, 042, 043, 044,
- ⑮ 性別ほか差 001, 023, 028,

2.2.1.4. 注目視点の整理集約

メンバーの討論を顧みつつ、注目視点と思われるものの整理集約を試みた。

- ①個と集団、男と女、強と弱などの価値観のバランスの問題

集団を生かしながら個を生かすという視点がアピールされた。同時に、自他という対立体の中ではバランスをもった価値観が必要とされた。成熟した個と集団志向。

②世代間の価値観や心の変化の問題、世代間乖離の問題

自己中という心理状態を根底に内蔵した、世代間乖離、人間社会の不調和、循環の欠落、老人介護での非人間性、老人エゴなど、問題山積。各年齢層間接触が重要課題。

③公共機関、社会などの問題

公共機関における気配りの欠如、無策・無責任。同様、社会政策としての環境対応に具体的問題指摘がなされた。これらが見直されない社会的マナー化が問題。

④ITなど新時代に関連した問題

心の豊かさの追求を基盤としたIT時代を。また生物の生き様に学び新時代を。

2.2.2 参考になる資料 ①文献

(文献)

0 3-1-10

安達勝雄

#	書類ナンバー	項目、内容
1	095 荒井	<p>*通産公報：H11-6-14 「躍動する個人と確かな国家を目指して」</p> <p>産業構造審議会総合部会は「21世紀経済産業政策の課題と展望」(今後の検討のたたき台)を発表。理念の整理と長期的観点からの政策の方向性を示す。</p> <p>(1) 経済社会システムの競争力の強化</p> <p>(2) 個人が輝く多参加社会の構築</p>
2		<p>*日本経済新聞 99-10-15</p> <p>ミレニアム広告企画 「生涯現役」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者就業へ制度変革を 慶大教授 清家 篤 高齢者就業へ制度変革を 生涯現役社会の条件 (中公新書) ・専門知識、幅広い経験生かす強力な戦力 働く意志と能力を持つ 活躍できる場作りを 中小・中堅企業で活躍、積極的に雇用し人材確保 ・インターネット財テクの主役を担う 貯蓄額の多い高齢者 株式投資で市場動かす 広い視野持つ自由人 経済・社会の貴重な財産 ・日常を離れ新しい発見 学ぶ中高齢者達 前向きな生活の大切さ知る ・人生 80 年時代の幕開け パネルディスカッション 1 高齢者雇用に関する日本の政策 パネルディスカッション 2 退職後の就業・社会参加 能力発揮できる仕組み創設
3	008 荒井	<p>*学会会報 No 825 (1999-10)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者雇用を見通す 一橋大教授 大橋勇雄 高齢者雇用のネック 高齢化の意味 高齢者雇用の将来
4	009 荒井	<p>*変わる土地不動産 明海大学教授 長谷川徳之輔</p>
5		<p>*朝日新聞 21世紀私達は 99-12-8</p>

- ・市民参加で成熟する社会 公益の担い手
NPO活動
- ・知識と経験に富む即戦力 働く高齢者
- *朝日新聞 第2部 世代間摩擦を超えて
エルダー経済日本
- ・高齢新人類の挑戦 #40860
淘汰を克服、社会けん引、年齢別人口分布
- ・職拓く実力は #40861
不況バネに人材集結
- ・連結家計 #40862
「親のすね」市場に活力 親が増資支援
相互扶助
- ・生涯社会貢献 #40863
福祉コストに自前意識
- ・会社人間再生 #40864
経験・人脈生かし新天地
定年後の楽園 退職金で新会社
「燃えつき」克服
- *朝日新聞 第3部 活路は「個」が開く
- ・「ソニー盛田」の遺産 #40915
高齢大国世界に先駆け
- ・時間貯蓄 #40916
眠れる資産掘り起こせ 時間・空間・人材 可能性を秘めたまま眠る財産を掘り起こし、少子高齢化の進むエルダー経済の牽引役に据える。
- ・元祖 介護保険 #40917
人と地域互いに活力 住民が相互補助
福岡県甘木市 平均年齢59才のシニアタウン
- ・安眠冷蔵庫 #40918
動く需要企業連携迫る モーター音、振動の無い冷蔵庫
新しいアイデアによる新ビジネス
- ・新・冷めないスープ #40919
介護に備えて 玄関・浴室・キッチンが2ケずつあり、リビングを通じて2所帯がつながる。
核家族を問い直す 渡り廊下一つ 世帯共生、負担分割

- 6 *『私の生涯現役』スピーチコンテスト大会
9 9-7-2 4
- 7 043 荒井 *岩波. 哲学思想辞典 ・自由 ・責任
- 8 045 北畠 *朝日新聞 H. 12. 1. 19.
・15～20年先の日本のあるべき姿について
・日本人の他人を思いやる心
- 9 048 北畠 *美しい老年のために：中野孝次 (海龍社)
2 0 0 0
*新老人道：安倍政次 (医師) 日本プランニンセンター
1997
・よき死を迎えるために
・老いてからの死
- 10 050 栗原 *朝日新聞一天声人語より
：自己中 「オキザリ虫」
「メイク虫」 「チュウ虫」
・「人と環境が共生する都市」川崎市環境基本計画
・自然環境と人間の造り出した環境の共生
- 11 050 栗原 *循環一輪廻の思想 横浜有隣堂9男2女の物語
松本八十男 1999. 11. 22
「環境問題」も「人間の健康」も「経済活動」も「ISO」
も循環
- 12 055 安達 * 外人労働者の受け入れ 朝日新聞 2000. 3. 25
高齢者問題、日本人の労働意欲 輸入労働力にはどの分野を
・人生後半の戦略を考える 46 のヒント PHP 文庫 国司義彦
人生 80 年、40 才はその中心、40 才より Silver Age 計画を立てるべし
・高齢者の後見 朝日新聞 2000-3-12
痴呆症の支援：シルバー各人のキャリアーにより、各種分野 Consultation が可能ではなかろうか
- 13 056 荒井 *モーパサン作ーベラミ岩波文庫 P202 S42 年
老いへの恐怖 人生の山登り →登頂まではゆっくりと→登頂後は 死である終わりが見えてくる →過去にあったものは二度と帰ってこない→我々は何を信ずるのかー僕には詩があるだけだ
- 057 荒井 *言葉の定義もしくは説明 (GLOSSARY)

- 「暗黙知」我々は自分たちのはっきり言えることより
多くのことを知りうる
- 058 荒井 * 「ある」ということの構造モデル
・メタ存在の構造モデル
- 059 荒井 * 「科学哲学」からの始まる連結
- 060 荒井 * 「パラダイム」 P a r a d i g m 言葉の定義
- 061 荒井 * 「新科学哲学」
- 062 荒井 * 「科学的リサーチ・プログラム」
- 14 067 石井 * 日本再生は IT 革命と真正面から向き合うことから始まる
* 日本流コーポレート・ガバナンスの確立を急げ
三井物産戦略研究所長 寺島実郎
・時代システムの変更を意識した欧米／バブルに浮かれた日本
・世界の金融のルール変更、変更後の対応遅れ
・米国経済の活性化は IT 革命、軍需産業の賜物
・IT と F T のドッキングにより新しい分野が金融に誕生
(ファイナンシャル・エンジニアリング)
・IT 革命により中間層の不必要な経営
(コンピューター)
・失業率は下がっても、大企業のレイオフのへらない米国
・IT の浸透した組織では年功や、経験が役立たず
・目に見えないシステムを駆使して 21 世紀も君臨する米国
・IT も日本の得意分野、物づくりの現場に生かせ
・中間層を厚く持つ日本の良さを再認識
- 15 072 圓山 * 米国を追わずモノづくりを
朝日新聞 2000・5・1
ーバブルのツケ、精算は総合設計力で
三井物産戦略研究所長 寺島実郎
- 16 073 圓山 * 海も体制も超える運動ーネット上から街へ
署名の輪 1700 人
NGO 英国代表 アン・ペティフォー
朝日新聞 2000・4・30
- 17 074 石井 * セーフティネットの政治経済 金子 勝
・市場競争の世界では信頼と協力が原則となっている。セーフティーネットはリスクを全体で分かち合うもので、競争世界の原則

- 18 076 圓山 * 少子高齢化の本質 発展の成果の認識を深めよ
日経新聞 1999・12・31 塩野谷裕一
- 19 077 圓山 * 失業が怖くない社会を創れ 島田晴雄
日経新聞 2000・5・12
- 20 080 荒井 * Glossary of Kant's Technical Terms
・エイジフリー 人間環境の問題構造を考える
- 21 094 圓山 * 論義収斂の叩き台として「通産広報」躍動する個人と確
かな国家を目指して 批判的に検討する
・セーフティネット論で想定される人間観・社会観
- 22 095 圓山 * 通産広報「躍動する個人と確かな国家」を目指して
- 23 097 圓山 * 市立大学設立準備事業推進における基本的視点
- 24 099 圓山 * 生涯学習時代における大学の戦略 村田治編著
ナカニシヤ出版 1999-3-31 発行
- 25 098 圓山 * 「躍動する個人と確かな国家」を目指して
: 項目抜粋
- 26 104 荒井 『”書林浴”は、如何が?』 荒井康全
『一冊でも多く』 永岡正行
- 27 106 寺川 * 学士会会報 2000-IV、#8 2 9
東北大名誉教授 大内秀明
・産業構造の変化
・高齢化社会日本の現状
・新システム形成に必要な制度・政策の論点
※老年学（加齢学）の総合的な体系化が必要になっている
- 28 107 石井 * 『産構審：21世紀経済産業政策の課題と展望』
を批判的に読む
・福祉分野へのNPO 高齢者による起業 ・シニアODA
・教育へ高齢者の活用 .生涯学習の機会
・高齢者参画型就業制度
・官業務へ高齢者NPO
- 30 110 栗原 * 日本を輝かせた勤勉な人達 朝日新聞一声一 00-8-2
- 31 111 藤井 * 『実質100条』の規制法
- 32 112 寺川 * 学士会会報 1999-IV、#8 2 5
一橋大学教授 大橋勇雄
・高齢者個人のバラツキが大きく一律の処遇が難しい：働
くものの業績と能力をしっかりとおさえ、処遇すべし
* 学士会会報 1993-II、#0799
・現在の60才は明治・大正の40代に若返っている。是を

若返り社会として捉える。今後の社会の対応は「福祉」ではなく「若返り高齢者」にたいし役割を与え続けることである。

- 33 122 圓山 * 大学改革：組織いじりが招く敗北感 朝日夕刊
研究活動自体を開放せよ H 11-6-30
三菱化学生命科学研究所室長 米本 昌平
- 34 125 栗原 * 『生きる道』ある教育者の悲劇
・大競争時代のキーワード 『ありがとう』『ごめんなさい』『どうぞ』
日刊工業 00. 12. 1 山口 多賀司
- 35 132 北畠 * 『川柳』からの抜粋
- 36 134 藤井 * 働いて学べる環境づくりを 三和総研 松下滋
- 37 135 藤井 * 規制強化だけでは限界に 日経エコロジー
200 1. 2 月
- 38 141 圓山 * 経済変革は文化の力から 既得権に切り込め
日経 20 01. 1. 8 作家 村上龍
- 39 153 栗原 * 『売るのは人間性です』US. JAPAN BUSINESS NEWS
4. 18. 1983
* ステップストーンの積み重ね 建設通信新聞
1994. 5. 30
* 意欲的に参加 建設工業新聞 1994. 5. 30
* 町おこしに 建設工業新聞 1994. 5. 30
- 40 162 植竹 * 『大失業時代』を読む
・大量失業時代がやってくる、消費者は失業の恐怖から手持ち資金を銀行に預金し、使わなくなってしまった、消費を助長するため物は安くなる。このような悪循環をどのように断つことができるのだろうか。
- 41 173 圓山 * 景気回復と財政再建 スウェーデンに両立の道
東大教授 神野 直彦 日経 2001. 5. 16
・二兎をおうもの一兎を得ず
・知識社会に市場経済の構造改革
・成人教育を通じ国民の能力向上
・福祉の向上、安全網
- 42 194 石井 * 歴史とは何か 岡田英弘著 文春新書
歴史 を正しく学ぶべし
- 43 198 圓山 * 今日とちがう明日 堺屋太一 週間朝日
2001. 9. 14

- ーセーフティネットどうつくるかー
- 44 197 圓山 *セーフティネットの定義
 ・金子 勝著「セーフティネットの政治経済学」
 ちくま新書、1999年9月
 ・竹中平蔵著「ソフト・パワー経済 21世紀日本の見取り
 図 PHP 1999年12月
- 45 200 圓山 *私の履歴書 日本経済 2001.8月 帝国ホテル顧
 問 村上信夫 腕のいいコックを目指して 生涯現
 役
- 46 205 圓山 * 自由と秩序 競争社会の二つの顔 猪木武徳 中公
 叢書
 民主制も市場機構もグローバリズムも人間を正しく理
 解することなく論ずることはできない。
- 47 208 栗原 * 私の今 私の自画像を完結するために
 私が選んだこの一冊 川田龍吉伝 (男爵薯の父)
- 48 213 石井 * 「自由と秩序」を読んで 中公叢書 猪木武徳著
 ・「日本という国を貴方のものにするために」
 角川書店 カレル・ヴァン・ウォルフレン
 藤井清美訳
- 49 217 圓山 * 朝日新聞より
 ・米国型へ画一化しない民主的機能の強化が必要
 ・グローバル経済の防波堤に
 ・グローバル化という試練
 ・途上国のグローバリゼーション
- 50 218 荒井 * Where is knowledge?
- 51 226 北畠 * 学問の創造 福井謙一 科学と人間の未来
- 52 227 圓山 * エイジフリーに向かって・私のバラダイム転換
 の歩みー自己蘇生へ向けて自分への旅ー
- 53 232 栗原 * 私の主張、最近のニュースより
 ・瀋陽事件：国家を考える前に、テロを恐れ、身の安全
 を先にする日本人
- 54 237 荒井 * 2001年国際収支 日経新聞 02-2-14
 黒字貿易より投資で稼ぐ
- 55 262 栗原 * ヨコハマパンチ 2002年秋号
 シティガイド協会のユニークな情報発信
- 56 275 北畠 * 「自己と非自己」 1. 自己と非自己 2. 私は誰？
 3. 私は誰？ 4. 凡ての他者理解は自己理解から始ま

る 5. 想像力の恵み パウロの告白と救い
(岩村信二：大森めぐみ教会週報より)

- | | | | |
|----|-----|----|---|
| 57 | 276 | 栗原 | * よこはま瓦版 日本登山会の父ウォルター・ウエ
トン |
| 58 | 289 | 圓山 | *川越市市制施行 80 周年記念事業
川越シティカレッジ懸賞論文
—入選作品集— 平成 14 年 12 月 |
- ・今, 地域福祉を学ぶ場を 岸山真理子
 - ・「グランド・ツアー」に乾杯 伊藤彰一
 - ・シティカレッジの中核は川越学の構築 菅原彰子
 - ・世界のスマイルシティ・川越を目指して 田村諭美
 - ・リカレントの場として 平松伴子
 - ・サラリーマンの体験から 大坪隆志
 - ・学生・市民・行政による環境問題解決 渡辺文郁

参考になる資料 ②メンバー作品

(メンバー作品)

0 3-1-10

安達勝雄

#	書類ナンバー		項目・内容
1	001	荒井	WG3 へのメモ 「先進エイジフリー社会を目指して」 1. 趣旨 2. ワーキンググループの進め方 3. 視点のサンプル ・ 60 才代が置かれている現状の解析 「すみれ」、「野ばら」、「鱒」、「そして 1」 ・ 近未来における 60 才一世代の社会的役割
2	023	圓山	W/G-3 の新企画に当たって ・ セーフティネットとしての大学 ・ フラットな人間関係とネットワーク型システム
3	026	荒井	エイジフリーについて、切り口と連想 (1)
	027	荒井	〃 (2) ・ 老人よりの発信する責任 ・ 弱者／生きる／語る・生き甲斐 ・ ハイデッガーの「3つの退屈」 ひとは自由（自律）という思想にほんとうに耐えて行けるか
4	028	荒井	W/G-3 作業計画レジュメ
5	029	荒井	先進エイジフリー社会を目指して KEYWORD を探る ・ エイジフリー社会構造の認識 ・ エイジフリー内在する問題点
6	036	荒井	P C の進め／WE B の勧め 認識のための質問
7	040	藤井	持続可能社会への転換のため
8	041	石井	自分探しの旅その 2 (21 世紀を覗く) ・ 自分の経験を後輩に伝える、このために新しい知識で経験を磨かねばならぬ。 ・ 住み良い世の中を作るにはどうするか ・ 人口問題 ・ 財政問題 ・ 環境問題 ・ 情報化
9	042	植竹	エイジフリーとは何か？ 自由論 ・ 「人は本当に自由に耐えられるのか」 ・ 欧米人のキリスト教には隠された意味がある ・ Free Way とは生命を保障されない道路のことである

			<ul style="list-style-type: none"> ・ Duty のことを何故税金というのだろうか ・ Love/Liberal ・ 終身雇用は定年まで子供扱いにする 奴隷の労働力 ・ Age-Free/Barrier Free 年齢制限無しのシステム
10	049	石井	植竹氏の「エイジフリー論」について
11	051	寺川	W/G-3 課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 女性は群れを作り、男性は単独 ・ 社会問題は個人（自）と公共（他）の対立、衝突 ・ 鳥の群れが餌を見つけたときに、餌を食べる順番は ・ 延命治療とホスピス治療
	070	寺川	<ul style="list-style-type: none"> ・ 『現象と感想』アンケート A, 身近な事象と感じ方 ・ 自然界の同時性の不思議, 現代科学の無理解 ・ 天体、自然の運行と同様に歴史や文明にも必然の流れ? ・ 弱者と強者, 権力と私欲の関係,
12	063	荒井	「お稽古事のまとめ～わたしの羊よ’ 声楽レッスンの 10 年に思うこと」
13	064	荒井	アンケート A 回答集 「最近の事象と感じ方」
14	079	荒井	アンケート A 身近な事象と感じ方
15	089	石井	「規範についての提案」 稲作文化の規範は自分の権利の前に他人の権利の尊重. 集団主義では性善説、競争社会では性悪説を考える必要があるろう
16	090～2	北畠	<ul style="list-style-type: none"> ・ エイジフリー「社会構造の問題点を考える」 ・ エイジフリー「人間環境の問題構造を考える」
17	100	北畠	人間環境の問題構造を考えるー 関連ノート (5)
18	101	石井	アンケート A の分類
19	102	藤井	「先進エイジ・フリー社会を目指して」について思うこと
20	113	石井	アンケート A の追加
21	115	圓山	「フロム 8」と私・・・若干元気になった我がリストラ心象風景ー自己解体を通しての事例提示ー
22	117	北畠	アンケート A 分析作業のきっかけ
23	118	藤井	最近の新聞記事から アンケート A
24	119	寺川	身近な事象と意見 アンケート A <ul style="list-style-type: none"> ・ 世論を構成する母集団の問題 ・ アナログ連続思考とデジタル断片思考 ・ 植物遺伝子の多様性
25	120	北畠	エイジフリーの定義
26	121	石井	WG-3 報告書のまとめについて

27	123	圓山	『エイジフリー社会を目指して』の討議素材として
28	127	圓山	エイジフリーへ向かって 一私のパラダイム転換の歩みー
29	130	石井	時代の影響を受けた私の仕事 私の仕事を振り返る
30	131	北島道教	WGー3 参加と自己紹介
31	136	石井	「エイジフリー」定義
32	140	(WGー3-088)	報告：章立ての検討
33	142	森山	俺の 20 世紀には何が起こったのか (自画像)
34	145	北島	わたしのエイジフリー、私の自画像
	190		WGー145 続き 大学 (旧制) 時代
			→ 203、209、210、220
35	146	石井	報告書のまとめ
	147	石井	エイジフリー社会実現のための提案
36	149、190、	藤井	わたしの自画像
37	150、151、187	北島	わたしの提案
	188	北島道教	私の提案
38	156	圓山	エイジフリーへ向かって・私のパラダイム転換の歩み NPO マインドの発見と自由な遊び心 ー自己蘇生へむけて自分の旅ー
39	160	北島	エイジフリー社会実現のための私の提案 人間は年代により主な役割がある
40	161	北島	アンケート A 分析の結果
41	163	荒井	わたしたちへのメッセージ、君たちへのメッセージ ・何故時間を持て余すことになるのか ・ハイデッカーの 3 つの退屈 ・見えないあるべき問題 ・20 年後の君達の日本の姿 ・フローでどのくらい食えるか？ ・ストックでどのくらい食えるか？
42	167	北島道教	エッセイ ・人生経験とは ・指導的な立場とは
43	168～9、172		・エイジフリーとは
44	170	石井	用語の定義 「規範」
	178	石井	”
45	175,176,181		『私の自画像』安達, 栗原, 圓山
	184、185、191		” 藤井, 寺川, 藤井

46	179	栗原	「自己中」
47	180	石井	エイジフリーの定義について
48	192~3	栗原	用語の定義：自己中、共生
49	195	寺川	先進エイジフリーに向けて私の提案
50	196	荒井	A dictionary by anyother name is not so sweet
51	203,209,210	北畠	私の履歴書
52	204	藤井	私の提案
53	206	森山	顛末書／お菓子教室 零細企業と個人経営について考えること
54	211	圓山	公共的理性の定義 「社会経済的諸制度が、その原点まで立ち戻って検討しなくてはならなくなっている。まさに構造改革とも言うべきものである。
55	214	圓山	エイジフリー社会・私の提案を書くにあたって
56	226	石井	WG-3に参加して学んだこと
57	221	圓山	エイジフリー社会実現のための私の提案（資料一覧）
58	222	荒井	A1431 自分の研究の資料（その1） セカンドの職業から自己を振り返ること
59	225	石井	エイジフリー社会実現のための私の提案 まとめ
60	227	圓山	エイジフリーに向かって.私のパラダイム転換の歩み 一自己蘇生へむけて自分の旅一
61	233	圓山	NP O に人生の可能性を見る今の私 市役所人生 30 年の職歴を記しつつ胸に去来するもの 市役所職員として生きてきたこの 30 年間の職業人生の総括
62	235~6	荒井	「WG3 報告書のまとめについて」（アプローチ）版
63	240	寺川	「個と全体」
	241	寺川	学習の感想
64	242	栗原	技術者 E ssay ト・ン・ボ・
65	245	北畠	私のエイジフリー
66	246	藤井	わたしの自画像
67	247	安達	WG-3 参考になる文献（未訂正）
68	249	圓山	学習の感想 -WG-3に参加して得たもの-
69	250	藤井	長い旅の末；学習の感想
70	253	北畠	身近の事象と感じ方 アンケート A 分析の結果
	264		全
71	257	寺川	私の自画像
72	258	栗原	私の自画像

73	259	栗原	用語の定義 「自己中」 「共生」 「循環」
74	260	栗原	エイジ・フリー社会の実現のための提案
75	265	北島道教	私の自画像とエイジフリー
76	269	植竹	植竹敏夫個人歴
77	270	荒井	WG3（荒井自画像原稿案 021027）
78	271	荒井	共通認識の形成と切り口（2章） 予備コンテキスト ～私は“アリギリス”であった
79	272	北島	エイジ・フリー社会実現のための私の提案
80	273	全	長い旅の末：学習の感想

2.3 参考になる考え方～私のワンポイント

2.3.1 荒井康全「こころの解毒剤はあるか？」

1999・1

西尾幹二氏の「国民の歴史」（扶桑社、1999）という大部の本が、本屋に平積みになっている。歴史教育を、正しい、内容にという研究会があってその報告書というふれ込みであったが、ここで触れる意図はない。この本のあとがきに、20世紀最大の哲学者であるというハイデッガーの著書「形而上学の根本諸問題」の中の、3つの退屈を紹介していたので、ちょっと立ち読みをした。

ひとつ目は、君は田舎の駅で、3時間後に来る汽車を待つ羽目になり、なにをしようもしようもない状態に遭遇したときの退屈。

二番目は、誘われて行ったパーティーはそれなりに楽しかったが、帰ってからやることがある。夜遅くに、それに取り掛かかる。そのときにふと、あの昼間のパーティーはやはり退屈だったかなあと思う、その種の退屈。

そして、三番目は、日曜日の昼下がり、ひとりで街を歩く。そのとき、忽然として、見るものすべてが色褪せ、なんだか、ひどくつまらなく退屈に思ってしまった。

およそこういった内容であった。ハイデッガーは、どのような文脈で、これをとりあげたのかということも興味があって、結局、この西尾氏の本を購ってしまった。

最後の退屈は本質的であり、なにか破滅の香りがする。紹介者である西尾氏もできれば避けたいと言明している。西尾氏は、「耳目の聳動させる奇怪な事件」の犯人達は人一倍この退屈の状態の陥穿にあったという。一般市民も、通常第一と第二の退屈に遭遇し、過ごしていて、突如襲うこの種の退屈感を正しく対応する、あるいは克服する鍛錬がなされていないという。鍛錬といったが鍛えれば克服できるものかどうかはわからない。ハイデッガーによると哲学にとっては、つまり本質を知ることがねがうものにとっては、この深い退屈に目覚めることが大切であるとする。これに襲われたら抑えたり、避けたりせずに、じっとこれに耐えて、待ち、そこから本質的なものを聞き取ることが肝要であり、このような中で本質的な呼びかけがあるという。また、この問題は、つぎの設問へとつながる。すなわち、ひとは自由（自律）という思想にほんとうに耐えていけるか問う問題である。自分で自分の自由（自律）の負担をし、第三の退屈にも耐えて、根底からの呼びかけに対応し、毅然としていくのは、ひょっとすると、人間に神になれと要求しているのかもしれないと西尾氏は結ぶ。そういう点では、ものはほどほどに、学問も、思考も、したがって生き方もほどほどに、あくまでも凡人で終わると願うことにもなる。しかしまたその凡人とは何かという問題がまた追っかけてくる。あるいは「ぼけ」という神の贈りものの恩寵に与るかということにつながろうかとも思う。

さてここまできたところで、化学の分野での現象や自然の数学モデルに長年職業として携わってきた人間として個人的習性が出る。こんな思考モデルである。まず、身体のどこ

かに「容器」をもっているとする。人間の意欲を毒するなにかが、そこに蓄積していると考え。このなかには美しいものも残っているが、嫌なもの たとえば なにか、うさん臭いもの、頑固なもの、無理を押し通してきたことによる「忸怩」のようなもの、あるいは、自分を抑えて、ひとの命令に腐心した「澱」として蓄積した、ものなどが残っている。第二にこれが「自由（自律）な」意識などを劣化させるという「毒性」をもっているとする。第三に、この容器には、幸いなことに、毒を解毒させる、反応器、の機能があると考え。主として「忘却」などさまざまな解毒剤を自然にあるいは故意に投入することができて、これで毒を浄化し、ハイデッガーのいう第三の退屈も回復させるかもしれない。暴発もひとつの化学反応の様態であることに連想すれば、毒の蓄積からちくちくと熱が蓄積し、熱の放出が間に合わずにあれば、暴発に至る「臨界状態」ということにもなる。一方、長い人生であれば、この容器そのものも、破れやすく、コントロールなどの機能の劣化を来しているということもあって～そんなことからくるキヤタストロトフイが当然考えられる。浄化力を与える解毒剤なるものが、具体的にどんなものがあるか想像してみるのもおもしろそうであるが、仮説として「毒」が残っているかもしれないということ、放っておいても自然には無くならず、本体まで傷めてしまうものがあるかもしれないとすれば、いかなるものであろうか。話題としてこんなモデルをちょっと提案してみたい。話題提起それ自身が、実は解毒剤となるのかもしれないのです。

2.3.2 荒井康全「戦場に架ける橋」と「虹にかける橋」

(1960年代から学ぶプロジェクトX 「戦場に架ける橋」(NHK総合 平成13年3月2)を見て)

内戦が続いていたカンボジアで、日本の技術者とカンボジアの工兵隊が、協力して落ちた長大橋の再架に賭け、そして達成する。このひとたちは、この取材があろうとなかろうと世界が認めうる第一級のひとたちである。しかしその存在を取り上げたことは、多くの、特にいまの日本を励ますよき話として生きるものであり、この取材者にまず敬意を表したい。

「有名の二級と無名の一級」

私は、「有名の二級と無名の一級」ということをときに思う。テレビで常連となった顔、叙勲報道でできた括りの顔ぶれ、そして定番の政府行政審議会、世襲的な政治家、低調な選挙投票。荒れる成人式、形等々。どこかで納得していない流れが固定化している、この時代を生きることの共感がない、未来にいきることへの挑戦がなく、白々したものとなって漂うようだ。平和な民主主義社会の共同体としての世界に誇る経済大国を形成した誇りと連帯感が、薄れ、切れ切れになっているといえさすこし過剰であろうか。

1960年代～東京オリンピック、経済立国にみごとな離陸をした、柄のわるい時代
1960年代の中ごろに学校を終え社会にでた。ときのエポックは東京オリンピック、日本が上昇気流に乗って経済立国にみごとな離陸をしたときであるといわれる。ものごとは、いい面ばかりではない、あのころは、同時に落ち着きのない柄のわるい時代でもあり、タクシーばかりでない、自家用に誇らしげくハンドルをにぎる連中にしても、すこしでもスピードを得ようと、まるでひとが変わってしまったと思うほどせこせこしていたように思う。人が不足していたからともかく余程でなければ、採用する。それが実際「余程である」から摩擦をおこす。たとえば東京駅あたりの食堂でのウエイトレスのマナーの悪さなどいまでも目に浮かぶ。日本中いたるところでどちらが客がわからない情景に遭遇したひとも多いのではなかろうか。

よき点といえば、経済の再建に対して無条件で是認したこと、労使の対立がどんなに苛烈であっても仕事は神聖なものとする道徳律に、無言の合意があったように思う。忌まわしき戦争への記憶がまだなまなましくあったからであろう。敗戦の屈辱と過去の時代に対する反省が根付いていたからであろう。

NHKのドラマ「虹にかける橋」

NHKのドラマで「虹にかける橋」というのがあった。このドラマの途中で、主役の技師役であった俳優の佐田啓二が現実の車の事故で死亡した。ドラマの中での上司の技師長であった下條正巳の追悼のことばが、いまでもなつかしい。内容はとうに忘れてしまったが、たしか時代が要求している技術者像を通して、それぞれのセクターで働くひとびとをロマンとして表現し、経済復興と成長への崇高な使命と評価を共有していたように思える。

歳月のなかでそのときどきに、情景の形で思いおこしわれわれに勇気を与えてくれたといえよう。

私の社会への旅たち

当時、大学院で新しい機械工学を学び、化学会社に入り、技術者として身を立てていこうとするわたくしにロマンを与えてくれたことを思い出す。それから、曲折はあったものの、ただひたすら技術の革新と現実への適用に情熱を注ぎ、そして 60 歳を超えて、いまは第二の仕事に入った。気分的にはふうっと長い息を吐くそれぞれの、過去の重荷のなんであったかを思うころにも入ったか。

日本は大きな曲がり角に立って久しい。わずか 10 年前まで、われわれの国が、獲得した世界からの敬意にいかに応えていくか、さらに若さと成熟さをあわせもった先進牽引的な国へとさらなる離陸にむかえるか、実に知恵と努力が求められている。

2.3.3 荒井康全「エイジフリーの脳内景観」

99・12・20

まず、本ワーキンググループの課題である「エイジフリー」を考えるに当たって、いまわたしの中に、存在しているもの、「脳内景観」といっておこうか、これをことばで抽出してみることにした。きわめて個人的な景観が、見方として共通の場で参考になるか迷ったが、意識の裏側を記すことをお赦しねがいたい。

連想キーワード

*発信する責任～ Disgusted T. B.

早朝、新聞をみて、顔を紅潮させる、そして「けしからん！」と叫ぶ、ロンドンの南西30キロにあるトーンブリッジという町には、そういう退役老人が多く、ここからタイムに投書が多いという。(ドア 貿易摩擦の社会学 岩波新書)

*状況を弱者から語らせる

同じ課題を強者から語らせる

*弱者問題からの切り口と連想

詩人は、本質的ななにかを意識の対象化をしてくれるようだ。

すると 無意識と意識の問題の焦点を詩人に置くことが考えられる。

弱者意識化問題なら、ユダヤの歴史つまり旧約聖書が恰好の材料を提供しよう。

弱者問題は、基本的に 生きるという命題としてヨブ記を読んで見る価値があろう。

*介護問題～高齢問題の切り口

*生きるということについての切り口と連想

～生と死を自分で選択できない道徳的な規範がある。

**江藤淳の死、新聞は「自死」という語を使った。

**遠藤周作の死 「ヨブの如くに」 (鈴木秀子「いのちの贈り物 ー遠藤周作氏の最期を通してー」 学士会報NO. 820 (1998-7))

*生きることの苦痛として～旧約聖書ヨブ記

**シューベルト「冬の旅」で知られるW. ミューラーでの主人公

(そしてホームレスの人)

**漱石の「門」の宗助、秘かに暮らすことへのあこがれ、あの時代に、内向きの願望がうけいれられたのだ。

(そして ゲームソフトを興ずる「オタクキー」の若者)

**自然との悠々なる暮らし～ ギッシング「ヘンリーライトクラフト」と陶淵明「帰去来の辞」

**初老とところの繊細さ、あるあこがれ～川端康成「山の音」

やがて、おとづれる孤独～小津安次郎 映画「東京物語」、黒沢明 映画「生きる」

**わたしの体験 手術室での状況メモ

持っていった読み物3つ； ブラームス ドイツレクイエム楽譜とオーディオ、シュヴ

ェーグラー 「西洋哲学史」下 岩波文庫、統計物理学のテキスト

*ある日曜日の新聞から

生き甲斐を見つけることを強いられしつもらぬ時代に老いを迎へる

保谷 水島孝雄 (日経 歌壇 99年12月19日)

自分史を書かず逝きたる祖父と父迷い迷いて己れも書かず

相馬 宮西昭雄 (日経 歌壇 99年12月19日)

*和魂 (にぎたま) と荒魂 (あらたま)

**ヨブが苦痛の中で語ったこと ~旧約聖書ヨブ記から抜粋

「神を詛 (のろ) ひて死るに如かずと」(ヨブ記 2.9)

**「唇をもて罪を犯せざりき」(ヨブ記 2.10)

**「如何なれば艱難にをる者に光を賜ひ、心苦しむ者に生命をたまひしや。斯る者は死を望むなれどもきたらず、これをもとむるは蔵れたる宝を掘るよりも甚だし」

(ヨブ記 3.20)

**「神は悩める者を救いて かれら (狡かしい者) に口の剣を免かれしめ、・・悪しき者の口を閉ざす」(ヨブ記 5.15)

**「望みの絶えたる者の語る所は風のごとくなり」(ヨブ記 6.25)

**「それ人の世にあるは・・・其日の傭人の日のごとくなるあらずや 奴僕の暮をこひねがふがごとくなるにあらずや・・我は苦しき月を得させられ憂わしき依るをあたえられる。我臥ばすなはち何時夜あけて外おきいでむかや曉まで寝転ぶ (ねころぶ)」(ヨブ記 7.1)

**「わが牀 (とこ) われを慰め、わが寝床わが愁を解かんと思ひをる時に、汝夢をもて我を驚かし異象 (まぼろし) をもて我を懼れしめたまふ。」 (ヨブ記 7.13)

2.3.4 荒井康全「歌曲、いわしの歌、ってありますか」

ゲーテの詩になる三つの歌曲の話です。

だいたい前になるが、青山にあるドイツ文化協会 別名 ゲーテ・インスティテュートに、ドイツ歌曲についてのコースがあると、近所の夫人から教えられ、通ったことがある。“雨、嵐そして稲妻、わたしは樹の下へ走る”、シューベルトの「羊飼いの嘆きの歌」の一節が、そのコースのキャッチになっていた。毎週水曜日の昼の時間にあって歌曲の伴奏者として高名なカーリン三上女史の会である。銀髪で、聡明な目を輝かせての語り口とよく用意された教材話からあふれる話のながれに、女史の深い洞察があり、おおいに魅せられたものであった。いまは大変人気のあるコースとなっているという。

ここに取り上げたのは、そのころのものであるが、考えかたのヒントとして本質的であるとおもえるので、ちょっと紹介しておきたい。

女史は ゲーテの詩になる「すみれ」、「鱒」、そして「のぼら」の三つの歌曲をとりあげた。それは つよい者とよわい者との関係における、それぞれへの意識のありかたとしての投掛けであった。

はじめは 「すみれ」 これは、モーツアルトの歌曲でつとに知られている。

「一輪のすみれが草原に咲いていた
そこへ若い娘の羊飼いがやってきた。
すみれはひそかに思う、
ほんのつかの間でもいいから、
あのうつくしい娘さんがわたしをつみとって
その胸に抱きしめてもらえたら
すみれの気持ちを知らずか、娘はやって来てすみれを踏みしだいた。
それは可憐なすみれだった」

この場合、強い側は娘さんで、弱い側はすみれ、娘さんはすみれに対して無意識で、すみれは恋焦がれているから娘さんに意識をもつと説明する。

つぎは、シューベルトの曲になった「鱒」である。

「釣竿を携えた一人の釣人が
川岸に立ち、冷やかな面持ちで、
魚が身をひるがえすのを見ていた。
水が澄んでいる限り、
釣人は鱒をその釣竿で捕らえられない、と
わたしは思った」

この場合、強い側は釣人で、弱い側は鱒、釣人はひとつ仕留めようと相手に対して強い意識をもつ。鱒も 自分の存在を結構アピールしている点では意識しているという。

むかし、高等学校の音楽の教師がこの詩は、権力への風刺であるといっていたことを

思い出す。

そして、今度は、世界中のこどもがうたう「のぼら」とつづく
「少年は一輪の可愛い薔薇に目を留めた、
少年がお前を折るよ！と言った、
薔薇は わたしをいつまでも忘れないように
あなたを刺すわ、わたしは折られるのは嫌よと答えた」

この場合、強い側は少年で、弱い側はのぼらであるが、ここはいささかややこしい。
単純には、少年ははなを見つけたという点では意識、見つけられたのぼらはいい迷惑で、
もともと少年に対して無意識である。ぼらがチクリと少年を刺すところから、双方が意
識して、「鱒」のカテゴリーに近づくだろうか、あるいは、ぼらが まもなく少年に捨て
られるということになれば やはり強者の無意識、弱者の意識でおさまるか、仕込まれ
た文学的なモチーフにひとは引き込まれていく。

さて、この歌曲の三点はまとめると以下の形になる；

		弱い側			
		相手を意識する	相手を意識しない		
		<hr/>			
		相手を意識する	鱒		のぼら
強い側		<hr/>			
		相手を意識しない	すみれ		(x x x x)

わたしは、この構図に すっかり参っていた。そして このマトリックスを見て、当
然ながら気づくのは 強い側も弱い側もお互いを意識しない。(x x x x) の升目に入る
曲はなにかということが気になってくる。 ここまでくれば、もうくどくどとご説明す
ることもないが、うっかり ゲーテの作品になにかがあるかはまだ調べに当たっていない。
あの頃、飲んでいるときにドイツからの若い客にそおっと (x x x x) はなにかと聞い
た。彼はしばらく目を膝に当てて、やおら「それは 鱒ですよ」とこたえた。で？ そ
のころは？ 食う人間の方も鱒がかわそうとかありがたいとかの意識はないし、食わ
れる方も多分食われていやだろうが、人間を意識していないだろうと決め込んできた。

ここまできて、もうひとつの意識に気がつく。それはこのマトリックスを眺めている
目と言えようか。(x x x x) を意識することが問題発見であることになる。
さらにその結果として他の升目に行くべきかどうかを考えるということへ発展するの
であらうか。

ゲーテの隠したミッシングリングだったのであろうか。

ところで いわしの歌という歌曲はどこかにあったであらうか。

2.3.5 寺川 彰「個と全体」

03/02.11

自然の生命体の営みは多様で、不思議と知恵に満ちている。基本的には、個は分担によって全体に奉仕するように働き、全体は個の生命を保証するように見える。

餌を置くと、最初の鳥が鳴いて、先ず仲間を呼び寄せる。種族保存の原則なのだろう。その上で、食べる順序で個別の争いを起こす鳥もおり、そうでない鳥もいる。全体としてこの鳥群は集団を生かしながら、個が生きている。

マングロープの木は海岸に繁茂するが、それぞれの木には必ず黄色い葉が何枚かついている。それは、木全体の塩分を適性に調節するために、自らは塩分を過剰に吸収し、それによって黄化し落葉するのである。特定の個が死の役割を分担して全体を生かしていることになる。

動物では、受精後の万能細胞は、どんな臓器や組織の細胞にもなりうるが、その能力と可能性を眠らせ、それぞれの個別の器官の体細胞を形成するように遺伝的にプログラムされている。分化して形成された個々の器官細胞は相互に作用しあって全体を作り、個と全体は共生関係になる。

これらの個別の器官を構成する個々の細胞はまた、日々、老化、死、再生の循環繰り返しという細胞の犠牲によって器官の生命を維持している。

個の欲望が過ぎると全体は機能不全に陥る。体細胞の歯止めのない増殖はがん細胞となり、個も全体も失われることになるだろう。個と全体は、抑制をともなったバランスの上に成り立っているのである。

そして、個が支える全体集団は、別の全体集団との関わりにおいてどこへ向っているのだろうか。自然の生物の中では、集団間の戦いと淘汰の中で、環境の変化に即応する進化を伴いながら、より調和のとれた共生の方向へ向っているように思われる。

物理現象では個と全体はどのような関係にあるのだろうか。

あらゆる物理現象は、個別には予測不可能な偶然性が作用しているように見えるが、全体としては確率の高い一方向に進んでいるのではなかろうか。

ブラウン運動では個々の微粒子の水上の動きはランダムで予測不能である。しかし、全体として見ると拡散の方向に向っている。個々の偶然の集合から全体の必然が生み出されているのである。

1日は地球の自転によって昼夜を繰り返し、1月は月の公転のリズムに従い、1年は地球の公転によって四季が移ろう。個々には、偶然のばらつきやゆらぎがあっても全体としては循環をともなった必然の流れにそって動いている。

人間社会における個と全体の関係はどうだろうか。

文明の歴史を、時間幅を一定にして年代別に並べた時、東西文明は、800年の周期でDNAの二重らせん構造のように興亡が逆サイクルで入れ替わっていることが発見されたという。天体、自然の運行に必然の流れがあるように、偶然とみられる個々の文明の歴史の

流れも、全体を通観した時に始めて必然の方向性が見えてくるのである。

ここにみられる自然の姿は、秩序ある循環と進化とも言うべきものであろう。

人間の歴史は常に戦いの連続であった。地球上至る所で、個別に不毛な戦いが繰り返されてきた。それでも、その規模は、次第に小さな集団から、より大きな集団間の争いへと変化してきたように見える。現在も民族間の個別の紛争は絶えないが、これも歴史の経過における1時のゆらぎであるのかも知れない。

驚くべき科学技術の発展に伴う地球グローバリゼーションの動き、ヨーロッパ市場統合など、それが、人間の経験と理性が欲望を超えて、次第により多くの人間の幸せを求めるよりよき必然の方向であろうことを、期待をこめて見守っている。

2.3.6 石井登喜男「コンサルタント失格の弁」

2000年10月 HEART の会報掲載

2.3.6.1. はじめに

私は定年退職後、コンサルタントを志して努力をしてきましたが、二つの理由で失敗しています。

1) お客さんに対する説明能力の不足(結論を急ぎすぎてしまう)

2) 地元の公民館活動が忙しくなった

(お客さんに気を使うことがなく、自分のペースのできるの好きになった)

以下にその経過を書いてみます。

2.3.6.2 私の能力不足

1) 『自分に何が出来るか』を明確に自覚する必要がある

私はサラリーマン時代は主として製造畑を歩みましたが、その経験を土台にすれば、コンサルタントは簡単に出来ると自惚れていました。しかしいざ退職して準備作業をしてみるとこれは大変な間違いであるということに気がつきました。

自分の売り物即ち『自分に何が出来るか』をもっと明確にする必要性に気がついたので、企業の『ISO9000, ISO14000 の受審活動援助』を主体とすることを目指し、受験者の少なかった ISO14000 の審査員研修に参加し、資格を取得しました。

2) ISO14000 の研修を受けて感じたこと

; ISO9000、ISO14000 は上手に取り入れれば、社内改革の有力な武器になります

ISO9000 以前は個々の製品ごとの品質規格が制定されており、規格に合格した製品が提供できている限り、会社の内部状況等は問題ではなかった。しかし一度に大量に注文する場合などには『信頼に値する会社』であることを確認する必要があります。さらに欧米では『結果』だけでなく『途中のプロセスを透明にする』慣習があり、会社の組織全体で品質保証する欧米主導の ISO9000 が誕生したのです。

日本でも高度成長が終わり、会社内ではトップが明確な方針を打ち出し、『責任と権限』を明確にして全員で実行していく体制が出来ない会社は競争に敗れてしまう時代になってきました。

ISO14000はさらに企業活動の全てを点検し、環境に悪影響を与える活動を計画的に削減するように仕向けていきます。

したがって日本の製造業の将来に不安を感じていた私は、ISO 導入の援助をすれば企業立ち直りにきっかけに出来るので、ぜひ推進すべきであると考えました。

3) 導入する企業の態度に失望しました

研修に参加した仲間の大部分は審査会社に勤務してコンサルタント業を続ける道を選びましたが、私はサラリーマンの延長になることを嫌って独立の道を選びました。

; 社内改革よりも『資格取得』のみにこだわっている会社が多すぎます

日本の会社の欠点はトップが『よきに計らえ』と部下に仕事を丸投げしてしまうと

ころにあります。そしてその体制のままでも、ISO の要求事項にしたがって分厚いマニュアルを整備すれば、資格をとることは出来ます。しかしそれでは半年毎に行われるチェック時の準備など維持管理に莫大な費用がかかりますので、中小企業などでは資格取得は困難です。

ISO を社内改革の武器とするためには、トップが意識を変え、明確な方針を出し、それを実行する簡素なシステムを構築する必要があります。そのためにはちょっとしたコツが必要です。私のコンサルタントとしての生きがいもその点をバックアップすることにあります。しかし私が 2, 3 接触した会社ではこのようなトップは居ませんでした。

最近話題となった『雪印乳業事件』の場合でも、トップが『当社は消費者が安心して購入してくれる製品を提供します』と言う明確な方針を出し、そのための社内チェック体制を確立していれば、問題は未然に防げたはずですが、お金をかけて ISO を導入するので、社内改革に役立てなければもったいないと思います。

しかし顧客の要望にこたえるのがコンサルタントの役目ですから、私のように『お客の考えを変えよう』と言うのは異端であり、注文がないのが当たり前かも知れません。

2.3.6.3 公民館活動について

1)管理能力の話

私の地元佐倉市の志津公民館で開催されている『しづ市民大学』は、一年制ですが、昨年で10年経ちました。スタート時には男性85名、女性91名と女性優位でしたが、昨年は男167名、女113名と逆転しております。この傾向は5年前位からです。定年退職者が増えたことが原因だと思います。女性優位の時代はどちらかというと、趣味の会の延長で、『教えてもらう』意識が強かったのですが、最近を受講生が積極的に参画する講座が増えております。

私は定年退職した平成8年から参加しています。講座を聞くだけでは物足りなくて、終わってからの飲み会の企画。卒業してからの毎月のOB会の提案。次の年には運営委員に立候補し、運営にも発言するようになりました。今年から卒業生を対象に『研究科』が出来ました。私は幹事として参加しています。

市民大学の運営は当然男性が中心になってしまいます。企画をたて、それを管理推進する能力はサラリーマン時代に経験した人が多いのではないのでしょうか。

定年後『手に職がない人』が困っているという話を聞きますが、私は『管理能力』も立派な能力であると思います。公民館活動を通じて市民団体の人の話を聞く機会が多いのですが、会の運営がもうひとつ物足りない団体が多いようです。積極的にサラリーマン経験者が参加し、助けるべきだと思います。

2)報酬と言うこと

平成8年の閉講式で聞いた『女性に学ぶ』と題する次のような話に、私は頭をがつん

と殴られたようなショックを受けました。

; 人間が生きていく上で不可欠な仕事『食べること』『寝ること』『排泄すること』をサラリーマンの男性は女性に頼りすぎている。そして人間は一人では生きられないので、必ず周りの人と相互依存関係が成立している。

サラリーマン時代、地域のこと、家のことを全然考えないで、会社のことしか頭になかった私でしたので色々反省させられました。

会社人間を卒業して、一市民になるためには身につけてしまった『出る釘は打たれる』ことを恐れて自己主張を抑えてしまう癖を取り除き、自分に出来ることを積極的に実行することだと思います。その点では、公民館の活動は何も利害関係のない人との付き合いなので最適です。私は妻をはじめ地域の人たちからこれまで受けた恩恵に報いるために、自分の経験を生かしていきたいと考え、まず議論の結果などをワープロで文章化することからはじめました。報酬と言うのはお金で受け取ることばかりでなく、『他人に貢献したことによって得られる喜び』も含まれるのだと今は考えています。私は現在使い切れないほどの報酬をもらっています。

; 経験はそのままで役立つことは少なく、最新の知識で磨かなければ役に立たない

私は前報で述べたように、パソコンを使って自分史のまとめを行ったのであるが、講義を聞くうちに自分の経験を思い出し、『こうすれば役立つのだ』とはっきり自覚することが出来ました。

又2年前から母校の同窓会が運営しているメーリングリストに参加して週1回の投稿を自分で義務付けています。こうすることによって新聞、雑誌、テレビなどあらゆるものに興味を持って接することが出来ます。似たような経験を思い出し、その時にとった自分の行動を反省すると、『こうすればよかった』と言うことが明確になります。

2.3.7 北島道俊「規範、そして規範なき社会の問題」

2000-9-21

2.3.7.1 「規範」とは

人間社会における倫理・道徳上の共通の価値観、あるいは、人間の日常の行動を秩序づける共通の価値観。人間の恣意的な判断基準ではない。（*1）

2.3.7.1 「規範なき社会」の問題（*1）

①「無規範な時代」を形成した要因を挙げて見みると、

(1)合理的という言葉で片付けてしまう恣意的（身勝手な）判断基準（価値観）

実験と証明可能なもののみを合理的とし、ついには、実験による検証不可能なものを不合理とみなす考え方が、科学・技術・経済・はもとより、あらゆる領域において支配的になってしまった。このことは人間における諸問題を主観的感受性の問題に矮小化し、無規範につなげたといえる。

(2)虚無化による共通の価値観（普遍的価値）の喪失

人間社会における倫理・道徳上の行動の基礎が主観的判断基準で量られ、真理や道徳上の価値の客観的根拠を認めなくなり、自己の思いや欲望を満足させることだけが目的の「利根的、虚無主義的」行為の氾濫につながった。

これは、敗戦後（反動として）失った大きな事象。

(3)規制と規範の混同

規制は制限のための掟であり、権力維持の為であれば縛りである。これが規範と混同され、規制の回避・反発が無規範の容認に繋がってしまった。

これが、敗戦後（敬虔さを失って）陥った大きな混乱。

②「無規範な時代の」の身近な社会問題認識の例示

(1) 殺傷、暴力行使など行為障害の激増・・・◎コドモもオトナもおしなべて問題

(2) 自らをいちはやく時代の被害者の立場においての加害者探し・・・◎問題のたびに元凶さがしに躍起になり、自分以外のところに責任転嫁、たらいまわし。

・・・◎高度経済成長が悪の根源であるかのような自称進歩的文化人の顕著な論調。

(3) 灰色部分にどっぷり漬かる居心地の良さ・・・◎正気と狂気、右と左、男と女、白と黒などの境界が曖昧のまま。

(4) 規範の確立を回避する時代精神・・・◎不気味な様相を呈する。

2.3.7.3 「規範・再生」への提言

(1) 現在のすっきりしない問題の多発を世紀末的現象などという低い次元で捉えず、しっかりした認識のもと解決策を研究し、新たなる規範を整備することこそが21世紀に与えられた課題と考え努力する。（*2）

(2) 教育改革

◎ 考え方の規範とする教えや事柄を見えなくする（骨抜き）教育を変える。

- ◎ 規制の積み重ねで規範を得ようとする間違い。規制はたとえ有効なものであっても対症療法でしかない。規範は育てなければならない。
- ◎ 市民大学など、人間の日常の行動を秩序づける共通の価値観、生き方の生涯学習環境をつくる。

(3) 規範なき I T 化は人間社会の崩壊に繋がる。

(4) 価値の尺度をすべて貨幣に集約することの限界を知ること。

[参考]

- * 1 土戸清：規範なき時代の宗教 (教文館、1997.3.20.)
- * 2 中村健二郎：21世紀に与えられた課題 (HEARTの会報第15号 1998.10.1.)

2.3.8 植竹敏夫「自由論」

2003.3.5

Freeの本当の意味を日本人は知らないでいる。

だから「人は本当に自由に耐えられるのか」という命題にたいしてたじろいしてしまうのである。

というのは日本人は自由という意味を知らないできたかも知れないし、本当の意味で自由を味わった事もないのかも知れない。

なぜなら自由の対極である、拘束状態といささか不本意な表現であるが、奴隷状態を知らないからである。

奴隷状態とは生命を保証される事を引き換えに自分の意志を喪失する事である。

逆に自由な状態とは生命を保証されない代わりに自分の意志を獲得する事である。

従って戦争において生命を保証されない上にさらに自分の意志を喪失する事は無限に理不尽な事であり、その理不尽な状況により人はトラウマを生じるのである。実際に軍隊生活において精神異常をきたした西洋人はたくさんいたと報告されている。

従ってこの極限状況によって、精神的自由を得るために人は殺戮を正当化するのであろうか。

これが戦争における本質的な不条理である。従って西洋人にとって捕虜とは奴隷状態の事であるが、生命を保証される事を知っているから耐えるのである。しかし日本人にとっては捕虜とは不条理な状態の増大であるから自殺するのである。

それでは平和時において奴隷状態とは何か？

西洋人は日々の糧を得る事は自分の意志を喪失する事であるから奴隷状態と同じであると考ええる。

ちなみにServiceという意味は語源的にSlaveと同じである。つまり勤務状態を奴隷状態と同じに考える事ができる。しかし現代の人たちが奴隷状態と同じであると意識する事はない。なぜなら長い間に培われた人権思想によって理不尽に扱われる事はない。

例えば女性に固有の問題のセクシュアル・ハラスメントは人権思想によって保証されている違反行為であるが、極論をすれば捕虜の扱いにおける禁止行為に近いわけである。そして日本の企業が容易にセクシュアル・ハラスメントを犯す背景はこの「自由の意味」がはっきり分かっていないのである。人々はそれらの奴隷状態の対価として賃金を貰うのである。従って勤務時間を離れば自由を得るわけである。

しかし自由でありつづける事はやがて賃金を失う事であるからその対価として生命を脅かされるのである。従って近代では自由である状態と奴隷状態が時間配分によって管理されていると見る事が正当な論理である。即ち賃金をより多く獲得するためには奴隷状態の時間配分を多くすればよいのである。平たく言えば自由の収支バランスである。

人々は奴隷状態で獲得した賃金をその自由な時間で消費するのである。しかしなが

ら資本を多く持っている者は少ない労働力で多くの賃金を獲得できるという例のありふれた論法よりは既に多くの宣伝能力を持った者が少ない労働力で多くの賃金を獲得できるという論法の方がより現実味を帯びており、マルクスよりはマクルーハンの方が21世紀に近い考え方である。このようにして人々は知恵と工夫で奴隷状態を少なくし、自由を多く獲得する方法を21世紀前半に獲得したのである。

その意味でマクルーハンは21世紀のIT社会の実現を予言したとも言える。しかしながら逆に知恵のない人は奴隷状態を多くしなければならぬ事が分かってしまった。

従ってここにも人権思想を持たなくてはならない。即ち知恵のある者が獲得した富を再分配する事が早急な課題なのである。

子供に自由があるのかと問われれば、子供は自分の生命を守る事ができない故、本質的に拘束状態である。しかしながらここでも人権問題は存在する。

即ち子供の人権である。奴隷状態にして良いはずはない。

しかしながらよく教育論理に現れる事は、子供の人権を奪い、戦争において生命を保証されない上にさらに自分の意志を喪失する事は無限に理不尽な事と同様なトラウマを生じさせている事に無関心である事である。これらはやがて容易に児童虐待の論理に繋がるのである。

日本の企業が取ってきた終身雇用は定年までは子ども扱いし、賃金を約束する代わりに自由を制限する事であるが、その賃金を一定期間貯蓄する事により年金という形で持続して賃金を支払うため、今度は逆に自由を与えるので老人にとっては天国であろう。しかし年金は努力で増えるわけではないのだから、やはり拘束状態の延長である。

かつてギリシアには哲学を語り、美を語り、民主主義の政治形態を語る、自由市民が存在したが、彼らを支えたのは奴隷の労働力であった。日本の官僚の構築したシステムは官僚が哲学を語るにふさわしい場を作ったのではないかと思われるようになってきた。

彼らの哲学を語る上で必要なのは国民の理不尽なまでの労働力である。しかしながらこの市民という概念は官僚からしてみると得体の知れない連中が自分の領域を侵し始めたと感じているのではないだろうか。

即ち本来の市民というイデオログが欠如したまま21世紀を迎えようとしている。

日本がバブル景気に沸いていた頃、アメリカは得体の知れない不況を味わっていた。

その時ジェレミー・レフキンはその著「大失業時代」で今日の日本を予言していた。

即ちコンピューターがやがて人の労働を奪い、多くの人が企業から放逐されて、やがて大不況が来るであろうと。あるいはグローバル化に伴い、労働力そのものが市場と化すであろう。

即ちより労働力の安い市場にシフトする事により、企業は2つの選択を強いられる。

1つはコンピューターにより労働力そのもののコストダウンを図る事。

もう一つはより安い労働力市場を求めて世界中に生産拠点を移すであろうし、賃金の点でいえば、日本においては年功序列の観点から、賃金の安い人が残され、賃金の

高い高齢者はドロップアウトさせられる。しかしながらこの構図はきわめて観念的である。

労働力によって得られた商品は賃金を得ている労働者によって消費させられるからである。したがって安い労働力で得られた商品は安い価値しかもたらさない故、経済は次第に減速してしまうのである。これが大不況の根本的原理である。そして安い労働力を得る代償として限りなく大きいリスク負担により、企業は今原点に戻る作業を始めている。即ち間違った方向にゴルフボールを打ってしまったのである。

そしてドロップアウトさせられた人たちは、市民運動として、企業や公共団体に異議申し立てを始めたわけである。やがて企業はドロップアウトさせた人たちに意見を聞かねば自社の商品は売れなくなるであろう。これがジェレミー・レフキンの描く構図である。

ドロップアウトさせられた高齢者は今こそ新しい世界構築の為に無償で働くべきである。それは自由のためである。ただ年金生活にのみ夢を育むならば、経済はどんどん収縮するであろう。

それを阻止するのが **Free-age** に与えられた使命である。

その努力がやがて **Age-free** の社会を創るであろう。

2.3.9 栗原 一「ある教育者の悲劇」

平成 13 年 3 月

昭和 9 年、県の教育研究会の発表会に、師範学校を卒業したてで新進気鋭の一人の青年が聴講していた。二番目に、熱心な教育者として知られている青年の先輩が演壇に立った。

話出しの最初に石川啄木の「はたらけど はたらけどわがくらし らくにならざりじっとてをみる」と読み上げた途端、来賓席に座っていた県視学に、壇上から引きずり降ろされ、連れ去られた。発表会は一時中断し、会場はしんとしてしまった。連れ去られた先輩は、その後僻地に転任させられた。

この時聴講した青年は、ある日校内の研究会の後の茶飲み話で「天皇も人間だ、人間であるからには、あやまりもある筈だ」と言った。それを小耳にはさんだ校長は、即この青年に、大倉山精神文化研究所へ行って修行をしてこいと命じた。当時、この研究所は教員の再教育として「超国家主義」の洗脳の間であった。時局は既に個人の自由な発想は否定され、軍国と言う雁字搦めの時代、若い教員程、洗脳が必要だった。この時青年は、天皇を頂点とする国家機構に忠実に随順する以外「生きる道」はないと覚悟した。27 才になり青年は結婚し、教育の実験校である附属小学校に転任する。一学年男女各 40 名づつの学校。昭和 15 年その男子一年生の担任となった。以後づうっと持ち上がりになって行く。私達との出会いはここから始まった。

附属校は時の文部省に直結しており、常に文部省の督学官の指導を受けていた。小学校は中学以上の教育迄の橋渡して、持って生まれた子供の才能を伸ばし、発展させる場である。しかし文部省は身命を投げ捨てて皇運を扶翼する次代国民の錬成の場と位置づけた。

小学校は国民学校と改称された。国旗掲揚、宮城遙拝、教育勅語奉読等の日常儀式の中で本来の個々の才能を伸ばす教育を先生は努力された。工作や理科では生徒の創造性を重視した。日記を付けさせ、月一回は作文の宿題をだした。これらの作文を集めて「戦時綴り方」として刊行し、戦時の教科書の補助材とした。毎月の誕生会は親も同席し、日常の反省会を兼ねた。又数人をグループとし、先生の自宅に泊り込み、厳しく躰けをした。

戦争が激しくなり、運動場はさつまいも畑となった。生徒は近くの牧場から二人一組でパイスケで牛糞を運んで肥料とした。先生も率先して汗を流した。

昭和 19 年、遂に学童疎開の命令が下った。先生は縁故疎開で離れる生徒を見送った後、集団疎開の生徒達と共に都市を離れ、田舎の疎開地へ行く。生徒達と寝食を共にし、物資不足の中を終戦迄頑張り抜いた。

疎開地で終戦を迎えた。「頑張りましょう勝つ迄は」は終わった。11 月に疎開地で解散式をおこなった。「生産と科学の力で敗れたのだから、今後は学問を起こし、科学の力で国を再興し、米英を凌駕しなければならない」と訓示した。そして先生は、元の学校には戻らなかった。

昭和 22 年国民学校は消滅。C I E の眼を避けて隠遁していた先生も結局は追放。私達が大学に入る迄先生とは連絡が取れなかった。

追放が解除され、先生は教育現場に戻り、その後小学校の校長になったが、昭和 35 年の安保闘争で樺美智子さんが死んだ日、学生運動に夢中になっていた先生の娘さんも一緒に行動していた。彼女は失望し、その後自殺した。先生は落胆し、時局に従った自分の運命を呪った。

昭和 50 年、先生は一冊の本を読売新聞社から出版した。題名は「ここにも教育はあった・国民学校始末記」、先生が保管された生徒の作文が随所に散り嵌めてあった。

今年は先生の 13 回忌。教わった私達は毎年クラス会を続けている。小学校のクラス会、と人は言うが、この先生に教わったからこそ私達は集まり、続けられるのだと思う。

2.3.10 藤井 勲「人生の教訓」

平成 15 年 4 月 19 日

ここに書き綴るものは、筆者が平成 6 年（1994 年）に著した『続・廃棄物事業』の「まえがき」として書き綴ったものであるが、「先進エイジフリー社会を目指して」を討議してきたワーキンググループ 3 で議論した中で、筆者としての経験を披露し、後世に伝えるべきであるとのメンバーからのアドバイスもあり、当時の想いを現状に置き換えて、若干の修正加筆を行ったものである。

21 世紀を迎えて、3 年を経過した。この 21 世紀に、何を期待するか。様々な人が様々な想いで、この 21 世紀を迎えたことであろう。筆者も、11 年前に、(有) 環境情報システムを創業し、「廃棄物コンサルタント」としてデビューしたが、16 年半前に出会いのあった「ごみ・廃棄物」およびその問題と共に歩んできたといえるし、21 世紀を迎えるに当たり、「ごみ・廃棄物」を含めた「地球環境」に何のように対応すべきであるかを、真剣に考えている一人であろう。

16 年半前に「ごみ・廃棄物」との出会いがあって以来 4 年間の筆者の行状については、筆者の前著作本『廃棄物事業』（平成 4 年 3 月同友館より出版）に記されているが、その後については、この本を通して報告すると共に、「ごみ・廃棄物」問題を何のようにして解決できるかを体験を通して提案／発信したいと考える。

この「ごみ・廃棄物」問題のみならず何事においても共通することは、筆者が人生 66 年で得た次の教訓に集約されるといっても過言ではあるまい。

- ①何事においても、「出会い」を大切にすること。
- ②「郷に入りては、郷に従え」の姿勢を大切にすること。
- ③「餅は餅や」の考え方を大切にすること。
- ④「相手の気持ちになって考える」こと。

従って、「ごみ・廃棄物」を含めた「地球環境」問題の解決策の基本としても、上記の教訓が大いに役立つと考える。また、「地球環境」問題の解決策においては、「人間と自然との共生」を計ることが最も大切なことと考えられるが、自然を相手として上記の教訓を当てはめれば自ずと解決されるヒントが見えてくると考える。

- ⑤「人間と自然との共生を計る」ことを大切にすること。
- ⑥「地球の生態系バランスを保持する」ことを大切にすること。

この「ごみ・廃棄物」に関して、平成 3 年には「廃棄物処理法」の改正及び「再生資源利用促進法」の制定があり、平成 4 年には「産業廃棄物処理施設設置促進法」の制定があり、いわゆる「廃棄物関連 3 法」の整備がなされ、法制整備の面では大幅に前進したことは喜ばしいことと思う。

ただ、この「廃棄物関連 3 法」が完備されたことによって、上記の③および④の教訓がなおざりにされているように思われる。即ち、「再生資源利用促進法」の施行に伴って、「リ

サイクル運動」が活発化してきたことは喜ばしいことではあるが、この「リサイクル運動」のお蔭で既存のリサイクル業者に悪影響を及ぼしかねない事態になっていることは決して好ましいことではないと考える。このような場合、上記の③「餅は餅や」および④「相手の気持ちになって考える」の精神が欠けているのではないかと思われる。

筆者は昭和 34 年 4 月、ある鉄鋼会社への入社と共に社会人となったが、それ以来、製鉄所、本社、海外、出向など様々な国・州・県・地域での生活を体験し、鉄鋼製造技術、生産管理、長期設備計画、工場建設、技術指導、技術調整、マスタープラン作成、技術開発、需要開拓、エンジニアリング、プロジェクト開発、プロジェクト管理、事業開発など様々なテクノロジー、エンジニアリング、コンサルティング、マネジメント、コントロールリングを経験してきた。

因に、筆者の海外勤務（長期出張も含む）は 10 年を越えており、滞在した国は、アメリカ、ブラジル、インドネシア、オランダ、イギリス、ドイツ、アラブ首長国連邦、インド、タイ、シンガポール、マレーシアなどである。また、出向も 4 回あり、ブラジル・ウジミナス製鉄の建設および操業指導、インドネシア・パイプラインプロジェクトの建設、マレーシア・電子部品工場の建設および操業体制確立、日本・廃棄物処理会社における企画開発の 4 業務を体験した。

その後、平成 3 年 9 月に鉄鋼会社を定年退職し、平成 4 年 3 月に廃棄物処理会社を退職、即平成 4 年 4 月に（有）環境情報システムを創業・開業した。

前述の 4 つの教訓は、昭和 34 年に社会人になって以来、様々な国、様々な仕事を通して得たものであるが、この「ごみ・廃棄物」問題に直面しても、この 4 つの教訓が見事に生かされている。

教訓①については、筆者が 16 年半前に「出会い」があったのがこの「ごみ・廃棄物」であったこと、この「ごみ・廃棄物」との「出会い」を通して前述の廃棄物処理会社中のリーダーカンパニーの社長との「出会い」があったこと、この社長との「出会い」を通して廃棄物処理業界をつぶさに体験できたこと、つぶさに体験できたことによって筆者の前著作本『廃棄物事業』を出版することができたこと、この『廃棄物事業』を出版したことによって様々な人々との「出会い」があったこと、様々な人々との「出会い」によって様々な勉強・体験・経験・仕事・コンサルティングなどができた／生まれたこと、このような経験を通して諸種の仕組・分析・手順・基準・標準・開発・提案・アドバイスなどが行えたことなどである。

教訓②については、筆者が社会人になって 44 年間様々な国で仕事をしてきた中で会得したビジネス感覚であったといえるが、このビジネス感覚の欠如によって多くの日本人ビジネスマンが海外事業／業務で失敗してきたと考える。多くの日本人ビジネスマンは、当時も今も、海外プロジェクトを行う時に、日本／東京に向けて仕事をしていると思う。何

故、その国を向いて仕事をしないのだろうか。筆者は、多くの海外プロジェクトをこなしてきたが、常にその国に向いて、「その国の人により、その国のやり方で、その国の人々の考え方で、その国のため、その国の人々のために」仕事をしてきたと言いたい。また、前述の廃棄物処理会社へ出向した時も、廃棄物処理業界を「廃棄物国」と考えて、「廃棄物国には廃棄物国の人々が居り、ルールがあり、法律があり、仕組みがあり、考え方があり、やり方がある」との前提で仕事をこなしてきた。

教訓③については、筆者が鉄鋼会社に勤務していたおり、エンジニアリング事業を推進するに当たって、既存のエンジニアリング事業会社の仕事を奪うのではなく、鉄鋼会社の持つ資源・技術・人材などを駆使して鉄鋼会社として既存業界とは差別化した手法で、「既存業界と共生」する形で、事業推進を行ってきたと思う。特に、「餅は餅や」のビジネス感覚は、筆者の勤務した鉄鋼会社にあつては、筆者が昭和34年に入社した頃は、特に、「天下国家を論じると共に、わが国の発展のための基幹産業たれ」が謳い文句であった。しかしながら、このような考え方では今の厳しい時代はやって行けないかも知れないが、逆に、今の日本に欠如したビジネス感覚かも知れないし、今の日本に必要なビジネス感覚かも知れない。今の日本とアメリカの経済摩擦も「餅は餅や」の感覚が必要なのかも知れない。また、「ごみ・廃棄物」問題についても、前述の「リサイクル運動」の根底に隠れている部分は、この「餅は餅や」の考え方を導入すれば、「リサイクル運動」のあり方の答が見えて来るのではないか。

教訓④については、筆者が勤務した鉄鋼会社がインドネシアで受注したパイプラインプロジェクトの技術調整役（Technical Co-ordinator）を業務とした折、施主であるインドネシア国立石油会社のメンバーおよび現場施工を行っている工事担当メンバーの間にあつて、それぞれの立場と責任および権限に鑑みて、正に「相手の気持ちになって考える」ことをモットーに、調整に当たったことが、このプロジェクトを成功裡に終えさせたと思う。また、「ごみ・廃棄物」問題で、最大の問題とされる「最終処分場の設置場所の選定と建設および運営」においても、地権者、地域住民、地域社会、地方自治体、都道府県民など「相手の気持ちになって考える」ことが最も大切であると考え。この「ごみ・廃棄物」問題に関しては、特に、「人」との関わり合いを重要視しなければならないと考える。

2.3.11 藤井 勲「環境消費の勧め」

平成 15 年 5 月 14 日

このワンポイントは、小職が長年お付き合いを続けている日経産業消費研究所(日本経済新聞社の関連研究所)の編集長からの要請に応じて、日経消費経済フォーラム会報 03 年 4 月号に「経済活性化の決め手は、ごみを出さない消費行動」と題した小論文を寄稿した内容が、本書の「参考になる見方・考え方」の一つに加えても良いとの判断で、その論文の転載(抜粋を考えたが、全文を掲載しないと論文の流れが不明確になると判断した)と若干のコメントを付してみたものである。

いま、地球環境創造が叫ばれている。

昨年夏の異常気象ともいえる猛暑、欧州での大水害、中国における砂漠化現象、米国における大干ばつ、オーストラリアでの大山火事など世界中至るところで環境異変が起きている。一方、我が国におけるバブル経済崩壊後 10 年以上に渡る不況、一昨年 9 月 11 日の同時多発テロを契機とした米国の経済クラッシュ、その影響を受けた欧州各国の景気低迷が見え隠れしている。ただ、中国だけは大幅な右肩上がりの経済を謳歌している。

わが国の「環境・エネルギー・廃棄物」問題に目を向けると、1997 年 12 月に地球温暖化防止京都会議(COP3)が開催され、わが国は温暖化ガスの排出量を 6%削減することで基本合意した。しかし、その通りには削減が進んでいない。昨夏に相次いで発覚した原子力発電所のトラブル隠しで、休んでいた火力発電所を再稼働させなければならず、京都議定書に逆行する事態が発生しているためだ。また、近年とみに「ごみ・廃棄物」の不法投棄が増えている。各地で土壌汚染や地下水汚染も進んでいる。

こうした環境・エネルギー・廃棄物に関する複合化した課題が、続々と顕在化してきていることを見る度に、第 2 次世界大戦後に我が国が築いてきた政治経済社会システムの「つけ」が回ってきたと思われてならない。

<有機資源の活用に関心高まる>

このように変動する世の中において、どのような消費行動が求められているのだろうか。

最近、時々利用している食堂で面白いことを目にした。食器を入れるお盆の中にある紙製のランチョンマットに、「有機栽培米 100%」「安全基準」などが記されていた。

いわく、「ランドバーグ農場は、自然と土を大切にするため 30 年間も有機自然農法を研究してきた。その結果生まれたのがこの『有機米』。自然堆肥と 1 年以上休ませた自然の栄養たっぷりの土で美味しくなった」「体にうれしいお米だ」。また、「この牛肉は米国産のナチュラルビーフ。成長ホルモン剤・抗生物質は使っていないから、安心して食べられる」などなど。

有機栽培米の元となる自然堆肥は、一般には農家にある「わら」(米わら、麦わらなど)、「もみ殻」(米、麦など)、雑草、植栽くずなどに人糞を混ぜ、時間をかけて堆肥にする。最近では我々の家庭、レストランなどから出てくる「食べかす」即ち「生ごみ」、家畜の糞尿など

を混ぜて有機堆肥を作ることも進められている。

「生ごみ」は都会では一般に、「燃えるごみ」として他の紙ごみやプラスチックゴミなどととも、都市ごみ焼却炉で燃やされることが多い。しかし、ここに来て有機質資源として見直し、「環境に優しい、ごみを出さないライフスタイル」の消費行動が評価されるようになった。

また、食品の安全基準については言われだして長いが一昨年からの BSE（牛海綿状脳症、狂牛病）騒ぎで再び関心が高まった。その原因となった牛の飼料「肉骨粉」のほか、成長ホルモン剤・抗生物質など広義の環境ホルモン問題をクリアーしていない物質の使用を止めるなど、安全基準の遵守が叫ばれている。食べ物の安全性を強調することが、商品価値を高めることにつながっている。

<グリーン購入法の制定>

一方、視点を変えると、2000年には「国などによる環境物品などの調達推進などに関する法律」（グリーン購入法）が制定され、国（国会、各省、裁判所）及び政令で定められる独立行政法人及び特殊法人は、各機関が重点的に調達すべき物品及び役務の種類（特定調達品目）として、紙類、印刷物、文具類、機器類、OA 機器、家電製品、照明、自動車、制服、作業服、インテリア、寝装、作業用手袋、設備、公共工事、役務の 14 分野にわたる 101 品目を選定することにした。

これらは小職も参加しているバルディーズ研究会の分科会活動の一つである「グリーンコンシューマー研究会」がグリーンコンシューマー全国ネットワークなどと幅広い協力関係を築き上げていく流れの中で、国の関係者が率先して制定したものである。

<ごみを出さない消費行動を>

ここ 15 年間は、昭和のバブル経済が終り、平成不況に突入して 21 世紀を迎え、経済社会の状況が一変した。小職も、1988 年元旦の日本経済新聞に掲載された廃棄物処理事業に関するスクープ記事が契機となり、30 数年仕事をしてきた鉄鋼業界から、いま話題の廃棄物処理業界に足を踏み入れることになった。3 年半の実務体験を経て、92 年 4 月に「環境・エネルギー・廃棄物」コンサルタントとしてデビューした。

今日まで小職は、ごみ・廃棄物、言い換えれば消費する「もの」の最終段階（廃棄物処理）から生産段階へと、物が生産され消費されていく過程をさかのぼって観察することに、もっぱら力を注いできた。いわゆる「動脈産業」の視点ではなく、「静脈産業」の視点で消費を見ると、前世紀において、地球環境や自然環境を大きく破壊してしまったことに胸を痛める。大量生産、大量消費、大量廃棄を謳歌したことが、地球規模での環境汚染・環境破壊を進めてしまった。

いままで述べてきた環境問題を解決する鍵、消費動向の変化を求めるキーワードとして小職は「環境消費」を提言したい。

この「環境消費」とは、小職が提言する「21 世紀型の地球規模的環境創造を推進する消

費行動」を言い、「環境に易しい ごみを出さない 消費行動」である。「環境消費」を推進することが、これからの経済活性化の決め手となる、と書き記して筆を置く。

<「環境消費」の勧め>

以上が、小職の寄稿した小論文である。聞きなれない「環境消費」という言葉を世に出したが、ここで若干の解説を加えよう。「環境消費」の意味合いは、その言葉通り「環境にやさしい ごみを出さない 消費行動」である。地球環境創造が叫ばれだして長くはないが、「環境・エネルギー・廃棄物」コンサルタントに従事している小職としては、旧来とは違う、新しい思考体系により、積極的に推進するためには、新しい言葉を、即ち「造語」を世にすることが求められているとの発想から、小職は多くの「造語」を世にしてきた。

小職の「造語」には、「廃棄物事業」「地域分業」「環境情報システム」「環境創造」「ウエイスト・テクノロジー」（和製英語）をはじめ、「特定地域」「広域処理・処分」「古紙再生断材」「環境大学」「ウエイスト・テクノランド」「循環型経済社会システム」「新古パチンコ台」「地球環境創造基金」「廃棄物無害化安定固化貯蔵工法」「品質分別」「地相」「町の発明家」「成品・製品・商品」「『作り勝手』と『使い勝手』」、環境影響深度」「浸透砕石」「合意形成」などがあげられる。

例えば、「廃棄物事業」という言葉は、11年前の平成4年に作ったものであるが、廃棄物の処理処分については、単なる「ごみ・廃棄物」の「処理業」ではなく、「ごみ・廃棄物」を対象とした「処理事業」または「加工産業」として捉える「廃棄物加工事業」とし、「加工」を省略して「廃棄物事業」とした。「業」と「事業」の意味合いを鮮明にして、単なる「業」ではなく、「事業」として確立することが肝心である。従って「廃棄物処理法」という規制法（「性悪説」に基づく）ではなく、「廃棄物事業法」として他の動脈産業と同様な「事業法」、廃棄物事業を支援する事業法（いわゆる「性善説」に基づく）の確立が望まれる。また、「地相」という言葉は、人間には「手相」「人相」があるように、廃棄物処理施設の立地についても「土地の相」があるということである。廃棄物処理施設の設置に反対されるのではなく、積極的に設置することにより「地域振興」に役立つ、良い「地相」の場所を選定することが大切であり、またそのような場所はあると私は確信している。

2.3.12 藤井 勲「有害化学物質削減に向けて」

平成 15 年 5 月 14 日

このワンポイントは、小職が 10 年来参加している「21 世紀を考える会」の会報に投稿したものであるが、既に 20 回にわたり投稿している中から、本書の「参考になる見方・考え方」の一つに加えてもよいとの判断で、その投稿文の転載をすることとした。

本年 3 月 8 日午後、「有害化学物質削減を目指す国際シンポジウム」が早稲田大学国際会議場にて開催された。小職は、ある NGO 研究会の会員として参加した。出席者は 135 名であったが、久しぶりに感動させられた。

二人の外人 NGO メンバー及び一人の日本人(新聞編集委員)による基調講演「知る権利と市民参加に関わる世界の動き」、7 名によるパネルディスカッション「環境情報へのアクセスと市民参加—PRTR を事例に」が 4 時間半に亘ってなされた。

環境に排出された有害化学物質の量を国が集計・公表する「化学物質管理促進法」いわゆる PRTR(環境汚染物質排出・移動登録)法がわが国でも一昨年 4 月に制定され、本年 3 月 20 日にその集計結果が公表されることになった。

また、「オーフス条約」(環境問題における情報へのアクセス、意思決定への参加、司法へのアクセスに関する国際条約)についての紹介もあった。

30 数年製造業に携わり、その後 15 年以上も、環境・エネルギー・廃棄物コンサルタントに従事している小職としては、欧米における「環境情報へのアクセスと市民参加」に学ぶところが多いことに気がついた。我が国における NGO の活躍が望まれる。

小職は当会(ハートの会)だけでなく、各種研究会(NPO もあり)、交流会、学会などに加入していることから、今回のようなシンポジウムにも参加することが多い。

今回のシンポジウムは「有害化学物質削減ネットワーク」(T ウオッチ)の主催になるものであったが、その折に紹介があった通り、先日(3 月 20 日)環境省と経済産業省が、大気や土壌などに放出された有害化学物質 354 種の初の全国集計(01 年度分)を公表した。年間総排出量は 90 万トンであり、このうち 12 の発ガン性物質は 2 万トン、発ガン性の疑いのある 98 物質は 35 万トンにのぼった。「特定化学物質の把握と管理・促進法(PRTR 法)」で、一定規模以上の事業所に対し、指定物質を環境中に出した量(排出量)と廃棄物として出した量(移動量)の届け出が 01 年度分から義務付けられた。国が纏め、事業所ごと、物質ごとの量が公表される。また対象は全国で 3 万 4830 事業所で、総排出量は 31 万トン。9 割は揮発による大気中への発散で、溶剤原料のトルエン(13 万トン)、キシレン(5 万トン)、金属洗浄に使うジクロロメタン(3 万トン)が多かった。総移動量は 21 万 9 千トンだった。一方、届け出義務のない小規模事業所や家庭、交通機関などからの排出は、政府が総量 59 万トンと推計した。

PRTR 法は、化学物質の排出・移動量の届け出 (pollutant release and transfer register) を義務づける制度であり、45 業種で指定物質を年間 5 トン(内発ガン性物質は 0.5 トン)以上扱う従業員 21 人以上の事業所が対象で、届け出データは環境省か経済産業省に請求す

れば、有料(1090 円)ですべて公開される。届け出違反には、会社名の公表や過料(20 万円以下)などペナルティーがある。03 年度からは対象が扱い 1 トン以上に広がることになっている。

市民による環境に関わる情報へのアクセス、環境に関わる意思決定プロセスへの参加、そしてそれらを保証する諸制度の整備は持続可能な社会にとって不可欠である。このことは 1992 年地球サミットにおけるリオ宣言の第 10 原則に位置つけられたように、国際社会ではいまや常識になっており、欧州ではこの第 10 原則を具現化させた「オーフス条約」が 2001 年に発効している。

このような状況を踏まえ、我々 HEART の会 WG3 のメンバーとしても、有害化学物質については、十分に監視し、われわれの子や孫に「つけ」を回してはならないと思う、今日この頃である。

2.3.13 圓山壽和「公共的理性」

H13. 10. 30.

「公共的理性とは、討議の場としての民主主義の仕組みを通じて社会の制度を論ずる際、国民が私利の観点ではなく公正の観点をとるために必要な知的・道徳的能力である。」

塩野谷祐一氏の論考（日本経済新聞・1999年12月31日・経済教室「少子高齢化の本質を問う・『発展の成果』の認識深めよ」）からの抜粋

コメント

社会経済的な諸制度が、その原点にまで立ち戻って検討しなければならなくなっている。まさに構造改革とも言うべきものである。

誰もその事は分かってきている。問題なのは、新たに制度構築に取り組んで行くべき我々自身の知的・道徳的能力の有無なのである。

民主主義の仕組みを通じて、これら制度構築へ向けての討議や行動、更には選択がなされるわけである。しかしこれら民主主義の制度化で現実になされている、各種政府機能からの発信、それを受けての各種メディアを媒介しての情報提供、更に政党など各種団体の見解表明などを、我々一人一人は適切に解釈し、考察し、公正な観点から自らの行動を選択し、決断しているのだろうかという思いに促される。

特にこれら一連の作業の中であって、無意識の内に我々一人一人が受益者というか消費者的なスタンスに置かれてしまっていて、選挙で一票を投ずるがごとく観客民主主義に陥ってしまっていることを痛感する。自分からは何等動いていない。

従って、じっくりと職人のごとく自ら材料（この場合は各種情報）を吟味し、時には材料を寝かせて品質を固定化（情報の真偽などの確定）してから、加工（情報の解釈分析）等の作業にはいることもなく、いつも出来上がっている製品を消費する事しかに関心がいけない状況に押し込められているとも言える。正確には、そのような旨いものや便利なものを手にすることばかり考えているとも言える。お金があればすぐ手にはいるものを追い掛けている。そのための情報紙を欲しがり、自分の口に合ったものばかり見つけようとしている。食わず嫌いと億劫がりになってしまっている。

知的・道徳的能力の欠如そのものである。安きに流れているのである。

腰を落ち着け、じっくりと物事を見つめ、専門家の意見を聞き、その動作を見習い、無意識の内に私利に促われている自己の見解を吟味し、社会の一員として立脚すべき公正の観点を探っていくことが求められているのではないだろうか。観客民主主義の反対に位置している参加民主主義においては、手元と頭を捻ることが求められているのである。短期的思考に基づく目に見える成果を追い掛けるだけでなく、今の構造改革的社会変革の中にあっては、長期的かつ広がりのある観点にたった制度改革とその成果が求められているのである。表層の動きに惑わされることなく、深く考える事である。公共的理性はそこから身に付いてくる気がする。

2.4 定義群

2.4.1 言葉との出会い

① 「自己中」

「自己中心」のことであり、広辞苑では、自分を第一に考えること、自分本位。これを心理学では、乳幼児の思考様式で、自己の視点を超えて考えることができず、物事を相対化したり客観視したりできないことと書かれている。

解説

かつて、或る地下鉄の広告に自己中心的な人を、自己虫と称して道徳やマナーを忘れた人を虫に例えた。

オキザリ虫 ゴミや飲み物の空き缶やビンを所構わず置いていく虫
メイク 虫 車内で周りを気にせず、身だしなみの化粧に夢中になっている虫
チュウ 虫 人目を憚らず、くっついていて雌雄つがいの虫

この様な虫は増やしたくないと宣伝した。

実は天声人語には、40年前、詩人の辻まことの言葉が最初であると書かれていた。やはり戦後の虫である。

さて戦争中は自己主張することは許されず、自己犠牲を強いられて抑圧されていた。

戦後の民主主義の名のもとにそのたがが外れ、自己を主張出来るようになった。自己を主張するという事は、その後個人のアイデンティティを大切にするという形で、民主主義の骨子となったが、一方他人の事は考えずに自己主張をする風潮が、拡大され、自分勝手となり、わがままにブレーキがかからなくなってきた、又ブレーキをかける人が居なくなってきた。最近の凶悪犯罪は、これの悪化の最終点である。

エイジフリーの戒めである。

大国のグローバルスタンダードに毒されて、インターネットで共通の情報を得、大量生産のファーストフードや均一回転寿司を食して、いったいその人間のアイデンティティは何か？ こうゆう形で自己中を見直してはどうか。

心理学の先生が自己中を論じたのに、文春新書 齊藤 勇著 「自己チュウにはわけがある」がある。

平成 14 年 8 月 31 日 栗原 一

② 「共生」

広辞苑では、ともに所を同じくして生活すること、と書かれている。

解説

人は生ある「動物」「植物」等、生き物として共生している。それを包む自然界、特に水や空気無くしては生き物は生きられない。その水や空気も循環しており、生きている。智慧に勝る人間は、共生している自然界に、新たにいろいろな物を作りだした、それがやが

て自然界の秩序を壊し、生き物と自らの命を脅かしており、共生が大切と論じられだした。

川崎市が平成 6 年に策定した環境基本計画の指針の標語に「人と環境が共生する都市をめざして」をかかげた。

環境とは人を含む生ある物からの視点で捕らえた言葉だ。本来は自然的環境のみであったが、人間が生活を営む必要から社会的環境が出来た。それが今、自然的環境迄悪化させて問題となっている。悪化の環境を人間が作っておいて共生とは、人と環境とを同格にとらえていて、何かおこがましくないか。もう少し謙虚でありたい。

黒川紀章がテレビの中で、私の残された仕事は、人と自然が共生出来る環境を作り次の世代に引き継ぐ事です、と言っている。

これはエイジフリーとしての贖罪である。

セーフティネットを安全ネットと訳せば、我々建築屋が昔から使っていた、鳶職が鉄骨の梁に乗り、梁と柱のジョイントのリベット打ちやボルト締めや溶接付けをする際の転落防止に、架構物の空間を水平に網を張ったのが安全ネットである。さてセーフティネットの考えは「敗者復活」「機会の平等」と定義されたが、その基本は共生が前提になっているのではないか。

生物学的に論じたものに、岩波新書 栗原 康著の「共生の生態学」がある。

平成 14 年 8 月 31 日 栗原 一

③ 「循環」

広辞苑では、ひとまわりして、また元の場所にあるいは状態にかえり、それを繰り返すこと。

解説

自然は全て循環する。生き物の生命はまさにそれである、生き物の中の血液も循環する。

自然界にも水の循環がある。従って宗教で輪廻の思想が生まれた。

循環は一つのサークルを成す。品質管理の手法に古くは Plan Do See 又は Plan Do Check して元に戻してサークルを廻して管理すると教わった。

経済ではお金が血液の様に循環する。あまり滞るようでは困る。

循環とはその過程過程が大事である。エイジフリーも循環の中で捕らえれば、本題の役割ともなる。エイジフリーも循環の中の一場面である。

平成 14 年 8 月 31 日 栗原 一

④ 「規範」

広辞苑によれば

「のっとるべき規則、判断、評価または行為などのよるべき基準」

議論

私たちの議論の中では

a) 平気で自分の子どもを殺してしまう母親

b) 買春を平気で行う裁判官の存在

など日本の現状に関して悲観的な見方が多く、その対策について多くの議論を行った。そして「現在は規範が欠落した社会であり、日本に適した規範を確立する必要がある」という認識で一致した。

・規範についての提案

a) 戦前の教育勅語は強制された規範であるが、下記の部分は現在でも通用する「当たり前なこと」が書かれている。

；子は親に孝養をつくし、兄弟、姉妹は互いに力を合わせて助け合い、夫婦は仲睦まじく解けあい、友人は胸襟を開いて信じあい、そして自分の言動を慎み、全ての人々に愛の手を差し伸べ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格を磨き、さらに進んで社会公共のために貢献し、また法律や秩序を守ることはもちろんのこと、非常事態の発生の場合は、真心をささげて国の平和と安全に奉仕しなければなりません。 (国民道德協会訳による)

b) 問題は国民がその当たり前な事を、当然のようにやるかどうかです。

戦前は教育勅語を強制されたのは事実であるが、それ以外に親や地域の人たちが、その当たり前な事を小さい頃から繰り返し教えていたから大部分の人がそれを実行できたのだと思います。先の自画像の中にも親や祖父から繰り返し教わったことが書かれています。

戦後はその仕組みが壊れてしまったのです。したがってこれからの作業はその仕組みを日本のなかに何とかして作り出すことだと思います。

教育基本法第一条(教育の目的)にかかっている次の言葉で、充分規範の役目をすると思います。

「教育は人格の完成を目指し、平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」

2001.5.2 1 石井登喜男

⑤ 「パラダイム」 p a r a d i g m

本来はギリシャ語で、模範例、範型、モデル、教訓などを意味するパラダイグマ(paradaigma)に由来する。たとえば、プラトンの「ティマイオス」(28A)では、製作者が何らかの同一性を保つもの(たとえばアイデア)に注目し、その種のをモデルにした形や性質に仕上げる、という再のモデルが<パラダイグマ>である。ラテン語のパアダイグマにおいては、特に語形変化の基本例を意味した。しかし、現代思想の頻用語として定着したのは、科学史家の*クーンが*「科学革命の構造」(1962)で使い始め、*科学史家や*科学哲学者らによって広く使用されることになったからである。だが、クーンがこの用語を提起した直後、たとえばM. マスターマンらによってこの語

の両義性・多義性が指摘されることになった。クーンは、前掲書の第2版（1970）に付した「後記－1969年」の中で、このような批判は部分的に受け入れ、より厳密な概念規定を伴った術語として、パラダイムという言葉の代わりに「専門学問母型」（*disciplinary matrix*）と言い換えることを提案した。

すなわち特定の専門学問領域において、さらに精細に規定されるべきさまざまな規定的構成要求と再定義するのである。しかしながら、1970年代にはいってクーンは、*解釈学的哲学に親しみ、パラダイムという言葉が解釈学のある術語によって表現可能であることに気づいていく。つまり、その術語とは、「解釈学的基底」（*hermeneutic basis*）にはほかならない。1991年に出版された論文「解釈学的転回－自然科学と人文科学」では、ある共同体に属する歴史家や人類学者がほかの部下共同体の思考様式を理解するために身に着けるさまざまな技法と同様に自然科学の諸概念を理解するためにも歴史的共同体に帰属する前提的諸概念を身に着けることが必要であるとし、後者のような諸概念の集積を科学の「解釈学的基底」と呼び、さらにそれこそがかつて彼がパラダイムと名づけた概念を言い表すにふさわしい言葉であらうとした。このように、パラダイムという用語は、精密科学のように、比類のない確実性を保証され、確固たる基礎をもっていると伝統的に考えられてきた知的営みにも、歴史的・社会的に与えられたある種の深層構造が存在していることを確認する科学観と強く結びついていると考えられる。20世紀の科学観の転回を象徴する言葉と言えるかもしれない。

－科学革命、新科学哲学

文献 佐々木力「学問論」東京大学出版 1997 （引用：岩波哲学思想辞典）

00/01/31 荒井康全

⑥「新科学哲学」 [英] new philosophy of science

1960年代にウィーン学団の*論理実証主義およびポパーの*批判的合理主義に対抗して登場した*科学哲学の新潮流、N. R. ハンソン、T. クーン、P. ファイアーペント、S. トウールミンらによって代表される。従来の科学哲学が科学理論を形式的記号体系と見なし、その理論的分析に専念したのに対し、新科学哲学は概念文脈依存性を強調し、科学理論の歴史的・社会的分析を重視する。一般に相対主義、多元主義、反実在論傾向が強い。

その出発点となったのは、ハンソンの「科学的発見のパターン」（1958）とクーンの*「科学の構造革命」（1962）である。論理実証主義が、<*理論>と<<*観察>>を峻別し、理論は中立的な感覚与件言語で記述された観察命題によって検証または反証されると考えたのに対し、ハンソンは<観察の*理論負荷性>を主張し、その理論転換のプロセスを解明したのが、クーンの<*パラダイム論>である。彼は科学理論は合理的手続きによって連続的に進歩するという通念を批判し、科学の歴史を科学者共同体が保持する<パラダイム>の断続的転換の手続きとして捉えた。

また彼はパラダイム転換には合理的根拠は存在せず、異なるパラダイムの間には共通

の尺度がなく、〈通約不可能〉であることを主張して旧来の啓蒙主義的な進歩史観に衝撃を与えた。ポパーを領袖とする批判的合理主義の陣営はこのようなクーンの考えを非合理主義ないし相対主義として攻撃し、1970年代を通じて両者の間に激しい論争が戦わされた。この論争の過程で、双方の主張を総合する可能性を探ったラカドシュの〈*科学的リサーチ・プログラム方法論〉が提出され、受け継がれ新しい展開を見せている。新科学哲学の問題意識を極端に見えるほど突き詰めたのは「なんでもかまわない」をスローガンに掲げ、科学の合理的進歩を否定したファイアーペントの〈知のアナーキズム〉である。

(文献 JanHacking (ed.) *Scientific Revolutions*, 1981, H. I. ブラウン (野家啓一 墓訳)「科学論序説」培風館 1985 (引用：岩波哲学思想辞典)

00/02/16 荒井康全

⑦「科学的リサーチ・プログラム」 [英] *Scientific research program*

科学哲学者*ラカドシュが提案した科学方法論。 *ポパー派の科学哲学では、反証可能な形で提案された大胆な仮説をできる限り厳しいテストにかけ、反証されればその仮説は棄却するという*反証主義が主張されていた。しかし、クーンは科学の歴史が反証主義者がいうように、推測と反証の連鎖によって進行するものではなく、彼はバラダイムと名付けた研究手段及び一定のものの見方からなる構造体の断絶を伴う交代であると主張した。

その結果、反証という通時的な規定も揺らぐことになった。

ラカドシュはクーンの問題提起を正面から受けとめた上で科学の合理性を養護する方法論として〈科学的リサーチ・プログラム〉を主張した。そこでは、歴史上での科学理論は単独ではなく発展しつつある理論系列(科学的リサーチ・プログラム)として考察される。

科学的リサーチ・プログラムでは、反駁不可能とみなされた中心的原理からなる〈硬い核(hardcore)〉(例えばニュートン・プログラムでは動力学の3法則と重力の法則)と変則事例を処理する補助仮説群からなる〈防御帯(protective belt)〉という構造をもつものとされ、科学の歴史は複数の科学的リサーチ・プログラムが、予測とその確証を競い合いつつ進む合理的な歴史として叙述される。すなわちこの方法論はクーンの言うバラダイムを合理的に再構築することにより、科学の歴史に見られる合理性を取り戻そうとする試みでといえよう。

一 合理的再構成

文献 I. ラカドシュ(村上陽一郎)「方法の擁護」新曜社 1966 (引用：岩波哲学思想辞典)

00/02/16 荒井康全

⑧ セーフティネット

セーフティネットという言葉が最近良く使われている。しかしここには市場経済をどのように見るかによってその意味が大きく異なってくる。立場の違う二人の論客の説を夫々の著作から抜粋してみた。「体系的な制度改革」を述べる立場と「各人の能力開発」を述べる立場である。油の乗り切った、若き二人の論客の説に耳を傾けたい。現実には、両方があいまってエイジフリー社会は懐深いものになるのではないだろうか。

ア) 金子 勝著「セーフティネットの政治経済学」(ちくま新書、1999年9月)から抜粋

セーフティネットの語源はサーカスの綱渡りに由来する。綱の下に張られた安全ネットがないと、綱渡り芸人は思い切ったアクロバットができない。この安全ネットを「信頼と協力による安心」に、アクロバットを「市場競争」に置き換えれば、両者の補い合う関係がわかるであろう。

ではセーフティネットとは、具体的にはどのような制度を指すのだろうか。それは、労働・土地・貨幣といった本源的生産要素と呼ばれる市場を中心として形成されてくる。労働市場では、年金・医療・失業などに関する社会保障制度をセーフティネットとして、それに連結する形で、雇用・解雇・昇進などに関する労使協約、あるいは公教育や職業訓練と資格制度などが形成される。金融(貨幣的資本)市場では、中央銀行の最後の貸し手機能や預金保健機構をセーフティネットとして、その国独自の為替・金利体系・公的金融などが連結している。土地市場では、公営住宅や家賃補助や住宅金融制度などの公的な住宅政策、あるいは土地投機を防ぐ都市計画規制などがセーフティネットとして形成されてくる。

これらの本源的生産要素市場においてセーフティネットが形成されてくるのは、本来的に市場化の限界を抱えており、セーフティネットがないと、市場はパニックを引き起こしたり麻痺したりするからである。

市場経済の奥底には、「リスクをカバーするためのセーフティネットという制度」が埋め込まれているのである。

(日本経済を再生させるためには、どういう戦略が必要なのか。)

それは、市場と社会の変化に応じて、機能不全に陥ったセーフティネットを張り替え、それに連結する形で制度改革を実行して行くという考え方である。

(経済戦略会議の最終報告における「能力開発バウチャー」については、セーフティネットの部分的つまみ食いという問題を引き起こす。それは制度改革における断片性の問題と名づけよう)

それゆえ制度改革は、断片的であってはならず、その国の社会的文脈に応じて、セーフティネットだけではなく、それにつながる制度やルールを含めて改革しなければならない。つまり制度改革は体系性を必要とするのである。

イ) 竹中平蔵著「ソフト・パワー経済 21世紀日本の見取り図」

(PHP 研究所、1999年12月) から抜粋

セーフティネットという言葉は、サーカスなどで綱渡りをするとき、万が一に備えて、綱の下に張る綱、ネットからきています。要は、競争社会、市場経済にはリスクが伴いますから、それなりの安全を確保する仕組みをつくっておこうということです。

戦後われわれの社会は一体何にセーフティネットを求めてきたのだろうか。

(普通に働いている日本人の感覚としては) 企業という存在こそが、戦後の日本人にとって最大のセイフティ・ネットだったのではないのでしょうか。

……いわゆる終身雇用と言われる仕組みがあります。……

現実問題としては、日本の経済全体の中で、こうした意味での典型的な終身雇用、年功序列を採用している企業は、比率としてはそんなに高いものではありません。

ただ、日本人のイメージとしては、「教育をうけて、大企業に入れば安心」というイメージが定着していたことは確かです。

- ・ 労使双方にあった終身雇用のメリット
- ・ 終身雇用を支えた長期取引、株式持ち合い
- ・ もはや企業はセーフティネットを与えられない
- ・ 失業保険と年金で国民に安心感を

能力を高めるための「教育バウチャー」を

基本的には、セーフティネットの根幹は失業保険と年金ということになります。

残され課題は、雇用の問題をどうするかです。日本の企業は、今までのように従業員を丸抱えにはしてくれません。ということは、一時的な失業はありうるということです。

ここで、21世紀型経済システムとしてぜひ強調したいのは、「自分の能力こそが最大のセーフティネットである」ということです。……これは、言い換えれば、教育により人的資源を高めることです。人生のどのステージにおいても、ある程度の職業訓練を受けられるような仕組みを、この社会の中に常につくっておくということです。

ハンディキャップを負っている人には、もちろん社会福祉が必要です。そうでない場合に関しては、政府が丸抱えでその人の面倒をみてあげるのではなくて、その人がよりパワーアップできるようなシステムをつくるということが、最大のセーフティネットと言えるでしょう。

教育バウチャーというのは、自分がもう一度職業訓練を受けたいと思う場合に、それを持って専門学校でも大学でもしかるべきところに行けば、教育を受けられるという制度です。

H13. 10.30

圓山壽和

⑨「免疫」・「自己と非自己」

「免疫」・生命科学の領域で、人間そのものの理解に大きな影響を与えている。

「免疫」とは読んで字のごとく疫（やまい）を免れるための体の機構である。

「免疫」という現象は生命が「自己と非自己」を識別して、非自己を排除して「自己」の全体性を守り維持するという機構である。

「免疫」のもうひとつの側面—アレルギーと自己免疫・・・ほとんど無害の微量の花粉などに対して、それを排除するための過剰の反応が起こったのが「アレルギー」で、さらに「自己」と「非自己」の識別が狂って、「自己」の組織や細胞まで排除しようとする自己免疫疾患が起こってくる。現代医学の中でも最も治療困難とされる一群の難病である。

以上は、「自己」とは何かという哲学的問題を考えるためにもヒントになることが沢山ある。

「自己と非自己」という概念・・・あらゆる自己の成分に対して寛容になっており、あらゆる非自己に対しては非寛容である、というのが免疫の基本原則である。

それで、免疫がなぜ自己と非自己を識別するか、生体は、自分で自分を毒するような反応を忌避する本性がある。(自己中毒の恐怖)・・・このことについていろいろな説が出たが、パーネット（1960年ノーベル賞）は、ついに細胞レベルでの現象、それも細胞クローンの選択、増殖、タンパク合成として説明した素晴らしい学説（結論）に到達した。この学説の正しさは、後年実験的に証明されていった。

免疫系できわめて重要な意義をもっている、最大でも35グラム程度の胸腺の発見もその一つである。多様な働きを持ち、「非自己」の識別に最も重要な役割を果たすT細胞は胸腺の中で作りだされる。

あいまいな「自己」・・・以上では免疫系における「自己」と「非自己」の区別能力は、きわめて厳格なように見えるが、時にはひどくあいまいでもある。禁止されている自己反応性が現れてしまったり、明確に異物であるにもかかわらず寛容になったりする。その境界は初めから決まっているのではなくて、後天的にシステム自体が作り出したものである。

(T細胞の成熟過程での様々な成分と偶然に出合うチャンスがあったかどうかによって獲得されるものである)

途中をジャンプしての結論、「免疫の広がり—スーパーシステム」・・・免疫系や個体発生を基礎に人体というシステムをみると、工学的システムとは明らかに異なった部分のあることに気づく。(自己生成的、自己多様化、自己組織化、自己適応、閉鎖性と開放性、自己言及、自己決定、などがキーワードになることで理解されよう)

これらで成立した超システムは、決められた目的のために作り出されたものではなく、また、既定の目的を遂行するために働くものでもない。目的そのものを自ら作り出してゆく、自己目的化システムである。当然著しい多様性と個別性に特徴づけられるはずである。生命を基礎にした文化についての考察にも参考として欲しい。

(参考：多田富雄著 免疫・「自己」と「非自己」の科学 NHKブックス)

H14.12.1 北畠道俊

⑩ 自由について

【用語の定義】 「自由」 (私の担当、資料一 068 ノート (1) を参照しつつ作成)

1. 岩波「哲学・思想事典」の「自由」項 (荒井主査提供資料一 043) の中から

◎善と悪との選択に関わる意思の自由の問題

○西洋政治思想上の自由

a) 古典における自由・・・

(自らの権力の保有や参与) = 権力の不在や権力からの解放ではなく、自らが自由で有り得るような権力の保有やそれへの参与を意味した。

b) 欧州中世封建制における自由・・・

(支配権を自己に容認しながら干渉の排除) = 上位権力からの干渉排除権、かつ下位集団への支配権であった。つまり、自由も、実体的な支配権を離れては存在し得なかった。

c) 近代的自由観の成立・・・

(権力と自由を対置する近代的自由観) … (もともと、18世紀末の二つの革命では、政治権力による外的な干渉の排除としての自由観念だけでなく、古代以来の、政治的決定への参加の権利としての自由の観念も重要な役割を果たした)

d) 自由主義的自由観への批判・・・

(個人への干渉の不在に自由の観念を集約出来ない) = 自由主義的自由観の限界や、一面性への様々な批判が噴出し議論を呼び続けている = (干渉のないこと = 自由であるとはいかない) = (人間の限界に思いを致さないヒューマニズムがもたらす規範なき社会の問題)

2. 植竹氏の自由論 (資料一 042 参照)

(奴隷状態との対峙としての自由) = 勤務状態が奴隷状態と考えることが出来るとして、近代では、自由である状態と奴隷状態が時間配分によって管理されていると見ることが正当な論理であるとしている。(具体的な思考のために敢えてした問題提起であろう。その中で時間配分という調整を指摘しており、d) の自由観の限界をとりあげているともいえる)

3. 私の以上の学習からの思い付くままの主張

a) (干渉容認の自由も排除の自由もある) = どちらがよりよい自由の受け止めであるかは、時、人、場などにより異なる。従ってこれは自己不自由ともいえる選択の自由であろうか。

b) (自己の側が閉鎖的で寛容に欠ければ自由ではない) = およそ、自己は周囲の他者との関係の中で受け止める者は受け止めて生きている。閉鎖的で寛容に欠けては、免疫学という自己化出来る異質の受容が出来ないことになる。自由ではないことになる。

c) (異質のものを峻別排除出来ないのも自由ではない) = 逆に、免疫の意味として説明さ

れているアレルギーや癌化の問題の様に、自己化出来ない異質のものを峻別排除出来ないで自己喪失となるのが、やはり問題の自由でない状態といえよう。

d) 私の「自由」の定義…「自由」とは言葉で固定化出来ない。他のある中の自己であり、そのそれぞれの自己が考え選択する命題である。結局は、それぞれが異質の自己化の選択・排除の峻別により自由な前進が機能し守られる状態をいう。

2001. 06. 25 北畠道俊

2.4.2 エイジフリーの定義について

2001. 6.25

石井登喜男

2.4.2.1 原点

「先進エイジフリー社会を目指して」

‘少子高齢化など新時代の構造転換を探り、それぞれの社会参画、適応などについて考える’

2.4.2.2 現状の問題点

WG-3のスタートにあたっての問題意識は「日本の現状は問題があり、変革が必要である」ということで皆共通であった。問題点は大体次のように整理できると思います。

- 1) 資本主義の冷酷な現実から豊富な経験を持ちながらドロップアウトさせられている高齢者の存在
- 2) 日本社会に根強く張り巡らされた「利権構造」により「老人支配」が行われ、若者が実力を発揮するチャンスを奪われている
- 3) 「宇宙船地球号は資源に限界があり、「大量生産、大量消費、大量廃棄」は続けられない。企業の方向転換が必要である

2.4.2.3 各自の定義

上記の問題点を克服した姿が「エイジフリー社会」であるということで、各人が定義(考え方)を提出しました。先の自画像と一緒に読んで貰うと、少しずつ違う、各人の問題点の捉え方がはっきりすると思います。

強引に共通項を見つけるとこんなところかなと思います。

『自信を持った自己を確立し積極的に経験を活用する社会』

- 1) 北畠道教 「人は皆、老若男女を問わず、分に応じ生き甲斐を持つ社会。苦楽を共に生きられる互助の仲間があれば人生ばら色」
- 2) 安達勝雄 「性別や年齢からの社会的制約がなく、個人の能力、経験、技能が認められて、自由に生きていける社会を言う。この社会を成立させるためには、今までの社会通念を改めて、個人の行き方、考え方もパラダイムの転換が必要になろう」
- 3) 北畠道俊 「多様な年代の個々の人間が、年齢差を隔絶障壁とせず、夫々の経験や知恵を生かして共生と連帯を実現し得る社会を言う。そしてこのためには社会の変革に合わせて、個人の行き方もパラダイムの転換が必要になってくる」
- 4) 寺川彰 「年齢や性による差別がなく、個人の能力、経験、特技が適切に評価され、活用されるような社会システムが確立され、かつ、普遍的理性によって運営されることによって自(個人)と他(社会、公共)がバランスよく共生

する社会」

- 5) 栗原一 「各世代毎に責任を持って人に見せられる自分の背中を確立すること」
- 6) 石井登喜男 「経験豊富な高齢者も活動力豊かな若者も共に協力し合って、自然と共生しながら生活している活力ある社会」
- 7) 藤井勲 「熟年層が積極的に自分の人生経験を活用し、人間、社会環境に貢献している社会」
- 8) 園山壽和 「年齢から来る社会的制約がなく、個々の人間が共生と連帯の中で、尊厳を持って自由に生きていける社会のことを言う。そして各人が年輪を重ねることによって得られる経験や知恵を生かし、社会的規範を我が物としつつ、自由自在に生きていくことが可能な社会を言う。このようなエイジフリー社会の実現のためには、共生を基盤にした社会システムへの改革と、個人もパラダイム転換へ向けて生涯学習が必要になってくる」

第3章 私のエイジフリー、私の自画像

第3章 私のエイジフリー、私の自画像

3.1 北畠道教「私の自画像と私のエイジフリー」

2002年8月29日

『私の住環境』

現住所 〒143-0015 東京都大田区大森西4-6-4 Tel・03-3763-5927

1918年（大正7年7月20日）神奈川県横浜市西戸部にて長男として生誕

1923年9月1日東京府荏原郡蒲田町北蒲田にて関東大地震に遭遇

1927年10月 東京府荏原郡入新井町大字新井宿字新田253番地（現住地）

1945年4月15日のB29爆撃機に因る空襲で全焼。父母は宮城県名取郡千貫村に疎開しており、次男は南方に出征中、三男道俊と、我々夫婦が罷災。

1945年4月18日から蒲田区女塚一丁目三番地ノ六石田定勝方に寄寓、同年8月1日に隣家の福島種二郎方に移り、さらに同年12月12日白蒲田区女塚一丁目4番地ノ2、富吉進方に移転した。

1945年12月30日大森区役所から簡易住宅の資材引取り方の通知があり、安田銀行大森支店に払込をする。

1946年1月6日入新井第二国民学校より資材の引き渡しを受ける。

1月14日松本・松崎・外二名の手に抛り竣工す。ただしガラス、畳、内張り板の入荷がなく、直ぐに入居できる状態ではなかった。

1946年1月10日横須賀市浦郷236番地に転居（借家）

1947年7月23日東京都大田区新井宿7丁目85番地に転入（簡易住宅）＝現住地

1947年9月20日母（くに）、弟（道俊）、父の遺骨とが自宅に帰る。

22日道頭は静岡に帰る

1948年12月5日長女（洋子）誕生

1951年1月22日長男（道治）誕生

1953年3月2日 次女（君子）誕生

1959年3月 同敷地内に、木造平屋（20・25坪）を建てて、移る。

1966年2月2日 母（くに）死去

1990年10月 同敷地内を整理し、道治名義の二世帯住宅を新築し、（198.74㎡）

[1Fに私と妻、2Fに長男道治と妻及びその息子と娘の4名]

私の住環境は、上記の通り横浜で生まれ、父母の仕事の関係から、大正9年に父母のみ蒲田駅から徒歩3～4分の所に転居（森八百屋の家作・道をはさんで井筒屋と言う菓子屋が今でもある）そこで弟道頭が生まれる。1921年10月上記の北蒲田699番地に祖父多喜次・祖母コサイ・叔母喜代・私の四人が横浜から、父母と弟道頭が合流し、叔母は神奈川県立第一高女にここから通学した。1923年9月1日の震災の際はこの叔母が弟を背負い私の手を引いて、柿の木の下で一夜を、今と違い電話もなく、情報網の不足、救援の食料が

大八車で支給になったのは4日後の夕方と思う。1945年4月には東京大空襲により、一夜にしてJR東海道線以東は、大森海岸から森が崎・羽田方面に向かって、大平野に変身していた。私の住環境は大田区内で二度に亘り大災害に遭遇した。

『最終学歴』

昭和16年12月・・・中央大学専門部法学科卒業（繰上げ卒業）

『職歴等』

昭和11年3月に東京府立第八中学校を卒業し、浪人

- 〃 12年5月 東京都市通信局雇員採用試験を麻布の東京通信講習所で受験し合格
- 〃 12年6月から通信事務員として大森郵便局庶務課に勤務、当時の大森郵便局は庶務
 - ・ 郵便・電信・貯金・保険・電話の六課があり、局長と電話課長は高等官で、東京の中でも屈指の大局だった。歳入徴収事務・公文書の授発・保健衛生関係・遺失物処理・給与支給事務その他各主査補助
- 〃 13年7月 徴兵検査施行…第二乙種合格
- 〃 14年4月 中央大学専門部法学科第1学年に入学（夜間）
- 〃 15年4月 東京都市通信局へ出向を命ぜられ、同日規画課局所係勤務となる
- 〃 15年7月 臨時召集に依り近衛歩兵第一聯隊へ入隊
- 〃 15年9月25日 両肺門腺炎により臨時第一陸軍病院に入院、同年12月7日に召集解除の目的を以て同院を事故退院し12月15日に臨時召集解除。
- 〃 15年12月16日 東京都市通信局業務部郵務課集配係勤務
- 〃 17年3月30日 任通信局書記補 給月俸六拾円＝所属は従前通り
- 〃 17年11月1日 東京通信局在勤を命ぜらず（官制改正）＝東京と神奈川に東京地方通信局所管の埼玉・千葉・茨城・栃木・群馬・山梨・長野が加わる。静岡県は名古屋通信局の所管となり、新潟県が仙台通信局から移管。
- 〃 18年11月1日 新潟通信局が新設され新潟・長野県を移管
- 〃 19年3月28日 任通信書記兼通信局書記給月俸六拾六圓＝（運輸通信省）
東京中央郵便局在勤を命ぜらず東京通信局業務部郵務課勤務を命ぜらず
- 〃 19年3月31日 給六級俸
- 〃 20年5月25日 東京通信局（赤坂葵町＝アメリカ大使館の筋向かい）工務部を除き空襲により全焼し本部を麻布区狸穴の通信院に置き各部課単位に都内の郵便局に分散し事務を執り業務部は、東京中央郵便局4階に、（但し部長は本部に、また郵務課は一時期赤坂郵便局を仮事務所とす）
- 〃 20年12月28日 東京通信局は工務部を除き麴町区大手町二丁目に移転した。
- 〃 21年3月31日 東京通信局機構改正、同4月1日官名改称により通信事務官三級官
- 〃 23年5月13日 東京通信局総務部労務課第二労務係勤務を命ぜられる
- 〃 24年6月1日 通信省を廃止し、郵政省と電気通信省が設置さる。
東京郵政局人事部管理課法規係勤務の郵政事務官となる

- 〃 24年7月16日 法規係を廃し労働係に吸収された。
- 〃 27年8月1日 郵務部業務課管理係に配置転換。昭和27年9月1日管理課新設
- 〃 31年7月1日 郵務部服務課第三服務係長
- 〃 33年8月6日 郵務部管理課調査係長 昭和33年4月1日職員基本給改正
(公達第66号)
- 〃 34年7月1日 普通職群級別俸給表特別級4号俸を給する
郵務部輸送課自動車係長
- 〃 37年7月14日 郵務部輸送課課長補佐を命ぜられ管理職群級別俸給表5級14号を給する 郵務部輸送課自動車係長兼務を命ずる
- 〃 37年9月10日 郵政省設置法一部改正(法律第154号)
〃 第二郵務部業務課課長補佐を命ずる
〃 〃 〃 管理係長・業務係長・訓練係長を兼務
- 〃 37年9月24日 〃 〃 〃 訓練係長・業務係長の兼務を免ず
- 〃 38年8月1日 管理職群級別俸給表4級6号俸を給する
- 〃 39年7月20日 第一郵務部集配課課長補佐を命ずる
- 〃 40年8月10日 第一郵務部輸送課課長補佐を命ずる
- 〃 41年6月20日 東京地区郵便物集中処理局開局統合準備室兼務を命ずる
- 〃 41年11月1日 日本橋郵便局次長を命ずる
- 〃 42年3月4日 日本橋郵便局長加藤秀松外国出張不在中代理兼務を命ずる
- 〃 42年3月21日 日本橋郵便局長代理兼務を免ずる
- 〃 43年4月20日 永年(30年)勤続により表彰する(郵政大臣)
- 〃 43年7月29日 東京郵政局勤務を命ずる 調査官を命ずる
- 〃 44年8月5日 第一郵務部兼務を命ずる
- 〃 45年6月1日 管理職群級別俸給表3級40号俸(勤務成績優良による特昇)
- 〃 45年7月29日 東京郵政監察局第二部第三課長を命ずる 郵政監察官を命ずる
- 〃 47年7月1日 関東郵政監察局第二部第三課長となる(局名改称政令261号)
- 〃 47年7月5日 小岩郵便局長を命ずる
- 〃 48年7月1日 管理職群級別俸給表2級36号俸を給する
- 〃 49年7月17日 荏原郵便局長を命ずる
- 〃 50年7月25日 中野北郵便局長を命ずる
- 〃 53年7月18日 中野北郵便局勤務を命ずる
- 〃 53年8月18日 管理職群級別俸給表2級特に328,200円を給する
- 〃 53年8月18日 願いにより本官を免ずる

以上昭和12年6月1日～昭和53年8月に中野北郵便局長を最後に退官するまで、逓信省・通信院・運輸通信省・電気通信省・郵政省と行政機関の名称は変わっているが、この間41年余の間郵政事業に携わった。定年退職後第二・第三の職場は以下に記す。

昭和53年9月～昭和58年8月＝東京発送株式会社第一営業部次長

昭和 59 年 3 月～昭和 61 年 6 月＝財団法人日本郵便友の会協会業務部主査
以上の職歴全てが郵政関係の職場で、引退後は次のような事業協力親睦団体で
平成 4 年 2 月 15 日～平成 11 年 8 月 2 日＝関東通信退職者同友会東京都南部支部長
平成 11 年 8 月 2 日～同会本部理事を委嘱され現在に至っています。

『叙勲』

昭和 63 年 11 月 3 日 勲 4 等に叙し瑞宝章を授与される（郵政事業に貢献）

『WG3 に参加の動機』

前記の通り第一次世界戦争の終わりに生れ、1927 年に蒲田に転居し、2 年後の大正 12 年 9 月 1 日の関東大地震に遭遇した。もしも横浜の生地に住んでいたら恐らく全焼し、場合によっては家族の何人かは死亡していたかも知れないと思う。

二度目の災害は 1945 年 4 月の米国の B29 による空襲では 3 戸の持ち家が全焼の憂き目に会い、焼け跡にはチリ紙一枚なく、ガス・水道・電気・電話の復旧の目途も着かず悲嘆にくれた。焼け出された翌々日職場に出勤し、その日は課内で私独りが被災者で、未だ被災しなかった係りの先輩達が着の身着のままの私に物資不足で、被服・食料品の購入には切符が必要という統制経済の中で何くれとなく面倒を看てくれて、通勤の靴・洋服は良しとして、傘がなくて雨の日は、濡れ鼠、靴下は履代えが無く数日でボロになり素足ではと云う時に贈られた靴下や、文机を神奈川から持って来てくれた方のことは 50 有余年経った今でも脳裏にしみじみと残っている。

我人生 84 年通して震災と戦災という不幸による苦しみを超えて平和国家日本の再建に国家公務員として働いてきた。

今回の WG3 は「先進エイジフリー社会をめざして」とあり、人生経験の長い事と、この間の住環境・職場環境等に就いて、時代の変遷の後追いで改善されて来たものの、これからは、情報通信の発達により、経済社会は世界規模での市場の一本化に進む等著しい変化の時代となるだろう。今や男女同権の世の中で女も仕事を持ち、専業主婦のいない家が多くなって、男女共婚期を気にしなくなり少子化は進む一方、長寿人口の増加が続くようになった今、エイジフリー社会に関心を持って仲間に入れて戴きたいと思いました。

『経験した業務内容』＝

- ① 大森郵便局庶務課…歳入徴収事務・給与事務、保健衛生・文書・遺失物処理・非常印鑑等
- ② 東京郵政局（含む、東京都市通信局規画課局所係）……局舎料算定・通信区画便覧・速達便覧・通信地図・郵便差出箱・置局調査・局舎構造認可（以上局所・集配係）
- ③ 人事部労務課法規係・人事部管理課第二労働係…国家公務員法・労働基準法・安全衛生規則・人事院規則の順法指導 人事部管理課労働係 …組合交渉等の立会い・全通の 2.1 スト・組合事務室明け渡し訴訟・人事院の公平審理等の資料作成・傍聴・立ち会い
- ④ 郵務部に戻り管理課管理係・服務課第三服務係長・管理課調査係長・輸送課長補佐兼自動車係長・第二郵務部業務課課長補佐兼管理・業務・訓練係長、第一郵務部集配課長補佐・

輸送課課長補佐

- ⑤ 日本橋郵便局次長
- ⑥ 東京郵政局調査官〔郵便業務運行正常化対策〕
- ⑦ 東京郵政監察局監察官第二部第三課長（郵便局考查）
- ⑧ 小岩.荏原.中野北の各郵便局長を勤め昭和 53 年 8 月退官した。

同年 10 月のストを最後に組合活動は鎮静化し、「お客様が第一」の姿勢を採るようになり、国鉄の二の舞いを踏まずに済んだ。

郵便は心を運ぶのが使命であり、安全・正確・迅速をモットーに全国均一料金で全国遍く公平なサービスを提供できる機関として、明治 4 年旧暦 3 月に、また郵便貯金は明治 8 年、簡易保険は大正 5 年 7 月に事務開始と 1 世紀前後の長い歴史を持ち、その間時代に即応した幾多の施策と変革・改善を施し三事業を一体の者として運営され、国の文化の発展に寄与し今日に至ったもので、労務問題についても経営面においても安定した状況の今、郵便局が国の機関としてより国民との窓口業務等現在はまだ扱っていない分野についても窓口を広げてはどうか。

2002/8/26, 小泉首相は私的懇談会「郵政 3 事業の在り方について考える懇談会」の田中直毅座長と首相官邸で会談し、今後の郵政改革の進め方について「郵政公社の経営をみながら民営化のパターンを選択する」と述べた。また、政府は郵政事業庁から事業を引き継いで来年 4 月に発足する日本郵政公社の初代総裁に、商船三井会長で経済同友会副代表幹事の生田正治氏（67）をあてる人事を内定し、首相と片山虎之助総務相が同日夕、首相官邸で会談し決定した。

2002/8/27, 前記「郵政 3 事業の在り方について考える懇談会」は民営化 3 案を併記した論点メモ（特殊会社・3 事業一体.郵貯簡保廃止）を発表し、このメモに沿って最終報告書をまとめ、9 月上旬に首相に報告する。首相は来年 4 月に発足する郵政公社を「民営化の準備機関」としており、民営化に移行する時期については経営の成果を評価できる 1、2 年後には民営化を検討できるようにすると報道されている。

自分の一生は横浜で生まれ東京で育ち、職場も都内から外に転勤することなく、戦災後の 1 年半の間横須賀市浦郷 236 に住居を移したのみで、職場の転勤の為に住居を引っ越すことなく送る事が出来たのは幸いであった。また採用時に現業の集配郵便局で庶務課勤務で郵便局の郵便・電信.電話・貯金.保険各課にわたる共通事務を経験し、特に公文書受発件名簿の登記・配布・発送から、歳入徴収事務（電話料金納入告知書の作成・発送.督促・歳入金の調定）等には算盤が必要で、中学では数学の時間に校長の方針で算盤と暗算を教えられていたので、即役立ったが、公用文書の用語は候文で、馴染むまで大変であった。

また事務用機器も和文タイプライター・タイガー計算機.ナンバーリング・アテナ印刷器・四連式料額印刷器等の取扱の習熟に意を用い、電話料金納入時期は貯金窓口に応援に行き、年末には郵便課の区分応援、2 年目からは特殊係り（書留郵便）の応援に、自分の分担事務以外に勤務時間外も奮闘した。

当時は官吏（高等官＝通信事務官・通信技師）（判任官＝通信書記.書記補）雇員・傭人

等の職階制があるが、伸び伸びとした局風の中で、2年半が過ぎたとき、高等文官試験合格者二人が見習いとして配属されてきた。最初に着任された千葉三男氏は、我々とキャッチボールや卓球をしたり、局の貸出図書を、週に3冊ずつ借り出しては、次の週には別の3冊をと続けるのであった。そこで私は次に読まれるだろうと思われる400頁程の一冊を、借り出して1週間後に返還して置いた所、案の定次週借り出し3冊のうちにこの一冊は入っていた。

私は次の週に返還に来られた時読書評を何うと、ポイントを把握されて隅々までもお読みになっていたのに敬服したと同時に、自分も更なる勉強が必要だと痛感した。

氏は2年後突然礼服で来局され、九州の県庁所在地宮崎郵便局長拝命の挨拶に来られたのだった。

通信関係の仕事に携わる為には法律の知識を学ぶ必要があると考え、中央大学専門部法学科（夜間）に入学し、通学のことも考え、たまたま東京都市通信局企画課局所係に事務員の欠員があるとのことで、昭和15年1月自局長には無断で局所係長に面接した。しかし3月になっても音沙汰無しで希望は適わぬと思っていたが、4月23日局員の給料支給を完了した午後3時頃、局長室に呼ばれ「君待望の辞令を渡します」と通信局へ出向の辞令が交付されたのである。東京都市通信局は前述の通り昭和17年11月東京通信局にそして昭和20年5月25日の空襲により工務部の庁舎を除き全焼し、業務の復旧に努力した。局所係は通信地図（集配局毎に全図・市内図＝郵便局市内地のみの図で官庁旅費規程の旅費算出に役場の証明里程とともに用いられる）の原図保管の大金庫の上部を棟木に押されて火が入り、複製するため市内外区界・速達直配区界・電報配達区界・電話加入区域等を該当の郵便局に出向き作図した。戦災直後は交通機関も食・住も不安定の中でその日に為すべき事を仕上げるしか無いことを悟った。今になっているいろいろ思い出すと、不幸・不運の連続が幸運・幸福を創造してくれたと思う。

ちょうどこの頃（1937）年日本は、着々と工業化を推進し不況から脱却していたが、貿易の自由を奪われ、満州、中国の一体化を唱え、進んで東亜新秩序の建設を志向した。

その手段として軍事力を行使したことが、やがて第2次世界大戦を導き、1945.8.15に敗戦となり、憲法を始め諸法規の改正を行い、民主主義の軍事力を持たない平和国家に変身した。その後、経済立国を目指し、苦節50数年の歳月を経て現在の繁栄を見るに至った。

この間の世界は東西の強国間の冷戦が解消され、国際連合等での各国協調路線の方向に向かいつつある。米国はこのテロのアルカイダ撲滅作戦を今も続けているが、一年経た今もオサマ・ビンラデン等を捕捉できず今日に至っている。

科学の発達にともない人間環境は地球規模よりまさに、宇宙規模で考えなければ成らない時に来ている。地球温暖化の問題・公害防止対策・自然保護・水資源の確保・農水産物など食料の安全性の確保などは個人や一国だけで解決出来る問題でなく、今や地球上のあらゆる人類が協調し解決の道筋を見出し、他は二の次にしても成し遂げるべき課題であると想う。

『わたしのエイジフリー』

「人は皆、老若男女を問わず、分に応じ生き甲斐の持てる社会」がエイジフリー社会であらう。現実としては苦楽を共にして互いに助け合いながら生きられる仲間があれば人生はバラ色である筈だと思う。

先ず第一に心身共に健康であることが大切である。人間の一生は糾える縄の如し。私が誕生した翌大正 8 年 10 月 12 日に私の姉を疫痢で夭折（5 歳）させた父母を始め家族は長男の私に対しては事の外疫病に罹らないよう食べ物に注意して育てられ、更に両親が共働きのため祖父母と 11 歳年上の叔母に育てられ、大正 10 年 10 月に蒲田町（現大田区蒲田 3-18-18）の地に 3 世代 7 人が集合し、楽しい安穏な生活も東の間関東大震災に見舞われ、その時の非常事態の体験は未だに脳裏に刻まれて居る。その頃は水は井戸水、煮炊きや暖房・風呂沸かしは薪木、木炭、練炭・炭団・豆炭等を用い、水道・ガスのひけてない時代で、電灯だけが大方の街中では各家庭に普及していた。とは言ってもラジオ放送もテレビもない時であるから、地震で地殻に影響あつてかは知らないが、六郷川＝多摩川の堤防決壊により床下浸水があり、井戸がえもし、生水も飲まないよう皆で注意していたが、弟道頭が私より一日早く腹痛を起し下痢便、まる一日過ぎて私が同じ症状になり、両親始め祖父母は姉日出の様にしては大変と医師（黒田先生）の大腹カタルとの診断により、絶対安静にして絶食・重湯・流動食・固形物で最初に許されたのはカルケットが 1 度に 2 枚だったと思う。一週間くらいして白身の魚を食べて良いと最初に口にしたのが鯉の煮つけで、こんなに魚が旨かったのかと身として食べられる所は残さず食べた。弟より後で罹病し全快は 1 日早く、抵抗力が強かつたのか、年齢が聞き分けができる歳になっていたからか？

「年寄りっ子は三文値が安い」とよく言われるが、体力的には余り強くなかったようだ。

小学校の一年生の通信簿の成績欄は「全甲」身体欄は「栄養丙・概評丙」乙は知らず。

小学二年生の時左頸部に腫瘍ができ、額田病院（現在東邦医大大森病院）で頸部リンパ腺腫瘍切除を行い、その時通信簿の「唱歌乙」を貰った。以後は先に述べた肺門リンパ腺炎で臨時第一陸軍病院に 4 ヶ月の入院をした以外は重い病気に罹ることなく、食料事情の不自由の中職務に専念しえたことは妻の影の力があつたればこそと深く感謝する所である。

このようにして定年退職後も 68 歳まで自宅から通える職場で働くことが出来た。昔から「命あつてのものだね」と言う諺がある。

一生を大切に人の為になる人として！

さて、身体健康については是位にして、心の健康について考えてみよう。

心とは人間の体の中にあつて、広く精神活動を司るが、精神活動を知情・意に分けた時、知を除いた情・意をつかさどる能力で、喜怒哀楽・快不快・美醜・善悪などを司るのである。知については他人が容易に判断出来るが、情・意については本能やその人の育った生活環境（住居地・家族・友人・先生・親戚・職場の上司・同僚・部下・近隣の人など）日常生活の中で会う人々などによって、一生が時代の変化にも影響されて千差万別で、他人からは解りにくいものである。しかし理性的認識のもとに行動できる品性・人柄を持った人、即ち人格者ばかりとは限らない。そこに問題が生ずるのであるから人倫にもとる事はしな

いことと同時に、させないことが肝要である。

人は社会の中で育てられ、世代交代も 20～30 年で行われるので、幼年期（0～5 歳）青少年期（06～25 歳）壮年期（26～50 歳.最近では長寿社会となり 65 歳までと考えてよい）。老年期は年をとって、肉体的・精神的な衰えが目立ってくる年頃で青年期は 14 歳くらいから 25 歳、時には 30 歳位の未成年後半と成年者前半に亘り、人間形成に最も重要な時期と考えられており、学校教育の改革も進められており、誰もが清廉潔白で敬愛される真の平和な社会に変わって来る事を切に望みます。私としては公明正大な心で、自分の体力や能力に併せて社会のために尽くす事を念頭にに入れて行動したいと思う。

今は少子高齢化が進み、学童・学生の減少時でもあり、成人の生涯教育に、又 OA 機器・IT 等最新事務機器の利用講習の機会や是等の利用がし易い環境を整備すること。現代社会は国・地球・宇宙と人智の考察範囲が拡大するに従って、分業化の必要を生じ、個々人の必要な情報利用は限られているに関わらず、情報発信が過剰となり、真に必要な情報を得るために無駄な時間を費やしている。[情報過多の害]

心身共に健全で長生きが出来ることは誰しもが願う所ではあるが、心には欲望が、身体には物と同じく寿命があり、何時かは死を迎える。日本では少子高齢化が急進し人口激減が心配されているが、世界的には地球人口は増加しつつ在り、やがて飽和状態になる。人ばかりでなく、物についても、技術の進歩で生産過剰となり物余り現象が経済界を混乱させ、豊食は身体健康を害し、ゴミ処理に多大の経費を要し、リサイクルの必要性が高まりつつある。また化石燃料依存による二酸化炭素排出規制の地球温暖化防止対策が論議されているが、我国の経済正常化に喫緊の要は無駄を無くすこと。人は生きるため真剣に取り組む一方、車のハンドルと同様に「遊び」＝心のゆとりが何よりも必要と考える。

高齢者は体力・気力に合わせて、社会に貢献出来る筈である。

84 歳の私が元気でいられるのは

- ①食事を医師の指示を忠実に守り肥満から復元。
- ②家に引き籠もらず社会の中に身を置く。
- ③趣味を生かし毎日散歩で足を鍛える。

3.2 安達勝雄「私の自画像」

02-9-End

—幼年時代—

- ・大正 14-8-25 (1925) 誕生

千葉県館山市総房水産館山工場隣の関東大震災での焼け残りの家屋で誕生。

- ・昭和 3 年頃まで

父親はサラリーマン、東京市田端付近、目黒区西小山付近で過ごす。

田端での記憶はない。西小山では付近に目黒川が流れており、蛍の記憶が残っている。

- ・昭和 4 年

鎌倉材木座で過ごす。体が弱くて転地療養。幼稚園に行かず、海で遊び、近くの光明寺の庭で遊んだ。楽しかった事のみ思い出される。満 4 才、毎日、自由に自然を相手に束縛されずに過ごしたことが思い出される。

- ・昭和 5 年

荻窪に引っ越した。東京府下豊玉郡井荻村字荻窪 3 丁目 147 番地

ここが僕の故郷、隣は広い原っぱだった。時には「いたち」、が前を横切った。蛇にバッタにトンボ、かえる、みんな僕の友達。家から幼稚園までは麦畑の脇の道を通い、ときには畑に入り、雲雀の子を捕まえた。

○日の丸幼稚園 北村大栄園長先生、幼年期を東京でありながら、豊かな自然の中で過ごしたことは、大いに有益であった。

—小学校時代—

- ・昭和 7 年

○杉並区 桃井第二小学校入学 山本先生、細井先生、松本先生

小学 3 年の時に、東京市に編入され、豊玉郡井荻村字荻窪から杉並区荻窪に昇格した田舎小学校。同級生は 1/2 がサラリーマンの子供、1/4 が商店、1/4 が農家という構成だった。勉強などは二の次で、近くの善福寺川で魚釣り、林や森や山遊びですごしていた。今になって考えると、比較的裕福な子供たちの集まりであった。年を取り毎年同窓会をやると、当時の農家の倅は荻窪の大地主、商店の倅は大店の大旦那、楽しい一日を過ごしています。我々の年齢は昭和の年数に等しく、徴兵検査を受けた途端に終戦となり、命を長らえた年代です。同級生の中には陸海軍の将官の子弟も居たが、小学時代は気に止めることもなく過ごした。

この時代に 2. 26 事件、満州事変、支那事変と軍国化が進んでいたわけですが、まだ子どもは意識することもなく、あるがままに軍国日本に呑み込まれていたものだろう。5 年生までは楽しく遊び、その後は、同級生一同、中学受験のために勉強が始まり、私も人並みに勉強を始めました。

この頃になると都の西の荻窪は徐々に発展し、我々の学校もレベルが揚がっていたのでしょう、クラスの 1/4 は府立中学に入学、私も近くの府立六中に進学した。

—中学時代—

・ 昭和 13 年

○東京府立第六中学校入学

近くの府立中学だったので入学したが、この学校は陸海軍への入試校で、校舎玄関には日本海大海戦の戦艦三笠の時鐘が設置され、この音を聞いて始まる一日だった。

外観はこのように軍国主義的教育の場に見えたが、我々にとって厳しい強制があるわけではなく、まだまだ自由な教育の下に育った。

*2年の時に、化学の成績が赤点で、担任（物理の先生）に呼ばれ、時間外の特訓を受けた。この私が、後に化学屋になろうとは？

先生はすでに物故されたが、懐かしい思いでとして残っている。

*荻窪には図画の先生がおられ、六中生も 30 人ほどおり、先生を会長として荻窪会を結成し、夏休みには奥多摩にてキャンプ、2 ヶ月おきに善福寺川付近でキャンプして、近くの墓地で試胆会、良き時代であった。

*夏休みは 1~3 年迄の各学年別に、10 日間、千葉県館山市塩見の臨海学校にて宿泊訓練。水泳教師として卒業生が多数参加、良いこと・悪いこと・諸々のことをこれら諸先輩より吸収、自己形成に役だったのであろう。

*我が校は新宿の片隅、新宿御苑に隣接、新宿駅より 5 分、伊勢丹交差点迄 2 分と極めて良好な環境にあり、一度校門外に出れば、補導協会の監視の下に晒される。紀の国屋で書籍を買うことは自由であるが、映画館、喫茶店に入ることは許されない。男の子、たまには脱線したくなり、そのときは渋谷に出かけて映画館、喫茶店に入ったが精神衛生上良くなかった。

*中学 2 年迄は探偵小説を読んでいたが、その後は文学なる物が読みたくなる。モーパッサンとか少し色気の掛かった外国物を読みたいが、何か、読むでは悪いような気がして手が出なかった。無意識のうちに戦時体制の影響を受けていたものと思われる。

別に是は良い、是は悪いとの指示はないが自らの垣根をつくっていたものだろう。子供の頃よりの躰が自分なりの倫理観をつくっていたものであろう。

後に高等学校に入り、読書、映画、その他諸々すべてが自由になった時、短い間ではあったが、背後霊がなくなり、自由を謳歌した。

*我が家のとなりは今の荻窪高校（我が家のほうが古くからあった）であったために、昭和 16 年、戦況の逼迫にともない火災類焼防止のために強制疎開にあい、世田谷区東玉川町に引っ越した。幼稚園以来十数年暮らし、我が故郷と感じていたところから移転すると、全てが様変わり、友人からも、慣れ親しんだ自然からも切り放された。

思うに今までが恵まれすぎていたのだろう。そろそろ高校の受験勉強をすべき時期となり、受験勉強に打ち込めるような体制になったのかも知れない。

*昭和 16 年 12 月 8 日 大東亜戦争

新聞と書籍よりの知識しかない我々は、緒戦の戦果に熱狂した。当時大川周明著日本歴史を読んでいた私は、その文章からかなりアジティトされていたのでしょ。戦争貫徹の

ために努力を誓った。

*昭和17年以降学校教育に戦時色が濃くなってきた。軍事教練が増え、受験勉強との調和が難しくなってきた。17年の年末、宮殿下の査察があった。翌年早々の入学試験を前に、1カ月軍事教練に励み、お誉めの言葉をいただいた。この教練が如何なる役に立つたのか考えさせられた。

*昭和18年3月 新潟高等学校理科甲類合格 東京府立第六中学校 卒業

高等学校に進学したのは、府立六中は進学校で同級生一同進学を目指し、右へ習いで受験した。お国のためには理科が良かろうと考えた。自分が理科系に向いている事と、お国のためにという考えが混合していたように思う。

*昭和13年～18年 在学中は日本が昭和年初よりの軍国主義のみちを最後に駆け上がった時代であった。この間我々の受けた教育には狂信的な軍国主義、神道思想があったかも知れぬが、東京在住の我々はことの良否を噛み分けたものと思う。正しい日本人は、神仏を敬い、己を正し、社会の維持に努め、国を守る。このモラルは小学校、中学校の時代に養われたものであろう。神道主義、軍国主義とは別ものとする。

—高等学校時代—

・昭和18年

○新潟高等学校 入学

我々の高校生活は修学年限短縮の為に、昭和18年3月～20年3月迄の2年間であった。

戦局はますます日本に不利となり、敗戦に向け直進した時代であった。

東京では毎日、戦争が意識され、日々の生活に影を落としていた。新潟は田舎、東京に比べると戦争の意識も薄く、中学時代のいろいろな制約から開放された私は一挙に自由の身になった様に思えた。新潟でもすでに戦時色が強まり、かつての良き時代の新潟からは変わっていたそうであるが、東京から来た私には伸び伸びと過ごすことができた。

*一部新潟在住者を除き全寮制に出会った。出身地・日本語の発音のことなる仲間、4修・5卒・浪人の仲間、と渾然一体となった生活が始まった。『自己を見つめよ』連夜の諸先輩の話は、訳のわからぬままに何を考え、何をすべきかの方向を示してくれたように思う。

*毎日授業を聴講し、放課後は読みたい本を読み、あまり分からぬ哲学書に手を出し、映画館に出入りし、腹が減れば料理屋に行き、夜は1枚の布団に数人がゴロ寝して、ダベリに過ごし、是が自由かと納得していた。

*私の本籍は千葉県安房の国、漁師の血を受けたものか水泳は得意で、当時の女子の日本記録程度の腕前であった。水泳部に所属し、インターハイ出場を目指し学期末試験中も5000メートルを泳ぎ毎日練習に励んだが、インターハイへ出発の直前に中止となり涙を流し、改めて戦時下の学生生活なることを認識させられた。

*18年秋学徒出陣 文科系学生の徴兵延期が無くなり、一部の先輩が出陣された。

このような外部状況がボッチヤン育ちの私を徐々に変えて、今までの青くさいモラルに新しい息吹を追加してくれたものだろう。

*18年下期～19年上期 寮幹事。寮生活に関する学校職制との折衝、生活物資配給に関

して市役所との折衝をとうして新たな勉強をしたように思う。

*勤労働員：新潟在住中も近郷への援農、新潟港における荷揚げ作業等アルバイトがあったが、19年下期になると大東亜戦争も末期となり軍需工場の労働者不足により、女子挺身隊、学生、生徒の動員が始まり、我々も富山県東岩瀬の不二越鋼材の冶金工場に動員された。宿舎は12畳に10人が詰め込まれ、言うなれば『たこべや』、階下には韓国より徴用された青年協力隊が同居し、同じ職場で働いた。職務は高周波炉により超硬合金（ドリル、バイトの原料）の製造であった。勤務体系は2直2交代、12時間勤務し、2班で交代勤務、夜勤／昼勤の交代日には24時間勤務となる。今日では考えられぬ状況であるが、当時は是が常識であり、異も唱えずに働いた。全てが若さでカバーされた。

*軍指定工場は軍より原料の配給を受け、その支給量は従業員の数に比例するので学徒動員により支給量を増やしていたらしい。軍の査察日には余分な原料を隠す為に、遠くの田圃まで運ばせられた。世の中の良い仕組み／悪い仕組み、いろいろと勉強した。

僅かの仕事に多人数は不要と理屈を着け、宇奈月、金沢、高山にエスケープしたのは細やかな抵抗であった。

*20年3月には高校卒業の運びになったが、実際の高校生活は1年半に満たず、かなり不満足な状態で、大学へ進んだのではなかろうか。入学式の時、大山工学部長より『工具崩れ諸君』なる第一声を頂戴したが、むべなるかな。

*僅か二年（半年は勤労働員）の高校生活であったが、あの戦時下において今の人達の間から見れば限られた自由であったかも知れぬが、あの時の生活が、物の考え方がその後の我々を支配したのではなかろうか。

—大学時代—

・昭和20年

○東京帝国大学第一工学部入学

化学系学科に進学を希望、昨年度、応用化学は志望者が多く、火薬学科は少なかったの
で、火薬を志望した。しかし今年は火薬が志望率2倍となり困惑したが、戦時下にて無試験となり無事合格した。新潟からは5名受験したが、成績順に奇数番の3名が合格し、何故自分が合格したかは今もって不明である。中学2年のとき、化学の落第点をとった私は今は有機合成を目指し、その一部として火薬研究を目指した。

*日本全土大空襲 3月10日東京大空襲、4月1日入学後も、東京周辺は連日空襲が続き、まともな授業は受けられなかった。また5月、6月の2カ月は群馬県大田の近郊に援農に動員され、麦刈り・田植えの勉強に励み、ときおり大田の飛行機製作所を狙ってくる艦載機の機関銃掃射に追い回された。残念ながら敗戦から日本を救うための火薬学の勉強は不可能であった。

*昭和20年8月15日 終戦

諸般の情勢より敗戦は覚悟していたが、ヤレヤレとほっとするとともに、我々はこの戦争に何ら寄与出来なかったことは残念でもあった。上陸してくる米軍の意図不明、全てがやり直し。秋より肺門リンパ腺炎を患らい、最悪の20年度であった。

*昭和 21 年 応用化学科転科

昭和 20 年は殆ど無駄に過ごし、高校は 2 年と中途半端であったので、応用化学科 1 年に転科を決心した。この年の高校卒業生はおらず、同級生は学内の転科組と新入の海軍兵学校出身者であった。ここで今までと全く違った人々とおつき合いすることとなった。

*敗戦後は一部の人々を除き全国民が困窮の時代であった。授業料は卒業まで待ってもらい、私もアルバイトに努めた。有機合成の勉強のために、サッカリンの合成、香料、染料の合成を行ない、販売迄お手伝いした。大学はサッカリンのおかげで卒業出来たのではないかと思っている。

*卒業講座は染料を選び、牧先生に師事した。テーマはアンスラキノンの建染め染料で、無事完成したが、色はくすんだ紫（私は腐れ紫と呼びます）であまり期待出来ません。大学で習ったことはすべて役立つものではなく、大学は物事の考え方、研究の仕方、製作のための方法を教えるところと考へている。

*今の学生は就職先につき、よく調査して決めています。我々の時代あまり自分のことは考えなかった。どこへ行こうと世のため人のためになるだろう。日本にはすべきことがたくさんある。給与などはそんなに違うわけがない。極めておおらかなものだった。私は染料屋だったのに、先生が誰か一人昭和電工に行かねばならぬとの話に乗り、そのうちに染料を始めるかも知れぬとのことで昭和電工に入り、とうとう石油化学屋になった次第です。

—昭和電工—

・昭和 24 年 昭和電工入社

昭和 24 年から 54 年まで 30 年間、昭和電工および関連の昭和油化に所属、石油化学関係業務の各種分野に渡り、働くことが出来た。技術職として技術の全分野に亘り経験することは難しく、このおかげで次の奉職先の日本プラント協会にて、コンサルタントとして途上国の工業プロジェクト開発のお役に立つことが出来たと考へている。

※関係職場 広田工場 横浜工場 中央研究所 昭和電工本社
昭和油化川崎工場 大分工場 昭和油化加工研究所
昭和電工千鳥工場 昭和油化本社

※関係した業務

*研究業務：2. 4D 除草剤の合成 塩化ビニール樹脂の製造研究
塩化ビニール／アクリロニトリル共重合樹脂の合成
メラミン－尿素樹脂の研究 ポリオレフィン類のブレンド研究
ポリオレフィン類の成型加工研究

*企画. 技術導入：塩化ビニール ポリエチレン アクリロニトリル
ポリプロピレン

*設計. 建設：ポリエチレンプラント アクリロニトリルプラント
ポリプロピレンプラント

*製造. 運転：高密度ポリエチレン アクリロニトリル ポリプロピレン

*製造管理：昭和電工千鳥工場（高密度ポリエチレン、塩素化ポリエチレン、ポリス

チレン、アクリロニトリル、青化ソーダ、アミノ酸、有機塩素化物

* 環境保安：

* 在職中前半は石油化学の萌芽、発展期にあたり、設計値より沢山出ればお誉めに預かる時世であった。常に設備の能力アップを考えた。導入した設計に余裕もあったが、技術者は常に触媒の改良、冷却能力の改善、プラント・ボトルネックの改良に努めたので、10年もするとプラント能力は3~5倍増加した。是が石油化学の利益なき繁栄の原因となったものであろう。

* 製造能力が増加すれば、廃棄物の発生も増加する。この処理が後手に回り昭和40年代の環境汚染を招いたものであろう。石油化学がある時期環境汚染の張本人であったことを忘れてはならない。

* 技術開発、工場設計、工場建設を担当していると、時間との競争になる。現在進めている案が不可能になる場合があるが、常に第二案に変えられるよう考えておく必要あり、大東亜戦争は代案無しに直進しひどい目に遭ったことを忘れてはならない。

* 昭和54年昭和電工/昭和油化の合併が迫り、日本プラント協会へ転出のお話があり、私に最適の業務と考えて、転出した。

* 昭和電工在職の大部分は、技術導入・設計・建設・製造運転を繰り返したが、何れのプラントも安定すると次のプロジェクトに変わり、長い目で見たプラント技術を完成させることが出来なかったのは残念であった。

—日本プラント協会—

・昭和54年日本プラント協会

日本プラント協会は通産省の監督下に、日本より海外へのプラント輸出業務を取り扱う協会で、途上国の工業プロジェクトの開発調査、資金計画の援助、プラント輸出の取りまとめを行なう。海外では **Japan Consulting Institute** として知られている。

昭和電工では石油化学に関する技術導入、プラント設計、プラント建設、試運転、運転管理を担当していたので、協会の技術関係の仕事は、電工での仕事を裏返しにしたようなものであった。電工での仕事は技術屋の実業とも言うべき仕事であったが、協会の仕事は所謂コンサルタント業務であった。

*業務内容

工業プロジェクトのフイージビリティ調査：

- 1) 当事国における、該当プロジェクトの必要性
- 2) 用役、原材料、製品需要地より見たプロジェクト候補地の適否
- 3) 需要調査による生産規模の設定
- 4) プロセスの概念設計 必要工場敷地面積 必要人員 所用金額
- 5) IRR (内部利益率) の算出 プロジェクトの適否判定
- 6) 資金計画 建設計画の立案

工業プロジェクト発掘調査：

当該国の諸官庁、銀行を訪問、輸出/輸入バランス、電力、用水、の調査

- 1) 大量輸入の工業製品の把握
- 2) 大量産出の一次産品、大量輸出の一次製品を原料とする工業製品の検討
- 3) 候補工業製品の近隣国における需給状況の調査
- 4) 原材料、用役の入手の難易を加味して候補プロジェクトを推薦する。

工場建設の援助、監督

途上国では工場建設に不馴れなので、コンサルタントとして当該国を援助する

- 1) コントラクターへの発注仕様書作成援助
- 2) コントラクターよりの受注仕様書の検討援助 ネゴシエーション援助
- 3) コントラクターとの契約援助
- 4) 建設開始の援助
- 5) 建設期間中の工事監督 進捗度の確認 工事報告の確認
- 6) 単独機器の揮え付け、仮運転検査、配管その他の総合検査
- 7) 試運転による性能の確認

既設工場の修理、改造プロジェクトのファイジピリティ調査

* 訪問した途上国

- 1) アジア : 中国、フィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、バングラデッシュ、ネパール、インド、パキスタン
- 2) アフリカ : ザンビア、ジンバブエ、南ア連邦、エジプト、モロッコ、ケニア
- 3) 中南米 : メキシコ、スリナム、ブラジル、アルゼンチン、バラガイ

この仕事は途上国の援助仕事である。国により状況がいろいろ異なり、援助国が規定を定めて一定の対応をしても問題が多い。大事なことは、まづ先方と仲良くなること。気楽に話せること。何が問題かよく把握すること。相手国のレベルの確認である。援助の為に大金を投じて、是が末長くその国の役にたたねば何もならぬ。

思いつくままに感じたことを並べてみる

- * 提供する工業技術：日本は資源に乏しく、概ね輸入原料に頼り、高純度の物質を原料として能率の良い技術を開発している。途上国では粗悪原料が一般的で、これに対応できるフレキシブルな技術の知識が必要である。また製造運転中に原料組成が設計値より大きく狂い、性能が低下する場合もある。
- * 相手国の技術レベルにあった技術を：いずれの国も先端技術を好むが、問題の起きたときの対応力に乏しい、その国のレベルに応じた設備を提供すべきである。
- * 途上国のエリートエンジニアは国外に留学して、アカデミックな教育を受け、理論的には強いが、エンジニアリングには極めて弱い。日頃接触を保ち良き関係を維持する必要あり。
- * 中間エンジニア：欧米流に、小さな個室を持ち報告がくるまでは現場に出ない。
日本流に、この階層が現場を歩く習慣を持たせることが重要である。
- * 老朽化設備の調査のおり、計器の故障により温度管理が不能になり、設備の腐蝕が進

行する。資金がなくて腐蝕防止剤が購入できず、是無しで運転を続け腐蝕がすすむ場合が散見される。円借款では一部の予備品を認めているが、このあたりの配慮が必要であろう。

そのプラントは利益を生んでいても、国として外貨の足りぬ時には、必要品が購入できぬものである。

* 事実の認識は、人と人との信頼関係が大切である。長期に渡り調査・コンサルティングが行なわれる場合は、十分な調査・コンサルティングが可能であるが、短期の場合には入手データの信頼性の確認が重要である。

旧英国領の途上国では、アイルランド、スコットランドよりの移民が農場経営を行ない、その 2 世、3 世がエンジニアとして工場管理をしている国がある。これらの国の技術レベルは非常に高く、黒人エンジニアのレベルも高い。途上国の援助には腰を落し現地への定着が必要であろう。私の場合調査調査で各地を飛び回ったが、現地の状況を把握できたのか、すこぶる疑問である。

・昭和 71 年 3 月 プラント協会を退職

今後は晴耕雨読、好きなことをしたいと考えました、HEART の会のお手伝いを始め今にいたっています。今回の自画像を書いてみていろいろ考えます。私の辿った道はその時々状況とチャンスで決められたように思います。是は給与生活者として当然の事ですが、あの時にこうすべきであったとの想いが出てきます。歴史に IF はありませんが、是からの人生に参考にして行きたいと考えます。

3.3 北島道俊「わたしのエイジフリー、わたしの自画像」

平成 14 年 8 月

1. はじめに

エイジフリーという言葉の定義や受け止め方は、当然このレポートで扱われることであるが、このエッセーを書く前に私の頭の中をよぎった感懐を書いておきたい。

- ① 人はそれぞれであり、基本的には固定化でなく、まず個の尊重と考えたい。
- ② 勿論その中で自分の好きになれば何でも良いということではない。
- ③ 勿論年代の差異なしということではない。年代の違いも確実にある。
- ④ 他のある中の自己であり、その中での自己の生き方の選択が考える命題である。
- ⑤ 結局は、各年代を通しての流れの中で、異質のことの自己化と排除の峻別の中での共生ある前進か。
- ⑥ したがって裏返して考えると、我慢しながら共存して生きるといった共生の心のような自在の制御力がないと異質の自己化と異質の排除の峻別はできない。
- ⑦ 定年後というのは、収入が少なくても良いと割り切れれば、定年前よりフリーに時間を使えることは確かだと思う。マイペースで行けることは有難いことである。しかし身勝手に良いということではない。
- ⑧ 以上のようなことを思いつつ、私の過去と現在の一端を年代を追って描き、エイジフリーへの感想を*をつけて付記してみたい。
- ⑨ 各項に、1、2行程度の社会的時代背景を、中村隆英著「昭和史」などよりとって()内に付記しておきたい。

2. 1. 誕生(大正14年・1925)より小学校入学(昭和7年)まで

(時代背景：ひよわなデモクラシー， 左翼運動と軍部革新派， 世界恐慌下の社会， 金解禁と昭和恐慌)

父は逓信省の官吏、母は小学校の先生。兄弟は兄2人で私は末っ子。祖父母も居り、3世代家族の中産階級であった。祖父は囲碁が上手で、4歳のころから私はその相手をさせられた。

今にして思えば屋外を駆け回る遊びの機会を少なくしてしまったとは思いますが、比較的特殊な遊び環境で、良い手悪い手に頭を使って自分ながらの判断を知ったことはプラスであったと思う。それに、兄二人がいたのでいつのまにか暗算などがかなり出来るようになり、少し得意になれたようである。今の時代より生育環境は良かったと思う。

*** 親や家族との絆が特に大事な年代だと思う。**

*** 今は幼稚園(児)における遊びのあり方が重要かと思う。**

2. 2. 小学生時代(昭和7年・1932～昭和13年)

(時代背景：血盟団と五・一五事件， 経済と産業の発展， 二・二六事件の勃発， 日中戦争の勃発)

大森の入新井第二尋常小学校へ6年間通学した。1年から6年まで男子組の1組で、担任は男のベテランの先生であった。当時、地区の一角に大変貧乏な集落があった。教科書も買えない、弁当も持ってこれない同級生がいた。この生徒に対する先生の密かな気配りがあり、密かなだけに生徒に確かな親切を教えていた。

先生の修身は校長先生のそれよりもみんな一所懸命に聞いた。修身の現場が授業の中にあったからだと思う。だから陰湿ないじめの記憶はない。

また、貧乏が原因での自暴自棄や暴力行為もなかった。最初にすばらしい恩師を得たことになる。

私は算術特に暗算はクラスで一番早かったと思う。その他大体上位であったが、図画と手工が下手だった。このことは今も引きずっていて、ものの形の把握がどうも杜撰である。今の時代では特に弱点として目立つ。

- * エイジフリーを社会という視点で見ると親切が必須の項目になる。
- * エイジフリーを人間という視点で見ると、とりわけ現代はものの形の把握、美の感性が大事な一つの資質になる。
- * これらは、遅くも小学校年代に養われることが望ましいと思う。

2.3. 中学校（旧制）時代(昭和13年・1938～昭和18年)

(時代背景：戦時経済統制，国家総動員法の成立，国内経済の悪化，大東亜共栄圏の夢，緒戦の勝利)

府立八中への入試に落ち、青山学院中学部に入学。兄二人は八中であつたし、憧れでもいた学校に行けずにすっかり参ってしまった。落ちると思わなかった甘さか傲慢さを叩きのめされた最初の一発であつた。

第二志望の青山学院は父の選択であつた。今思うと父はリベラル好みのところがあつたし、賀川豊彦先生のことを尊敬もしていたようであつたから、少し費用もかかるが特徴のある青山を敢えて対象にしてくれたのかもしれない。

私にはミッションスクールの発想は勿論なかつたのである。元氣なく入学したのだが、毎日講堂で全校生徒が賛美歌を歌って、先生が輪番でしてくれるスピーチを、生意気に友達と評価の話題にするなど新鮮な満足感があり、元氣の出るのに長い時間はかからなかつた。そして厳しいが親しい友にもなってくれた愛のある先生が多数おられた。今、亡父に感謝している。

- * 大いなる者（神）の愛という言葉をいつの間にか学んだと思う。
- * 今は、愛はエイジフリーの基本でもあると思っている。
- * 宗教に触れない、とりわけ神をタブーにすることは大変問題と思う。

2. 4. 高等学校（旧制）時代（昭和18年・1943年～昭和20年）

（時代背景：戦局の悪化，東条内閣の退陣，小磯内閣とフィリピン決戦論，小磯内閣から鈴木内閣へ，）

中学5年からではあるが、運良く二高（仙台）へ合格、入学した。

戦局は急速に悪化し、米や塩・砂糖などの主要食料は配給となり、東京からは疎開する家庭も増えていた。その点でも仙台への都落ちで空腹は避けられた。

食べ盛りだから、すごく幸運な事だったのだ。しかしそれより、自主自律心の確立を目指した寮生活が与えられた。今、その遭遇は、与えられたのだからおかしな話だが、誇りにすら感じている。そしてこれが、この時代への感謝のすべてとってしまいたいほどなのである。

魅力ある講義も授業は最初の半年、あとは農村への勤労働員、やがて軍需工場への学徒動員が殆どであった。だがこの間も、校長以下、錚々たる教授が、この自律教育のために献身されていた。素晴らしい場であったが、文科系の、とりわけ1年上級生は、学徒出陣で多数出征して行った。残念な事であったが、われわれの年度は、学業年限が3年から2年に短縮になった。

自主自律の寮生活、これはエイジフリーへのモデルと思える。しかし上記の様に、社会的には極めて不安定な個人でしかなかった。社会と不可分である自己の現実の国はありのように実際は大きく左右されるものである。高校時代は、自主自律という自由を学んだが、社会との関係は最も不自由になっていった時代であったといえる。

*** 奉仕活動の体験、共同生活の場を踏むのを通常とする過程を合意のうちに、この年代につくりたいものである。**

*** 思いやりや正義感を自主的に身に染み込ませるにはこの年代が一番大切なように思う。このことは勿論IT時代にも重要な普遍的課題であろう。**

2. 5. 大学（旧制）時代（昭和20年・1945年～昭和23年）

（時代背景：原爆投下，敗戦，占領の開始，民主化政策，新憲法，吉田内閣，学制改革，片山社会党内閣）

昭和20年4月、私は東京工業大学応用化学科に入学した。父母が仙台に近い母の故郷宮城県岩沼に疎開していたのであるが、3月には高等学校時代の書物や思い出の写真をそこに置くことなく、全部持って寮から長兄夫婦が守っていた東京大田区の家に戻った。そして4月15日の大空襲により、家と共に、持ち帰った殆ど総ての物を焼失した。続く8月15日の敗戦の詔勅は大学の校庭で聞いた。それまでは戦況日々に悪く、空襲相次ぎ、慣れきっていたとはいえ生理的に心身は説明し難い力みで硬直しきっていたのであろう、全身からへなへなと力が抜けていった。

虚脱とも何か違うこの現象は後にも先にもないものであった。

自分の家もなく食料も極度に乏しい。盗みを働く悪人になるか、そのまま立ち直れず消滅してしまう運命を辿るか、そのどちらかしかないというのが今振り返る当時の状態の筈

である。だが、当時はそうではなかったのである。空襲の被害にあわなかった者の親切があった。戦災者同士の助け合いもあった。そしてなんと言っても空襲という束縛からの開放があった。とも角戦争は無くなり平和になった。

ゼロからの再出発だからなのか、自分の些細な行動も総て前向きに感じ、悲観など起きた思いは全くなかった。

間違いなく経済的にはどん底、そんな特別な時ではあるが、学生という非生産者である大学生活を続けられた陰には、兄夫婦のひたすらの援護が無ければ到底成立しないことであった。特に血の繋がりのない兄嫁が、自分の食物の大半を私にまわして養ってくれた。この恩は返し様も無い恩である。

もうひとつ書いておかなければならないことがある。それは、この終戦の年の11月18日に、私は近くのプロテスタント教会で洗礼を受けた。前に記した中学が青山学院だったこと、今思えば、当時よく存続出来たと思うキリスト教研究班と称する寮が、高等学校の寮の一つとしてあって、そこで寮生活を送ったこと、などクリスチャンへのレールに乗っていたともいえる。然し洗礼を受けるというのには、やはり決心を伴う内在的心象があったのであるが、そのことの表明は難しいので省略をお許し頂きたい。この世的にそれを促したのは聖書の言葉を証するような、牧師の倅であった中学時代一の親友I君の友情に私が動かされたということである。

こういった多くの出会いが、私に人とのハートある交際を大切に、隣人を大切にということを見せてくれたと思っているし、大変得をしたことであった。

そして大学時代は、専攻した応用化学(有機化学)で私がなんとか役に立つ新しい仕事をしたいという、社会的責任を感じる心境であったと、今当時の無一物の中での張り切りが思い出されて懐かしい。

卒論の有機合成化学の研究では、反応のメカニズムを大切にせず仮説を立てろ、そして実験せよ。納得いくまで繰り返し懸命になれ。実験の中で新しい何かが見えてくる。人まねはするな。などを熱っぽく教えこまれた。

大学時代のこれらのことは物事へ取り組む基本として、その後の開発型社会生活での私の指導原理になっていると思う。また、大学時代の友は専門が近いので、社会人になってからの交流も多かったが、特に卒論の仲間5名は今でも時折の会合や旅行を楽しみ、全員ハートの会にも参加して応援してくれている。これも同じ釜の飯といった卒論の場で通じた絆であると思う。

*** 大学時代は社会に出る自分への指導原理を形成するかけがえの無い時間だったと思う。**

*** 社会人になる上で、何処かに奉仕の心とハングリー精神を育む環境がある(にすること)が極めて大事だと思う。**

*** また、自分の学んだことを社会にフェアに生かして貢献する、高い志を求める目前の時でもある。**

*** 21世紀は長寿社会であり、IT革命で、スピードと広がりが増える時代**

である。このことは、生涯学習によるリフレッシュ、新旧の共同や国際的な多様な視野を必要とする社会となろう。そのベースを持った人材をこの時代に養うことが求められていると思う。

2. 6. 会社勤務 1、研究開発職務時代（昭和23年・1948～昭和48年）

（時代背景：朝鮮戦争，サンフランシスコ講和，高度成長の出発，安保闘争，所得倍増，資本自由化，東京オリンピック，道路，新幹線，証券恐慌，イザナギ景気，生活様式の変化，革新自治体の台頭と公害問題，大学紛争，ニクソンショック，高度成長の終焉，日中復交と列島改造，沖縄返還，）

大学を出て新入社昭和23年当時は、アセチレンを出発原料とする合成化学がこれからの有機材料開発の基幹とされ、事実、プラスチック、塗料溶剤、医薬品をはじめ、未来事業展開の骨格として重視されだしていた。その上わが国では戦後のモノのない、ゼロからの出発であったから、生産業に研究開発は不可欠な部門であった。

私は300人の従業員という当時の中企業であったが、出発物質アセチレンからの誘導体をやっていた昭和合成化学工業(株)に教授の薦めもあり入社し研究課に所属した。

有機化学では有機電子論という新しい反応理論の講義の出だしたばかりの頃であったから、先輩技術者はそれを大学でかじって来た新参者の私に耳を傾け、また期待もしてくれた。そして具体的テーマはアセトアルデヒド誘導体の合成、ビニール化合物の合成、その生成物の高分子化、それらの応用といった、まさに、戦後果たした生活の豊かさの開発に繋がる新産業分野であった。

研究の機会を与えられているのであるから、これは発明になるし事業化すれば役にたつと思われることに遭遇する。だが当時はまだ、大方の会社に特許部といった組織は無かつたし、出願手続きに対する支援部門もなかった。勿論私の会社にも無かつたので、特許庁に先輩の審査官を尋ね特許の書き方や手続きを教わり、苦心の末、昭和25年9月9日私の特許出願第一号「ポリヴィニールアルコールの製造方法」が受理され、翌年11月公告された。この辺は、新人が自分で駆け回って、二、三年でよくぞ切り開いた成果と云いたいのであるが、白いキャンパスが与えられ、自由にどうぞお描きなさいといった時代であったのだから、みんないろいろやったわけで、その中で私のやったことは自力での特許化というだけのことだったのである。

ただ、この経験で私は役に立つかもしれない新しいことは特許にしておこうという考え方になっていた。

その後、昭和32年には昭和電工(株)が有機事業に参入するため、私の入社した昭和合成化学工業(株)を合併した。そして私は同社新入社員として、その中央研究所の第二室(有機研究室)の研究員になった。

以下、昭和35年主任研究員、昭和36年東京工業大学より学位(工博)授受、昭和38年第二室長、昭和43年石油化学研究所次長兼有機研究室長、昭和45年中央研究所薬品研究部長、昭和47年本社企画部次長、開発企画部次長；

が私の研究開発職務時代の経緯である。

室長時代は丁度時短の動きが強くなりつつあり、土曜半ドンが定着する趨勢になったのを機会に、アイデアを出し合うことに繋がる室内雑誌会と、実験助手が実験の中味を理解するための知識教育に土曜の午前をあてた。幸いその頃の仲間は、これらがその後の役に立ったと感謝か評価をしてくれている人が多い。

さて、特許という点では、薬品研究部長になる前の昭和 44 年頃までが、直接発明に噛みこんだ時代であり、殆ど共同出願ではあるが、100 件に近い特許を出願し、80%位が登録査定になったと思う。

然し、既存の事業の改良特許として有効であったもの、新規製品の製造開始にあたって部分的に役にたったものは勿論あるが、ずばり、特許が社内に新製品事業そのものを形成したと確信するものはなかった。そんな中で、ライバルに当たる某社が、特許を買って呉れたのがある。自社で利用せず、売られてしまう気持ちは複雑ではあったが、今はこれも特許の効用と思っている。

そんな私ただけに、その後当時の若手研究者の何人かが、それぞれ、内外に注目されるニュープロセスを出して、ずばり工業化し大きな貢献をしてくれたことに対して、人一倍敬意を表したい気持ちになる。

また、私が後に関係会社役員として赴任し、生産と研究開発を担当した時に、私の依頼を受けて、当時の室員達が多数参画してくれ、特許も含む全く新しい有用なプロセスを共同で完成事業化し、さらに新しい事業への道が開けたことは、私が研究所出身であったから纏められた、過去が生かされたケースと素直に思う。

研究開発には経営本体にいいコーチがいることが望ましい。幸い、これには少し役立ったと思う。

- * いい土は花を愛する人でないと出来ないという。では研究を愛する人とは？
- * 自分は該当者か？
- * 今や IT 時代、埋蔵特許が掘り起こされ、過去の発明者の成果も今との出会いで復活するような事業が数多く成立しないものだろうか。
- * 初心には捨てがたい力がある。

2. 7. 会社勤務 2、関連会社役員時代（昭和 48 年・1973～平成 2 年）

（時代背景： 石油危機、狂乱物価抑制政策、経済大国、経済摩擦、海外への投資と援助、自民党内紛、ロッキード事件、減量経営、産業構造の変化、内需拡大政策、第二次石油危機と財政再建、保守化志向、円高への転換、内需主導のブーム、税制改革のつまずき、リクルート問題、天皇の病と崩御、自粛ムード、）

昭和 48 年 11 月、私は山口県にある徳山石油化学（株）取締役工場長に就任し、技術全般の責任を持つことになった。有機合成関連の研究一本で 25 年過ごした私であったから、石油化学工場という大現場を前にして職責をまっとう出来るかとのとまどいがあったことは事実であった。若し製造課長であったら完全に失格であったと思う。

幸い工場長であるから暫くはだまって工場現場を観察し、必要に応じて質疑応答することが許されたわけであるが、現場の諸君は多分頼り無かったに違いない。

ただ、時あたかも第一次オイルショック、事業効率の新しい転換が必至であったから、研究所育ちの私への期待もあったのであろうか、大方の従業員とはじきに気脈通じ合える仲になった。新しい技術開発、事業開発体質の付加、これが私への第一命題と受け止め、それまでは、会社の行事と従業員の消息記事を主体とした社内報に、時々私の考えを披瀝させてもらう様にした。

それらのテーマの一部を要約し、私のこの時代の自画像とさせていただきたい。

昭和49年6月号 「石油危機、そしてわれわれの今後の課題」

‘グラフに見る石油危機の背景’ ‘今回の現象—エネルギー高価格時代への突入—’

‘わが国の石油化学はどうなる’ ‘われわれの今後の課題’

昭和50年9月号 「企業の社会的責任と徳石」 ①生産 ②災害防止 ③節約

④調和 ⑤進歩 ①は直接的責任、②、③は①に伴い充たすべき責任、

④、⑤はさらに、①②③の行為の結果が成長社会とのかかわりあいにおいて果たされるべき指向的責任。

昭和51年8月号 「最高から最効へ」 1. 調和+進歩→最効 2. 極限の追求

と極限状態 3. バイオリズム 4. 最高から最効へ

昭和53年新春号 「青春は感動する」(成人の日になんで)

昭和53年12月号 「低成長時代の課題」 低成長時代を質的成長時代という言葉に塗りかえ、知恵と力を合わせて頂きたいと思います。

[付記] 昭和55年6月、新規プロセス溶剤EGAの営業運転を開始、後にこの新製品が電材等精密溶剤事業展開に繋がる。

昭和57年新春号 「溶剤市場の開発」

溶剤はどんなところで活躍しているだろうか

溶剤の使用を左右する重要な性質

溶剤を必要とする主な市場

変動する関連市場動向

溶剤市場開発への取組み。

昭和58年新春号 「徳石の基本体質について」

(内容項目の一部)

5. 酢酸エチルの二役活用 6. 高純度溶剤への進出と溶剤のファイン化

昭和59年新春号 「昨年の成果の上に」

1. 城を固め基本体力の一層の強化の為に 2. 事業体質を豊かにする為に

昭和59年12月号 「工場長退任のご挨拶」

(10) 昭和60年新春号 「交わりを原点とする業容の拡大」(資料別途)

1. 石油化学業界の構造改善を踏まえた新生 2. 新時代の波に呼応した新生

(11) 昭和60年9月号 「異分野との接点(1) L S I 産業」

真空管から超LSIへの発展の様子

集積化技術の一主役フォトリソグラフィ

フォトレジスト関係溶剤として活躍するEGA、酢ブチなど

高集積化に伴い有機溶剤へ要求される質の問題

LSI製造に登場する薬品概観

(12) 昭和60年12月号 「再びよろしく」(11月1日付で再度工場長を委嘱された)

(13) 昭和61年6月号, 9月号「異分野との接点(2)クロトン酸の素質とその応用」

(14) 昭和62年12月号 「品質で信頼される徳石に」

(15) 平成2年新年号 「技術開発センター完成を機に開発体質の飛躍革新を」

(16) 平成2年5月号 「役員退任に当たり」

2. 8. 会社勤務3、常勤顧問時代(平成2年・1990～平成5年)

(時代背景:平成になり、昭和史の範囲外になった。後日別資料で補填したい)

得失いろいろの山口県での単身赴任生活16年余を経て、軟着陸に向けての最後の会社勤務、東京へ戻って、思わぬ恩恵の3年であった。

会社勤めで会社が動いている以上、仕事はなくなる。幸い、暗黙の定年の気配があって、そろそろ自分で決める毎日の生活になると思ってはいたが、現実に日々職責のようなものがあると、それ以上定年後は考えない。そうなった時に一息いれてゆっくり考えよう。こんな心境だったように思う。今考えると、これは自己無責任、筋書きどおりなら、気力の湧かない日々つながっていたかもしれない。

ところが、東京で暫く常勤顧問をして、月一回徳山に来て思いついたことを勝手に言え。といわれた。実際3年間そんな処遇に与った。

それは16年余単身で苦勞された慰謝料のようなものだという人もいる。

でも今のリストラ時代を思うと殊更のことであるが、これは感謝しなければならない。

そろそろ融通の利かない年齢。それだけに、あらゆる点で軟着陸への恵まれた機会であったと思う。その間、会社ではやや客観者として放言も出来たし、東京の生活を取り戻し、いろいろな時代の旧友との旧交をあたため、HEARTの会の発足へ向けても、自分にとっても良い機会という考えも固まった時間であった。

ハート川柳の例会の「スタート」という句題に、「敗戦という終わりの日始めの日」という句が出来た。そして、自分に始め、一言で言えば、「新生」が折りに触れ来るのがエイジフリーであると思うに至った。そう思うと、この3年間は私に与えられた、定年後のエイジフリー形成環境であったと言える。現時代もそういう折りに触れた「新生」への環境づくりを社会も自分も工夫すべきだと思う。

2. 9. 会社退職後(平成5年・1993～平成14年～)

(時代背景:平成になったので、昭和史の範囲外になった。後日適切な資料で補填)

の予定)

平成14年現在、進行形であるので、この項はもう少ししてから纏めたいが、少しでも触れさせてもらおう。

現在の生活の主な内容：

ハートの会関連：0.5日/週＝理事会、自宅での関係作業＝1.5日/週、セミナー、文化集会など＝1日/月、WG＝1夜/月、川柳例会＝1夜/月、これらの関連諸準備＝5日/月、以上を要約して、1/3位のウエイト。

趣味娯楽関連：囲碁＝5～6日/月、麻雀＝1日/月、園芸・その他＝ネット3～4日/月、以上を要約して、1/3位のウエイト。

家族で外出・展覧会・懇親会・OB会等：以上を要約して、1/3位のウエイト
これらの間で、読書、パソコン利用等随時

カレンダーほとんど埋まる老いの幸

平成10年末、糖尿病の余病と思われる複視体験、入院初体験。

次いで平成11年初、右腎腫瘍摘出手術のため入院。音楽療法の効果を知った思い。(会報26号P1参照)

いろいろの新しい体験をしたが、幸いにも、まだ人生を楽しむ気力が残っているように思う。実はこういう気力もなくなった時、家族や周囲に感謝して心優しく生きられるかが今後の最大の関心事である。

3.4 寺川 彰「私の自画像」

2003.02.08

* 生立ち

父は朝鮮総督府の官吏で、各地の刑務所長を歴任した。終戦時の小磯国昭首相が当時朝鮮総督府長官で、同郷のよしみで赴任したと思われる。私は南朝鮮の公州で生れたそうだが、覚えているのは、広い畑の真中にぼつんと建った光州の官舎以後のことである。平壤の官舎は大きく、暖かいオンドルの部屋もあった。丘の傾斜地がそのまま広い庭になっていた。大きな池があり高台にはあずまやがあつた。朝鮮人町は中学校の裏手に小さくかたまつて見えたがその中に入った記憶はない。母はいつも出掛けていたように思う。昭和8年に、隣接している山手小学校に入学したが、1学期半ばで、父の定年退官のため、朝鮮を離れて日本に帰国した。知人に預けた黒毛の大きな犬は、我が家の前を動かず、飲まず食わずで亡くなったと知らされた。

* 小学校時代

昭和8年から6年間の小学校時代は東京市荏原区中延町の家に住みつづけた。

1年生の12月に石板の下敷きになって、左大腿骨骨折で3ヶ月間昭和医専付属病院に入院した。ひまで勉強したせいか、以後学校の授業が楽になった。2、3年生の時の担任は佐藤寅次郎先生で、放課後よく先生の手伝いをさせられた。その頃、宿題が多く、特に国語の書き取り宿題が膨大で、ある友達の母親からクレームがついたこともあるが、私にとってはそれが今でも非常に役に立っている。

小さい頃、父はよく昔の物語を聞かせてくれた。妖怪や歴史の話が多く、多分両親が謡曲をやっていたせいと思う。私も耳学問で、羽衣の一節などものにした。

私が4年生の昭和11年、2月に2・26事件、7月に父が肺炎でなくなった。64歳であった。私が病室に呼ばれた時、父は静かで、足から次第に上がってくる死の状況を刻々と知らせてくれた。人間の死とは不思議で荘厳なものだと思った。

4年から6年までの担任であった高橋泰四郎先生の家には、海外に出かけた教え子からのものを加えて、数千の蝶や昆虫の標本が集められていた。その影響もあって、私も昆虫採集に熱中し、北は祐天寺から都立大学、南は馬込、池上本門寺の付近まで足を延ばした。当時は一面に水田が広がり、植木園も多かった。低い植木の手が届きそうな所に緑色の蛹を見たり、草いきれの中を蝶を追いかけた、あのぞくぞくする興奮と夢は今も忘れられない。

クラスのメンバーは、1年から6年間変わらず、50名前後であった。友達の家によく遊びに行き、また、先生や友達と遠足にでかけることが多かった。クラスの中山君は話上手で、先生に云われて授業の代わりによく千夜一夜の物語を連続で聞かせてくれた。我々は、受験準備でも随分先生にお世話になった。しかし、私は東京高校付属中学の受験に失敗し、府立八中に入学した。

昭和12年7月、蘆溝橋事件勃発、12月南京占領。この時代、日本は戦争への道を突き進んでいくが、日常生活に目だつた影響はなく、子供心にそれほどの緊迫感は感じなかった。

家には本が多く、とりわけ、修養全集が私のお好みで、修身の教科書よりはるかに大きな影響を受けたと思う。私は級長で通した為、先生の連絡係でもあり、それなりの悩みもあったが、それも含めて小学校生活は秩序良く、充実していた。祝祭日には式があり、教育勅語が朗読されたが、その内容は、人の学ぶべき当然の教えとして素直に受け入れられた。先生はそれぞれに個性があり、権威も威信もあって尊敬された。したがって、担任教師ごとに、クラスの生徒間には融和とまとまりがあった。しかし、その後の戦争の悲劇で、私のクラスの消息は大部分が未だに不明である。

* 中学校時代

1年生の時に、洗足池の先の上池上町に引越した。通学には、家から2kmは必ず歩く学校の規則があり、往きは洗足池を抜けて目蒲線の大岡山駅まで歩き、帰りは同方向の友達と、目蒲線の大岡山駅からいつも東京工業大学の中を抜けて昆虫や植物の観察をしながら帰る、秘めやかな楽しみの時間があった。

府立八中は自由な雰囲気のある学校として知られていたが、急激に戦時色の強い方向へ変わっていく中であって、2年生の時のクラス担任であった白哲長身の皆川先生は、文理科大学国文出で、俳句の加藤楸邨に師事し、自由な精神とは何かを身をもって示された先生であった。芭蕉、俳句の紹介や芥川竜之介の“杜土春”の解説など、若き先生の風貌と共に忘れることができない。

先生は終戦後の8月25日、ニューギニアにほど近いハルマヘラ島で戦病死された。“征きし日のかの夕焼と風呂敷と”これは、数年後、皆川先生の死を函館で知った加藤楸邨の句である（北海紀行、昭和21年8月）。

3年生になって、麻布区森元町に引っ越した。この一角は、両親の故郷である山形県新庄市の士族の邸がままとまっていたところで、知人が多く、叔母の家もすぐ近くで、母親としては住みやすかったのだろう。この年、次第に日米関係が険しくなり、我々の肌身にも感じられるようになった。近くの水交社では、陸海軍情報部の講演会などが開かれていた。12月8日朝、遂に太平洋戦争が勃発した。

この戦争が、A,B,C,Dライン包囲網によって日本が経済的に封鎖され、石油も禁輸されるに及んで、起こるべくして起こった止むに止まれぬ戦争であると納得していた。緒戦の大戦果も空しく、勝算のない戦争は、1年にも満たぬ昭和17年8月、ガダルカナル島への米軍上陸を境に攻守所を変えて戦局は逆転し始めた。

昭和18年、5年生の7月、母は知人に呼ばれて一週間の予定で軽井沢の別荘に出かけたが、二日目の朝突然帰ってきた。私の異変を夢で見たというのである。私は持病の慢性盲腸炎が起きて、またいつもの事と思っていたが、結局母に引っ張られるようにして病院に連れて行かれた。診断の結果は腹膜炎で一刻を争う危篤状態になっており、手術で一命を取りとめた。母は以前から、めったに夢は見ないが、夢を見た時は必ずその通りのおことが起こった。母の不思議な夢知らせは、その後の東京大空襲や終戦、私の東大合格など事ある毎に続いたが、軽井沢からとんぼ帰りした時の、私についての夢がどんなものだったのかは、何度聞いても遂に答えてはくれなかった。

手術後も化膿が止まらず、完治するまで半年以上かかり、留年になった。

昭和 19 年、戦局は急激に悪化した。我々は、4 月から学徒勤労動員によりクラス単位で色々な工場に配属された。3 ヶ月程通った多摩川沿いの航空レンズ工場は後に爆撃された。空いっぱいの空中戦や、B29 の大編隊への体当たりが頭上に見られるようになった。たまに街中で若い白マフラー姿の航空兵に出会うと涙がこみあげてきて止まらなかった。

この年の暮頃からは毎夜のように偵察空襲があり、時々爆弾を落とすので、夜も寝られないようになった。そんな状態の中でも、昭和 20 年 1 月末に一高の入学試験が行われ、理科甲類に合格した。

* 高等学校時代

昭和 20 年 3 月 10 日の大空襲以後、東京は危険になり、母と妹は、梱包したまま発送できない家財道具を家に残して 4 月に郷里の新庄に疎開し、私は一高の寮に入った。5 月 25 日の大空襲で一高の由緒ある教室はすべて焼夷弾を浴びて灰燼に帰した。翌日、渋谷を抜け、余燼燻る熱い電車を伝って麻布の我が家の焼け跡にたどりつき、一面の焼け野原の中で、人間の業の不条理と空しさに耐えた。

その後、我々新入生組は、埼玉県の大里の農家に一人ずつ分宿して農作業を手伝った。戦争を忘れさせてくれた砂漠のオアシスのような 2 ヶ月であった。しかし、その間に、沖繩地上部隊が全滅し、敗色はいよいよ濃厚となっていった。

7 月末、一転して、廃墟と化した立川航空機工場の寮に移動。艦載機の襲来を受けながら、午前中は授業、午後はたこぼ掘りとじゃがいも掘りを続けた。食事はひどく、米粒が数えられるお粥であった。それでも、渴しても盗泉の水を飲まず、と、掘りあげたいもを持ちかえる者はいなかった。栄養不良で、ノミにかまれた所が化膿し、動けなくなる者が続出する中、あの暑く静かな終戦の日のラジオ放送を聞いた。

死と絶えず向き合っていた生活から解放された喜びをかみしめながら、荒れた東京の街をただ歩きに歩いた。

3 年間の寮生活は、物質的には最低であったが、精神的には豊かで充実していた。その間、多種多様の、優れた能力と考え方を持った人物との出会いがあり新鮮な驚きがあった。そして、世の中のすべてが急激に変化する真っ只中であって、人間とは何か、そして如何に生くべきかを問いつづける、変らぬ価値あるものにいつも触れていられた得難い期間であった。

* 大学時代

昭和 23 年 4 月、東京大学農学部農芸化学科入学。最初の 1 年間は千葉県検見川寮から通った。この寮生活でも、食べるものも着るものも乏しかったが、専門の異なる畏友との共同生活で、すぐれた思考や感性に日々接する豊かな日々を過ごした。

2 年目から新宿区甲良町に部屋を借りた。兄に部屋代を補助してもらい、学費は奨学資金を借り、その他の費用は、学校新聞の配達と家庭教師のアルバイトで補った。一日二食で過ごしたが、戦争時代の延長で一向に苦にならなかった。理系は実験が多く、まじめに学校に通った。しかし、この頃、一方では、シューベルトやシューマンのリードに取り付

かれ、楽譜を読むのが一番の楽しみだった。

生物化学教室を選び、卒論は、“鯨肝油中のキトール（ビタミンAの二分子重合体）の抽出と構造決定”であったが、この経験からは、大学に残って研究者の道を選ぶ情熱と自信を持つことは出来なかった。学問の世界という巨大な壁の前でたちすくんでしまったのである。公務員試験にも合格したが、富士銀行の従兄弟に勧められて昭和電工を選んだ。

この間、昭和 24 年に、下山事件、三鷹事件、昭和 25 年レッドパージ、朝鮮戦争勃発、物情騒然たる世の中が続いた。

* 昭和電工(株)富山工場・病気休職

昭和 26 年 4 月、昭和電工(株)へ入社し、富山工場に配属された。石灰窒素の品質管理や新製品開発など色々勉強させてもらった。

3 年目の 3 月、スキーで転んで背中を強打して以後、毎月軽いかぜの症状が 1 週間程現れるようになった。その都度、会社や町医者に診てもらい、異常はないとのことであったが、身体はただならぬ異変を感知していた。医者に強く訴えたが取り合ってもらえず、7 月に別の医院で撮影してもらったレントゲン写真には、径 3cm の白いリング状の影が右胸部に大きく写しだされた。断層写真の結果、鶏卵大の巨大空洞が肺門部から背部にかけてぼっかり口を開けていた。手術は不可能とのこと、言外に余命は半年と推察された。下宿に帰る蒸し暑い歩道の目の先 1 m 程が白くぼんやり見えるだけだった。

八月から神奈川県藤沢市の高座病院に入院した。絶対安静の日々が三ヶ月続いた。身体は寝たきりであったが、ある日突然心が全くしぼられない自由を実感した。その夜は月が明るく、病室の窓から見える赤松の大木の枝葉がゆっくり揺れていた。この月の光を浴び、さやかな風を感じ、生きてこの美しい自然に浸っている喜びで涙が止まらなかった。この日の自由とこの夜の感動を生きている限りは決して忘れまいと固く心に誓った。

この時を境に私の運命は方向が変わったような気がする。

三ヶ月目のレントゲン写真は劇的に変化していた。そして一年目の写真では空洞の中身が無くなって穴がつぶれたような状態になっていた。ストレプトマイシンとパス、ヒドラジドの効果で、私は千人に一人という奇跡的な癒痕性治癒となり、2 年後の昭和 31 年夏に退院した。

* 中央研究所

昭和 31 年 11 月に中央研究所第一室に転勤、翌年 1 月から 6 月まで東京大学農学部農芸化学科肥料研究室に派遣され、リン酸、カルシウム、カーボン等の放射性同位元素標識化合物の製造技術を習得した。7 月以降標識石灰窒素を製造し、肥効分布を解析してジュネーヴレポートに掲載された。

昭和 32 年 7 月、第五室に配属され、標識溶成リン肥を製造して肥効を調べた。

* 日本原子力研究所へ派遣研究

昭和 33 年 5 月から 2 年間、及び昭和 37 年の 1 年間、日本原子力研究所放射線化学研究室に派遣された。コバルト 60—10KC の照射室が完成したばかりの時点で、化学的方法による高線量の測定法を確立した。また、熱及び放射線酸化によるベンゼン水溶液中でのフェ

ノール生成のラジカル反応の研究を行った。同室の研究員は皆若く、未知の領域に取り組む意欲と活気に溢れていた。東海村の自然は美しく、その中で結婚し、長女を得た。

* 中央研究所で麻酔薬ハローセンの工業化

昭和 40 年～43 年、紫外線照射による麻酔薬ハローセンの生成反応を研究した。基礎試験で、無色の三弗化塩化エチレンガスと等量の臭化水素ガスをフラスコに導入しながら紫外線を照射した時、中空の一点からハローセン異性体が液状で出現し、滝のように落下し始めた。何も見えない空間から、目に見える物質が出現したのである。「無」から「有」が生じる。この時、私ははからずも自然の秘密の一端を垣間見たような感動を覚えた。

工学グループの応援を得て、プラントを建設し、工業化に成功した。工学研究のためのデータの取り方、特に精留塔の設計のような化学工学は、基礎研究とは発想が異なる手法を必要とすることを学んだ。

ハローセンの物質特許は、英国の I C I 社が所有していたので、製品見本を I C I 社に送って検定証をもらい、武田薬品で包装販売してもらった。薬九層倍の経済の実態をこの時始めて実感した。

この研究で社長賞を得、また、原子力研究所での研究からハローセンの工業化研究までの理論の一貫性と実用化の実績が認められて、原子力工学博士を取得した。

* 緩効性被覆肥料CSRの商品化

昭和 43 年～45 年、チャイナマーブルのような肥料が作れないかとの本社の研究開発部長の一言がヒントになって、緩効性被覆肥料の研究を始めた。接着樹脂の選択と球状化方法が成功の決め手になった。樹脂量と肥料三成分の溶出量は見事な直線関係を示し、溶出期間は自由にコントロールが出来た。工業化と商品化のための膨大な試験を同時並行的に進め、新製品として武田薬品を通して販売した。

当初、川崎工場で生産を始めたが、新製品にも一律に固定費を課せられたため赤字となり、やむを得ず、群馬県の三興化学工業（株）に生産を委託した結果、忽ち利益率 No.1 となって表彰された。この製品は商品名“エードボール”として現在も市販されている。

* 農薬研究体制の確立、除草剤ダイムロン開発、水田除草剤ショウロン M 商品化

昭和 46 年～48 年、合成及びスクリーニングの専門家を外部より迎え、研究員を宇都宮大学と理化学研究所に研修派遣、また、安全性研究施設を設置して、農薬研究体制を整えた。

尿素系除草剤ダイムロンを開発し、工業化及び商品化試験を行った。

昭和 48 年～52 年、水田除草剤“ショウロン M”を商品化し、有機合成化学協会賞を受けた。さらに、芝生除草剤“スタッカー D”を商品化、また別に非農耕地除草剤“タンデックス”を導入商品化した。

物にも、生れるべくして生れ、光るべくして光る、さだめのようなものがあるのかも知れない。ダイムロンは、有機化学研究室の棚に置かれていた高分子酸化防止剤に端を発した一連の関連化合物 SK 剤の一つである。偶然、水田雑草マツバイの防除効果が発見され、さらにその後、市場のタイミングよく、ホタルイの防除効果が見出されて、水田用混合除草剤として根を下ろした。その後、水稻が短稈になる副作用が逆に倒伏防止剤として利用され、

薬害軽減剤として広く用いられるようになった。

時を経て、新たな作用機作で甦り、次の役割へ生命がつながるといふ幸せな薬剤で、現在も多量に販売されている。

* 国際衛生(株)出向

昭和 53 年 10 月から 1 年間、国際衛生(株)工場長で出向、殺虫剤パナプレートの主原料を転換合理化し、製造法の改良を行った。

ここには、ベテランの製造課長がおり、さまざまな装置上のトラブルを一手に引きうけてすべて独力で修復した。どこにでも、一人か二人、神のような手を持った素晴らしい技術者が存在することをここでも認識した。

わずかな期間ではあったが、薬品会社として品質上にも生産上にも問題なく運営する責任の重さを痛感した。この小さな会社が、ここ数年連続して優良子会社として親会社の昭和電工(株)から表彰されるまでに成長している。

* 昭和ダイヤモンド化学(株)に出向

昭和 55 年～58 年、ダコニール混合殺菌剤 4 種類を登録商品化した。その他数種類の混合殺菌剤、くん煙剤の開発試験を行った。アメリカのオハイオ州クリーブランドにあるダイヤモンド・シャムロック(株)の研究所の豊さに目を見張り、方や、フィリピンのミンダナオ島の南端ダバオ、韓国全島、台湾、タイ、インドネシアの国々へダコニール普及のために何回か出張してその貧しさを目の当りにした。

これらの国々の大規模な果樹、野菜、バナナ等の栽培にダコニールは必需品として迎えられ、彼等の社会生活への貢献に喜びと誇りを感じた。

* (株)エス・ディー・エス バイオテック

昭和 58 年～62 年、ダコニールの安全性資料の整備登録を担当した。

この薬剤は、世界中で広く使用されているが、1980 年以降、膨大な安全性の追加試験が行われ、針の穴ほどに狭いあらゆる種類の関門をくぐり抜けてその安全性が実証された。広範囲の抗菌作用性と安全性を兼ね備えたダコニールもまた、稀有な恵まれた薬剤というほかはない。

平成 2 年後半～3 年末まで、再度、ダコニールの市場調査を行い、PR のための安全性資料を作成した。

農薬に対する世の批判は厳しい。しかし、農薬なしに、適性な食料生産を保つことはできないことも事実である。農薬の安全性と有効性について、人々の正しい理解が得られるような粘り強い努力が一層必要と感じている。

* サンド薬品(株)埼玉工場

昭和 62 年～平成 2 年、フランスの医薬品製造会社で、技術顧問として採用された。

医薬品登録のための分析法の開発、品質管理全般の管理、抜き取り検査法の解析等を担当した。課長はそれぞれに若く、スカウトされた人材が多かった。生産医薬品の数も豊富であり、また生産は技術の粋を集めて順調であった。しかし、他社にさきがけて、新しい医薬品を日本で登録することが会社の将来の命運を左右する最重要課題として絶えず厳し

く要求された。

外資系会社であるため、語学堪能であることが評価の基本となることはいなめず、日本の会社とは異なった合理的な経営方針が感じとれた。

* セローノ・ジャパン(株)

平成5年～9年、イタリアの遺伝子組換え医薬品製造会社で、新設する浜松研究所内に放射性同位元素取扱施設を建設するため、技術顧問として採用された。私の第1種放射線取扱主任技術者の資格が役に立った訳である。

設備・配置の設計、放射線量計算、測定機器選定、取扱規準書作成等、1年がかりで完成し科学技術庁の承認を得た。

浜松市に研究所設立後は、適宜出張し、放射線取扱施設管理の全責任を負う他、新医薬品の承認申請に必要な多くの審査業務にも関与した。遺伝子に関する医薬品についても、放射線取扱いに関しても、行政の監視は厳しく、従業員の移動も激しかったが、未知の困難な仕事に取り組む若いリーダー達の姿には一種の感動を覚えた。すべてが新しく作り出される仕事ばかりで、私自身働き甲斐のある数年間であった。

* その後

人間環境活性化研究会（HEARTの会）設立のため、安立代表から声をかけられたのは、平成5年の頃であった。平成7年1月に正式に本会が発足するまで、安立代表を中心に、故平山代表代行を含めて現在の理事メンバーが毎月のように会合を重ねた。この時期、日本はバブルが崩壊し暗い予感が漂い始めた頃である。

以後8年に及ぶ時が経過しようとしている今、日本はバブルの崩壊のみならず、すべての面で、固有の価値観がゆらぎ始めているような気がする。

私自身の生き方の目標としてきた好きな言葉は次のようなものであった。

“随所に師となる”

与えられた環境を支配し、主体的に誠実に生きる。

“相手の立場に立ってものを考える”

知恵とおもいやりを持ち、他人の痛みを感じる。

“自ら律すること厳に、他に恕すること寛に”

自分には厳しく、他人にはやさしく接する。

現在の人々のものの感じ方や考え方は、これらとは正反対の基準で動いているように思われる。共に生きてきたのに、何故これ程に違ってしまったのだろうか。どちらが間違っているのだろうか。我等はどう生きるべきなのか。古くて新しい課題がきびしく問いかけてくる今日この頃である。

3.5 栗原 一「私の自画像」

2002. 8. 31

給料生活が終わった次の年、平成 12 年、私は月二回のNHK文章教室に通いはじめた。その都度出される課題で、400 字原稿用紙で 4~5 枚の文章を書いている。一貫して自分史の一断面となっており、これを集大成すれば「私の自画像」となる。以下それを見出しとして紐どく便宜に、経年別にアウトラインを整理してみる。

「出生」

昭和 9 年 2 月 1 日、横浜の現在住んでいる家のすぐ近くで生まれた。昭和 9 年は室戸台風が大被害をもたらした年であった。

父は岡山県の農家の生まれ、高等小学校を卒業後船員を志し、油差しや甲板洗いかからたき上げた外国航路の船乗りとなり、七つの海を渡り回った。

母は新潟県出雲崎の出身だが、既に横浜に出ていた子の無い伯母に、学校に行かせてあげるからと養女になり、横浜の第一高等女学校を卒業した。父とは横浜寄港時に見合いして結婚した。

私が幼稚園の時父は下船。汽罐士の資格を取り日本鋼管に勤める。父が乗っていた 5000 噸の貨物船、巴洋丸（東洋汽船所属）はその後陸軍に徴用され、太平洋戦争の開戦直後の昭和 16 年 12 月 22 日フィリピン島リングエン湾上陸作戦中、雷撃を受けて沈没した。（最近、日本海事協会の図書室で調べて判った。）

「小学校時代」

昭和 15 年、神奈川県立女子師範学校附属小学校に入学。母が女学生だった時、隣に附属小学校が併設されていた。自分の子供をそこにに入れることが憧れだったのか、試験を受けさせられた。母は今で言う教育ママであった。そういえば母が女学生時代愛読した有島武郎の「或る女」の中に出てくる登場者の名前の一つを私に付けたのだと思う。登場者は、岡 一。

戦時色が強まり、昭和 16 年国民学校と改称。この年の 12 月、太平洋戦争（大東亜戦争）に突入。昭和 17 年 4 月 18 日、米軍が日本を初空襲、下校中の私の頭上を双発のノースアメリカン B25 が通り過ぎた。近くの堀の内地区に焼夷弾が落ち、幼稚園児が機銃掃射を受けて死亡した。この年の 11 月 30 日、横浜港でドイツ軍艦が爆発火災を起した。黒煙は空一面を覆い、港周辺や港が見える高台は外出禁止令が出た。

この事件は以後報道管制され、又ドイツ軍の乗組員は箱根に隔離されて、戦後迄ドイツには帰れなかった。（戦後の調査による。）

次々と戦局が悪化するなか、昭和 19 年 7 月、学童疎開発令、集団組と縁故組に分かれた。集団組は秦野へ、私は縁故組となり、母方の田舎、当時は空き家になっていた新潟県出雲崎、それも町から一里離れた約 20 戸の集落に、母と私と妹弟の四人で疎開した。空き家といっても、戦時下海岸に打ち上げられたソ連の浮遊機雷が爆発、海岸に面していた母屋は消失、蔵だけが残っていた。従って荒れ地になっていた畑の、開墾、薪拾い、近所

の井戸へのもらい水から生活が始まった。

昭和 20 年 3 月 10 日の東京下町の東京空襲、5 月 29 日の横浜大空襲、疎開地の私は幸いにも空襲の実体験はしなかった。8 月 1 日に長岡市が空襲を受け、一晩中空が真っ赤で飛行機の爆音が絶えなかった事の印象しかない。

終戦となり横浜で学校の授業再開が 11 月から、と連絡を受け帰る事になった。開通している信越線を経由して桜木町の高架プラットホームに下りた時、一面の廃墟が山手の方まで続いていたのはいつまでも忘れられない。

「中学・高校時代」

昭和 21 年、横浜二中の試験を受け合格。旧制中学としては最後の入試だった。何故近くの三中でなく二中を受けたかということ、皆が三中を受けると落ちる者も出る、戦争で唯一焼け残った二中を受けるとの先生の勧めであった。

昭和 22 年、新教育体制のもと新制高校の併設中学となる。以後高校二年迄下級生はなし。

昭和 24 年、高校一年の 12 月、隣接の米軍キャンプに出入りしていた夜の女の失火で校舎が全焼。空襲で焼けた一中、三中と同じ条件になってしまった。そしてあくる昭和 25 年から第一高女の女子校舎を三分の一借りて、分校としてかよう。この学校には岸恵子、草笛光子、小園蓉子等の有名人が在学中だったことを後年知った。4 月には校名が横浜翠嵐高等学校と改名、男女共学の下級生が入ってきた。二年の時、数学は「幾何」を選択した。一学期の成績はオール 1 となり夏休みの補修授業を受けた。おかげで二学期はオール 5 となった。これが将来理科系を志望する芽となった。又社会は「人文地理」を選択したが、夏休みのアルバイトで行商（ゴム紐や化粧品売り）をやりながら「地域調査」として纏め、宿題として提出、先生から足で稼いだ調査として褒められた。これがその後大学での都市計画専攻に繋がる。又この時期から大学入試に進学適性検査が参考にされる様になった。最近聞いた話であるが、文部省が、進学適性検査の優秀だった者を、その後の追跡調査をした様である。我々は「進適」の世代だった。

「大学時代」

昭和 28 年 4 月、一浪した後、東京工業大学に入学、理数科好きな人が皆受け、20 倍の競争率であった。「ナイロンの発明」の本に魅せられて高分子に進もうと思っていたが、大学三年で専門課程を決める時に建築科を選ぶ。叔父が横浜市の建築技師であった事も影響した。実はこの時、第二外国語で選択したフランス語が、第一、第二、第三と不合格になるも第四課程に挑戦していた。第四の試験後、先生の所に結果を聞きにいったところ不合格、第四だけでも合格にならないと外国語の単位不足で三年に進級出来ない。フランス語は殆どの人が不合格となる名物先生。この先生に掛け合ったところ、これを訳してこいと一冊の本を手渡された。これはベルグソンの「夢」。

早速、神田の古本屋街を捜し回り、訳本を見つけ、これを指定の頁分を転書して先生に提出したところ、黙って 60 点ぎりぎりの合格をくれた。この先生は言語学で有名な小林英夫先生。（仏文学の有名な小林秀雄ではない。）こんな語学センスの無い私が何故、後年

海外担当になったのだろうか、或いは父から見えない糸が繋がっていたのか、人生は本当にわからない。

恰好良いと思っていた建築も、意匠のセンスは無し、構造は苦手で、最終学年の卒業論文の指導教官を誰になってもらうか迷っていた。学年指導の藤岡道夫先生に住宅問題をやりたいと申し出たところ、住宅なら清家清先生にと預けられたが、先生はデザイン専門なので、まだ教室を持っていなかった故田辺平学先生の弟子で、都市計画の石原舜介先生に預けられた。卒論は「目蒲線鶴の木駅周辺の地域調査」だった。

「戸田建設積算担当時代」

昭和 32 年 4 月、戸田組に入社した。ひどい不況時代で同じ大学から三人受けても一人しか取らない就職難時代だった。新潟の母方の遠い親戚が戸田組（後の戸田建設）で役員をしており、縁故で一人の合格の中に入れてもらった。配属先は積算（見積）課だった。

大学の成績は、デザイン駄目、構造駄目、おとなしいから現場向きでないとの理由だった。設計部の大学の先輩が私の所へ来て、大学出が積算へ行くものではない、確かに工事費を出す重要な部署だが、嫌と言えれば何とか変えてやるからと言ってくれた。その時何故か、私は重要な部署ならやってみますと反撥した。

配属されてすぐには、数量拾いはさせてもらえない。見積書の検算や、カーボン複写ばかりさせられた。算盤が全然出来なかったのも、高校出に負けるものかと、一生懸命練習をした。掛け算の時、算盤に両方の数字を置かず、頭と頭から掛けて結果を算盤に置いてゆく自己流を習得した。そして桁違いをしない様、掛けられた数字は最初から桁が合う様に置いていった。

入社して次の年の 4 月、祖父の葬式に参列した母は脳溢血で急死した。停年後の父と五才下の妹と八才下の弟の面倒を見る事になった。母の葬式を自分が段取り、家の借金の処理も自分がする事になった。

昭和 36 年、結婚。妻の実家は戦後の農地解放で没落した地方の名家（戦時中は大森に住む）。父は東京帝国大学の造兵学科を出て航空発動機で博士を取り、精密機械の会社で役員をしながら、東大第二工学部設立と同時に講師として参加したが、戦後すぐ昭和 21 年結核で亡くなった。先妻（病死）に生まれた兄姉が四人あり、妻は後妻であった母の二人姉妹の上の娘だった。同じ会社で大学の先輩の家（後の義兄）に居候していて、その先輩から話が持ち込まれ、私も片親なので、合うだろうと決めた。

昭和 39 年 6 月、新潟地震発生。日本建築学会より被災建物復旧診断の調査チームに人出しの呼びかけがゼネコン各社にあり、戸田から構造の人と、コスト担当は大学出の私が選ばれた。倒れた建物を引き起こして復旧する費用の出し方は、自分としては経験したことのない分野だったが、一応まとめた。これが社内で評価されたのか、10 月にタイのチェンマイ医科大学新設工事の国際入札に、戸田として始めて応札する事になり、この調査チーム五人の中にコスト担当で選ばれた。材料費はタイの市場で一店一店調査し、労務費は日本での歩掛かりを基準に、タイではどのくらいの能率だからどのくらいの割増にする、という出し方で工事費を算出した。参加業者は地元タイ業者八社、外国勢は日本の戸田一

社の計九社だった。入札の結果は九社中五番目だった。これで自分の工事費の出し方に自信を持った。

昭和 40 年、会社は現場経験をさせようと、私を横浜三ツ沢の市民病院の改築工事現場に、次席として配転した。設計は芦原義信という大先生だった。いきなり次席は大変だ、しかし積算で学んだ色々のコストを積み上げてゆく实际が、建物が出来上がっていく過程で大いに勉強になった。自分の部下や職人の世話役と親しくなろうと仕事が終わっても、現場宿舎で夜遅くまで、飲んだりマージャンしたりした。土方の世話役が結核菌の保菌者だった。私は肋膜炎になってダウンした。間もなく世話役も重病となり死亡した。病院の現場をやり、病院に入るとは何たる因果か。

「戸田建設職員組合時代」

昭和 44 年、45 年の二年間、会社の職員組合の本部副委員長兼賃対部長となる。ふつう組合の支部の組織で働いてから本部に上がるのだが、今まで組合運動は避けていたのに、突然本部役員、それも副委員長になってしまった。この二年間で会社が極秘にしていた給料の昇給テーブルを、組合員一人一人の昇給額の調査をして割り出した。

日本の経済上昇期なので、賃上げ交渉の主導権は組合側が取っていた。この時の会社役員との接触が以後為になった。この時の本部役員のメンバーは今でも時々集まっている。

この時期、毎年大量に入社する新入社員の教育担当に任せられ、見積教育そのものが、新人の建築物を作る仕事を覚えさせる教育に適するとの事だった。一方体をこわして現場から内勤になった先輩から、建築の経済や経営の知識が大切だとハッパをかけられ、業務のかたわら勉強した。新しい積算の考え方（事前原価と事後原価を近かつける）や概算の出し方を体系付け、社内の積算全国大会の開催者である本社部長の資料作りを手伝わされた。又社外で講師として活動した時期であった。

「戸田建設海外工事室時代」

昭和 50 年以降、建設業界は発展途上国に進出しだした。又石油産出国の工事に参加する業者も増えだした。積算部に席を置きながら、海外に調査に出かける事が多くなる。又同業者の調査ミッションにも参加する様になった。商社の人や海外に発展してゆく会社の海外担当者との付き合いも多くなる。

たまたま昭和 51 年 10 月、マレーシアに進出していた三協精機からの呼びかけで、マレーシアに現地法人を作らないかと話があり、調査に指名された。建設市場調査だけでなく、経済調査、進出に於ける法規制、優遇措置、民族問題（ブミプトラ）等を調べて会社に報告した。建築だけにとらわれない調査報告に、社長は直ちに私を海外工事室に転勤を命じた。社長は私を海外の現地法人の要員と考えたのかもしれない。

「米国戸田建設時代」

昭和 54 年、戸田建設は既にブラジルと米国に現地法人を持っていた。米国には毎年研修として社内留学生を送っていたが、数年前に現地法人を作り、最後の留学生をその任として踏みとどまらせた。初代が七年にもなり、引き継ぎに二代目が本社から送られたが、実際に米国法人といっても、日本でやっている様な仕事は出来ず、日本の外交公館や公邸の営繕工事や日本料理店の内装工事しか出来ず、失望した設計技術者の二代目が、引き継ぎ途中で任にあらずとゴネた。そこで白羽の矢が立ったのが私である。前年の 12 月に父が死に面倒を見る親が無くなっていた。君が行ってどうしても駄目で旗を降ろしたいならそれでも良い、ともかく行ってくれと社長に口説かれた。

最初の一年は単身、二年目妻と次女が来た。長女は高校三年で大学受験を控えていた為、高校の近くに下宿させ日本に留まった。米国はまだワーキングビザが取りづらい頃で、私と同じくカナダのモントリオールで取得して入国した。

ニューヨーク総領事公邸の扉の錠の取り替え費用 20 ドルから始まり、屋根のアスファルト防水の補修や、国連本部内庭の鐘楼の屋根葺き替え等の仕事を積み重ねていった。今まで留学生を受け入れてくれたニューヨークのゼネコン、フラー社（昔、東京の丸ビルを工事した）や設計事務所のグルーゼン社（島本源徳という日系人がいた）にいろいろ協力してもらった。日本の大和ハウス工業の石橋社長の助言もあって、カリフォルニア州に新しく会社を作り、又フロリダ州やテキサス州にも会社を作り、しだいに米国に進出してくる日本企業の対応を考えた。何といても金利の高い時期なので社長に頼んで資本金を一気に百万ドルに増資してもらい、それをユーロダラーに運用したら、年 19 パーセントもついた。これなら仕事をしなくても金利で社員三人分の給料が払えた。足掛け五年になり、社員も七、八人となり、事務所の広さも 30 m²から 300 m²になった。次期交替者が自分より年配で四国支店長の人に決まり、日本に帰る事が出来た。

昭和 59 年、帰った日本の本社では派閥争いが激化していた。社長には覚えのあった私も、社長が会長に、副社長が社長になってから、私の人事も冷たくなっていった。

又身に覚えもない怪文書事件にも巻き込まれた。日本で海外法人のバックアップ営業をしていたが、現地法人が赤字を出したりして風当たりが強くなり、私が営業して取った上海の仕事を、社内でやるのやらないのと問題となり、海外担当を外される内示が出て、海外時代から知っていた先輩が社長の設計事務所を訪問。その社長に相談したら、俺のところへ来いということになり、31 年間勤めた戸田建設を退社し、山下設計に移った。

「山下設計と北海道支社長時代」

昭和 63 年 10 月、山下設計に転職。設計事務所はゼネコンから見れば、先生先生というところ、戸田がゼネコンで準大手なら、山下は設計事務所の大手、これは大変なところへ入ってしまったと思った。山下の社風は、社員はそれぞれ独立していて他人を干渉しない。だから何も教えてくれないので、しばらくは戸惑ってしまった。社長は焦るな、遊んでいろとの事。仕方なく見識と人脈を拓げるため、蔵前スクールや各種のセミナーやカルチャーに出席したり、海外で作った異業種の人脈に接触した。

平成 3 年、社長より札幌支社長（後の北海道支社長）をやってくれないかと突然言われた。妻の母は年始めに亡くなり、我が家には親は誰もいなくなった。何故か横浜を離れる時は、親の死と重なる。現支社長が社員と旨くいっていないので、まったく新鮮な人をとの社長の配慮だった。市立札幌高専に校長で清家清がいた。路上で先生に会ったとき、何で君が設計事務所の支社長なのよと言われた。先生は私がデザインの駄目だった事を良く覚えていた。一方社長には設計事務所の支社長たるもの人前では絶対にデザインが苦手と言うなど釘を指された。

北海道では私の前歴、米国や海外の話は全て封印した。そんな話をしたら、北海道の閉鎖社会、部下も付いてこないし、浮き上がってしまう。苦手を隠しながら出来るだけ若手に働き場を与える事で社内を活性化し、自社の得意な分野、病院やホールの設計を積極的に PR して営業した。北海道は自分としては生まれて始めての土地、風土は米国に似ているが、日本語が通じるだけまだ良いか、とにかく北海道中を車で走り廻った。212 の自治体があるが、80 パーセント以上は廻った。北海道を去る時、道産子も多い社員の、誰よりも北海道通になっていた。就任当初、年間売上の設計料が 3 億円ぐらいだったのが 10 億円にもなった。20 人のスタッフも最高時 40 人になった。

足掛け 7 年になった、リリース登板が長くやっては組織が沈滞する。自ら願い出て次長に支社長を譲った。そのとき、街々では拓銀の倒産と合併問題で大揺れで、北海道も暗黒時代へ突入していった。平成 9 年 12 月、横浜に戻る。

「最近の私」

- ・ 「人間環境活性化研究会」の分科会で「先進エイジフリー社会を目指して」で勉強させてもらっている。
- ・ 「技術支援集団」イーテックに所属している。
- ・ ビオトープのボランティア団体「横浜にトンボを育てる会」の実行委員。
- ・ 「横浜シティガイド協会」の 7 期生として登録。
- ・ 月 2 回、NHK の文章教室に通う。
- ・ 小学校の同級会の幹事。
- ・ わが家の庭は、芝生とバラ。どちらも手がかかる。

「終わりに」

自画像はキャンバスに自分だけの絵の具では絵にならない、多くの人の絵の具に混じり合い、引き立てられて絵になるものだ。

多くの絵の具に心から感謝したい。そして家族の絵の具にも。

3.6 石井登喜男「時代の影響を受けた私の仕事」

2001.1.22

3.6.1 桶屋稼業（個人営業のつらさ）

私の家は、祖父の代から桶屋であった。関東大震災の際、東京の深川で被害を受け、知り合いを頼って、埼玉県川口市に移ってきたそうである。私が生まれた昭和 10 年頃は、国道 122 号線沿いに店を構えて結構繁盛していた。

当時はほとんどの容器が木製の桶であった。我が家では洗濯用のタライから、おはち（飯びつ）、水を入れて運搬する手桶、たくあんや白菜などの漬物桶、人糞を入れる肥桶から風呂桶まで、大小いろいろなものを作っていた。

私は小さい頃、体が弱かったので、余り熱心ではなかったが、それでも材料の運搬や、仕掛品を乾燥させるための手伝いなど、やるのが当然という感じで手伝っていた。

本格的に桶屋の修業をしたのは、中学を卒業してからである。

我が家の前の道路は、いわゆる街道筋に当たっていた。当時毎日のように、近郊の農家の人が、東京方面に馬車で人糞をくみ取りに通っており、また市場へ野菜類を運ぶ人も多かった。これらの人達は、帰りに私の家に立ち寄って、おしゃべりをしながら休憩を取っていった。たまには肥桶の注文や、嫁入り道具に、高価な銅製のタガをはめたタライを注文してくれたり、ギブアンドテイクが結構成立したので、私の家もまづまづの生活ができたのであった。

しかし、商売というものは、時代の影響を敏感に反映するものである。車の発達、水洗便所の普及により、人糞は肥料として使われなくなった。電気洗濯機の出現で洗濯は楽になったが、タライ洗濯はなくなった。

そして一番影響の大きかったのはプラスチック容器の出現であった。成形技術の関係で風呂桶のような大きなものは、昭和 40 年代にずれてきたが、木製の桶はほとんど追放されてしまった。

世の中から需要がなくなってしまったのであるから、方向を転換せざるを得ない。私はサラリーマンになるべく、大学に入る事にした。

我が家は、弟がタイルを習って少しずつタイル施工業に変身していった。その後は、仕事の注文が工務店経由になっていったので、目抜き道路から郊外に移転し、タイル業として継続している。

販売という観点から我が家の商売を見てみると、大量生産の商品ではなく、原則的には、必要に応じて作る注文生産である。しかし技術的には注文主（個人から工務店に変化した）よりも優位であるので、ある程度注文主をリードできる。

したがって技術的な優位性、商品がしっかりしていること、納期が早い、安価であることなどが認められれば、余り販促活動は必要ない。

しかし技術というものは、10 年、20 年単位では、消費者の趣向の変化につれて、変わらざるをえないので、常に先を見通しておかなければならない。

我が家でも弟がタイルの技術を習得したから存続できたのである。この点は大企業でも、中小企業でも、常に考えておかなければならない大事なことであると思う。経営者も労働者も常に 20 年先を考えて準備をしておく必要がある。

3.6.2 学生生活（サラリーマンへの準備）

私がサラリーマンを選んだ理由は次の 2 点である。

；私は不器用であったので職人の世界に限界を感じていた事

；個人営業の怖さを見てきたので「寄らば大樹の陰」と思った事

サラリーマンになるために必ずしも大学に入る必要はないが、周りの人を見ていると学歴社会である日本の姿を感じたので、私は大学に入る道を選んだ。

（40 年たった今考えてもこの判断は良かったと思う）

大学で学んだことでサラリーマン生活に役立つことは、知識の量ではなく、自分に分からないことが起きたとき、「どうすれば分かるか」という知恵（度胸）が付いてきたことである。

3.6.3 サラリーマン生活

新たな就職に当たっては、先生の薦めもあって、いわゆる大会社ではなく発展途上の会社を選ぶことにした。たまたま先輩が勧誘に来た洗剤会社に入社した。

私はサラリーマンになっても、モノ作りを捨てたわけではなく、直接モノ作りに携わる工場勤務を希望し、定年まで技術や製造部門に携わった。

サラリーマン時代、会社では、社会からの要望により、製造技術の変更を余儀なくされたことが多かった。

昭和 40 年代には、河川に於ける泡立ちが問題となり、その原因の一つに洗剤があげられた。我々は原料を生分解しやすいタイプに変更せざるを得なくなり、最適な製造条件を見つけだすのに、てんやわんやの大騒ぎをさせられたのであった。

昭和 50 年代に入ると、琵琶湖の富栄養化防止の立場から、洗剤へのリン分の配合が禁止され、無リン洗剤の開発に会社ぐるみで取り組み、何とか成功することができたのであった。

私の勤務した会社は 100 年の歴史があるが、「消費者に密接な商品」を販売している事を考えて、戦前の石鹸の時代から「家庭科学研究所」という組織を作って活動していた。その中では家庭内の仕事の能率化を研究し、「新しいたらいでの洗濯方法」などを提案してきた。そして合成洗剤の研究も密かに行っていた。その後合成洗剤が本格的に普及した時代になってからも、多少時代を先取りした商品を開発できたので、他社との激しい競争にも勝つことができたのであった。

私のサラリーマン時代、大部分の人は家のことなど放って置いて、ひたすら会社のことしか考えずに過ごし、会社もまずまずの処遇で答えてくれた。しかし今後はそれは期待できないだろう。又サラリーマンは、桶屋などの自営業者が時代の変化に対して何の保護もないのと違って、ある程度の法律的な保護があるのは事実であるが、基本は個人の自覚であると思う。

3.6.4 定年後

私は平成8年に定年退職をし、サラリーマン生活に別れを告げた。

定年後ある講演会で、今までの自分にパンチを食らわすようなこんな事を教わった。「自分がサラリーマン生活に専念できたのは、それを支えてくれた妻を始め周りの人たちのお陰である。世の中は一人では生きられない。相互に助け合う仕組みがあるから快適な社会生活ができるのである。年金も自分の積み立てた以上にもらえるのである」。

そして地域のことを少しずつ勉強することからスタートすることにした。

私は定年退職後、コンサルタントを志して努力をしたが、自分の能力がないことに気がついた事および今までお世話になった地域の人に恩返しをするために、地元の公民館活動に勢力を注ぐことにした。

今の心境

会社人間を卒業して、一市民になるためには、身についてしまった『出る釘は打たれる』ことを恐れて自己主張を抑えてしまう癖を取り除き、自分に出来ることを積極的に実行することだと思う。私は妻をはじめ地域の人たちからこれまで受けた恩恵に報いるために、自分の経験を生かしていきたいと考えている。企業もこれからは、自然と共生するためには、従業員がまず自分の住んでいる街をよく知り、街を良くすることに関心を持つようにならないと成功しないだろう。報酬と言うのはお金で受け取ることばかりでなく、『他人に貢献したことによって得られる喜び』も含まれるのだと今は考えている。その点から言えば私は使い切れないほどの報酬をもらっていると思う。

3.6.5 略歴

昭和10年11月1日	埼玉県川口市で誕生
16年4月	川口市立第五国民学校入学
23年4月	〃 元郷中学校入学
26年4月	〃 県陽高校(定時制)入学
31年4月	東京工業大学に入学
35年3月	〃 化学工学課程卒業
35年4月	ライオン油脂株式会社入社
35年5月	結婚 (娘と息子二人)
42年4月	佐倉市に転居
47年11月	管理職昇格
48年4月	関連会社(四日市合成)に出向
55年1月1日	合併によりライオン株式会社となる
58年4月	部長昇格
61年4月	子会社(ライオン化学)に移動
平成8年3月	定年退職

3.7 藤井 勲「わたしの自画像」

平成 14 年 8 月 21 日

3.7.1 幼年時代

- ・昭和 11 年 9 月 28 日（1936 年） 山口県防府市華城にて、この世に生を賜る。

[生まれた場所：山口市野田神社のそばの病院]

父 31 才（大日本帝国軍人、陸軍騎兵隊）、母 23 才（侯爵・阿川毛利家）であった。

- ・昭和 11 年～昭和 12 年

父親が、大日本帝国軍人として対ロシア国境警備のために満洲国・海拉爾（ハイラル）に滞在していたので、母親は私の誕生を無事に終え、兄（3 才年上）を伴って、父親のもとに帰る。私自身は、生まれ故郷～海拉爾滞在については、全く記憶にないが、酷寒（冬場にはマイナス 40 度、夏場にはプラス 50 度となる）となる生まれて初めての冬場に、酷い急性気管支炎に罹って、一時的に命を落とす羽目になってしまった。一夜が明けて、泣き出したため、「あらっ！ 勲は生きている」と母親が抱き上げて、皆で生きていることを喜び合ったとのこと。

- ・昭和 13 年～昭和 15 年

その後、父親の軍属の関係で、東京府世田谷区東松原に移り住む。現在の井の頭線東松原～明大前の間に官舎があり、そこに住んでいたと思われる。何の様な生活をしてきたかは全く記憶がない。

- ・昭和 16 年～昭和 17 年

大東亜戦争が始まった時は、どういう訳か私は生まれ故郷の山口県防府市華城の実家に居たようだ。1 才の時に患った急性気管支炎のお陰で、この時代を含め小学校を卒業するまでは病弱で、常にゼーゼーと云っており、呼吸器用の「吸入器」を手放すことができずにいたことだけは覚えている。

3.7.2 小学校時代

- ・昭和 17 年～昭和 18 年

昭和 17 年の秋であろうか、山口県防府市から千葉県千葉郡津田沼町（現在の習志野市）に移り住む。住まいは、大日本帝国陸軍・戦車連隊の連隊長であった父親の官舎で、兄と妹（4 才年下）も一緒に住んでいたと思う。

想えば、当時父親が陸軍中佐で、皇族（李王朝）の「御付き武官」、第二戦車連隊の連隊長、国土防衛の参謀を兼ねており、常に津田沼と東京を往復していた。

昭和 17 年には、近くの幼稚園に通っていたことを微かに覚えている。通園には家から今の京成線の上に架かった橋を渡り、田園風景の畦道を歩いて通っていたことを覚えている。

昭和 18 年 4 月、町立津田沼国民学校 1 年生に入学した。何の様にして通学したかは、良く覚えていない。覚えていることと云えば、学校帰りか遊びかで、京成電車のレール

に小石を並べ、電車が通過する時には麦畑に隠れていて、バババーンと云う電車が小石を踏みつけて行く様子を見ていたことくらいである。兄と兄の友達に連れられて行ったのではないかと思うが……………。

・昭和 19 年～昭和 20 年

昭和 19 年正月、すなわち国民学校 1 年生 3 学期から、東京府渋谷区常盤松国民学校に転校。父親の東京の住処である常盤松の官舎に移り住む。現在の実践女子大正門の真前にある住まいであり、当時は実践女学園と云っていたと思う。母親に 10 銭あれば学校に行けるのかと云った覚えがある。

官舎の裏側には皇族（李王朝）の大豪邸が広がっていたことを記憶しており、時折り母親に連れられて皇族の子供達と遊ぶために、大豪邸を訪れていたと思う。確かな記憶はないが、李顯公とか李寓公とか云っていた記憶がある。

常盤松国民学校では、当時としても学校給食があったように記憶している。何か肝油玉が配られていたと思うが、私は余り好きではなく、食べないで、家に持ち帰っていたことも記憶している。また、父親が皇族の御付き武官であることと云うことで、学校では特別扱いを受けていたことも覚えている。

第二次大戦も激しくなり、東京本土空襲が始まる前に、父親を東京に残して、家族は山口県防府市の実家に疎開する運びとなる。お陰で、東京での大空襲には遭わずじまいである。防府に飛行場があったため、一度だけ、機銃走査と空襲の経験を持った。

昭和 20 年 4 月に、華城国民学校 3 年生に進級し、教育勅語を暗記する。『朕思うに、我が皇祖皇祖、国を始むるに高遠にして……………』と高らかに唱える。また、朝礼では、東の空に向かって『神州不滅、必ず勝つ。がんばれ！』と毎日言い続けたことも覚えている。新型爆弾が、広島と長崎に落とされて、終戦となる。

・終戦を迎えて

昭和 20 年 8 月 15 日は、防府にて天皇陛下の玉恩放送を聞いた。父親が東京から帰って来て、私を含め兄弟 4 人及び家族に、これから何の様に生きて行くのかについての話があった。父親としては、『俺の人生はこれで終わった。これからは、それぞれが自分で、頑張っていかなければならない』と、淡々と皆に話した。振り返れば、当時父親は若干 39 才であった。父親としては、大日本帝国陸軍の軍人としての役目を終えて、長い公職追放の日々が待っていたことは事実であるが、まさに軍人としての仕事が無くなれば、他に何の仕事もないと云うことなのか……………。

私としては、国民学校（小学校）3 年生の夏の出来事であった。兄が小学 6 年生で、妹が 5 才、弟が 2 才であった。実家は、祖父母および叔父の母の 3 人に我が家族 6 人を加えて 9 人での生活が始まった。祖父が銀行勤めを終えて、元来の農家に戻って 4 反歩の耕作を営んでいた関係で、私も夏は稲作、冬は麦作を手伝って来た。

・昭和 21 年～昭和 23 年

終戦処理を終え、父親が実家に帰って来たのは、昭和 20 年暮れのことであったと記憶しているが、昭和 21 年の正月には父親の関係で、岡山県御津郡横井村（現在、岡山市に合併されている）に、農地開拓の一員として移り住んだ。私は、村立横井小学校 3 年生に編入した。3 年生の 3 学期から 4 年生一杯までを岡山で過ごした。

父親が公職追放に合ったが為だと思われるが、何故に岡山くんだりまで移り住まなければならないかとは良く理解できなかった。誰のつてを頼って来たかも知らない。今から思えば、敗戦と言うものが、人生を如何に大きく変えるものなのか、計り知れないものがあつたのであろう。

岡山では、まさにどん底の生活を強いられたと記憶しているが、学校では、転校して来たにも拘らず、3 学期から即、級長をさせられた。昼ご飯時には、何時も、教室ではなく、校庭の片隅で、母親の作ってくれた弁当を食べていた。弁当は「ふすまご飯」であつたため、米作り農家の多かった岡山では、「ふすまご飯」を食べる人がいなくて、当時子供心にも、恥ずかしい思いをしていたのか、皆と一緒に昼食を取ることができなかったのであろう。担任の先生が時折、弁当を食べている私の元に寄って来られ、自分の弁当の半分を私に取らせて、美味しい先生の弁当をご馳走になっていたことが思い出されて来る。このように厳しい生活環境の中にあつても、級長であつたことから、勉学には励んだものと記憶しているが、級友からは「びんぼう級長」と言われていた。

・昭和 23 年～昭和 24 年

小学 5 年生に進級する少し前に、岡山から防府に帰って来た。また、華城小学校での勉強生活に戻った。この間の想いでや記憶が余りない。相変わらず気管支炎気味であつたため、学校は休み勝ちであつた。

3.7.3 中学校時代

・華城中学校のこと

戦後わが国の学制が米国に倣って「6・3・3・4」制となつたため、各地方自治体としても、その学制に応じた「小学校・中学校・高校・大学」の校舎の確保のみならず、学区の設定に苦慮したものと思われ、私の通学した華城中学校は、華城小学校の一部を流用したもので、1 学年 2 組で 3 学年 6 組の小陣まりとした中学校であつた。私の時代のみ存在した中学校で、私が卒業すると同時に、華城地区と西隣の西浦地区を合わせて、華西中学校が誕生したことから、私たちが華城中学校最後の卒業生（第 6 回卒業生）と相成つたと記憶している。

・皆勤賞のこと

小学校を卒業するまでは病気勝ちであつたが、中学校に入学して以来、中学校・高校・大学と全てを皆勤するまで健康優良児に申し上がつて来た。何が私をそのようにしたのかは分からないが、兎に角、病気はしなくなった。お陰で成人してサラリーマンになってからも、病気欠勤したことはなく、皆勤して定年を迎えることが出来た。

- ・学級委員長／生徒会長として

私は、津田沼国民学校に入学以来、津田沼～常盤松～華城～横井～華城に渡る小学校6年間は、連続して級長を務めており、中学校に入ってから、1年生から3年生までずっと学級委員長（級長）を務め、中学3年生の時は生徒会長として、華城中学校をリードしたものであった。

- ・運動部のこと

中学2年生～3年生には、バレーボールの選手をしていた。当時は9人制バレーであったが、私はバックセンターを守っていた。部員が少なく大会には出れなかったが、健康維持のためには大変役立ったものと思われ、皆勤賞もその所為であろう。

- ・稲作／麦作などのこと

父親が長年に渡り公職追放されたため、元来の農業を営むこととなり、私も学校から帰れば毎日田圃に出掛けて、稲作／麦作の手伝いをして来た。当時、機械化は全くなく、苗代造り～籾蒔き～田植え～水張り～草取り～稲刈り～脱穀～精米を、全て、わが家のメンバーでこなすことが肝心であり、4反歩ながら黙々と働いたと思う。

また、公職追放された父親が何らかの収入源を得るために始めた新聞配達を手伝うべく、私も新聞配達を始め、朝早くから近所を巡って1時間半くらい走って回っていたと思う。この新聞配達も私の健康維持に非常に役立っていると思う。

3.7.4 高校時代

- ・高校入学のこと

昭和27年4月、山口県立防府高等学校・普通科に入学した。当時は、同校も男女共学であったが、一学年10組で、1組から5組が男子、6組から10組が女子であった。一組が50人の学級であった。

- ・高校時代の思い出

昭和27年4月から昭和30年3月の3年間の高校時代の思い出も殆どなく、ただただ、勉学に励んでいたこと位である。相変わらず、新聞配達をしながら、また、中学時代からの保全経済会および山口県育英会からの奨学金を受けながら、高校に通った。

当時は、地方から大学に入る人は少なく、私の記憶でも、高校生全体の10%足らずであったと思う。また、当時はアチーブメント・テスト時代であり、進学組は、月に1回県下の高校生による模擬テストが行われていたと思う。私は、模擬テストの結果、常に県下で10番以内に入っていたと記憶している。

- ・大学進学への決意

高校1年生から2年生の時は、大学に行くのであれば、何とはなしに東京大学と決めていたが、3年生になってからは、祖母が以前から病気勝ちであることを理由に、通学で行ける近くの大学（山口大学）に行くことと決めた。私の親友が京都大学を目指していたこともあって、非常に残念に思ったことを覚えている。当時は、父親が公職追放に遭い、母親は父親の生活信条に同調、祖父は年金生活、祖母は病気勝ち、と生活環境が

芳しくなく、大学進学すらままならぬ時であったと思う。

- ・アルバイトの思い出

高校時代も学資稼ぎのため、夏休みは道路測量のアルバイトで費やしたことを思い出した。同クラスに私と同じような境遇の友人がいて、二人で測量アルバイトをしたことが偲ばれる。

3.7.5 大学時代

- ・大学入学のこと

昭和 30 年 4 月、国立山口大学工学部機械工学科に入学した。工学部本部は、宇部市にあったが、一般教養は山口市にある山口大学本部で受けることとなっていたため、大学 1 年生当時は、毎日防府から山口へ通学した。通学時間は片道 1 時間半程度であったと記憶している。

- ・学生アルバイト

大学に入ってから、奨学金は、保全経済会と山口県育英会の 2 つに加えて、日本育英会（特別奨学金）からも受けることとし、合計で 1 万 1000 円を毎月受け取っていた。また、家庭の状況から、両親の収入が少なく、3 才上の兄は警察予備隊（今の自衛隊）に入隊して自活、妹と弟もいることから、私が自分の学費だけでなく、一家の生活費も稼がなくてはならない立場となっていたことは間違いなかった。

このような状況から、大学 1 年生当時は、大学から帰って来たら、近所の家に家庭教師としてのアルバイトを強いられた。

- ・専門学部での出来事

大学 2 年生からは、専門学部として宇部市に通学するようになった。ただ 2 年生後期から 3 年生一杯は、宇部市に住む叔父の家に下宿することになった。

しかしながら、アルバイトとしての家庭教師先は沢山あった。宇部市は宇部モンローを産んだ俵田翁の創業した宇部興産の発祥の地であり、当時は大変な勢いがあり、石炭、化学、セメント、機械の 4 部門で、日本でも有数の企業に数えられていたため、宇部市では宇部興産に勤める役員／会社員上層部の子女を対象とした家庭教師としてのアルバイト先が沢山あり、私としても毎日夜は家庭教師に出掛けていた。2,000 円／月／軒と見ても、6 軒の掛け持ちであったが、2,000 円／月／軒×6 軒で、12,000 円／月の収入があった筈であり、奨学金と合わせて 23,000 円／月の収入があったことになる。

- ・常盤公園の近くでの下宿

大学 3 年の後期は、叔父の家から出て、常盤公園の近くに下宿先を探して移り住んだことがあった。叔父夫婦とのトラブルが元で、工学部に近い所に移転したのだ。

- ・4 年生は自宅から通学

昭和 33 年 4 月からは、祖母の病気の関係で、自宅から通学することとし、通学時間が片道 2 時間であったと記憶しているが、私の稼ぎで実家の生活には問題ない状況にまでなっていた。

・工場実習単位修得のこと

大学3年生の夏休みには、地元の大企業である宇部興産に工場実習の単位取りのために1ヵ月お世話になった。機械工学科にいたことから、宇部興産の機械工場で実習した。実習が終わる段階で、工場の人事から宇部興産に入らないかとの誘いがあり、当時としては、地元の優良企業であるとの判断から、学部の教授からも推薦を受けていたこともあって、一応宇部興産に内定することとした。

所が、大学4年生になってから、わが国の急激な経済成長を見るに付け、たまたまではあるが、八幡製鉄から工場実習の学生を募集していることを知り、卒論の担当教授と相談の結果、機械工学科の成績優秀生の一人であることから、八幡製鉄のニーズに合致しているとのことで、4年生の夏休みを返上して八幡製鉄の工場実習に出掛けた。

7月下旬に、八幡製鉄所に赴き、初日は人事課によるオリエンテーションがあり、宿舍もあてがわれた。宿舍は製鉄所の作業員宿舍である帆柱寮であったと記憶している。配属先は、当時わが国の形鋼の生産の2/3を占める「二三大形工場」であった。工場のトップは確か800人を越える工員を保有する掛長であった。当時の八幡製鉄所でも最大を誇る工場であったが、掛長は6年先輩の技術屋であった。工場実習に集まった学生(技術系)は、約80名であったと記憶しているが、あとで分かったことは、この工場実習に参加した学生は殆ど全て、八幡製鉄に入社していた。

昭和33年と言えば、わが国が神武景気を迎える前の年でもあり、製鉄業としても破竹の勢いで成長した頃である。案の錠、工場実習が終わる頃には、八幡製鉄より、入社意向を聞いて来た。私としては、1年前の3年生の折り宇部興産に内定していることを理由に、1日待って貰い、宇部興産および工学部の世話教授と相談し、八幡製鉄であれば宇部興産とも格が違うことから、是非八幡製鉄に入れとのことで、両者の了解を得て、八幡製鉄に入ることを決めた。翌日、八幡製鉄に入社することが内定した。思えば、人生を変えるであろう就職先は、斯くして決定した。

昭和34年の当時からすれば、日本一の会社に就職できるものと、大いなる期待をしたものである。

・卒論テーマの選定

大学3年生後期から、卒論テーマの選定について、熱力学の助教授の勧めで「太陽熱の効率的利用に関する研究」ということで、4人の同級学生と研究に勤しんだことを覚えている。共に研究した仲間は、一人は三菱重工へ、一人は荏原製作所へ、もう一人は何処だったか覚えていない。

3年前に、赤池学氏と共著した『「温もり」の選択』では、燃料電池をテーマとしたものであったこと、現在自分が「環境・エネルギー・廃棄物コンサルタント」を任じていることは、この卒論のテーマに遠因があったのかも知れない。

斯くして、卒論も無事終えて、八幡製鉄に入るべく、昭和34年4月5日を迎えることとなる。

3.7.6 八幡製鐵に入社してから

- ・八幡製鐵へ入社して 10 年まで
- ・昭和 34 年 八幡製鐵（株）に入社
- ・昭和 34～37 年 八幡製鐵所 戸畑製造所 技術部
圧延技術課熱延技術掛に配属さる。第三ストリップ工場・熱延精整掛にて三交替作業の監督員を経験する。
熱延精整掛にて、HFL の作業標準・技術標準など標準化を推進、HSL、SBL など新規設備の建設及び操業を担当する。標準化推進、管理技法の導入も推進。
- ・昭和 37～39 年 八幡製鐵（株） 本社・計画部
会社全体の長期設備計画の企画立案・調整。各製鐵所の設備計画の調整。
- ・昭和 39～41 年 ブラジル・ウジミナス社へ出向 (掛長)
イパチンガ製鐵所に於けるホットストリップミルの建設及び操業指導を担当 (熱延精整を担当)
- ・昭和 41～44 年 八幡製鐵所 戸畑・技術部 (掛長)
技術課設備調整掛長を拝命し、戸畑地区の設備計画の企画立案・調整。鋼管部門 (八幡鋼管を吸収) の設備調整。八幡製鐵所のマスタープラン (昭和 43～52 年) の企画立案・作成
- ・昭和 44～45 年 八幡製鐵（株） 本社・鋼管技術部 (掛長)
鋼管技術部副部員を拝命し、鋼管の利用技術、主として、パイプラインの設計。建設・操業に興味を持ち、アメリカでの API による「パイプライン・スクール」へ参画す。
- ・富士製鐵と合併して
- ・昭和 45 年 富士製鐵（株）と合併、新日本製鐵（株）へ
- ・昭和 45～48 年 エンジニアリング事業本部 (以下「エン本」という)
鉄構海洋事業部 (掛長)
土木部土木設計課掛長を拝命。その後、組織改正にて、第一開発室掛長を拝命し、我が国に於ける、本格的な石油製品パイプライン (関東石油パイプライン：京浜地区／京葉地区から北関東の群馬・栃木地区へパイプライン) の基本計画への参画及び基本設計の実施
その後、組織改正にて、相模原技術センター掛長を拝命。札幌通産局からの要請にて、北海道石油パイプラインの基本計画への参画及び基本設計の実施
- ・プロマネ時代
- ・昭和 48～49 年 大阪営業所 神戸 プロマネ (課長)
神戸ポートアイランド工事事務所長を拝命。神戸市の計画した「神戸ポートアイランド船舶給油施設」の受注及び当該施設の設計・調達・製作・建設・試運転など、フル・タンキーとしてのプロジェクト・マネジャーを担当した。
- ・昭和 49～52 年 インドネシア・ニスコニ社へ出向 (部長)

新日本製鐵のインドネシア法人会社・ニスコニ社（Nippon Steel Construction, Indonesia）の技術部長を拝命。下記のプロジェクトを担当。インドネシア国営石油会社（プルタミナ）で計画した「アルジュナ・ガスパイプライン・プロジェクト」（パイプ径：24inch, 延長：220km）の受注及び当該施設の設計・調達・製作・建設・試運転などからなるフル・タンキー・プロジェクトの実施に当たって、テクニカル・コーディネイター（技術調整役）を担当した。

- ・昭和 52～53 年 新日本製鐵 エン本 鉄構海洋事業部
アラブ首長国連邦(UAE) プロマネ （課長）
アラブ首長国連邦で活躍中の B P P G（British Petroleum Project Group）で計画した「Zakum-1,ポンプ・モジュール・プロジェクト」（海上石油ガス生産施設）の受注及び当該施設の調達・製作・建設・試運転などからなるタンキー・プロジェクトのプロジェクト・マネジャーを担当した。
- ・昭和 53～57 年 エン本 鉄構海洋事業部
国内プロジェクト プロマネ （課長）
東京電力(株)／福島第二原子力発電所の循環水配管工事(調達・製作・建設) のプロジェクト・マネジャーを担当した。ASMEによる品質保証体制を設置して、マネジメントを実施。品質保証計画書の作成も実施。
- ・昭和 56～57 年 エン本 鉄構海洋事業部
計画技術部 計画室（兼務） （部長代理）
電力プロジェクト・マスタープランの企画立案及び作成。
- ・昭和 57～61 年 エン本 鉄構海洋事業部
計画技術部 モジュール総括 （部長代理）
各種モジュール・プロジェクト（海外）への応札及び受注活動。ユニオン・タイ社より各種モジュールを受注。円高でも国際競争力（価格面）のあるモジュールを社内製作できる極限的コストへの挑戦を経験。インドよりボンベイハイ・ヒーラ・プロジェクトの各種モジュールを受注
- ・昭和 62 年 マレーシア・大宏電機（株）へ出向 （部長）
電子部品の組立てを主な業とする大宏電機（株）が、マレーシア・ジョホール州で現地組立工場を建設するに当たって、工場建設の総合コンサルティングを担当し、マレーシア・MIDAの投資優遇制度の活用法と合法的研修制度の導入法の知見を得た。

3.7.7 廃棄物との「出会い」

- ・昭和 62～63 年 新日本製鐵 エン本 鉄構海洋事業部
技術開発部 （部長代理）
廃棄物処理事業について、広範囲に渡る調査研究を実施。昭和 62 年 12 月、アメリカのウェイスト・マネジメント社（Waste Management Inc.）を見学調査する機

会を持つ。異業種交流会としての「廃棄物処理事業化検討委員会」を共催して、ウェイスト・マネジメント社との共同事業化を調査研究。我が国に於ける廃棄物処理業のリーダー・カンパニーと定期的に「ウェイスト委員会」を開催して、標準化・マニュアル化の事例研究を実施。

- ・昭和 63～平成 3 年 (株)市川環境エンジニアリングへ出向
社長室長(Executive Adviser) (部長)

社長特命事項への取組。1.最終処分場に関する情報収集及び企画立案、2.中間処理施設に関する情報収集及び企画立案、3.広域処理・処分ルートの開発、4.事業企画に関する特命事項、5.標準化・マニュアル化等管理体制強化に関する特命事項、6.その他、社長特命事項

- ・平成 3～4 年 (株)市川環境エンジニアリング
企画開発室長 (部長)

企画開発室としての業務。1.中期経営計画の策定及びフォローアップ、2.年度事業計画の策定及びフォローアップ、3.情報管理システムの構築への準備、

3.7.8 環境・エネルギー・廃棄物コンサルタントとして

- ・(有)環境情報システムの設立

平成 4 年 2 月に、(有)環境情報システムを設立し、同年 4 月に、同社代表取締役社長に就任する。

- ・環境・エネルギー・廃棄物コンサルタントとして活躍中

現在は、(有)環境情報システム／代表取締役社長として、「環境・エネルギー・廃棄物コンサルタント」を任じている。

3.8 森山憲夫「私の出来事と日本の出来事」

2003年4月3日

「俺の20世紀には何が起こったのか」をWG-IIIに参画する前に書き始めて中断し、後にこんなのは如何がですかと持ち出してから、もうすでに二年以上が経過してしまいました。結局完成することなく、私の履歴は30歳から一寸も歳を取っていません。まだ30才のまま‘73年3月からそのままオネストに存在しています。30年以上も心の中に履歴を置いてきていることになります。自分の中では、私に対し正直であって決して逃避して来た訳では有りません。私が何であるかを持ち続けながら、会社生活を送り、女房、子供との生活に時間を捧げ、ある意味では充実した時間の連続であったとは言えます。それでも人に「私が何であるか」を言葉に残すことが出来ないのは、現在も続いている「生き方」の矛盾をさらけ出せないからなのです。これがオネストです。

最近購入した本にこんなキャッチフレーズを見出しました。

「私とは何か」と問うことが、

「私というあり方」をする者である。

過去と現在。

両立しえない二つの時間をつなぐ能力こそが、

「私」である。

時間論・身体論との出会いが、

「私」という不思議な存在の謎を解く。

だから履歴を書き示すことの重要性を考えたのは、私に限らずごく当たり前の事であったのです。残念ながら、私は現在まで繋がらずにいます。

21世紀を迎えた時改めて気が付いたのです。若くして結核をわずらい、心筋梗塞で倒れ、会社で危険仕事に従事して命拾いをし、よくもしぶとく生きてこられたものだと考えますと、いまさら贅沢は言えず、神に感謝し、牧師に懺悔して悔い改め、残された生活の充実を計るのが、人間らしいのだと、考えるべきかも知れません。デカルトが哲学の第一原理として「私は考える、ゆえに私は存在する」と命題しています。私ももう一度30歳に戻って過去と現在をつなげてみて、‘73年3月の履歴の後に一節をオネストに表現してとりあえず（なぜならこれは死ぬまでに自分に問いかけながら、自分にしか知らせることなく終わりますので）私の履歴の終わりとさせて頂きます。

年代	俺の出来事	日本の出来事
1901年、M-34	(俺のDNAは存在していたか)	八幡製鉄所創業
1937-7-11 S-12	長崎県に誕生 父:健一(30歳),母:富美子(30歳) 親父は慶応卒、お袋は日本女子大卒で恋愛結婚だそうだから当事としてはモダン。次男として現在の原爆病院で誕生 祖父がかなりの富豪で、愛宕町の中心地に居住していたが祖父の稼いだ資産は、祖父没後整理したところ、借財と相殺し一銭も残らなかったそうである。親父の悲劇はここから始まる 親父県庁勤務をあきらめ、東京に職を求めて上京。	日中戦争勃発 日独伊三カ国防共協定
1939-8 S-14	東京、恵比寿に転居、親父の就職先は三機工業(株) 住居は借家であったが、かなり大きかった記憶あり 女中さん(ねえやさん)が居たと記憶している	日米通商航海条約破棄 国民徴用令
1941-12 S-16	4歳、中産階級の次男として何不自由なく生活していたのに、我が家の悲劇は戦争から始まる	真珠湾を攻撃 太平洋戦争勃発
1944 S-19	国民小学校に入学、兄貴は集団疎開で静岡へ 防空壕、恵比寿ビール工場の空爆、観世左近の豪邸が近くに有った事など、記憶にある。	学童集団疎開開始 サイパン、レティ戦敗れる B29東京初空襲
1945 S-20	小学二年生、三ヶ日小学校に転校 静岡県引佐郡三ヶ日町に一家で疎開 母親、俺、妹二人、親父は東京に残る 東京大空襲で借家焼失、これにより社宅歩きが始まる 惨めな疎開生活開始、お百姓さんの手伝いをして、食う物を頂戴していた。母親が着物と食い物を交換していたのを記憶している。長女、喜久子脳性小児麻痺で死亡、栄養失調か	ポッドダム宣言受諾、敗戦 東京夜間空襲 広島、長崎に原爆投下 第一次農地改革

1947 S-22	川崎市鹿島田に移住 社宅生活開始、長屋生活玄関口にトイレがあった。 小学4年、鹿島田小学校に転校、貧乏な悲惨な小学生生活を開始 ここでの生活が後にいじめの反動に繋がる、 大類とし子(漢字が不明)さんと初恋に。母親が恋文を保管していた。現在は彼女は所在不明、手紙も行方不明。	教育基本法、学校教育法 独占禁止法 日本国憲法施行	
1948 S-23	川崎市小田町に移住、焼け跡に出来た社宅戸建二軒 少しましな社宅が支給される。親父が酒乱である事を知る 5年6年生新町小学校、ガキ大将で、いじめの首謀者。 成績優秀、加瀬均先生(当事の代用教員)が可愛がってくれ、男女4人の仲間が出来た。(荒井、田中、長谷川)	帝国事件発生 菊池寛没 太宰治自殺 昭和電工事件起こる 東京裁判	
1950 S-25	小学校卒業、川崎新町小学校 卒業時袋たたきにあう 当然のごとく私学に行くものと考えていたが、貧乏で行けず 川崎市立富士見中学入学、競輪場と野球場(川崎球場)隣接 勉強はろくにせず平凡な中学生、なぜか大きな思い出が無い 成績も急激に悪くなり、勉強に興味なし。	民自党と民主党連立、自由党に GHQ 共産党 24 名除名 金閣寺放火	
1953 S-28	富士見中学校卒業、成績中の下、高校進学に苦労 東京の高校に越境入学、親父の社宅の関係 志望校入試に失敗、東京都立雪谷高校に入学 東京世田谷区下馬に移住、戦後初めて自宅に風呂が出来た	衆院バカヤロー解散 日米友好通商条約調印 民放テレビ放送開始	
1954 S-29	まじめな平凡な高校生であったが、なぜか結核を発病、高校2年生の秋、通学禁止休学。自宅療養をさせてくれた母親の愛情を初めて意識、感謝の毎日であったと記憶。 何をやる事も出来ず、本を読むことに喜びがあったが、手に入る本に制約があり、昭和文学全集を隣の方から借りて読んでいた	米ビキニで水爆実験 自衛隊発足 洞爺丸遭難	
1955	休学、自宅療養、二年目	第一回原水爆禁止世界大会	

S-30	結核治療薬、通院費で親父の財産を食いつぶす、命を助けて貰うことになる。	東京電信工業(ソニー)トランジスターラジオ発売
1956 S-31	秋、高校2年生に復学、通院しながら勉強したが二年間のブランクは取り戻せず、どうにか単位だけ確保	日ソ共同宣言、国際連合加盟 南極観測船宗谷
1958 S-33	3月最低の成績で卒業だけは出来たものの、大学受験は失敗 父親胃潰瘍で吐血、入院。 浪人生活を継続、暗い生活の中で、キリスト教と出会う 両親を含め全員キリスト教徒になる、一派の光発見 父親も入信、酒乱から脱出、家族に平安が、	関門トンネル開通 売春禁止法施行 京タワー完成
1959 S-34	療養、大学受験に再挑戦、失敗、だが少しづつ心は豊かに 惨めな青春が続く。 飲む、買う、打つの知らない二十歳の情けない浪人生 キリスト教と母親の愛情に何とか支えられた 東京目黒区中目黒に移住、社宅、マンション(上級社員用) 兄貴結婚、24歳、日立造船(株)の安月給で苦勞	皇太子明仁親王ご成婚 伊勢湾台風 国連経済社会理事会の理事国に
1960 S-35	最後の覚悟で5大学の受験に挑戦、最後に上智大学経済学部 合格。結核も完治、慶応大学で診断を受ける。22歳でわが青春！ 親父55歳で定年を迎え、転職(後、十年間苦勞する事になる) 此れからの大学生活は学費以外はアルバイトで。勉強よりも バイト、金が出来れば遊び、失った青春を取り戻す事に熱中	日米新安保条約調印 全学連デモ樺美智子死亡 浅沼稻次郎社会党委員長刺殺
1961 S-36	親父退職金で一軒家を横浜上大岡に購入、初めて父親の 喜んだ顔に長年の苦勞を見た。 両親、妹、俺4人の比較的安定した生活が続いた	株式大暴落 松川事件差し戻し、全員無罪判決 ライシャワー大使着任
1962 S-37	大学生活にも慣れ、部活に参画。ソフィアコンサートバンドに入部 誰もやり手の無いベースを習い始める。音楽の才能は無く、ただ 部員とのコミュニケーションを楽しむ。 バイトで貯めた金で無銭旅行を企て毎年北海道、東北、山陰、	三河島駅事故 堀江謙一ヨット単身太平洋横断 貿易自由化始まる

	<p>九州、四国と継続する事になる。</p> <p>勉強は最低の単位数に押さえ、週3~4回家庭教師のバイト。</p> <p>残りはマーツジャン。帰れないときは下級生の下宿に。</p> <p>大学は学問を学ぶ最高学府であることの認識なし。</p>		
1963 S-38	<p>4年生になって初めて社会に出て何をするかに思いを馳せるが時既に遅し。26歳、Aの数20数個の成績では何処の会社からも受験の資格取れず、三機工業(親父の紹介)、三共製薬(兄貴)いずれも駄目。夏休み部室で溝口先輩に会い、バンドー化学(株)の入社試験のチャンスを頂戴する。これが最後のチャンスと全力投球。成功、考えたら神戸であった、致し方なし。</p>	<p>石炭鉱業合理化臨時措置法</p> <p>原水爆禁世界大会分裂</p>	
1964 S-39	<p>春、ついに卒業。25歳ずいぶんひなびた新入社員であった。</p> <p>阪東調帯護謨(株)、神戸本社、</p> <p>入社式に両親が東京から招待され、これにはお袋が喜んでくれた苦勞を掛けた両親に心から感謝。</p> <p>3ヶ月の教育で東京支店に配属。営業である。</p> <p>これからが波乱万丈の生活が始まるである。</p> <p>まず酒が飲めないセールスマンの苦勞から始まる。飲んで吐いて、の繰り返しで半年後には飲めるようになる。親父のDNAの引き継ぎか。年を取っている事の劣等感が優越感に成るような努力が自然と身につく、一年生としては人付き合いに余裕が出る。</p>	<p>新潟地震</p> <p>東海道新幹線開通</p> <p>東京オリンピック開催</p>	
1967 S-42	<p>10月12日結婚</p> <p>長すぎた春に終止符を打つ事になる。結婚をする事になった経緯は紆余曲折があるがこれは世間一般ありきたりのことと理解。</p> <p>新居は磯子のマンションに、金がなく借金。</p>	<p>東京都知事美濃部当選</p> <p>資本自由化正式実施</p> <p>吉田茂没</p> <p>日米首脳会談</p>	
1969 S-44	<p>4月突然札幌営業所に転勤、炭鉱末期の状況であったが此処での営業は生きていた。札幌の人々の人情に触れた。</p> <p>次期所長と張り切った時代でもあった。</p>	<p>東名高速道路全線開通</p> <p>軍縮委員会に初参加</p>	

	この年 9 月長男誕生、剛と命名、冬国での苦労は女房がする事になる	
1972 S-47	これも突然、東京支店の海外販売部に転勤辞令。しかもドイツ駐在の内示つきである。英語も出来ない、海外事情などまるで知らない俺に会社は何を期待したのか。上智大学卒にも様々な人間がいる。7 月東京に転勤。神戸単身赴任、英語の勉強を含め再教育。半年の寮生活で知恵熱を出すほど使っていない頭を使う。	グアム日本兵横井庄一発見 連合赤軍派浅間山荘事件 川端康成没 沖縄返還
1973 S-48	3 月、教育実習終了。ところが赴任の指示が出ない。妙な会社である。病氣療養から復帰した当事の専務が、“俺の知らない人事異動は承認できない、一事保留” であった。とんでもない事態発生。再度海外販売部に差し戻し、東京にて待機。12 月、再三の延期の後、駐在員交替はしない、俺の駐在員辞令は白紙撤回となる。これぞ幻の駐在員であった。奇妙な事にその時のドイツ駐在員は溝口さんであった。雀部部長に対し曰く、“退職願いに匹敵する仕打ちである”抗議。この年、公私共に軌道を外れた行動に出た事が後に俺の会社生活と俺の社会人としての生活に影響を与える事になる。	円為替変動制に 金大中事件 石油ショック 江崎玲施奈ノーベル物理学賞

「私はあの時何をすべきであったか」という問いかけと、「私はいま何をなすべきか」という命題は、永遠に「私とはなにか」を起想する事になると考えています。

履歴を書き示そうとしたのか、自画像を表現しようとしたのか、考え方に多少躊躇するところがあって中途半端なものになったと言えます。自叙伝を書き終え余命いくばくも無しでは情け無い話ですが、オネストに表現する事は出来るかもしれません。いまさら人生を振り返り他人に披瀝する事で満足感を得ても仕方が無い、と考えると素直な気持ちで自分の人生を振り返ることが出来たら、素晴らしいことかもしれません。

「私はなにか」ではなく、なんであったかを思いながらもう一度自叙伝のネタになる自分の自画像を振り返って見たいと思っています。

3.9 荒井康全「習作自画像」

2003.01.28

～わたしの略歴

多摩川の下流は六郷川と古くからよばれていたが、多分、砂が堆積してできた中州を指しているであろう。東海道、川崎の宿はそのひとつの郷にあったと想像する。わたしの生家はその周辺の農家のひとつであった。

家は江戸のしかるべき時期に摂津の方から来たらしいが、まだルーツをただしていない。なるほど尼崎と川崎かと地勢的類似性を思う。いずれにしても開拓団移民であったのであろう、地誌を散見するに、江戸時代至って、盛んに干拓が行われたようだ、地名に池上新田、田辺新田、小島新田などが残っている。「荒井新田」というのがあったという、横浜の歴史博物館での展示でそれを知った。鶴見区史をみると、確かに荒井という一族が親子二代にわたって干拓をおこなっている、結局 風水に流されたということらしい。それ以上のことは、これから調べておきたいが、その直系なのか、その下男のながれなのかかわからないが、今回には間に合わない。自分の先天性について語るためには過去としては短かすぎるし、自分自身の後天性について語るには長すぎるのである。

38年神奈川県川崎市川崎区小田に生まれる。

父健蔵、母うらの長男として生まれる。後に二人の弟が加わるが、この時点では、2歳違いの姉に私を加え4人の家族であるが、当時は父の両親と、まだ娘時代の3人の叔母たち、そして徴兵で外地にいる叔父で構成される十人に及ぶ大家族であった。生後三ヶ月でリンパ腺炎での手術を行っており、「腺病質」ということばがいまも耳になじんでいる。また、小児麻痺の初期であったのであろうか、ある日突然に片足が棒のようになり歩けなくなってしまった。親は医者を探すこと、神仏に頼めることなどすべてをやってくれたようだ。占いの神託では、端午の節句の折の鯉幟を立てるための穴の位置が、地神の痛に障ったという。寡黙で強面の祖父が、大きく育ったら親孝行をせよと幼い私に言い聞かせたという。幸いなるかな、なにかのきっかけで、回復すると、こんどは近所の餓鬼なかまに入って真っ黒になってトンボとりやフナとりに走る、やんちゃな男の子への軌道に乗っていった。京浜地区工業化の中にも、まだ各処に田園が残っていた。

戦時体験。

44年川崎市立前沼国民学校に入学。出征軍人を送る歌を祖父の背中で聞き、そして自分もその行列で旗を振っている。戦時色が日に日に強くなり、大人の会話から、ただならぬ変化が起こることを感じ取っていた。夕食後の家族の団欒、ラジオから流れる広沢虎蔵の「旅行けば」ではじまる浪曲、ひょっとした弾みで、満州の話、そして「おい、満州に行こう、連れてってあげよう、明日の朝」で、戦況や銃後の話に華が咲く。いつ満州に行くのか心待ちにして、それなりにわたしは傷ついていたが、この家族にとっては、いつときの平和な時期でもあったのであろう。

やがて、防空演習、国防服、もんぺ、頭巾、地下足袋、ズックの肩掛けなど、やがて初めての空襲警報。夜間空襲で聞く空気の鋭いなり、そして体を吹き飛ばすような炸裂音。囲炉裏の灰が天井に舞い上がった。爆明で見たのだとおもう。百メートルもない距離の中学校の校庭とそれに続く住宅、田んぼにいくつもの爆弾が落ち、だれだれさんの一家が全滅したという。いくつもの爆弾池がその威力を残していた。

「大師様があるから家は焼けやしねえ」

祖父はよくそう言っていた。川崎には、厄除けで有名な川崎大師がある。一方、父は近くの電機会社の工場で潜水艦の主機モータ組み立ての現場主任をしていた、あるとき父がその機械とそこに立つ人間を私に、そおっと鉛筆で描いて見せた、山のように巨大なものらしい。そしてこれは秘密だといって塗りつぶした。ともかくも父が立派に思えた。家族は、川崎からは離れる様子がなかったが、火災の延焼を防ぐための家屋の取り壊しがはじまると、さすがに 母は姉（8歳）とわたし（6歳）をつれた疎開することになった。が、行き先がない。母の遠縁を頼って茨城県の鹿島の近く、利根川沿いの徳島という地へと疎開するが、それもつかの間 三浦三崎の漁港の町へと転々とする。徳島では、父が訪ねてきてお腹をこわししばらく寝込んで、帰っていったこと、無花果の木からあっと思う間もなく下の堀切に転落したことなどを思い出す。三崎には祖父と叔母のひとりが、ときどき来てくれた。祖父のためにバス停で吸殻のたばこを拾って感激させたりした。そのようなある夜に 川崎に大空襲があった。

それで家をことごとく焼失した。父は家財を守るか、自分の書籍にするか迷ったらしい、彼の決断は両方とも火の中におき去った、がただひとつ 伝来の阿弥陀如来の木像を、井戸のなかに投げ入れた。そして燃え盛る阿鼻叫喚のなかを、走り、熱風に渴くひとに水を運んだりして、ようやく祖母や叔母たちのもとに、たどりついたという。

この事態で、母は、自分の夫と生死をとものにすべき時と決し、三崎を引き払い、川崎に向かった。途中、京浜急行の追浜駅に爆弾の直撃があったが、われわれ母子は、ひとつ手前の駅にあって救われた。ほうほうの手で川崎の父のもとに帰り、焼け野原のバラックに親子がおさまった。

終戦をむかえる、闇市と「はぶゆーあ・ちょこれっと？」

天皇陛下の声を初めてラジオで聞いた、尊いひとは、高い声なのかなあと思った。近所のひとたちと一緒に聞いていた、炒り大豆を食べながらだったと思う。近所のおじさんや動員で働いていた朝鮮の青年もいた。これからどうなるのかと元無産党だというとなりのおじさんと動員青年との口論がはじまったが、それ以上の争う勢いとならなかった、不安ななかにも、どこかほっとしたあかるさがあった。もう空襲がないことがうれしかったようにおもう。まもなく、駐留軍のジープが、トラックが、長蛇となって、近くの第一京浜国道を東京へと向かっていく光景を見る、母親はサッカリンで甘味を作った代用今川焼きを焼いては、闇市で商った。地回りがきても気丈夫に渡り合っていた。わたしは、焼け

跡の工場から歯車を4つ失敬して台車をつくり、うなる音をジープに見立てたり、ときに、国道に出れば「はぶゆーあ・ちょこれっと？」とジープにこえかけ、チューインガムを投げてもらった、いちど缶詰を投げてもらった、何の缶詰であったろうか、わすれたところに、それがどんぐりの粉に変わっていたことを知った。

さてこの間、ずい分学校に行っていなかったように思う。もとの前沼小学校の校舎は焼失していた、焼け残った市立新町小学校に間借りし、やがて、その小学校に糾合された。蓋のない机、二つの椅子に板を置いて三人がけにして座る。授業時間中鉛筆を無心で削っている子がいた、油紙で塞いだガラス窓等々、冬の時雨のときは、足のつま先が痛かった記憶がある。とにかく家に帰りたいかった、家もトタンで雨露をしのぐ陋屋（バラックといった）であったが、それでも家がよかった。勉強ははるか遠くにあるような気がしていたと思う。

父親のこと、知的な刺激

「お前はできる、かならず川中に入れ」、まだ学校に入る前だったとおもう。川中とは、神奈川県立川崎中学校のことで、当時、国民学校からは級長の子でなければ入れない学校だったという、その中学生たちの何か後光の射した通学姿にあこがれをもって眺めていたようにおもう。

銭湯帰りに、中天の夜の星にねがい賭けようとも思った。一瞬の光芒の消滅はなにか願いの無謀さを告げているようであったが。戦後まもなく、父は会社の労働組合の創設に係わり、そのリーダーに推された。初期の労働運動であったから夜も遅かった、若い組合の人たちが、よく深夜 バラックの我が家に立ち寄り、私が寝ている傍で、大議論をやる。新しい時代がきた、すぐにでも社会主義革命が起こるのではないかと、訳わからず、なにかすごいことになりそうだと思った。また、議論の合間に、ときおり挟むかれらの学生時代のことなどの会話から、自分のまだ知らない、はるかに向こうの世界を感じとった。その多くが機械や電気や法律など、さまざまな学問を大学で学んだひとたちであるということも知った。また大学を出ていないひとのなかにも、勉強を積んだりっぱなひとがいることも知った。どこか知的な興奮が漂っていた。勉強すれば、あのようなひとたちになれる、それにもしかしたら、あの運動会の予行演習でみた気位の高そうなマドンナに対してだって、一定の尊敬を受けることができるかもしれないと思った。生涯の友達であるM君が転校してきたのは、小学校4年の2学期であったとおもう、勉強ができて、気風がいいライバルが現われた。

私の父親は、組合に推されて 川崎の市議会議員に立候補し、当選を果たしていた。わたしの「川中」はまだ遠くにあった。

キリスト教教育のこと、明治学院に学ぶ

昼休みに友達とじゃれついて、子犬のようにどちらかが追っかけて遊んでいた、わたしが逃げるばんであった、息せき切って、校舎の屋根裏へ逃げた、そこはもう袋小路だ、どうしようか。うす暗がりにはひとがいる。よくみると集会をしている、みんながお祈りして

いる、そうだと思ってそおっと仲間に入れてもらった、ともだちが、追ってきた。あれっときよろきよろしていたが、やがて状況に気づいて、彼も座ってしまった。キリスト教の学校のクラブであった。ふたりとも「宗教部」に入ってしまったのだ。

私はキリスト教の学校である明治学院中学校を受験させられた。島崎藤村が出たというハイカラな雰囲気漂う学校であった。面接の試験に失敗して、補欠で入れてもらうために父親は、たいへん奔走した、「あれを落したのはあなた方が間違いだ、一学期だけためしてくれ、それでだめならいつでも引き取る」と頑張ったらしい。組合でのキャリアーが、押しをつよくさせていた、ともかくそれで入れてもらった。ヘルマン・ヘッセの「車輪の下」、あの主人公の少年ハンス・ギーベンラートの名前をいまでも覚えている、NHKのラジオ 加藤道子の「わたしの本棚」の朗読であった。憂鬱であったが、ハンス少年のように夢中で頑張った。英語のリーダー冊丸暗記を敢行した。't h'の発音で猛烈なヒステリーをおこすオルトマス女史の英会話の授業も快調に飛ばした。すべての学科の予習と復習を試みた。そして、いよいよ夏休みがはじまったある午後、M君と一緒に京浜急行の花月園にあるプールの水泳から帰ってくると 母親が学校の父兄会から帰ってきた、まず「おまえ、よかったねえ」と誇らしげに、ほめて、その夜 みんなで川崎の街に出て食事したとおもう、そして御祝いにテニスのラケットを買ってもらった。明治学院の学校生活は軌道に乗っていったとおもう。

父は、宗教に思いを持っていたひとであった。戦前から教団「生長の家」の誌友会であった。この宗教は、スピノザ的な汎神論のながれにある思想であったろうが、基幹は皇国思想であったと思う。戦後、自ら選んだ社会主義との間の思想的葛藤に悩んでいたようである。あるとき組合機関紙が、かれの寸描記事を乗せた。そのなかで、時代の過激なながれのなかで、ものごとに対して批判的、懐疑的な思索の傾向を示しはじめた息子に触れ、敬虔な内面性の経験を涵養していくことの必要を感じているという感想を述べていた。かつて祖父の事業の失敗で、県立第二中学校（現在の翠嵐高等学校）の試験に受かりながらも、一家の生計ために断念しなければならなかった思いが、多分わたしの上に投影していたように思う。

～横浜山手の丘から、はるか客船ウイルソン号を望む。

夏の陽光の下、きらきら光る紺青の海、メリケン栈橋に客船が入らんとする。巨大なライトグレーの、華麗な船体、白いブリッジとそれに続く白い居住のエリア、その上に鷲の飛翔のファンネル（煙突）、米国の客船プレジデントウイルソン号だ。白い半そでの士官服のチーフオフィサーが船首にあつてきびきびと指示している、あでやかな原色っぽい私たちの人影が動く、そんな光景であった。いつのまにか、自分を栈橋近くに立たせている、いくつかの記憶が重なっているらしいが、そのとき、誓うものがあつたとおもう、船にのってアメリカに行こう。

また、ハリウッド映画「ふたりでお茶を」を鑑た。中学校の夏休みで、これもM君といっしょだった。ヒロインのドリス・デイのタップダンス、プールつきの広大な邸宅、足の

すらっとした若者たちが歌い、抱擁する、この世の中にこんな国がある、こんなに陽気で、眩しさに満ちた社会がある、そして一方に貧しく、しょぼくれたわが日本がある。「あこがれのハワイ航路」は不滅のカラオケ定番であるとおもうが、当時ははるか遠い現実のように思われた。なんとしても現実を引き寄せようという思いがわたしに起きていた。船にのってアメリカに行こう。

～ルネッサンス的人間像への憧れ、”よし きらいなことに挑戦しよう”

都立一ツ橋高等学校に入る。熱病に罹ったように都立日比谷高等学校を受験したが、見事に落ちた。私の高等学校は、浅草橋にあって、もともと女学校が母体であった。男女共学で、男子は全体の二十パーセント程度で少数派であるから、クラスの結束はよかったと思う。あとで考えれば、ここに残っていても何の問題もないのであるが、日比谷落選組みが転校を密かに模索していた、なんとなく落ち着かなかった。

夏が終わると熱っぽく語っていた友人は残り、私が転校して、神奈川県立湘南高等学校に移ることになった。このときの友人とはいまも続いている。湘南校は、当時有名な受験校でもあり、鎌倉、鶴沼、茅ヶ崎などこの地方独特ののんびりした空気があり、また自由な気風があったようだ。勉強のスタートが取り遅れた分は気合で生きる決意をした。

アメリカ帰りで気負い気味のM先生に授業中に食いつき、彼の目に留められ、彼の英語の時間に、公開質問時間「荒井タイム」をもらう、必死になって文法書を調べ先生の解釈に異を唱え、対抗するという筋書きで一種のエンターテインメントを提供したようなものであった。コーラス部に入る、生徒会委員になる。生涯の友となったH君等とは、ここからはじまる。この学校は、二年間でコースが終わる方式で、数学は、解析と幾何が2科目平行、理科は物理、化学、生物の3科目並行で、特に数学と物理の調整に手間取った。これが、以降の私の生き方に陰に陽に影響し、いまに至っていると思う。つまり数学と物理コンプレックスである。

英語や世界史は快調であった。一度はこのような世界に進むことを考えたが、不得意なもの（嫌いなものがあるということ認めようとしない）をそのまま残すことに拘った。そのままでは、残念とおもった、たまたま出会いがわるかっただけであり、自分の向き不向きにかかわりないと考える。

たしか国立大学一期校は八科目であったから嫌いなままでは済まされないという切迫した事情があったかもしれない。あるいは、最後に理系コースである商船大学に焦点を置いたときのこじつけであったかも知れないが、ともかくそう考えることにした。世界史が得意科目であったから、古今東西から、いろいろな人間像を曳き出し、自由に思いを回らせた。そして理想的人間像をルネッサンス世界に求めた。ダ・ビンチでよし、聖フランシスコでよしであった。

これらの全人的なものに現代人は達することができるか、分化した時代では、ただ考えることだけでおわりであろうかと思った。しかし、つぎのようにその道筋を想定してみることにした。

ひとつ、好きなことは出来たとする。

二つ、いま苦手とおもうものに賭けてみる。

三つ、きれいなものが好きになったときに 全人的な接近がおこなわれたとする。

～ニュージーランドへの遠洋航海、自分探しの青春であった商船大学

眉目秀麗であることということが入試要綱に入っていると聞いたことがあるがほんとか、と問うたひとがいる、わたしの顔をチラッと見たようだった。

裸眼で視力1.0とか、綱に片手でぶら下がって10秒以上とか、あるいは、性病検査とか海洋日本の伝統的な独特の体力試験があった。「紅顔可憐の美少年」で知られる寮歌が、事実を虚飾するのかもしれないが、わかいときはだれも、それなりに、意気がいい。

商船大学は 当時東京と神戸にあった学校が戦時統合され静岡県清水市にあった。伝説羽衣で知られる三保の松原の砂浜のなかにあった。満月の夜は、駿河湾の海がきらきら光り、遠く伊豆の対岸や達磨山の灯が見えて、切なくもうつくしい。

「完全就職、陸の倍の給与、たばこも酒も免税で、しかも外国が見られる」、たしか雑誌蛍雪時代での紹介であった。

そして、1956年（昭和31年）目出度く機関科に入学する。そして低空飛行で1960年（昭和35年）秋に5年半の過程で東京越中島の地にて卒業。卒業実習は6ヶ月、最初の3ヶ月は三菱日本重工横浜造船所 いまの港みらいの場所である。あとの6ヶ月は運輸省航海訓練所の生徒になり航海実習である。大成丸という3千トンクラスで日本列島を周航して、瀬戸内海で特訓を受けると、ニュージーランドへの遠洋航海にでる。長駆赤道を越え、熱帯スコールに身を洗い、ブーゲンビルの夕日を望見し、いくつか南十字星を仰ぐとやがてクック海峡に錨する。折りしも雨雲が切れて陽が射す、波洗う崖の海岸線に鮮やかなみどりの丘陵が見える、

赤い屋根のバーンやサイロがある、たくさんの羊の群れがある。首都ウエリントンに着いたのだ。

ときに、“六十年安保” 東京はデモの渦で騒然としたときに出航したが、国際放送は、池田内閣の発足を報ずる。

いま思うと、自分の生きるべき道筋と現実の学問・教科にじっくりしないものがあったのだと思う。それを認めたくないから困ったものであった。この辺のところは、いずれ、もう一度整理しておこうと思うが、物理も数学もその他あまりこころ踊るものではなかった、それ以上に基本的には、外国を無料で行きたいというところにあったから、相対的に手段としての位置づけになる学業が軽くなってしまったのかもしれない。初めて家を離れたという開放感とみずからの責任で方向を定めるという自意識との葛藤があり、思索は旺盛であるが、意欲に敏でなく、なんとなく身を浮き漂わせていたように思う。石原慎太郎の芥川賞作品である「太陽の季節」に障子を破る下りがあったが、持てるエネルギーが向かうべき何か、当たるべき壁の喪失感のあった時代だったように思う。思えば日本が経済大国として離陸しようとして必死にもがいている時代でもあった。成績のよいクラス

メートルに対する競争心はあまりおきなかったし、むしろ冷ややかにみていたと思う。

蒸気タービンの実験の時間に、側の十メートルほどの水槽を、往復して帰ってくる賭けを引き受け、実際に実行して担当教官を烈火のごとく怒らせたことがあった。この教官には、後に就職した会社からの米国派遣について大変助けてもらうことになったが、当時はそのような状況であった。

～原子力船の乗り組みに志願しよう、東京大学に行こう

「あなた、あれほど勉強しないのにこれから東京大学に行くって?」、母は意外に思ったらしい。

惰眠を貪ってきたが、卒業航海が近づくにつれて、それまでの自分を振り返ってみる。すくなくも受験の頃の直向きさにもう一度帰ることを必要を感じた。船体の揺れの復元もひとつの挑戦だろうと思った。それ以前に文系の大学に入りなおすことも考えたが、これからひとり立ちして食っていくたねは、やはり技術におこう、逃げるべきでない、それをようやく納得しかかっていた。それにしては、いまこの状態はお粗末であること、やるならその世界で一線に立つべきであるということろまではきた。

飛躍するがとりあえず聴講生で、東大にいつてみよう、あとはそれから考えることにした。これはいささか飛躍であったが、ヒントがなかったわけではない。卒業研究は、例の水泳事件のD教官に師事したが、テーマは海水温度とエンジン効率であった。

当時丸の内のレンガ建てビルにあった飯野海運本社の工務部に通い 機関航海日誌から丹念に海水温度とエンジン効率算出諸元のデータを集めた。船会社の機関部門がどのような状態で動いているかが伺えて興味があった。あるときそのN課長が、帰りにビヤホールに誘ってくれた。「君、会社に入って陸でやるんだったら、なにか特別な武器をもたなければいけないよ」といって、部下の一等機関士であるKさんの話をしてくれた。会社から東大に留学派遣されているという。そしてその人に会いに機械工学科を訪ねたことがありこれが下地になっていた。もっとも、このひとは、船の大学を首席で卒業している点が、私と大いに違っていたが。

さて、ターゲットは原子力工学としよう、親には将来、原子力船の乗り組み第一号になるために、機関をつくることをやるのだといってしばしの猶予をもらうことになった。

ときは、1960年(昭和35年)9月、甲種一等機関士の面接試験を終えて、力学の履修のために駒場の教室に走った。

～機械工学大学院で熱工学を専攻する、「七輪の火も、原子炉の火も熱反応で同じ、反応現象なら化学産業だ

～コンピュータに化学技術の夢を乗せる、アメリカに行こう。

制度もそうであろうが、ものごとが始まる時は変なことがおきる、とにかく、一年がむしゃらに勉強して、親の手前 大学院を受験しなければならなかったから受けることに

した。夏に大阪大学、京都大学そして最後に東京大学と大学院受験行脚をした。勝率は2勝1敗であった。

1962年（昭和47年）春東京大学大学院数物系研究科機械工学入学となる。

さて、これ以降は、やや話はかたくなるが以下に概略を記す。

64年 東京大学大学院機械工学で熱工学終了。昭和電工入社。

プラント建設設計部門に配属（装置設計担当）。

`東京オリンピックの年。

~化学を熱現象として見てみる。コンピュータの技術応用に夢を馳せる。

69年 米国ウィスコンシン大学大学院化学工学。プロセスシステム工学の研究。

74年~98年 現象・プロセス・品質の解析技術の研究所を作り、育てる

; 技術計算、管理技術、そして数理技術分野

`第1次石油危機。技術の中心は省エネルギーと軽薄短小へ向かう。

計算機支援現象・プロセス解析(CAE)、計算機分子化学(CC)などによる材料開発、装置設計、運転品質管理領域への支援と普及推進。

83年 宇宙飛行士に応募、書類審査で落選。

90年~98年 (社)新化学発展協会にてCCの調査研究活動とプロジェクト化推進。

めでたく、平成10年度大学連携型プロジェクト「高機能材料設計プラットフォームの開発」採択。

98年 昭和電工退職。

98年~現在 武蔵工業大学事務局（国際交流、産官学交流事業企画と推進）

1998年 武蔵工業大学国際交流と産学協同の推進

ふたたび、忽然として?? 時代の変わり目にある大学と付き合い合うこと。

その他

1967年（昭和42年）結婚、妻 敏子、一女一男。

1973年（昭和48年）から1年間休職 幼稚園経営

別途書いた文章のいくつかを寸描として以下に添付する

1) 「アリとキリギリス」～わたしは“アリギリス”であったか～

1999・12・17

順番待ちで、BCGの注射に立ち並ばされる思いは、さまざまに通ずるが、60才をこえると、もうひとつごとではない。危機管理とはだれかがいっていたが、定年を迎えるころにはほぼ、接続なめらかにして すきなことができて、うまいことに収入もある、そういう準備をきちんとしておくことらしい。これがなかなか至難の技で、わたしの場合は、結局 収入が必要で、すきなことは後から着いて来たれかしとまことにころもとなく、そういう状態で2年まえに定年を迎える。

娘の結婚で、50代なかばに、すこしこちらもいい気になり、二世帯住宅に立て替え結局ローンを組んだ。計画では、退職金で半分くらい精算するということがあったが、新しい仕事の忙しさにかまけて、そのまま払い続けたが、先の短い身には、やはり重い。ただひたすらに利子を払うために働いていることになっていることに気が付く。ともかく慣れない職場で、懸命に働くことになる。ありがたいことに丁度身体も元気であるが ふと、この歳になってと思う。

「おれは、キリギリスだったのかなあ」と苦笑する。

そして、すこしずつ仕事に慣れて、2年目のこの夏に タンス預金も動員してめでたし全額返済した。さて、あとは夫婦ふたりとこどもへのなにかの折での支援ということで、しばらく働くということにあいなる。

哲学では飯がくえない。ほんとうはそうではない。しっかり勉強して世に抜きんでてしまえば口で稼げる。しかし一般には、腕に技をもっている、手に職を持っているのほうが、圧倒的に需要が多い。つまりたしか生き方が大切だと素朴に思い込み、また大学という`中小企業`でやっていくには、なんでも自分でやりこなす気概が必要ではあった。

国際交流、産官学技術交流など時代のうねりにつながることを企画するというので、たしかに新鮮で、挑戦しがいがある。いままでの企業経験は結局活かそうである。まわりも期待してくれる。無我夢中に一日が終わり、帰りの電車のなかなどでふと、「世の中楽なしごとはないものだ」と、ときにまた、`キリギリス`を思い出す。あれからアリは長生きしたろうか、キリギリスはどうしたろうか等、等。

もうひとつは、技術者・研究者としての職務とはっきり縁がきれていることの寂しさがのこる。週末に、朝永さんの量子力学を勉強することがはじまり、量子化学へはいった。知識をきちんと整理し、理解しておくことは気持ちがいい、ほとんど宗教的な境地になる。ありがたいことに続いている。

わたしの方は、このような心境のタイミングに、本W/Gの企画に関与する縁となった。

つまり、自分のエイジフリーのまっただ中にある。これを一緒に考える仲間がいることがありがたい。将来にむかって、いい自画像が描ければ、ありがたいことになる。

いまの自分の目でみる、自分の事態をどのくらい(客観的に)把握できるかが勝負で

あろう。 いたいこともあるが、言いたくないこともある、認めたくないこともある。
要は、自分に対してHONESTになれるかであろう。

ところで、アリギリスとということばもあって 大学生が使っているらしい。

2) 「お稽古事のまとめ～`わたしの羊よ`、声楽レッスンの10年に思うことごと」

キリギリスだった、なれば、習わばパバロッティ、コールウーブンゲン覚えてますか？

平成12年3月

i 声楽レッスンの動機

*50歳に近づくと、仕事のほうもほぼ先がみえてくる。

なにか、あたらしいことをやっておきたいと思った。

*ひとが誘ってくれないことをやってみたい。

*ニッカウキスキーのテレビコマーシャル`空気が動く`

キャサリンバトルの透明感のあるオンブラマイフー。

*神の恵みの雨は、ほぼ万人のもとに降っている。

*自分を試験体として、見る。つまり 科学的に練習の経過が見られないか。

*もしかしたら、普通の人間の声も、訓練によっては楽器になるかもしれないと思う。

i i 素朴な期待感

*何回くらいレッスンに通うと、声楽らしい発声になるのか。

歌うのが上手というのは、どういうことなのか。

*ドイツ語の詩やイタリア語の詩は、何回読むと暗唱できるか。

(50歳代であるかどうかという困難があるか)

暗唱したあと、どのくらいの期間でわすれるか。

暗唱回復は、何回くらいでもどるか。

これらは、個人差、年齢差でどのようにちがうか。

*中高年からの声楽という本を書きましようか。

i i i 具体的にやってみたこと

1) レッスンの回数をカウントする。

着替えの場所に日付入りのノートを開いておく。

2) レッスンのレコーディングをする。

(携帯テープレコーダ 5代目。200本のカセットは結構ボリュームがある。写真を撮影して処分した)

内容をなるべくノートにも記録する。(最初の5年は、よく記録したが、活用のしかたが見えないのでやめた)

3) レッスンのレコーディングをよく聞く。

4) コールウーブンゲン、コンコーネ50のカラオケがある。(これは、問題であった。活用の仕方によるのであろうが、習いはじめのころは、背に腹は替えられない思いで利用したが、先生にバレた)

5) 曲目のCDを買いあさる。(課題が与えられたときになるべく聞いてイメージを知るようにした)

i v レッスンの記録

第1回レッスンは 1990年3月31日(土)、第200回レッスンは

1999年10月2日(土)

レッスン回数 200回(10年; 20回/年)

習った曲目数 49曲(10年; 4.9曲/年)

イタリア語の歌曲 19曲

ドイツ語の歌曲 25曲

日本歌曲 4曲

その他 1曲

v レッスンによる効果

1) 声楽の音が、でるようになったと先生に言われたこと(2000年1月)

2) その他

v i わたしの固有の問題

1) 発声がこもる、あかるい「ア」の音がむずかしい。

2) からだがかたくなる傾向がある。

v i i 声楽による生活上の因果循環関係について

1) 5年前に、積年の課題であった蓄膿症の手術をする決心をあたえた。

治療の結果はありがたし、成功であった。

結果として空気の通りがよくなることが発声によき影響をする。

2) 治療がたばこを止めることを決定づけたが、発声上の好影響の期待が勇気づけてくれた。

3) 入院生活の朝型をその後に適用した。(残業と夜遊びはやめた)

4) テープでの自分の声聞きながら眠りに入る。

仕事やその他の心配事をいったん遮断できる。

どんな状態でも、自分の声は良い声だと念ずる。曲が仕上がりに入る頃はよく眠れる。

5) 結果として、身体の養生を成し遂げることになる。

上記1)と2)の結果、多分肺からの酸素吸収がよくなってきたことから身体全体の活性が上がったようだ。

6) 食欲の急激な増大と、体重の増加をおこす。

7) 食生活を変える方向の努力がはじまる。

8) 運動として、1日1万歩をこころがける。

使い走りを厭わないようにこころがける。体重は増加傾向であるが、ぎりぎりのところで抑えてくれている。

9) 通勤満員電車は、詩の黙読の場となる。特に帰りの疲れているときなどは、リフレッシュのためによい。

10) 週末、早朝決まったコースをあるく。口にマスクを当て、秘かに発声練習をする。
練習時間が獲得できる。(なるべく音が他に聞こえないよう気を配っているが、はたして?)

v i i i わたしのよろこび

- 1) コールブングエンが、ともかく最後までいった (1998年12月)
- 2) グローバーのこどもの楽典が最後までいった (1999年10月)
- 3) 娘が、ときに伴奏してくれたこと (1994年5月)
- 4) 孫娘と同じ先生になって、親子3代が、レッスンを受けることになったこと (1999年6月)

v i i i 先生のキーワード集をつくりたい。これは断わられた。

x その他

翻訳詩を数編

シューベルト 要約詩「冬の旅」 (1993年1月)

シューベルト 「魔王」 (1997年4月)

メンデルスゾーン (「郷愁」(「わたしの羊よ」) (1999年10月)

3) 私の65歳

2002・10

定年一年まえに思ったこと、「瓢箪から駒が出る」
「おもしろいことをやってみたい、これまでの専門にこだわらない」と言ってしまった。
セカンドのことはじまりであった。

そのころの自分についての捉えかた

「哲学では飯がくえない」、工学研究者として やることを期待していたことは事実。
やるべき 課題もいくつか考えてきたように思う。

学位を持たないことが 不利であること。これについては、結果的に これまでの準備が遅れたことを自覚していた。その意味で 大学での教員になる準備はできていなかったといえる。

一方、それまでの企業で、シニアとしての地位とその自分の足元をみるに、きわめて危ういものを感じた。「なにをやっても食える」という、自覚と行動が希薄のようである。パソコンネット、インターネットなど企業の新人ならやる基本的なことごとがすでに人まかせになって、ただ、その上に乗っているように思えた。素朴にこれでは「飯がくえない」と思った。自分がひとりになって、自分の体をうごかし、仕事することを考えた。

ただ人の上に乗っていてはやがて立ち行かなくなろう。しかしながら 独立して事業をすることは、断念することとした。

なぜか、「年金生活者に近くなっている人間は、金銭的に冒険しては いけない、再挑戦が効かないからです」 以前、英国人の若い部下から、かれの投資企画の相談を受けた。

こちらの心が動いたその折に、彼が察して だめですよと丁重に断られたことを覚えている。そして以降、事業独立は思考のそとに置くことにした。

セカンドの職について

通産省（当時）のコンピュータケミストリー・プロジェクトの研究調査と企画を 昭和63年より、八年越で 行ってきた。平成10年に 経済産業省産学連携プロジェクトの第一号「機能性材料設計のプラットフォーム」（現 OCTA システム）として立ち上がったが、まとめ役でもあったことから、ごく自然に以降のプロジェクトへの移行が予定されていたが結果的には話は流れた。この話がみずもの'であることも一方では想定してはいた。私立大学の教授である高校以来の友人と、あるときに飲んだ。「きみのところに、おもしろいことはないかね、これまでの専門にこだわらないが」と言った。これが 実は、現在に繋がるのであるが、これまでの仕事にひと区切りつけようという気持ちもあったと思う。

セカンドで、特技を生かすということ

特技といえるか、自分の手の中を上げるとひそかに上げてみた。

語学とくに英語になじんでいる。

自分の特徴は、混沌としたことを 丁寧に筋道を立て形にしていくことが得意。

相手のはなしをよく聞く姿勢をもつ。

健康に当分自信が持てる。

けんかは不得手。夜遊びは当面しない習慣を着けた。

これまでの専門に拘らないで仕事ができる覚悟がある。

が本当に好きなのは、x x 工学やx x システム工学である。

その結果生まれた現在の仕事の成果をあげると、産官学交流などあたらしいことの立ち上げなど結構やっている。

なにに苦しんだか、どう考えたか。

'はじめの1年は、じいっとみているというが 定石であるが、実際はそうであったろうか。意識はすごい葛藤であった。新しい仕事を覚えるということからくるストレスがあった。事務局と教員との役割についてだいぶ苦しんだと思う。窓口業務と企画業務である。当初、助手もないから、窓口を経験する機会となった。これはやや苦渋に満ちたものであったと思う。家で明け方 ふと目がさめたりし、業務の手順を考えたりした。一方企画業務は、自発的にやるという形になっていたので精神的には 楽しいものであった。総務部のS次長と部屋に何日もこもって 企画案の絵を描いた。それがけっこう実現に至っていった。

「これは、仕事なのだ」

大学は、私鉄の駅を降りると、木々の繁みの多い高級住宅街の坂を下り、河原に降りた

外れにある。白壁にはみ出した季節の花々が、いい。このあたりは、カラスも多い。野生化したインコウの集落でもしられている。高い樹木にとまるさまざまな鳥を、途中で見上げることが慣いとなった。特に冬の空を細かく網目で覆うケヤキがいい。そのひとつが特に気に入って、それを見上げてひとりつぶやく、「これは、仕事なのだ」のだと。そういう割り切り方をし、立ち振る舞いを正すといったところであった。

自分の専門を大切にする

自分を生かしているのはなにかと考えることがある。そこまでいなくても、なにをするときにもっとも ころを満たすのであろうかと考えることがある。そんなことをどうして思うのかというと「これは、仕事なのだ」のだということとの表裏の関係なのであろう。企業にいたときもそうであった。数学や物理のような本質的なものに触れているときが充実しているようだ。本質的な知に触れ、その思考のなかにいることがたのしい。これは研究者の世界でもある。事実これが企業で 数学を使って技術開発をする部門をつくる力になったことを思う。これからも、いつかチャンスが 必ずくると思うが、先々のことはわからない。これでお終いという考えもあるが、そんなことよりも、こういうことは、人間としてのあるべき、否 あってほしい本質的な知的活動ともおもう。この世界の職業として遠くなったと思った瞬間に、手放したものがいかに大切なものであったかを知るということか。このような気持ちが、ずうっと尾を引いてきたことを告白する。

すっかり朝型に変身した。早朝1時間くらいを取って、継続的な読書に入った。分析化学の入門からはじまり、朝永さんの量子力学(みすず書房)、量子化学(掌華房)、サイモンの物理化学(東京化学同人)、分子細胞生物学(東京化学同人)と紐解いた。読んだ章節に日付を刻した。そういう日々がいまも続いていることがうれしくまたありがたいと思っている。

「哲学がなくては、飯が食いつづけられない」

さて、いまの仕事は、5年間の約束で1年更新の嘱託である。よく5年ももったものと思う。まわりがよかったともいえる。アメリカで化学工学を学び、そのなかでプロセスシステム工学で卒業試験を終えた。日本に帰ってきて、結構なまいきだといわれて悩んだ日がつづいたが、不器用だったから結局 化学数理技術という研究部門を作った。(この部門は幸か不幸か、いまも続いている。) この学問をやっていると 不思議に対象に拘らなくなる、つまりシステムなのである。方法論の工学だからといえようか。したがって、いまの仕事を実際にうけるときに 基本的には 自分は技術者であるということ、自身のうちで決意して臨んだのであった。自分が貢献できるとすれば、なににあるかと考えた。大学の事務の部門が抱える問題を エンジニアリングとして課題化することであろう。これに 誇りを持つべきであるということである。つまり「哲学がなくては、飯が食いつづけられない」ということであろうか。

「食うために生きる」こと

先日、かつての会社のライバル会社にいる後輩が、大学にたずねてきた。不器用な荒井が、勤めているとはどういうことかということであるという。さて、彼の問題、56歳を迎えて、リストラの対象になったという。優れて専門技術分野をやってきたために、あらためて仕事を探すことの困難さを経験している。業界首位の会社も、まことに懐が浅くなったようである。日本の現実である。それで すこし歩いてみたという。墓石の販売の営業部長に向いているといわれたこと、それでもなにかあるということは、救いであると苦笑していた。墓石とは 想像外であるが 新しい分野というのは 残念ながらそういう形であられるようだ。まず「食うために生きる」という現実が われわれのまえに立ちはだかることになる。

「生きるために食う」こと

新約聖書のなかのきわめつきの部分である。逆説的であるが、終戦直後の灰じんのなかでの世相は、まさに「食う」ことであった。年寄りから、こどもまで いつも ひもじいおもいの毎日であったが、いま振り返ると不思議に明るさが残る。戦争からの開放、そして 手慣れない自由が、将来に希望を与えたといえようか。必死になって「生きるために食う」ことに向かったと思ひ返す。ひるがえっていま、世の中全体が ぴりっとしないように思えるのはなぜだろうか。目標が見えない。感覚的には 金があれば手に入る、たいしてがんばらなくても 遣っていける世相である。

さて、このなかで 「生きるために食う」ことをやっていこうというわけである。荒井君 準備はできているかね。

4) 宇宙飛行士になりそになったキリギリス

2003.03.07

今回は、宇宙飛行士落選のさわりのお話とします。

題して「高度の命題への帰属」

ある朝 食卓に着いてから家人に聞く、「さっきのニュースで 俺のことを言ってなかった？ 理科系、協調性、忍耐力とかって言っていたようだが」

宇宙開発事業団 搭乗科学技術者募集の公示、昭和58年の初冬であった。

幸い、事業団は勤め先の近くだ、気もそぞろに募集要項を貰い受け、さらにすっかりハイになって 早晩のわが家の玄関に立って、挙礼する。

「ただいま宇宙飛行士候補帰還せり！」

なにかの参考として、このときの募集要領を紹介しておこう。

1. 採用人員 搭乗科学技術者（以下「PS」と略す） 3名程度
2. 応募資格 日本国籍、短大（自然科学系）卒業相当以上、過去5年以内自然科学系部門の業務2年以上経験、5年以上の実務経験（大学院期間は考慮）、所属機関の推薦。心

身ともに健康であって、無重力環境のスペースシャトル内で生活し活動することに適した以下の身体的、心理的特性を有すること。

身体的特性 身長（152cm～193cm）、血圧、視力、色神、聴力、その他PS業務に支障のない身体的特性。

心理的特性として、協調性、適応性、情緒安定性、意志力、その他PS業務に支障のない心理的特性を有すること。

～朝のニュースで聞こえてきたのは、この辺りだ。

材料実験を円滑に遂行するため、自然科学系の基礎知識を有し、かつ、材料実験又はライフサイエンス実験についての専門的知識・技能を有すること。

分子分析（赤外分光など10種）、材料製造実験（等温電気炉など8種）、物性測定（中性子回折など8種）、内部構造研究（透過型X線、走査型電顕など7種）、物理測定（比熱計など4種）、化学分析（液体クロマトなど7種）、生理学実験（心電計など9種）、生物学実験（インクベータなど6種）、生化学実験（電気泳動装置など8種）～ああ、化学実験をもっとやっておけばよかった。

ざあっと六十を越える測定経験が対象である。わたしが丸つけられるのは比重計くらいか。

搭乗員としての訓練活動、宇宙飛行活動等を円滑に実施することのできる教養を有すること。

～これは主観の問題だ。

所定の期間PSとして、訓練・業務に支障なく従事できること。

～問題は 推薦状とともに会社のO.K.をどうとるかだ。「本人の希望に基づいて」という主旨の推薦状も獲得した。

3. 選抜方法は 第一次で書類、二次で試験、第四次ではNASAで試験。

第三、四次では 回転椅子、直線加速負荷装置などを用いて宇宙酔いに対する適性を検査するなどであった。

～体力強化プログラムを作ってくれた娘はまだ中学生だったろうか、下の息子を加えて、一緒に遊園地のジェットコースターを乗りに行く。たちどころにして`しまった`ことに気付く。

正月早々、提出した応募調査書の動機欄には以下のことを書いた。

「船用機関士～機械工学～化学工学～数理工学へと自らの知的好奇心と会社の理解も幸いしてひとつの経路をたどってきましたが、現在もっとも関心を持ち手がけ始めたのは「化学におけるCAD」です。コンピュータを利用して分子設計の分野を実用化したいということです。分子軌道法とコンピュータグラフィックスがその技術の中核をなすと考えられます。ここに及んで、一度 新しい素材開発の立場からきわめて純化された（無重力、恒温、真空）での実験プロジェクトに参画しておくことは本能的に意義あることと感じています。それは多分「高度の命題への帰属」による発想の転換をねらうものと

ということかもしれません。」

「このたびは、当事業団の搭乗科学者の募集に対して御応募いただきまして誠にありがとうございました。

さて、今般の第一次選抜の結果、貴殿につきましては誠に遺憾ながら選に漏れましたことをここにお知らせ致します」

3カ月後 花の季節の頃のたよりであった。

蛇足ながら身体的状況変化は以下の通り；

昭和59年(1984)(当時46才) 身長 160.7cm、体重63.0Kg、 内科等診察 異常なし。

平成9年(1997) 身長 161.3cm、体重 68.5Kg、
検査判定区分 要経過観察(肥満、脂質)。

ちなみに、応募者数は540数名、先にカナダでは2000人規模であったという。本プロジェクトのその後の状況は、皆様ご存知の通りであります。ややあってから、高等学校時代の友人がさりげなく言った。

「そうかあ、もう猿の乗る時代は終わったんだね」

終わり。

5) 手術室からの実況報告～ギリギリス、とんだ宇宙飛行士

02.04.07

いまから十年前のものになってしまったが、鼻の手術を受けた。ギリギリスの延長でけっこう軽い。つまり宇宙飛行まがいの体験として病院生活をとらえるとどうということかという意識のワンポイントです。いまならどうかとあらためて思いますが エイジフリーに向かう前夜の感じ方のサンプルということでご覧いただきます。気分の勝れない場合はお読みにならないでください。さてどうでありましょうか。

(記録 1995年6月手術室での状況からの実況報告)

第1回は、左の鼻の手術で、全身麻酔の状況から入る。

「・・・さあん、さきほど伺ったNです。」

(ああ、病室にきて説明をしてくれたひとだ) Nさん いろいろありがとうございます。

(相手の名前を言うことに尽きる)。

～こうなれば、こちらが帝王である。麻酔の担当という美女に紹介される、手で会釈。御車の行進だ。第4手術室に入る。酸素マスクで10ほど呼吸すると、先生が入ってきたことが告げられた。麻酔のフィーダが口もとに置かれる。縁が四角で錘形のものであった。美人ぞろいの手術室である。天女たちとっておこう。肩から頬にかけてぐう

っと重みを感じた。 麻酔ガスを三つほど吸い込む、天女たちの顔が遠くなる。こちらの目の下のほうからなにか黒いシャッターがあらわれ、金属音のような音とともに、そしてすべてが暗転した。

「・・・さあん、おわりましたよ、答えてくださいあい。」

～（声がする、終わったのだ。）

十日を経て、第2回目、こんどは右側の鼻で、局部麻酔の状況である。

「手術室で、お好きな音楽を流します。」

枕元の楽譜鎮魂ミサ曲に瞬間、目を落としたようだが。ここでは、プロの音楽家になってしまっているらしい。今回は、経験からくる微かな余裕も手伝って、手術中に自分に降り懸かってくる事態をなるべく丹念に観察しておく試みを期した。

*手術室の重い扉のところで、家内へ手を振る。

*病室から来たカートから一度、金属の平板の上にリフトされて、手術室のカートに移される。ここですべてが手術室側に引き渡される。ここまで運んでくれた病棟側のナースの動きを目で追う。

「さきほど 伺いましたKです。」

～（すごい美人であるが、ボーイッシュ。ナースとしては完全。それ以上は考えることもあるまい。）

*第5手術室

*リフトで手術台に移される。ここでも軀を左右にゆらせて、台に乗せたようだ。

*昔のご飯釜を乗せるドーナツ型の枕、最後まで頭の座りが馴染まなかったが。

*天井は濃淡のあるおおきめの模様タイル、大型のゼットライト、音楽はさすがにポップス系。

*左の胴、左くすり指に心電図用の端子、右の腕は血圧用バンド、ほぼ10秒間隔で締め付けてくる。両脚はゆるく固定。この間、着衣は脱がされ、専用のパンツひとつ。厚手の布カバーが掛かる。これで待ちの状態に入る。(入室して10分くらい経過したろうか)
(すでに、1時間まえに麻酔が効くようにするといっって筋肉注射がしてあり、これがすこし睡気(ねむけ)を誘うものらしいが、覚めている意識のほうが旺盛だ)

*「先生が入ってこられまます。」

道具、設備類を確認している。今回試しにつかうもの、つぎの回のために補充しておくものなど。

～（けっこう 和気あいあいなのだ）

*「・・・さあん、大丈夫ですかア」と声をかけると一旦ドアの外に向かったようだ。そして間もなく入ってきた。

～（どんな姿か見ておこう）重装備である、炭坑夫の親方みたくないで立ちで、ヘルメットにはライトが点いている。

*床屋の大きい布を顔に掛ける、直径10センチメートルの穴が切っており、これが口や鼻のまわりを局部として露出させている。～（本日のテーマだ。）

- *なんかの合図があったのであろう、一斉になにかが始まる。～（そうだ、耳栓もあてがわれているが、まだ聞こえる。）
- *鼻孔にスプレーされ、なにかグリース状のものを塗布した棒が鼻に差し込まれ、また戻す。
- *「少し痛いですよ」で、右歯茎の上方に4点ほど、麻酔注射をする。
～（間違えられたら大変だ、さっき手術での確認を訊いていたが、思わず、右でえすと叫んで置いた）これが痛い。
しばらくして、右歯茎上方を定規を当てたように一本の線が曳かれた。これとの前後はわからないが、ジイッという音がした、～（どこかの局部を削っている）
- *瞬時、瞬間に痛みが走る、彫刻刀で板に彫ってる感じなのだ。
まもなく、喉の吐き気が頻繁になる、1回に3度くらいの吐血を取ってもらう。
- *「残り3分の1まできた、縫っておわりにします」の声、ぱちぱちとホッチキスで留めていくようなことをしている。
- *吐血は最後まで続いた。
- *「・・・さん、おわりましたよ。」ここで答えることになっている、深い安堵感がある。
E v e r y t h i n g h a s n o w b e d o n e !
- *「これからこの手術は全麻になるだろうね」術語、しばらくして3度目のひとりごとを言われた。この先生のガーゼの詰め方には、定評があるらしい。ナースたちの雰囲気わかる。
- *病棟のナースが迎えにきた。
(記録 わたしが病院に持って行ったもの)
ブラームス ドイツレクエム楽譜とカセット（これは優しく励ましてくれた）
シュヴェーグラー 西洋哲学史 下 岩波文庫（カントについて理解して置きたいと思ったから）
統計物理学のテキスト（これは一度も開かなかった）
(記録 わたしの愛用した測定器具)
時計、体温計、目盛つき尿ビン（一生でどのくらいの量を排出するのだろうか。自分を観測しようとするれば、病人もけっこう忙しい）
(記録 わたしがこころみた最適投与問題)
痛み止め座薬の効力開始タイミング（リリースというらしい）と経時体温との関係の観測をこころみる。
(記録 わたしとタバコ) 第1回の手術の前夜 ひそかに喫煙納めをしたことになった。翌早朝、喫煙と思ったがすでにそのような状況ではないことを知った。爾後 喫煙から完全に離れた状態が続いている。

3.10 圓山壽和「私の自画像 サブタイトル…最近の心境」

H13. 6. 25.

1. バブル体質からの脱却を求めて

今、冷静に、謙虚に自己を振り返るとき、次のことに気付く。

「バブル経済の頂点からその崩壊とその後の 10 数年の時の流れは、我々に新たな思いで自己再構築をしていくことを求めている。」と。

我々団塊の世代と呼ばれる 40 台後半から 50 台前半にかけての世代は、戦後の高度成長経済の仕上げとも言うべきバブルの時代を、各職場で先頭に立って突き進んでいたわけで、その反動もとりわけ大きく跳ね返ってきている。そして生活の場においても、将来設計の見通しが狂い、家庭、仕事、そして友人関係等において、生き方も含め全般的見直しを迫られている。このように具体的な場をとうした自己認識の転回を軸として、各人とも社会認識の変更を余儀なくされているのではないだろうか。

しかし、各人が帰属組織の場においてバブルの社会的総括をするには、その後遺症が大き過ぎ、組織の関係者間においては冷静かつ本音の論議はできていない。

また、組織の一員としての個人にあっても、民間企業労働者にあっては、いやおうなしに産業構造改革の痛みを余儀なくされているが、特に人事院勧告制度等に守られてきた公務員にあっては、安定した現状に固執している。

バブルを加速した要因の一つとして、横並び意識とパイの奪い合いや組織内上昇指向が上げられている。同質の人間しか許さないがために、バブルも行き着く所まで行ってしまった感がある。今の日本の閉塞状況は、このような体質を今もって脱却できていない、一人一人の個人が置かれている閉塞状況が累積したものであろう。

私自身、昭和 47 年 4 月の就職以来始めて、平成 8 年 4 月から川越市役所を離れ、バブルで破綻した県・市共同プロジェクトの担当として、埼玉県へ出向派遣された 2 年間にわたる生活の中で、全くこの種の狭量な単線系の人間であったことを自覚させられた。バブルに踊ってしまった行政施策の無責任な先送りの実態を肌で感じた。

派遣終了後も含めてこの間 5 年間、自問自答の内なる葛藤をしつつも違う体質の自分になるべく、総てを振り切ろうとしてもがいて来た。最近になって、ようやく足踏みの中から足元が固まって来た感じがしている。

今、私がなすべきことは「自己蘇生へ向けて自分への旅」だと自覚している。

今回このようなことを念頭に置きつつ、我がリストラ＝自己再構築の記の原点とも言うべきものを、現在の心境として心象風景的な雑感として取り纏めてみた。

2. 人生の楽しさと広がり求めて

埼玉県派遣直後からの約半年の間、バブル破綻で身動き取れない職場環境の中、一地方行政マンとしてのそれまでの自分を振り返ったとき、先ずプライドと自信に溢れていたせいか、それまでは気が付かなかった反省すべき傲慢で甘い体質が見えてきた。

そして、地方公務員たる川越市役所職員としての将来と現状に対して自信喪失気味に陥ってしまった。いつも散策しながら、脳裏に浮かんでくることを反芻していた。

「納税者である住民に対して独り善がりであったな」、「国・県の幹部や権威的の大学教授、更にコンサル任せの啓蒙主義だったな」、「地元川越のことを本当に知らないな」等の反省であり、とりわけ感じたのは「一個の人間として総合的に見ての実力不足」と「遊びとゆとりのなさ」であった。そして「結局おれも偉くなって仕切りたかっただけだったんかなあ、それにしては甘かったな」という自虐の思いであった。

その後何とか職場外の集まり（ハートの会など）に積極的に出ることで、このスランプとも言うべき状況から這い出ることができた。異業種でフランクな NPO マインドに触れられたお陰である。

私にとっては、県庁派遣の 2 年間とその後の 3 年は、「バブル崩壊の社会認識の深化と成熟社会の到来」という時代背景の中で、行政や公務員という存在の「限界性」とその対極にある「人生の楽しさ」、そして「広がり」がようやくと無理なく見えてきた時間でもある。遊び心もなく前だけを向いて走って来た団塊の世代の人間が、少しコース外に放り出され、自意識過剰で仕方なくそれを契機に「自分への旅」を始めたが、ようやく実はそれが自分にとっての王道であると気づき始めたということかもしれない。それが現在の心境である。

3. 大学時代の回想・思想的遍歴

今の私の心境は上記のとおりであるが、私の人生の出発点ともいうべき学生時代を回想してみたい。今の私の思想的原点が辿れる気がするからである。

30 数年前のことであるが大学に入って 1~2 年の教養課程の頃、哲学的な世界観を持ちたくてというか、友人やサークルでの討論で立脚点を求めているんな評論や学術書をわからないなりに読み漁った。知に飢えていた。

丸山眞男（政治学者、「日本の思想」岩波新書の著者）や大塚久雄（西洋経済史家、「社会科学の方法」岩波新書の著者）、更に日高六郎（社会学者、「自由からの逃走」フロム著の訳者）や内田義彦（経済学史家、「資本論の世界」岩波新書の著者）などの著作で、ヨーロッパにおける近代的個人や近代的社会の形成過程を勉強し感銘を受け、ヨーロッパの市民社会に憧れた。

一方では、マルクス主義の影響下にある学生運動各派が叫んでいた「自己疎外論」や「国家独占資本による新帝国主義反対」、その典型である「ベトナム侵略戦争反対」等の言葉にも、心動かされていた。そして丸山眞男の対談相手でもある梅本克己（哲学者、「唯物史観と現代〔第 2 版〕」岩波新書の著者）の唱える「主体性論」や、同じく古在由重（哲学者、「思想とはなにか」岩波新書の著者）の唱える「思想の肉化」等の言葉の響きの方に、ベトナム戦争の激化の中、人間としての良心や行動の原点を感じていた。また、若き小説家の大江健三郎が発言していた「サルトル（フランスの哲学者）のアンガージュ＝参加」に触発されて、自分も何かしなくてはと社会変革への主体的参加のあり方を模索していた。

そして、大学の正門の脇で熱心にアジテーションをしている学生運動各派のリーダー達に対しては、トータルに世界把握している点で理論的には負い目を感じていた。ベトナム戦争を新帝国主義ととらえ、反戦運動を展開することに共鳴はしても、そこから先の政治権力の奪取までを目指している運動にはついていけないというのが本音であった。従って、プチブルと批判されようと、学生運動各派の説に耳を傾けても、政治革命についてはその運動体の体質も含め私には拒否反応があった。

具体的には、学生運動リーダー達が持っている強烈な使命感とその裏返しとしての指導者意識とも言うべきもので、またその内側に入ったらなかなか出られないのではないかとこの雰囲気も好きになれなかったのが本音である。宗派的な匂いを感じて、そこまで取り込まれて生活や価値観が不自由になってしまうのは嫌だったとも言える。高踏派的なりベラルなところで、勉強していたいという側面もあったことは事実である。違った意味でエリート意識があったのであろう。

マルクス主義以外の社会変革理論はないのか、リベラル左派の知識人の言論活動や反戦市民デモだけで、ベトナム侵略戦争への日本政府の負担を止めさせることができるのか。そんな思いを抱えながら、大学3年になり専門課程へ進学した。そして大学3年の半ばから始まった大学闘争の2年間の中でも、反戦運動や公害反対運動における市民運動の可能性という形で、いつもこの思いは私の中にあっただ。

この闘争にあっては大学そのものの在り方が問われ、極めて短絡的な面もあったが、大学における教育研究そのものが批判と解体の対象となっていた。今思えば、総てにベトナム戦争が背景にあったものと思われるが、熱気の中で社会的存在としての自己のあり方を真剣に考えていた。その時、闘争の理論的提起者でもあった助手や博士課程の大学院生のグループが打ち出したスローガンは「自己否定」と「連帯を求めて孤立を恐れず」であった。このスローガンは中途半端なエリート意識とリベラル思考に浸っていた私を内側から、ある種の爽快さを持って打ち崩して行った。

党派的でなく、全学共闘会議というオープンな組織で闘争が展開していったことも、私にとっては共感しやすかった。従って、のめり込んでいった。熱気に浮かされたように、自己否定と大学解体を叫び、情動的に動いていた。制度破壊が先行し、破壊の先に新たな主体が自ずから生まれてくるという思考法に嵌っていた。あるべき大学の秩序を描き、その再生に参画して行く思考=志向は全くなかった。また闘争の相手方でもあった大学当局とも言うべき教授陣や秩序再建志向のグループとは、同席できる雰囲気など双方ともありえなかった。

そして、大学闘争としては何を勝ち得たのか不明なまま、終焉、敗北し、専門学科の仲間とも感情的しこりも残したまま、再び全員で会うこともなくなった。

その後は、専門課程の講義にもほとんど出ることもなく、親からの仕送りも気が引けて下宿を引き上げ、農場の中にある学生寮でとにかく卒業だけはしようと気の向くままに、

読書三昧の日々を過ごした。ボヘミアンの生活であった。

そのような頃、平田清明（経済学史家）の「市民社会と社会主義」（岩波書店刊）と出会い、現代の社会諸関係を規定する所有概念のうちには資本家的私的所有と異なるものとして、市民社会の基礎には「類的存在」に基づく「個体的所有」概念があることを理解した。このような翻訳術語を駆使しての人間・社会観の提示は、西ヨーロッパの歴史的経験や認識のない日本人である私にとっては、決して易しいものではなかった。しかし、日常言語と学問的概念を分析しつつ論理を展開していくこの本を、頭を切り替えつつ何回も読み込んで行く中で、その言わんとするところがクリアーに見えて来た。今の私の言葉で言えば「個と個の共生を前提とした人間観」ということになるが、そのことの持つ深い意味を理解することができた。

ようやく私は、日本のマルクス解釈の盲点を批判したこの本により、革命を標榜する政治運動ではなく、市民社会の普遍的価値の確立や具体化に重点を置く市民運動や市民的連帯の戦略的理論的根拠を手にすることができた。西ヨーロッパの社会＝歴史認識における「市民社会」や「個人」は、我々が常識としてイメージしている「近代社会」や「私人」とは全く異質なものであることを理解することで、日本の現実社会の中で今各人に求められているものの端緒を掴むことができた。

なお、市民運動や住民運動、市民参加という言葉は当時あっても、NPOやNGO、市民活動などの非営利で非政府の領域を担って行く言葉はまだなかった。

ところでこのような模索というか、どう生きるべきか、さ迷える羊のごとき学生生活であったが、丸山眞男などと知識人論（当時インテリゲンチヤ論や転向論が盛んだった）で討論や対話をしていた竹内好（中国文学者）に、大学に入って間もない頃から心情的には惹かれていた。日本における知識人のあり方を、特に中国に視点をおいて展開していた竹内好が土着的な風貌も含め一番身近に感じられ、全集まで買って理論の神髄を掴もうとした。当時、自分も大学生として、卵ではあるが知識人の一翼を担っているという自負もあったのは事実である。竹内好は西ヨーロッパ社会とアジアの近代化は違うし、知識人の在り方も違うと述べていた。

今回の自己対峙の自省の日々の中で、昔（大学生の頃）、竹内好の魯迅（中国の作家）の評釈を脇に置いて読んだ魯迅著「阿Q正伝」の主人公阿Q（根無し草の唾棄すべき人物）のように、私自身が「知ったか振りをした時代の走狗」でしかなかったような思いまで想起されて来て、今までの俺はなんだったのかとの自問に陥った。私は昔、「共感のできる一個の主体的人間として、地域に生活の根拠を定め、生起してくる新たな現実を見据え、思想を肉化するのだ」と言っていた筈だった。自分を見失い人生のスランプとは、こういうものかと始めて痛感した。大学時代をこんな形で回想することになったのも卒業後始めてであった。

また今回のスランプの中で、阿部謹也（西洋社会史学者、「中世の窓から」朝日新聞社刊の著者）の著作（「ヨーロッパを読む」石風社刊）を新たに再読する機会を持てた。大塚久

男の大塚史学に心酔していた学生時代には分からなかった視点、即ちヨーロッパの社会史における賤民と差別の問題や教会における告白の問題をとうして、西洋における個人の誕生の実証的歴史的経緯を理解することができた。と同時に著者が述べている、「日本の市民社会は世間」であり、日本人は世間に生き方を支配されているという見解についても実感を持って理解することができた。

昔、ヨーロッパの市民社会をマルクス理解をとうして理解させてもらった「平田清明の著作」と、世間に覆われている日本の市民社会風土を解明してもらった「阿部謹也の著作」が、私という一個の日本の具体的現実の中で繋がったのである。

恐らく私は、自己の確立も含め、日本の市民社会の確立に幾分かでも寄与したくて、市役所に就職した気持ちを持っていた筈である。しかし結果的には、世間に振り向かれて一所懸命、自虐的に言えば周囲の目を気にして偉くなりたくてとまでは言わないが、仕事をしてきたのに過ぎなかったと言えるのかもしれない気がした。

遠回りをしたような気がするが、ようやく市民社会の一員としてのスタンスを見つけられた気がしている。エイジフリーに生きて行ける筋道に出たのかもしれない。

※追記 H15.6.29

上記自画像は、当ワーキンググループが活動開始してから約1年半後(平成13年6月)に記したものである。その後、2年の時の経過を得て現在に至っている。

私の人生も、特に、今回の表題のわが心境も、微妙だがある面では大きく変化して来ている。当ワーキンググループの活動成果が出てきており、より一層エイジフリーの必要性を実感して来ている。

それは一言で言えば、「人生楽しく生きていくためには、深く考えることだな」ということである。感謝。

3.11 植竹敏夫「個人歴」

2003. 3. 10

1946年

東京と港区芝愛宕町（現西新橋）に生まれる。科学が好きで音楽と絵を描く事が好きな少年だった。父親は豊職人であったが、母親は酒屋の娘であり、父親は日本の侍が好きでまた歴史が得意であった。よく日本のチャンバラ映画を新橋の映画館に連れて行ってもらった事がある。だから私は嵐寛十郎の鞍馬天狗や大河内伝次郎の丹下左膳や市川右太衛門の旗本退屈男を良く見せてもらった。一方の母親は洋画ファンでこっそりオードリー・ヘップバーンの映画を見ていたそうである。だから父親のチャンバラ映画の資質と母親の洋画ファンの資質の両方が私にはある。親同士は殆ど趣味が違うので一緒に歩く事はなかった。どうしてこの様な夫婦が誕生したのか私にもわからない。しかし私が戦争直後に生まれた事から推察すると、戦争のさなかの出来事だったらしい。つまり戦争の為に男が少なくなっていたのだ。また母親は埼玉県生まれであり、東京が好きだったのではなかろうか。この母親は父の豊職人である事も嫌っていた様だ。勿論出身の酒屋である事もいやだった様だ。いつも外国のファッションの雑誌を見ていたといわれている。そして父親のはんてん姿の衣装をある日突然アメリカ式の工事人のズボンにさせたことがあった。そして母親はついに父親を横に置いて隣に婦人服の店を作った。隣は畳の工場であった。この店は巧くいったし、畳工場の方も巧くいった。つまり戦後の物不足の時代に両方とも巧くいったのである。

ところで港区のこの辺りは昔から建築の金物屋と塗装店、大工、電気屋や箆笥屋など建築に関わる店が多かったが、その他にも八百屋、果物屋、洗濯屋等職人の街であった。明治時代から続いた下町の一部をなしていた。しかし江戸時代は新潟の武家の屋敷であった。明治時代の初め、たぶん和歌山から出た植竹は当時野中という名前で薩摩藩の下級武士であった。西南戦争に負けてさまよう内に植竹という名前を得て、豊職人になったのだ。明治時代になって4間長屋の一部で土地を借りていた。しかし昭和の戦争後は土地が自分の物になったらしい。特にこの地域の地主は戦後戦犯になって、その保釈金が欲しいため、土地を安く売ったのではないかと思われる。父親は戦後木造の建物を自分で建てたと言っている。その時父親は樽一杯の錆釘を焼け跡から探し、それを売って隣の土地をも手にしたのだ。だから母親が隣に店を出す事もできたし、また後でビルが建てられるようにもなったのだ。また父親は不動産屋まがいのこともやったし、母親は闇市で洋服を売ったとも聞いている。しかし戦後、私の洋服の膝はいたるところにつきはぎがあり、それで小学校にいくのがいやであった。

父親はやがて自分の稼いだ金で大工に2階建ての貸家を作り、商船会社と、ビル清掃会社に貸したのである。私の部屋はその隣になったが、殆ど内装はなく無仕上げで木下地が見えていた。冬は大変寒かった。しかしながら貸した家賃で徐々に裕福になっていった。

私は当時小学校でオートドアの模型を作っていた。理科の先生はかなり熱心に私を指導

してくれた。この模型は後で NHK の番組に出させてもらう事になった。また私は今から考えるとかなりおかしな話なのだが音楽が好きでやはり NHK に出させてもらった。この音楽の先生は私を音楽家にしようと思ったのである。

1959年

中学校は芝中学に入った。父親は入学試験であったのに裏から手を回すほど熱心であった。仏教系の学校であり、私は面白くなかった。この学校は昔良かったのだが、先生の暴行事件で生徒が死んでから、評判が落ちてしまった。確かにいやな先生ばかりであり、私はこの学校は失敗だと思った。それで私は高校に入ってから成績が落ちてしまった。そして当時から文学に興味を持ち、勉強などはそっちのけで小説ばかり読む様になってしまった。またその当時芝高校の裏のホテルで日本で初めてのサルバドール・ダリ展が開かれていた。私は恐る恐る見に行ったが。その絵に度肝を抜かれ、しばし呆然と立ち竦む様であった。つまりその瞬間から私はダリファンになってしまったのである。シュル・レアリズムという戦前のアーティストの運動が戦後の空虚な時代への強烈なパンチであった。つまりかなり学校の生活とは違った行為をするようになっていった。我々団塊の世代の基本的な問題点は多くの小説家、画家、アーティストは全て、戦前の文化の影響を受けたものであり、それと著しく違った戦後の世界との断絶を経験し、それらのアーティストが死んだ現代は空虚そのものなのだという事である。従って全ての事象に亘って2元性があり、正しくもあり、間違いでもあるということである。だから私共は団塊の世代ではなく、断絶の世代と呼ぶにふさわしいと思われる。

1967年

東京理科大学に入学。多くの入試試験で入学時自分が何になるのかは決めていたわけではない。しかし私は建築学科という訳がわからない学部に属す事になっていた。というのは、私は少し前までは医者になろうとしていたし、その時にどのような世界観を持ってよいのか分からなかった。あるいは画家になりたかったのかもしれないし、小説家になりたかったのかもしれない。しかしながら1967年といえれば1970年代の安保闘争が大学にも蔓延していた。というのはこの時期哲学においてはフランスやドイツの哲学の影響で、日本では現象学から実存主義に移る時代で(今では骨董博物館に入るかも知れないが)自分でも現象学が分かったわけではない(翻訳本では、文字が持つ深い意味が抜けてしまう)。しかしキルケゴールやニーチェそしてサルトル、ハイデガーあるいはメルロ・ポンティなどを建築学などそっちのけで読んでいた。またサルトルの影響を受けたといわれる大江健三郎の作品を読んでいた。「芽むしり、子撃ち」から「万延元年のフットボール」「個人的体験」などを読んでいた。ここで大江健三郎は息子大江光を持つ事により限りなくキリスト教に近づくのだが、彼はやはり無心論者だと思う。しかしながらやはりキリスト教は一種の救いである。

私はキリスト教というものが神を介在として人間を作り上げるのを見て、西欧人はなんて幸せなのだろうと思った。と言うより神の存在は人々を広大な宇宙の現前に自分を包んでくれるものであった。しかしアジア人の多くは仏教の影響できわめて不可解な状態に生

きるしかなかった。ところがこの時代では神を否定する西洋人が多く現れた。例えばキルケゴールである。彼は「死に至る病」で人間の持つ絶望を表現した。

彼はキリスト教徒との戦いの上、路上で死んでしまうし、「ツァラ・トスツラかく語りき」を表し、「超人」の思想を持った、ニーチェも重い病気でのたれ死してしまうのを見たが、日本人は西洋の脱キリスト教の恐るべき世界を比較的余裕を持って見ていたのではないだろうか。

ところでサルトルの実存主義は実にユニークであった。彼の論理は実に面白い展開をする。多くの物体は人間が作るが、人は誰が作るのだろうかという基本的な問いかけである。もしも神が存在するならば、神が人を創ったのであろう。しかし彼は始めから神を否定する。そうすると人は常に自分を自分で作らなければならない。彼の「嘔吐」と言う作品にその恐るべき恐怖が書かれている。閉じ込められた状態と脱出。しかしこの論理には飛躍がある。地球上には人が作った以外の物があふれている。それらは誰が作ったのであろうか。その当時我々は昭和 21 年生まれで、戦後の最も多くの子供が生まれた時代であり、日本はものすごい勢いで、戦後の復興を急いでいた。

しかし我々の前にあった多くの著作は戦前の物が多かったのである。後で知った事だが、ニーチェは後にナチスに思想的影響を与えたのだとか、ハイデカーはナチス党员だったとか、サルトルはマルクスに傾倒していたとか、そのような状況は実存主義其の物を台無しにする事であった。つまり我々団塊の世代は戦前の著作で青年時代を過ごし、戦後の得体の知れない違和感を味わっている。私は残念ながらマルクスを読んだことがない。しかしながら映画でチャップリンが「モダンタイムズ」の中で工場労働者になり、奇妙な働き方をするのを見たとき、日本の未来産業はこの様に成ってしまうのではないだろうかと危惧を得た事は事実である。

チャップリンはアメリカでは「共産主義者」のレッテルを張られたが、イギリスからは「爵位」を貰っている。そして私は実存主義の影響でやはり自分は自分で創ってこうと考えたわけである。まず文学から始めた。大学では奇妙な事に建築課と数学課の生徒で大学に存在していなかった文学クラブ（サークル）を創ってしまった。サルトルの政治的かわりは、当時の学生に対して多くの影響を与え、またゴダールの映画「中国女」等は何となく我々を毛沢東派反体制の学生に仕立て上げたのであるが、今ゴダールの映画を見ると何となく古臭く、見ていて耐えられないほど陳腐である。勿論マルクスに傾倒したサルトルも無残な敗退であった。

私は学生時代シュル・レアリズムに傾倒していた。しかもサルバドール・ダリである。その他の作家には殆ど目もくれなかった。しかしこの時代でもう一人好きな作家がいた。それはキリコである。ダリはキリコからアイデアを盗んだのではないかと思う。一見倒れそうな構図を杖が支えている。そして本来海の中でしか形が見えないものを支える杖は実は建築的にも面白いアイデアであった。しかし地震の多い日本では絶対無理なアイデアであった。私は建築にキリコ風のパースを書くのが好きだった。またダリがアンドレ・ブルトンのシュル・レアリズムの団体に入っていた事がある。しかしあることを理由にダリは

その団体から排除させられてしまう。多分ナチスとのかかわりである。しかしそれはたいした理由でもないのだ。ところで日本の前衛詩人と呼ばれた西脇順三郎によれば、シュル・レアリズムとは現実社会を否定する事が重要であると言っている。しかしこれでは私の建築家としての接点は全然ない。しかしながらダリが唯一愛したスペインの建築家がいた。それはアントニオ・ガウディであった。ガウディは熱心なキリスト教徒であった。

実はダリもキリスト教徒ではなかったかと思われる。つまり近代主義と逆な生き方をしたのではないだろうか。そしてガウディは日本ではスペインの近代主義に遅れた一風景として写真集にあらわされている。日本の東野芳明によれば「現代の工業時代のゴシック」と言う事になる。私は多分この時代が、磯崎新の言うようなポストモダンの時代から取り残されたスペインの建築家を、彼がキリスト教徒であったとしても愛したのは事実だ。磯崎新は言う。ガウディとはなんだか分からないと。日本の多くの建築家もやはりガウディは分からないと否定するのだ。私は建築家になりたいと思った。しかし私をどのように紹介したらよいのだろうか。つまり巧い具合におまえが好きだと言えようか。多分おまえが好きだとうそを言うだろうし、相手もしたたかだから俺が好きなのではないと思っているだろう。そのように考えると私は建築家になれない。私は建築家になるという一抹の不安の中である日私の友達からル・コルビジェの写真を見せられた。スイス生まれのフランス人であったコルビジェに非常に興味を持った。それはコンクリートが打ちっばなしの壁の上にあった、ピカソの絵を思わせるオレンジ色の人間の形をしたモジュロールであった。コルビジェは自分でもピュリスムの絵画を書いていたらしい。ピカソのキュビズムやシュル・レアリズムの影響を受けた画風であった。しかしながら、コルビジェのピュリスム、ピカソのキュビズムに反対するものであった。私は彼こそ絵画と建築を結びつける何かのきっかけを与えるものだと思われた。つまり建築家になろうと決心したのである。しかし後で気が付いたことだがダリはピカソもコルビジェも嫌いだったそうだ。

1971年

私はあと1年で卒業しなければならない。大学は大部分セメント工場やゼネコンの就職口はあった。当時建築課の学生の就職先は設計事務所が10%くらいしかなかった。しかし私はどうしても設計事務所が希望だった。私は自分の研究室の講師に就職口を頼んでみた。前川国男設計事務所を紹介された。しかし多分東京理科大学から誰も就職した事がないと言う事であった。というのは前川国男は英語の試験をし、かなり英語ができないと入れてもらえなかったし、処女趣味で、学生からしか所員を取らないという事がわかった。つまりチャンスは2度こないわけで、給料は千円札で支払われるほど安かった。実は私が小学生の時、上野で東京文化会館の建築が余りに美しかったので、それを模型にした事があった。それ以来前川国男が好きであった。しかし後で分かった事だが、前川国男はコルビジェの教え子であった。また真ん前の西洋美術館がコルビジェの作品である事を学生時代に知った。しかしコルビジェが指摘しているように、余りラフさが無い綺麗な建物で、私も小学生の時余り興味を持たなかったし、その当時はコルビジェに興味を持っていたわけではなかった。その様な訳で就職に失敗してしまった。

1971年

新田守彦建築研究所に就職。此处では当時日本で大流行のスーパーマーケットの設計をしていた。本人は京都の西山卯三の所で教えて貰ったとっている。

私はこの時も悩んでいた。建築家はどの様な立場にいたらよいのであろうか。私はアートをめざしていたし、建築家にして、アーティストになれば一番幸せであった。それはその頃から私に定期的に襲う発狂の原因でもあった。その発狂状態は大学を卒業してから常にまとわりついた。しかし世界が徐々変わっていく実感がしてきた。つまりベルリンの壁が崩壊するとともにその発狂状態は徐々に消えていった。さらにソ連が崩壊して決定的になった。新しい時代が来ると言う予感であった。

私は建築文化と言う雑誌の懸賞論文に論文を発表した。このコンペで私は佳作に選ばれた。その時は1等賞も2等賞も無かった。3人が佳作に選ばれた。

この内の一人が八束はじめという人で、現在建築評論家として活躍している。検査員の一人から当時大学講師だった先生に問い合わせが会ったらしい。貴方の大学の学生だった人間が建築論文コンペに応募したがどうしようかと。その時にこの講師は何とかしてやってくれと頼んだらしいと言うのだ。

つまりその事で私は佳作に選ばれたと言っている。つまりこのことは大変不愉快な気持ちになった。ジャーナリズムの世界もコネクションの世界なのか。

私は日本の社会はとても不愉快で生きづらい、いやな世界だと思うようになった。八束はじめという人は建築の設計は余り巧くないが、建築評論家として生きている。この人は建築家大谷幸夫の学生であった。

1976年

三井建設企画開発部嘱託となる。文学クラブ（サークル）で建築課の学生だった友人の紹介で企画開発部に入った。彼は学生時代同じ文学部の仲間で建築課にいたが、都市計画家の所に弟子入りし都市計画家として私より一年先に卒業している。私はその後1年程でオイルショックになりフリーになった。

株式会社ゾンテム建築企画研究所を作る。当時資本金は1000万円以上と言う規定は無かった。50万円で株式会社を作った。

1976年

私はやはり自分で仕事をしなければならぬのか。私は商売の方法を模索していた。私は何がこの時代で優れた商売なのか。様々な商売を上げてみた。ところがこの当時2×4工法の住宅がアメリカから入ってきた。私はある都市計画家から建築家としてスタートするのに住宅からは駄目だと言われてきた。なぜなら住宅はこれから全て住宅メーカーが日本中の住宅を立ててしまうので駄目だという事であった。つまり都市計画家になる事を進めた訳であるが、日本では住宅建築家が崩壊している時代であった。しかしもしかして2×4工法は日本で初めてだし、うまくすれば成功するかもしれないと言う期待があった。しかし建築家として生きてゆくには自分の作品が無くては駄目である。私は自分の作品は何も無かった。磯崎新は言う。建築家になりたかったらまず親戚の家を建てよと。これを

近親相姦的建築というというような話を聞いた。しかし私はもうすこし酷いやり方を考えた。つまりあまり建築雑誌に載らないような、地味な作品をいろいろな場所に行って写真を取って歩いた。この作品を自分の作品集として、持ち歩き営業したのである。当時三井ホームが2×4工法住宅を始めた。此処の営業所は三井不動産からきた8名の社員と後は建築も分からない社員ばかりであった。私はこの人たちに私の作品集なるものを見せて仕事を取りに行った。何の反応も無かったが暫くして、アメリカに2×4の研修に行かないかという誘いがあった。研修は自己負担である。私はこの誘いに乗った。自己資金は100万円である。この金を全て持っていったが、同じように同行した他の設計事務所の連中は300万円も持っていった。多くの人に資金的な援助をしてもらい、私はアメリカに渡ったのである。そのときは当時の三井不動産の社員で後の三井ホームの社長になった赤井士郎もいた。私は帰国後商売のことを考えていた。当時の三井ホームの社長は坪井東であり、専務は岡田徳太郎であった。この人は三井物産のブラジル支社で木材を調達した国際人であった。この人は私ども設計事務所を集めた集会で三井ホームは住宅会社で始めて設計事務所を使う事を宣言した。そしてインテリアデザイナーも使うことを宣言した。これは私どもにとっては画期的な事であった。その後徐々に仕事が入ってきた。設計方法は実に懇切丁寧で、三井ホームの社員がマニュアルを作り、それと研修を重ねてゆく方法で、このような会社は他に無いと思うようになった。私は学生時代のことはすっかり忘れて30歳から40歳まで三井ホームの仕事をした。

これは岡田徳太郎の魔術であると思った。当時月300万円の設計料が入るようになり、所員は5名になった。この間700棟の住宅を設計した。しかし私は40歳になって体調を崩し、ついに三井ホームの仕事ができなくなった。この時から三井ホームの社長は赤井士郎になっていた。

当時2×4工法は順調に伸びて行った。しかし年間1万戸になった瞬間にその伸びる割合は平行線になってしまった。赤井士郎は岡田徳太郎を徹底的に非難し、2×4工法で自分がやりたかったのはプレハブ工法であり、プレハブの研究に取り掛かった。

そして年間2万戸の住宅を作る計画を立てた。しかし1万戸はおろか8000戸にまで落ちてしまった。つまりこの時から設計事務所は余計な代物になってしまった。私はこれを最後に三井ホームの仕事はしなくなった。

私の所員に三井ホームの仕事をやらせ、私は自分で仕事を見つけるようになった。約15年前のことである。

1977年

私は結婚した。私は新婚旅行を兼ねてスペインに妻とガウディを見に行った。バルセロナに旅行したが、この時妻が必ずしもガウディのファンでない事に気が付いた。彼女はかなり怒って別々に行動しないかと言い出した。私はガウディを見られる千載一遇のチャンス逃してしまったのである。それでもサグラダ・ファミリア教会やその他の多くのガウディの建物は見る事ができた。しかしこの時自分の建築家としての限界を知ったのである。私がかねてから見たいと思った物を妻は許してくれない。この結婚は失敗だったので

は無いだろうか。あるいは私のわがままなのか。

妻がわがままなのか。それと私の建築家としての夢は当然日本人には理解できないだろうと思った。日本では私の嫌いなポストモダンの建物がひしめいていた。つまり私はやはり戦前の世界観で生きているのではないだろうか。ポストモダンと言う戦後の世界観を見なければならぬ。磯崎新等のポストモダンな建物は何となく嘘っぽく我々を騙しているように思えた。千葉にある幕張ニュータウンのポストモダンの集落は人間が生き生きとしておらず胡散臭いイメージが蔓延している。しかし私は建築家としてどのような建築を作れば満足するのであろうか。いろいろ悩んだ末に、日本建築に行った吉田五十八や堀口捨巳等をどう思うか。やはり自分とは違うであろう。しかし私はある時谷崎潤一郎の陰影礼賛と言う建築に関する論文を読んだ。日本人の美しさの根本がどのようにして失われていったのかが書かれており、すごく感動する文章であった。しかしながら建築家というのは黙ってお金を出してもらって、自分の好きな建築ができるのであろうか。これは私の前々からの疑問であった。だからもし自分の好きな建築を作りたかったならば、常に形で自分はこの様な建築が作りたいのだと訴え続けなければならない。

これが私の結論である。しかし建築の作品の発表はおおよそ建築ジャーナリズムによらなければ出来ないというのがその当時の常識であった。

1993年

私はある女流画家の息子の家を設計した。しかしこの当時はまだ私がどのような設計をするか世に知らしめる手段が無かった。しかしとにかく一生懸命に設計をした。結果として日本風の建築であった。この出来上がった作品を建築ジャーナリズムに送りつけたが、当時「新建築」は私の作品は載せなかった。ところがニューハウスという建築雑誌が和風住宅の特集で載せてくれた。しかしこの雑誌からの反応は全く無かった。つまりこの和風建築という特集雑誌は置いてある本屋と置いてない本屋があるようでそれが反応が全く無い原因である。

1995年

知り合いの大工から中野で狭小住宅の設計をして欲しいとの依頼を受け、設計に取り掛かった。この場合在来工法では無理なので、2×4工法にした。しかし採光斜線、北側斜線、道路斜線等が掛り、通常の階高では無理である。そこで天井高が2300に成るようにスタッドをつめたし、2階床根太と3階床根太は208にするなどかなり努力をした。建築は完成したが、後で施主と意匠上の事でもめてしまった。

1996年

スチールハウスの事でアメリカに渡る。この企画はアメリカで成功した不動産会社の社長で彼の別荘のビバリーヒルズに紹介されたのである。翌年建設省の関係で建築センターに行き、スチールハウスの説明に行く。

1998年

私は柴又から円筒の家を作ってくれと言う依頼があった。これはニューハウスに私のプラン集を載せている物の中から、公庫住宅に適した特集号がくまれており私は木造で円筒

形の住宅を載せていたのである。しかしこれには困ってしまった。

木造住宅の基本は方形の家であるが、円形の家は 2×4 工法ならば出来るのではないかと思っていた。ところが柴又の住宅は在来工法で円形である。しかし折角来てくれたお客を断るつもりも無かった。そこで荷重がなるべく円形に伝わらない方法を考えた。これは大変巧くいったのである。しかしこの円筒形の住宅の依頼は他にも 4 件ほどあったが、大阪と北海道と名古屋と千葉の九十九里浜であった。それらの住宅地は監理が出来ないので断った。この建物は 3 階建てであったが、小屋裏 3 階にした。

そこで出来上がった建物の写真を撮って、ニューハウスに掲載を依頼した。編集長は快く受けてくれたが、いつまでたっても載せてくれなかった。載せない理由もはっきりしない。後で分かった事だが、ニューハウスは安めの住宅が良いらしい。前回の画家の息子のうちもそれほど安い住宅ではなかった。

1999年

事務所は建築の不景気にみまわれ、全ての所員を解雇した。私は東京地方裁判所民事調停員（建築担当）になり多くの建築事件を手がけるようになった。

コンテンポラリーアート団体 NAU にアート作品出展。この NAU の代表はシュル・レアリズムが好きだ。岩永忠樹と言う。NAU は 1 年に 1 回上野の東京美術館で合同展を開き、私もそこに作品を出す事が出来た。私はこの人と非常に巧くいった。

2000年

スウェーデン・日本芸術団体メンバー S J P の団体に入る。この時村田訓吉を知った。村田訓吉はフランスで岡本太郎と作品を合同で出すほど優れた作家であった。勿論岡本太郎も当時はシュル・レアリストであった。しかし村田訓吉はネオダダを希望している。

2001年

日本 S J P 事務局となる。

S J P はスウェーデン大使館の KAI REUINIUS (カイ・レニウス) が熱心に村田訓吉を扱ってくれた。彼は日本人のノーベル賞選考に世話を焼いた一人である。奥さんは日本人である。

2002年

現在 I T リフォーム研究所を作ろうとしている。

建築が量的にも少なくなっている事はご存知だと思うが、それは建築が量的にも満足できる水準になった事と不動産バブルがはじけて不動産に投資する事が少なくなったからだと思う。しかしながら不動産床面積は今後 21 世紀の変革化の波でリフォームをせざるを得なくなった。即ちリフォーム事業は増えている。新築が増えないのは、今後人口が減って行くため、30代の人しか新築をしないようになってしまったのだ。また高額所得者も管理が簡単なマンションに移りつつある。今後新築が増えるのは、国の就業形態が変わる時ではないだろうか。

また日本のインターネット人口は直線的に増えており、2002年においては3,600

万人にまで達し、アメリカに続いて世界第2位になっている。しかしながら人口の多い中国がやがて第2位になるだろう。このIT化の波は、インターネットの世界だけではなく、SOHOが盛んなれば、様々な機械が必要になる。

そこでITリフォームと言う耳慣れない事業を始めようと思う。この事業はこれから延びて行くリフォームとITを組み合わせたものである。日本においてはITの技術者は建築の事が分からない。一方建築の技術者はITの事が分からない。ところが21世紀はどちらの技術も必要なのだ。そこで2つの技術を統合する事にした。建築のリフォーム費用は80%で、ITは20%であるが、ITの方はコンサルタント事業でどんどん増やす事が可能である。私はようやく建築家のフリーな立場に立てたのである。21世紀はこれから30年掛けてIT革命が始まる。これからパソコンでもないユビキタス文化が到来する。

つまり日本は不況から脱出する時に、その革命が始まる。ITバブルが潰れたなどというのは、はなはだ時代の流れが分からない連中のことである。

第4章 先進エイジフリー社会を目指した私の提案

第4章 先進エイジフリー社会を目指した私の提案

4.1 エイジフリー社会実現のための私の提案

まとめ

2002. 3. 5

石井登喜男

1.背景についての考え

- ；豊かな生活、寿命の増大
- ；倫理の荒廃
- ；特権支配
- ；戦後の民主化
- ；地球環境破壊
- ；年代間乖離

2. 提案のまとめ

； わたしたちへ

- 「心のゆとりが必要
- 「自己は他力を得て生かされている
- 「個と公がバランスよく共生する社会
- 「開かれた労働市場の構築
- 「生涯現役の意気込み
- 「弱者の救済が必要
- 「自分の背中を見せる生き方
- 「環境と調和した生活の実践

自信を持った自己を確立し積極的に経験を活用する社会の実現

きみたちへ

- 「明示できる実力の保持
- 「各人の自画像を読んで参考にしたい
- 「歴史を学ぶ必要

4.2 北畠道教「先進エイジフリー社会を目指して私の提言」

2001. 7. 30

平成 11 年 11 月 18 日に第一回の WG3（ワーキンググループ 3）が発足し爾来今回まで 20 回に及ぶ集會が持たれたが、この僅か二年足らずの間にあらゆる社会の動きは物凄いスピードで変化を続け、殊に情報通信分野における IT の本格稼働・映像のフィルムによらないデジタルカメラの出現による経済・産業の変革が国レベルに止まらず、地球規模、更には宇宙規模にまでグローバル化されて利用されねばならない時が来ている。かかる変革期に我々がより良く生きて行くために、そして将来を見据えて如何に有る可きかを思う時、私は次の事を第一に考え「先進エイジフリー社会」とは「人は皆、老若男女を問わず、分に応じ生き甲斐の持てる社会」と定義した。

現実としてはく苦楽を共に生きられる互助の仲間があれば、人生バラ色>たとえ貧乏でも心には温もりがある。肉親の情＝親子・兄弟姉妹・夫婦、友情、師弟愛、等欲得抜きで付き合える仲間が多く存在し、互いに助け合いながらより健康で、より活力ある生き方をする。これこそ人間がこの世に万物の霊長として生存し続けてきた所以ではないか。

さてこのグループには①1918. ②1925. 1925. 1927. ③1934. 1935. 1936. 1937. 1938. ④1946. 1946 の各年に出生した 11 名が参画し、年齢格差は 28 歳と一世代以上異なり、文系 2 人、理工系 9 名で、回を重ねるごとに、親密の度が増して本音で討議できるようになった。

しかし上記の年齢差は①. ②が戦前派、③が戦中派、④が戦後派とも分類することができ、1945 年の敗戦によりわが国の国土は削減され、立憲君主国（天皇制）から戦争放棄の民主国家に移行し、①～③の者が受けた情操・精神教育等は新憲法による法制の大改変が成された為、思想の転換を余儀なくされた者では有ったが、国民のコンセンサスが比較的平穩に得られ、まずは軍事大国から、経済大国として立ち直るために幾多の困難を克服し、今日あることをひとまず可と認めることができる。

そろそろ総括の時が迫っているが、

;世間様に顔向けできないようなことの起きない生活を心がけ、自分の体力や能力に合わせて社会のために尽くすことを念頭にいれ行動すること。

;少子高齢化が進み、学童・学生の減少時でもあり、成人の生涯教育に、又 OA 機器など最新事務機器の利用講習などの機会並びにこれらを利用しやすい環境に整備すること。

;現代社会は国・地球・宇宙・と人知の考察範囲が拡大するに従って、分業化の必要を生じ、個々人の必要な情報利用は限られているに関わらず、情報発信が過剰となり、眞に必要な情報を得るために無駄な時間を費やしている「情報過多の害」

心身ともに健全で長生きが出来ることは誰も願うところであるが、心には欲望が、身体には物と同じく寿命があり、いつかは死を迎える。日本では少子高齢化が急進し人口激減が心配されているが、世界的には地球人口は増加しつつ在り、やがて飽和状態になる。

人ばかりで無く、物についても、技術の進歩で生産過剰となり物余り現象が経済界を混乱させ、飽食は身体を健康を害し、ゴミ処理に多大の経費を要し、リサイクルの必要性が高まりつつある。また化石燃料依存による二酸化炭素排出規制の地球温暖化防止対策が論議されているが、我国の経済正常化に喫緊の要は無駄を無くす事。人は生きるため真剣に取り組む。

一方車のハンドルと同様に「遊び」＝心のゆとりが何よりも必要と考える。
高齢者は体力・気力に合わせて、社会に貢献できる筈だ。

4.3 安達勝雄「エイジフリー社会に関する私の提案」

2001. 3. 26

- ・ 我国の少子高齢化&人口減少
- ・ 環境制約の深刻化
- ・ 世界規模での市場の一本化
- ・ 技術革新に伴う経済社会の変容 が我国 21 世紀の経済社会を規定する。

その対策として情報技術革新が加速され、労働人口の減少とあいまってエイジフリー社会が指向されている。新しき社会についてその必要性が理解されるが、その仕組みについては今後いろいろと考へて行かねばならない。『エイジフリー社会』とは社会的に制約されることなく、自由に学び、自由に職を選び、自由に生きることと考える。

現在まで我々は古き制約の中でバランスの取れた仕組みに馴染んできたが、新しき仕組み達成のために古き制約の問題点に着目して改善すると、今までのバランスが崩れ、新たな問題が出てくるものと思はれる。これらを克服するためにいろいろと努力が必要であろう。

1) 少子、人口減少、高齢化 ー労働人口の減少

これを回避するために、労働における能率の向上、老若男女の格差撤廃、機会均等が叫ばれるが、現実には経済停滞による生産低下、不景気のための人員削減により、労働人口は過剰であり、かなりの失業者を抱えている。将来人口減少、高齢化が安定すれば人口の年齢層分布は高齢者を頂点とする三角形となり、余剰高齢者の割合は減り、その時点の経済力に応じた労働力が必要となり『労働における、老若男女の格差撤廃、機会均等』が可能になろう。今後考えねばならぬことはこの過渡期をいかに凌ぐかにあるのではなかろうか。

2) 日本人の平均寿命の延長にともない、体力の老化は遅くなり、世の中には元気印の老人が多くなり、人口に対する労働可能人口の割合は増加するものとする。現在は高齢者の過剰人口が懸念されるが、将来は人口減少による労働人口の減少し、不足分は、元気印の老人によりカバーされるであろう。

3) 現在労働社会は情報技術、製作技術の革新により日夜変化しつつあり、能率性、経済性を求めて是に適合する有資格者のみの社会になりつつある。有資格者はエイジフリー社会の合格者であろう。ここからはみ出たものは産業予備軍に編入される。

世の中に競争原理が働く限り能率性、経済性を求め各種の技術革新が進行し、弱者は取り残され、否応なしにエイジフリーの社会の弱点が浮かび上がってくる。

4) 過渡期の産業予備軍 今後労働人口がバランスしエイジフリー社会に移行するまで、産業予備軍の行動が問題である。予備軍の大部は熟年者であろう。熟年者は現在の社会情勢より見て、若年層の職業を侵すべきではない。現在の元気型老人には、生活困窮者、困らぬ人とさまざまであるが、余裕のある人々は生き甲斐を求めて無理に若年層の分野に参入すべきではない。趣味に生きるもよし、ボランティア活動よし、熟年者に適した

NPO, NGO 活動 を指向すべきであろう。

5) 熟年者に適した NPO 活動 (衆知を集め考えて行きたい)

- ・コンサルタント： 今までのキャリアにもとずき相談業務.
- ・修理、更生；今までの技術をいかし玩具、電気器具、日曜大工等
- ・廃棄物リサイクル：廃棄物には種々の製品、物質が混合されている、是の分離再生には色々な知識、技能が必要で、時間に余裕のある熟年技術者の出番と考える。

6) 過渡期のセーフティネット 現在までは終身雇用・年功序列をベースとした企業、抛りの年金、給与、が主体となっていたが、時間の経過とともにその効力は薄れてこよう・こうなると働かねばならぬ産業予備軍の仕事は重要になる。是を維持するために産業予備軍のための職種を認め、是を守る不文律が必要になろう。

7) 過渡期を過ぎエイジフリー社会に入った

- ・今までの大学は能力を高める機関であり、技術・技能を教える機関ではなく、実技は企業にて習得するか、自己習得するものであった。将来の企業は中間職が無くなり、即戦力を採用して仕事をするようになるが、大学はいかなる対応をして行くのであろうか？
- ・学生は就職即実技が必要になる、今までは広範囲の能力を磨き、実技はその都度取得したが、新方式では、自らの進むべき道を明確に定め、就職即実技の体制をとらねばならない・自らの適性をこの時代に明確に掴むことは難しく、離職の可能性は大きくなる。この場合離職後産業予備軍に入り、別分野の勉強をすることになる。
- ・情報技術の発達により企業は、情報を取り仕事の転換が増えてこよう、旧来であれば従業員は急きょ新事業の勉強をし、新事業に従事したが、来たるべき時代には新採用の従業員が新事業に従事し、旧従業員はレイオフということになる。レイオフされた従業員は産業予備軍に入り、別企業の採用を待つか、別分野の勉強をすることになる。
- ・企業に採用され仕事をして行くためには、自らの実力を明示する物を持つ必要があるが、これが、検定資格になるか、業務履歴になるか考えねばならぬ問題である。
- ・終身雇用制が無くなり、企業から企業へ移るチャンスが増加するが、このリスクをいかにカバーするか考えねばならぬ。
- ・時代にあった技術、高い能力を持つものには住みやすい社会になるが、弱者の救済を考えねばならない。また能力主義に陥ると弱肉強食の時代となるが、いかに歯止めをかけてゆくか考えねばならない。

8) エイジフリー 社会の高齢者

企業における終身雇用の時代は終わり、高齢者は社会における終身雇用を目指すべきであろう。短時間在宅勤務をはじめ、高齢者の就労可能な勤務を開発されねばならない。人生半ば(50才?)迄に自らの特性、趣味等を把握し老後はいかに生きるべきか、社会に貢献すべきか考えておかねばならない。

9) 生涯学習制度

エイジフリー社会では転職のチャンスが増加し、そのために新たな学習が必要になっ

てくる、また高齢者が新たな仕事をするためにも学習が必要になろう。このためには学習 制度が必要で、働きながら学ぶことのできる、各種の職業教育、資格取得のための教育野可能な学校が必要である。

10) エイジフリー社会にむけて

- ・新しき社会のためには、新しき規範が必要になる。それは **F R E E**.
- ・孫呉空が釈迦如来の掌の平の中では自由自在に活動したが、これは掌の中での自由であった。古き制度でも規範の中では自由であった。
- ・**A g e F r e e** 社会でも新たな規範が求められる。
- ・総ての人が自由であるための規範、これは何なのか、皆で作って行かねばならない。

4.4 北島 道俊「エイジフリー社会実現のための私の提案」

2001. 7. 30.

1. エイジフリー社会の背景として（思いつくままの列举）

(1) 20世紀、特に戦後55年の大きな変化を経ての回顧と考察

① 得てきたエイジフリーの背景

- ・戦争目的の徴兵制度がなくなる。
- ・参政権における男女同権など民主化。
- ・衣・食・住の需給状況の顕著な改善…生活における物資面での困窮が殆ど無くなる。
- ・職業など選択の幅が広がる。
- ・遊休の時間や場が広がる。
- ・福祉の社会化。
- ・情報公開の普遍化。
- ・寿命の増大。

② 失ってきたエイジフリーの背景

- ・愛国心（ナショナリズムではない）など帰属向上心の希薄化。 連帯感の希薄化。
- ・金権支配の横行。
- ・規範なき社会（倫理の荒廃）。
- ・年代間乖離。
- ・地球(自然)環境破壊。
- ・人、モノ、情報の不調和過密社会。

③ 回避すべき、過去の歪み（特に戦前・戦中の）への逆戻り重要注意点

- ・ナショナリズム、特権支配。
- ・テロ行為。
- ・非人間的差別社会。

(2) 21世紀という（大きく変わろうとしている）新時代の潮流課題

- ・地球環境の保全、共生。
- ・国際化、グローバル化。
- ・高齢化社会秩序の形成。
- ・新科学技術の展開と変革。
情報化社会、
バイオ、超マイクロ技術進展社会

2. エイジフリー社会実現への私の提案

エイジフリー社会の実現には、変化の中に生きて社会を形成する個人それぞれの側にまず基本がある。従って個人にその資質が育成されることが不可欠と思う。まず、自己の生活過程を振り返って、尊重したい事項として以下4項目を提案する。

- 1) 生活の中（話す、遊ぶ、学ぶ、働く）で、友人の出来る環境を尊重しつくる。
- 2) 奉仕、労働体験を主とする期間を青年時代にもつことを合意形成し実現する。
- 3) 社会には公正と規範に基づく前進が必要だということをわきまえ尊重する。

具体的には、自分を規範のカヤの外に置かないで、社会形成の役割の一端を担う。

（これに対する教育的役割は、家庭、学校が最初に担うことであるが、社会そのものに規範が感得される様にしなければならない。そのためにはメディアの影響が極めて大きい。勿論、それが特定の意識の統制固定化に利用されるものであってはならないが、メディアは社会的に大きな責任にかかわっているという認識で、もっと市民による真摯な声を反映し、それらの結果が世論を形成し、社会の質が高められる様にしていかなければならないとの感を強くする。メディア対応もカヤの中を心がける必要がある）

- 4) 楽しく納得できる生活を自分に求め工夫して前向きに創る。

次にエイジフリー社会の形成における社会的課題のひとつとして、世代間・人間間協力で助け合える事が社会形成の自由度を広げる大切な課題と考える。この具体化のために以下の4項目を提案する。

- 5) 世代間・人間間で理解のし合える内容での語りかけに気を使い努めて協力を計る。
- 6) 同一地区に居住している幅広い世代が、現状より優れた町づくりを地方自治の中に創造し推進する。
- 7) 企業でも世代間の連帯という点に目をむけ、新展開を計る。
- 8) 国際的視野で世界を見定め、平和を祈念し守る。
最後に障害、疾病、罹災など、特別な事情にある者も生き抜ける社会となるための提案として、
- 9) 特別な事情者への、必要な福祉などの社会資本の充実とともに、人と人との相互扶助で補完される施策を重視して、それを実現する。

（付記） 本課題は勿論社会の環境も問題であるが、主体は自分自身の側にある問題と思った。フリーという言葉には本質的に自己が内在しているというのが私の感想である。但し自己は他力（特にサムシング・グレートの力）を得て生かされているとの認識を強くしている。また、勿論個人差はあるにせよ、その自己の老衰していく年代をどう健全にそして感謝して生きられるかは、エイジフリーの仕上げの段階として興味もあり、課題として今後の生活の中に整理実現したいものだと思う現在である。実はこういう気力も無くなってきた時に、いかに周囲に感謝して心優しく生きられるかが、私のより大きい関心事である。

4.5 寺川 彰「先進エイジフリーへ向けて私の提案」

2003.02.09

エイジフリーの定義

年齢や性による差別がなく、個人の能力、経験、特技が適切に評価され、活用されるような社会システムが確立され、かつ、普遍的理性に基づいて運営されることによって、自（個人）と他（社会、公共）がバランスよく共生する社会

エイジフリー社会が、現在よりも、より多くの人間に、より多くの生き甲斐や幸福、満足感をもたらす社会を目指し、その考え方や制度仕組みが、より多くの人間を納得させるに足る論理的根拠をもつものであるならば、いつの日か、多数の合意によってそのような社会が実現するだろう。

こうしてできた社会システムが十分に機能し、運営が円滑に行われるためには、前提として、各個人の社会公共に対する意識、協力を欠かすことはできない。

しかし、現状を見れば、家庭、学校、会社、社会、国家等、自に対する他、個人に対する公共集団の関係はあまりにも対立的であると言わざるを得ない。

個人の自由や基本的人権などの権利を主張すること、それを守ることが何にも増して優先され進歩的とみなされ、逆に国益や公益を強調することは保守反動とみなされて非難される傾向が強い。

公といえば、国家権力に結びつける根強い先入観がある。その抵抗意識が国益や公益を拒否する雰囲気につながっている。

民主主義は社会運営の一つの方法であるが、完全なものとは云えない。それをできるだけ公正に機能させるためには、民主主義を支える個人と社会との関わり方に共通のルールと規範がなければならない。個人の自由がどのように保証されるべきかという課題と共に、個人の自由と社会全体の利益をどのように調整すべきかという問題も解決されなければならない。自と他の視点で云うならば、自他の権利の調整が必要な場合があるだろうし、また、複数の他の公益を守るために自の権利を制限する場面もでてくるだろう。

本来、個と公は、対立的関係ではなく、共生的関係にあると思われる。個は公によって守られ、公は個によって支えられるべきものであろう。

自然における個と集団は、そのような形で調和と秩序を保ち、種としての生命を維持しており、それが自然の共通の摂理というべきものである。

個人は、また、家族、近隣、友人、社会、そして国家という「共同体」と無縁の存在ではありえない。言語や伝統、歴史、文化を同じくし、運命を共にして共生しようという集団が共同体を形成し、民族となり、国家を形成してきたのである。

個と公に関係する現実には、ますます複雑な様相を呈し、多くの社会的問題が生ずるかも知れない。これらの問題に臨む個人の意識としては、他の立場での考え方への理解、公に対する信頼感の醸成が必要であろうし、また、共生の倫理に基づくバランスのとれた公的機能の運営が必要となるだろう。

4.6 栗原 — 「エイジフリー社会の実現のための私の提案」

平成 14 年 8 月 31 日

各論は、いろいろな人が、今までいろいろな方向から提案付けをされているので、それで良いと思う。

人はそれぞれ異なる自己（個）を持っている。それは、それぞれの世代で生きてきた、それぞれの生活環境、教育環境、社会環境等により、育てられた証（あかし）である。私のエイジフリー社会の定義は、感覚的な表現ではあるが「各世代毎に責任をもって人に見せられる自分の背中を確立する事」であった。それが適切な定義であるかどうかはわからないが、定義は人により異なって良いのではないかと思う。

私の定義の意味は、自信をもった自己（個）の確立である。そしてそれは、自分だけの（個）ではなく、人に受け入れられる、或いは認められる（個）でなければならない。単体の（個）が、社会の中でうまくつながり合って秩序が保たれば良い。これは自然界から宇宙迄、全てこの原則があてはまる。組織の長としてマスコミにインタビューを受けたとき、一貫して私のモットーは「人を大切に」だった。

「先進エイジフリーを目指して」と言っても、何も新しい事をするのではなく、今までに出来てきた社会の歪みや、秩序の乱れを見直す事ではないのか。

さて「私の自画像」は、あまたある自画像の一つとして、さりげなく（個）の主張とします。

(個) : I d e n t i t y

4.7 石井登喜男「エイジフリー社会実現のための私の提案」

2001.2.26

1. わたしたちへ

現在子どもの社会に起こっている問題は、その親の責任が大きい。そしてその親を育てたのは私たちおじいちゃんの世代です。私たちがサラリーマン時代会社以外のことは皆妻に任せてしまい、地域社会との付き合いもなく生活してきた咎めが現在出ていると考えられます。しかし戦後廃墟の中からスタートした日本の社会がここまで豊かになったのは、私たちががむしゃらに働いた結果であることも事実です。子どもの教育を妻任せにしてしまったのが間違いだったのです。今こそ自信を持って私たちが蓄積してきた経験を社会のために役立てることが罪滅ぼしになるのだと私は思います。

まず私たち自身が『自分の楽しみ』を追求しながら、環境と調和した生活を実践していき、子ども達、孫達に見せることが一つの教育だと思います。

エイジフリー社会は祈っているだけでは実現しません。できることから活動することが大事だと思います。

2. きみたちへ

人間は一人では生きられません。まず生きるために不可欠な「食べ物」を手に入れることができるのは、太陽の光と生物社会全体の仕組み、そして社会の誰かが作ってくれるからです。お金を稼ぐために勤める会社も先輩達が大変な努力をして築き上げた結果です。

まず自分の両親から始めて、住んでいる地域環境、人間に感謝することからスタートです。そしてこの国の歴史を学んでください。この国は2000年以上にわたって先輩達がこの国に合った「国作り」を進めてきた結果なのです。もちろん良い点、悪い点があるでしょう。それを治していくのは貴方達若い人です。

21世紀は皆さんの世紀です。一人一人が個を確立し、上から与えられた社会ではなく、下から創り上げた社会にしてください。

エイジフリー社会は老いも若きも共に協力し合う世の中です。一緒になって作り上げましょう。

4.8 藤井勲「先進エイジフリーに向けて私の提案」

平成13年10月2日

4.8.1 平成11年7月8日WG3の発足に当たって提示した考え方

『熟年の社会参加』のありかたについて

1. キーポイント

- (1) 『熟年』とは：55～60才以上？ 〔「老人」との違い？〕
 - ・『熟年』：各種の人生経験を経て、他人に指導的な立場となり得る年齢層
- (2) 『人生経験』とは
 - 1) 人生の目標：自分は何をするために生きて来たか？ 〔目的意識〕
 - ・ 目標意識：何を、何時、何処で、誰から、何故、如何にして
 - [5W1H]
 - 2) 仕事の達成感：自分は何をして来たか？ 〔貢献度〕
 - ・ 貢献度：自己、家族、社会、日本、世界、地球
 - 3) 結果としての問題点：何の様な問題／つけを残して来たか？
 - ・ 反省事項：自己、家族、社会、日本、世界、地球
- (3) 『指導的な立場』とは
 - 1) 自分の若年意識：自分が若い頃の意識は如何であったか？ 〔初期意識〕
 - ・ 初期意識：戦前、戦中、戦後、学生意識、社会人意識
 - 2) 現在の若者意識：自分の子供・孫たちの意識が分かるか？ 〔意識変化〕
 - ・ 意識変化：30代、20代、10代、児童、幼児、乳児
 - 3) 指導的な立場：自分が他人に指導できる事項があるか？ 〔指導可能事項〕
 - ・ 指導可能事項：家族、社会、日本、世界、地球
- (4) 『社会参加』とは
 - ・ 社会参加：各種の人生経験が、人間／社会環境等に貢献し得る参画容態
- (5) 『人間／社会環境に貢献』とは
 - 1) 人間環境に貢献：自分が人間環境に貢献できるか？ 〔人間環境〕
 - ・ 人間環境：倫理意識、人間関係
 - 2) 社会環境に貢献：自分が社会環境に貢献できるか？ 〔社会環境〕
 - ・ 社会環境：自然環境、人間環境、地域環境、地球環境

2. 生涯現役として

- (1) 人生を大きく変える転機
- (2) 藤井式3年の法則
- (3) 目的意識を明確に
- (4) 『出会い』
- (5) 生涯テーマ

- (6) 過去の経験
- (7) 会社人間ではなく『地球人』として
- (8) 「環境・エネルギー・廃棄物コンサルタント」として
- (9) 地球は、かけがえのない『地球人』と『自然界』のための、地球である

4.8.2 その後 WG3 で討議を続けて

前項は2年前に WG3 に参加するに当たって、私の思いを箇条書きにしたものであった。あれから2年に渡って『先進エイジフリー』をテーマとして月一回参加者と討議してきた。その間参加者から種々の提示された資料や、熱っぽく議論したことなど、実に楽しいときを過ごすことが出来た。

4.9 荒井康全「ハイデッガーの三つ退屈とゲーテのミッシング・リング」

03-03-20

(孤立な日本の高齢者)

このワーキングが始まった1999年は、国際高齢者年の年でもあった。

東京都老人総合研究所からアンケートが送られてきたときの同封の資料をファイルから探し出した。この研究所は、ミシガン大学と協力して日米の老化に関する比較研究を行ってきた。その結果は 日本の高齢者は、米国に比して身体面の健康状態は良いが、精神面ではさほどでない。また、日本では米国に比べて「適正体重の維持」への意識が高く、このことが身体健康水準も高いことにつながっていると見られる。しかし、その割に、医療機関での受診率は米国より高い。注目すべき点は、日本では米国に比べて高齢者が、子供からの支援を含めて、近隣との接触や社会参加の点でも孤立状態にあることだ。就労率、経済的満足度はともに日本の方が高かった。（「孤立しがちな日本の高齢者」（読売1999/9/4））

(ネイバーということ)

さて、近隣の接触の部分は、特に本ワーキングの課題と関連している。日本の高齢者は、配偶者がいなくなってから、子供との同居の割合が60歳で1割であったのが加齢とともに上がって5割程度まで行く。一方、米国の場合は、逆に一人暮らしが、日本の同居のパターンと数値的に類似対応している。老人施設などの社会的インフラの整備が端的に現れているようだ。ここでの生活のすがたとして、たとえば近所づきあいの方も、日本では物のやりとりや外での立ち話など、お互いの生活まであまり立ち入らないつきあい方をしているのに対して、米国や英国では相談や病気のときの助け合いなど、生活に入り込んだつきあいをしている。かれらの生活の基盤として気のあった隣人と週末をすごす、ネイバー (Neighbor) という語感をふと懐かしくおもうひともいると思う。

出典 (東京都老人総合研究所・ミシガン大学「全国高齢者調査」)

Institute for Social Research, Univ. of Michigan, "AMERICAN'S CHANGING LIVES: WAVE I, 1986)

上の資料はわずか数枚のものであったが、捨てきれぬものがあった。会社人間でがんばってきたわれらの仲間の姿も 現実感を帯びてくる。そして道筋のなかで、われわれのエイジフリーのための意味ある提案なるものが見えないであろうか。

このワークショップを経過してきた私の場合は、ふたつのキーワードを取り上げたい、つまり「退屈」と「いわし」である。

提案1 (「退屈」について研究すべきである)

本ワーキングでは、哲学者ハイデッガーの3つの退屈を取り上げた。第一は「汽車を待つ退屈」、第二は「パーティの退屈」、そして第三が「みるものがすべて退屈」であった。第一と第二の括りは 旅行するとか、パーティに誘われるとか 行動の質の問題がある。

よき知り合い、よきクラブや本ハートの会のような会合に加わることが積極的な意味をもつ。地方自治体の広報のお誘い欄はけっこうおもしろい。コーラス、ダンス、カラオケなど、この辺の文化はますます多様にして、深くなっていくとおもう。一方、大学が生涯教育の核になっていくための模索実験が行われている。時間をかけて高い目標に到達するようなプログラムの開発及び施設などよく設計されたファシリティなどの整備が必要である。

提案2（精神の解毒を研究すべきである）

第三の「退屈」の問題は、真に生きることに關することであるが、いまに生きる日本人がもっとも苦手としてきた課題ではないだろうか。具体的なコンテンツを提供してきたのは宗教であったろう（いや、宗教団体とっておこうか）が、社会の共通的意識のなかでの位置付けがよわいようだ。これについては、メンタルな毒という視点が面白そうである。

これについて、もう一步われわれの思考をすすめられないだろうか。

提案3（「いわし」（構造問題の発見）のための研究をすべきである）

「退屈」に対してもうひとつの「いわし」に入ろう。ここでは、相手に対する意識と無意識でものごとの持つ意味をみていこうという提案である。特に強い側と弱い側という取り上げ方をしたい。強いと弱いは相互に關りがあつて意味する対応關係であるが、この關係が相互に無意識のままにあることを見出すことは、まさに、「問題構造の発見」と言えよう。環境問題は、無意識状態問題から意識状態問題への展開の歴史の例であつた。

そういえば産業革命もそうであつたし、生命科学やナノテクなどの科学技術も意識状態への探索など発明とか発見というものはすべてそうであつた。人間の叡智の尊さはここにあるのであろう。第2章で、ゲーテのミッシングリングの探索と言つたが、その発見の役割を賢者である高齢者が担うことは、まさにハイデッガーの第三の「退屈」からの解毒になるかもしれない。

提案4（ネイバーのありかたを研究しよう）

そういうことを丁寧に考え、論じ 社会に発信していく「ネイバー」をもつための努力は大切なことであると思う。ひととの付き合いかたの研究をしよう。

4.10 圓山壽和「私の提案を書くにあたって」

H13. 11. 29.

今手元に当ワーキンググループの第一回集会において配布された、荒井グループ主査の起稿による、「WG3 へのメモ (99/11/18) “先進エイジフリー社会を目指して” 少子高齢化など新時代の構造転換を探り、それぞれの社会参画、適応等について考えるー」がある。

それを見ながらフト感慨に更けりたくなる気持ちに襲われる。当ワーキンググループもかなり幅広く討議してきたなあ。人間環境論に端を発した規範論や IT 論、社会経済構造論から切り込んでいった就業構造の変革と労働市場の流動化、そして、エイジフリー社会の各人なりの定義と擦り合わせ。更には、そのようなエイジフリー社会を生きていく主体としての私＝自己はどこにいるのか、それを探っていくために自画像に取り組んで来たのだった。そして今、最終課題である、「エイジフリー社会に向かって・私の提案」にまで至った。

今私の脳裏には、これからのエイジフリー社会の最大のテーマは、やはり日本の場合、「個の確立に裏付けられた自立型職業人によって形成される開かれた労働市場の構築」があげられるのかなと言うセンテンスが轟いている。そしてそのためのセーフティネットとしては、「共生を核理念とした地域社会」と「大学を軸とした開かれたリカレントの場」とがあり、この二つを両輪とした社会経済システムの再構築と拡充が急務になっているということを書けばよいのだという声がしている。

しかし、何か物足りないと言うか、それよりもっと大事なものがあるのではないかという気持ちもしている。これらのセンテンスは机上の学習成果であり、それではないものがエイジフリー社会には必要なのである。正確に言えば、もっと具体的な実質の伴う場が、あっちこちにできてくることが求められているのではないだろうかという事を言いたいのである。旨く表現できないが、エイジフリーを実感できる場が必要な時代というか、時がきているのである。

少し脱線する。

今から思えば、既に5年半が経過したが、平成8年4月の職場の人事異動を契機として、まさにバブル（泡）的な勢いの下に歩んできた、それまでの職場生活の総括をせざるを得ないところに追い込まれたのだった。時代がまさにバブル経済の崩壊を徹底的に認識せざるを得ないときと同じくして、私自身もバブルであったなあと痛感した次第であった。リストラ＝自己再構築に向かわざるを得ないことを感じていた。

そんな私にとって、平成8年7月の入会以来、いつもこのハートの会の種々の集会は、自分を見つめ直す場であるとともに、気持ちの上ではセーフティネットであり、またオアシスであったことを感じる。

平成8年9月から約2年半続いた、ワーキンググループ2は、あらゆる面で人生の先輩

である尊敬すべき諸氏に恵まれ、今思えば至福の時間を過ごさせてもらったと思っている。当時の私は、一挙にバブルが崩壊したともいえる生活環境、特に職場環境の激変の中で、気持ちがささくれだち、通勤そのものがかつた時の経過の中で、ハートの会はいつも暖かく、私の極めて私情を交えた廃棄物・リサイクルに関する提起や討議を受け止めてくださり、すこしずつ自分を取り戻していくのをサポートしてくれていたことが思い出される。

そして今、このワーキンググループ3においても、研究テーマは異なるが、私にとっては同じように、私の自己再構築をしっかりとサポートしてくれている。一時期に比べれば、私も幾らかリストラ＝自己再構築がなされて来たのかもしれない。

特にここ1年ぐらいは、いつも自分に言い聞かせていた「5年間は静かにじっと我慢して充電に努める事」の5年間の効果が出てきたのかもしれない。この間のリストラ＝自己対峙において、スローガンとも言うべく肝に銘じていた「遊び心」が、私の中に吹っ切れた生活態度を幾分生み出してきているものと思われる。そしてもう一つのスローガンである「NPO マインド」も抽象的なものから、ほんの僅かではあるが生活の中に実質化してきている効果が表れて来ているのかもしれないと思えてきた。

そのような事を思うにつけ、今回、「エイジフリー社会」をテーマにしたワーキングに参加できたことは、私にとっては打って付けの場であったと言える。まさにこれからの人生の再構築を自らに課していた私にとっては、エイジフリーそのものが問われていたのである。私が幾分、エイジフリー社会を生き抜いていく力を得たとしたら、それはこのような場、即ちハートの会と出会えたからである。そしてまた、エイジフリー社会を目指してのワーキンググループに参加できたことにもよるものである。

これが提案を兼ねた、結論である

以上、書きなぐりの雑文であるが、私なりのノルマ達成としておきたい。

第5章 長い旅の末 ～学習の感想～

5.1 北畠道教「学習の感想」

WG3「先進エイジフリー社会を目指して」の会合は平成11年11月18日の第一回から月一回のペースでハートの会役員3名で会場設営や事務連絡を取り、スムーズに続けられ、やっと終着駅に辿り着こうとしています。座長の荒井康全氏を中心に参加各人の個性・経験が活かされた集約が得られれば、この大命題に3年を費やした事は無駄ではなかったと思う。私は正規の会終了後の二次会には健康上の理由で欠席を通したが、二次会でのフリーな対話が次回の進行方向に良い影響を与えたと思う。

私は1918年に生れ、2002年7月20日で満84歳を迎えたところであるが、この間の生活環境に影響の大きかった天災は関東大地震、洪水、最後に人災の太平洋戦争で、終戦の年の4月15日晩の空襲で家財を喪失し、着の身着のままから這い上がらざるをえない苦境にたたされたが、これらの災害で親族が一人も命を落とさなかった事を幸いと感謝している。

人の命の大切さを第一に！

秩序と平和を希求する。

以上の視点に立って現状を見るに、国の財政・金融面では他国との関連で予測困難な事態が到来しており、現時点では深刻な不況から完全には脱出できずに居る。

WG3の会合が始まったのは小渕内閣の時で、その後森・小泉内閣と政府が推移し、少子高齢化の進むなかで、我が国の終身雇用体系の存続が危ぶまれ、また情報通信の急速な発展に伴い産業構造の変化も著しくリストラの進む中で、政府は教育改革・行政改革に着手し、今日を迎えている。

この間WG3のメンバー夫々独自の経験と構想を寄せた本稿が後世の参考になれば幸いです。

最後に次の5点の今後の動向が理想の形で落ち着けば住み良い日が来る。

○少子高齢化の進展＝終身雇用体系維持不能～ワークシェアリング

[年金問題・健康保険問題・介護保険問題]

○物不足～物余り =製品…(流通)…需要者へ =特に需要!供給のアンバランス
による廃品、不用品・ゴミ等の処理方法の改善に注目が集り [リサイクル法]

○教育改革＝義務教育は徳育・情操と語学・算数・地.歴・理・体操 [先生＝聖職者]

○行政改革＝省庁再編成～郵政事業庁…3年後公社化(職員身分は国家公務員)

郵政公社法案と信書便法案は国会通過し、首相持論の民営化は不発。

○国会議員等の不祥事が相次ぎその他の重要法案が積み残しされた。

最近殺人犯の増加が目立ち、不浄な金と心が公序良俗を乱している。これでは平和国家とは言えまい。

5.2 安達勝雄「WG3に参加して」

私のハートの会への入会はWGへの参加から始まった。

- 1) 人間活性化と環境「自律社会を目指して」
- 2) プラスチック材料が環境問題を克服するための条件を探る
- 3) 先進エイジフリー社会を目指して

初回のWGから参加して、WGがハートの会の実行グループと考えています。今まで民間の会社、協会等に所属して、その中で過ごしていると、情報は一定方向のものに限られて、考えも国定化し勝ちであった。このWGに参加してからは、自由な題目を選び、かつそれぞれ異なった職業、経歴、年齢の人達と自由に討論できたことは、人間活性化、否、私自身の活性化であった。特にWG3はいろいろな面で大きな収穫を得たように思います。

* エイジフリー社会とは？

私自身明確なイメージを持つことが出来なかった。討論の中新鮮なご意見を伺い、自分がまだまだ古き仕組みに縛られていることを痛感した。

* 今までの社会経験、年齢が各自の考え方に影響している事が良く分かりました。

* 自画像：

ありのままの自分を曝け出すには勇気がいります。エイジフリー社会を頭の片隅に置いて、自画像を書いていると、今までの生き方が余りに軽薄すぎたことが痛感されました。

あそこではこう考えるべきで、ここではこうすべきであったと思い出されます。

* この反省を踏まえて、先進エイジフリー社会はかくあるべしと考えます。しかしながら、今後の思考・経験により、この考えは変わるであろうし、又変わらねばならぬと考える。

WG3に参加して、過去の自分を認識し、もう10年、もう20年若ければとの想いが先進エイジフリー社会の基礎とならねばならぬと感じています。

5.3 北島道俊「長い旅の末；学習の感想」

HEARTの会の趣旨に、下記の項目がある。

- ・ 個々人の生活や事業活動の中に生かせる相互啓発学習事業の展開
- ・ 場を異にする人との交流・協力・出会いの機会づくりと支援

ワーキンググループ（WG）はこの趣旨を直接的に踏まえた共同研究集会であり、従って各自それぞれレポートを作成するなど、一寸労力もいる集まりである。

WG 2に参加して結構楽しく仲間に入れてもらっていたとはいえ、今回のWG 3はその発足が平成11年11月であったから、私は満74歳になる直前であった。

すべての対応に特にのろさを感じだしていたので、迷惑をかけるかもしれないという躊躇と、歳だからこそ若いいろんな方々と勉強してみたいという思いが葛藤していたが、「先進エイジフリー社会を目指して」という将来への選択肢を議論しながら“自画像”を描く機会になるということと、会の役員の人でもあり音頭をとる一端の役割があるということ、会進行上で雑用の足しになるのも一つの役目といった気持ちがあって参加させて頂くことにした。

さて、メンバーは40才台から80才台に亘った。しかも多様な人生暦、これはそうはない研究会である。最初にお互いにオネストを大事にしようという合意がなされ、出された報告や意見は心に響き、そうだったのか素晴らしいなとか、そういう切り口があるのか、と思わせられることに豊富に出会った。勿論、自分とは違うなという見解にもかなり遭遇したし、これは自分の中に同化または吸収したいという意見にも数多く出会った。自分に取り込みたいということも、なにか取り込めないということもあったが、それぞれ私の生き方と視野を広げてくれた。従って、この機会は、私にとって間違いなく新鮮で元気が出てくる時間を与えてもらった。

この元気の出る事情を、以下の最近の体験から、私は免疫力が高まる環境の効果と思っている。いささかそのことに触れ私の学習の感想を締めくくりたい。

私はこのWG 3が発足する1年前、即ち平成10年11月に、高血糖で目の毛細管に血の通わないことが原因と思われる眼筋麻痺、そしてそれによる思いもよらなかった、両眼ばらばらでモノが完全に二つ見える異常“複視”におそわれ入院した。さらに、その検査の過程で腎腫瘍が見つかり、明けて2月には複視状態のまま右腎の摘出手術を受けた。結果的には早期発見で一応命拾いをしたのだから幸運といえるのだが、その入院中、目が不自由なら耳で楽しむしかない、久しぶりに好きな歌曲やオーケストラなど、消灯後数時間、密かにイヤホンで聞いて楽しんだ。そしてこのことにより免疫力が高まり、病状回復に大きく貢献したと確信する体験となった。（HEART会報第26号（2001-夏季号）に『私の複視体験から：「ほっておけない心の通わない社会」』でこのことに触れましたのでご参照ください）つまり、WG 3では、自己化できる非自己は吸収し、自己化出来ない非自己も理解出来るものは横に置いて他者理解の幅が広げられ、その結果自己理解がまた進むという、免疫力の高まる環境で元気を得た。さらには大事な友を得た思いである。

5.4 寺川 彰「学習の感想」

“先進エイジフリー社会を目指して”と題するこの学習が始まったのは平成11年11月であった。私はハートの会の仕事を通して日頃経験知識の豊富な方々を存じ上げており、その方々の能力を何らかの形で社会に役立たせる方法、システムはないものかと考えていたので、高齢化社会のあり方について学び考えるきっかけを得られればと思い、この学集會に参加した。

しかし、このテーマは私には予想以上に難しかったように思う。私の解釈では、高齢者の活力を生かす魅力的な理想社会を目指すものであるだけに、その理念は理解しても、実現にむけての具体的な方策に、真正面から立ち向かうとなれば、社会構造改革の課題そのものに取り組むことに他ならないことになるのである。それについては、参考資料として与えられた通商産業省産業構造審議会に詳細な提案がなされ、かつまた、専門家の意見や論文が来るべき主要な社会問題として、新聞、雑誌あるいは書物に取り上げられている現状にあることを思えば、私自身にとっては、ただ学ぶ事以外に、提案すべき社会システムなど考え及ぶはずもないと思うほかはなかった。

それにも拘わらず、この学集會は魅力的なものになった。一つには荒井リーダーのすぐれた運営方式の誘導があり、もう一つは魅力的なメンバーによるものであった。

荒井リーダーの誘導とメンバーの合意によって、当初は身近な事象への見方、考え方の自由な発表、討論から始まり、エイジフリーの定義、自画像を描くことによって自己の内面を見つめ、評価し、そこから各人のエイジフリー社会への提言がなされる方向に向かったのである。

メンバーそれぞれの立場からのものの考え方、感じ方の発表、またテーマに関連する新聞、雑誌等での識者の論文紹介、それについての自由活発な討論が毎回時間ぎりぎりまで続けられた。しかし、この会合での討論は、一方では、結論をまとめる方向へ焦点をしぼった議論が行われる傾向が強かったため、かなり真剣に、それぞれのメンバーの生き方や考え方がはっきり表れていたように思う。できるだけ正直に自分の感性や考え方を表明するということが学集會の主要な目標課題でもあったのである。

何と云っても、メンバーの年齢層とキャリアの違いがこの会を魅力あるものにした。それぞれのメンバーの報告や考え方は、それぞれの経験や個性の違いによる独特の味があり、私にとっては、大変新鮮で、学ぶべき多くのものが得られた。

この学習を通して、自分の感性や考え方を正直に表明するには、かなりの努力を必要とすることを知った。また、自画像を描くことによって、改めて自分の生き様が自分自身にはっきりさらけだされたように思う。どう生きようとしてきたのか、自分なりに納得する答を再認識したような気もする。

あるべき社会は、自分の自画像の反省を通して得た、あるべき自分の自画像にほかならないと感じている。

5.5 栗原 一「長い旅の末；学習の感想」

平成 11 年 11 月から始まった「先進エイジフリー社会を目指して」の集まり、巷では我が国初の介護保険制度実施の方針の決まった月でもあった。日本の不景気は益々深刻に、一方米国は好景気を謳歌していた。以後学習を続けて足掛け 3 年、20 世紀から 21 世紀にかわる激動の時期だった。日本の首相は小淵、森、小泉首相と代わり、米国はブッシュ大統領、ロシアはプーチン大統領に代わった。この間、社会はいくつもの事象を生きたテーマとして、毎月集まったのトーキングの中に与えてくれた。

- ・ ハワイ沖での米国原子力潜水艦と訓練船えひめ丸との衝突沈没事件
- ・ ニューヨークの 9 月 11 日テロとその後のアフガン戦争
- ・ 池田小学校の殺人事件
- ・ KSD から始まり外務省、国会議員の不正事件
- ・ 雪印から始まった日本の食品業界と行政指導のあり方
- ・ 中国瀋陽事件と日本の対応
- ・ 北朝鮮との外交交渉と拉致問題

今の日本は何をやっているのだと憤り、世の中の事件にあまり反応を示さないで携帯電話に夢中になっている若者達に憤る。

しかし良いこともあった。

- ・ 有珠山噴火や三宅島噴火に対する対応の素早さ
- ・ オリンピックでの女子選手の大活躍
- ・ 白川氏に続き野依氏の連続日本人のノーベル化学賞受賞
さらに今年は小柴氏と田中氏のダブル受賞
- ・ ワールドカップの成功と日本チームの活躍

この集まりが始まったころ世の中 I T の時代と騒がしく、我々も時代に乗り遅れるなどパソコン操作の補習講座に参加した。急激な I T の発展は例えばウィンドウズは 97,98,2000,XP と変わっていった。一方携帯電話の普及が広がり悪利用が社会問題を起こした。I T に対応する急速な対応が逆に I T バブルを生じ、昨今の米国エンロン社の破綻となり、当初の米国の好景気は今急降下を始めている。

日本の三代にわたった首相はそれぞれ個性ある方針を打ち出したが、一貫して変わっていない社会現象は不景気が続いているという事実である。

しかし景気が良くても悪くても、人は年をとっていく、年をとれば実社会から外れていく。そこでエイジフリーと言ってまだ若いのだぞと鼓舞し、何が出来るかを、何が社会に還元出来るかを考え、年寄りの愚痴も加わり若者になんだこの態はと諷める。

この気持ちのはけどころとして我々の生き様はこうだったと、それぞれの「自画像」が作られた。君達には育ってきた社会環境が違うから、決して同じことをせいと強要はしない。何か躓いた時に参考にして呉れば良い。

これがエイジフリーの人達からの終わりにあたってのメッセージである。

5.6 石井登喜男「WG3に参加して学んだこと」

1) 参加した最初に「自己紹介」で私はこんな言葉を書きました。

「エージフリー社会について」2000.1.20

現在は「平成維新」と言われる変革期です。明治以来「富国強兵」のかけ声のもと中央集権化が進み、今では何でも行政頼りです。

先日の川勝先生の話聞き、まず2000年以上の歴史がある私達日本人の過去の業績について勉強する必要があると思います。そして日本人に適した「倫理、道徳」を確立しなければなりません。そのうえでの具体的な施策の検討だと思います。

江戸時代までは老人を敬い、障害者を差別しなかったのです。もう一度国民全体がそれを思い出さなければなりません。

2) 上記の言葉は現在でも間違っているとは思いますが、議論には不適だということを最初に学びました。

議論というのはまずお互いに使う言葉をきちんと定義することから始めなければならないのです。そして相手の言うこと、自分の言いたいことをきちんと認識した上で、発言する必要があります。

当時新聞などに出ていた「平成維新」という言葉もなんとなく分かる気がしますが、きちんと定義はされていません。したがって勝手に使っても相手の理解は千差万別です。

WG3でも各人が自分の自画像を提出し、お互いに相手が考えていることが大体想像できるようになった頃から議論が噛み合うようになりました。理解を速めるためには終了後の「ちょっと一杯」というのも大変有効だということを学びました。

3) 「エージフリー社会について」の定義は各人夫々違っていますが、それを実現するためには一人一人が「個」を確立しなければならないという点では皆同じだと思います。そのためには「自画像」は最適な教科書だと私は思います。

皆さんが書いた「自画像」は半世紀以上の年月を生きてきて、いろいろな経験を積み、自己を確立した人が書いているので、若い人が読んでも大変参考になると思います。個人的な経験談を他人に語る時にはその内容に普遍性を与えるために、最新の知識で検証することが必要だということも学びました。

私も議論の中で出てきた本をできるだけ読むようにしたつもりです。

お陰で自分の視野が広がった気がします。

5.7 藤井 勲「長い旅の末；学習の感想」

平成 11 年 11 月 18 日にスタートしたWG 3 は、『先進エイジフリー社会を目指して』をテーマに、既に 2 年 9 ヶ月、32 回の集会を行って来た。

また、小職からWG 3 がスタートする前の平成 11 年 7 月 8 日に提示した『先進エイジフリーに向けて』と題した提案を思い起して見ると、当時の思いからは相当幅が広がった議論を互いに交わすことができ、この歳でも大いに勉強する機会が与えられたものと嬉しい限りである。

メンバーも 80 代・70 代・60 代・50 代と 1 世代ほど違う年代層の集まりで、小職は若手に属し、且つ現役を勤めている立場で良き先輩連との交流が出来たことは、現役コンサルタントとして勇気を与えられたと感じる次第である。

現在、小職は『環境・エネルギー・廃棄物コンサルタント』として“コーディネーション・コンサルティング”に精を出している。特に、廃棄物最終処分場の確保、地域分散型発電システムへの転換、資源循環型経済社会システムの構築、環境創造事業の推進などを提言し、具体的に実行することにより、かけがえのない『地球人』と『自然界』のための地球を救うことをターゲットにしている仕事人としては、大いに元気付けられた。

この長い旅の末に当たって改めて感じることは、小職は、この先進エイジフリーをいま実践中であるということである。即ち、『熟年の社会参加』を通して、人間／社会環境に貢献できるということである。

……………この指止まれ。

5.8 圓山壽和「学習の感想 ―WG3に参加して得たもの―」

思えば平成8年4月、50歳を目前にして川越市役所という狭い世界の中から出され、埼玉県庁派遣（派遣期間は2年間だった。）となったのを契機に、フットしたことで同年7月に幸運にも出会った「ハートの会」は、私にとってその後一貫して、自分をもう一度見つめ直すのに最適な場として機能して来ている。まさに私にとっては、元気づけられる「オアシス」とも言うべきものである。従って、前回のWG2にも参加させてもらおうとともに、今回のWG3にも参加させてもらい感謝している。

今手元にある資料を紐解いてみると、今回のWG3は平成11年9月14日のハートの会事務局の呼び掛けによる「WG2を活かす」併せて「WG3以降への展開」の会議が発端になっている。その場においてWG3としては、「形成される高齢化社会による構造改革の必然の中にテーマを求めること」をコンセンサスとしていくことになった。そして同年11月9日の再協議を経て、11月18日にオリエンテーションも兼ねた第1回のWG3が開催されている。私の出席状況を見てみると、第2回（平成11年12月17日）ともう1回欠席（こちらは日時不明）している以外は、遅刻することが多かったが参加させてもらったと記憶している。この8月の例会が第32回ということなので、出席回数も30回になる。約3年近く、WG3の諸先輩と楽しく討議させてもらったことになる。とにかく職場の外に、絶対に外せない職務を除いては優先的に入れることにしている日程を持っているということは、何か自分が主体的に生きていることを僅かながらも実感できてうれしかった。職場環境の激変を味わった50代前半、人生の指針にブレを感じていた中で、WG3の「自由な時」と「開放された空間」は、私にとって生活に一本芯を入れてもらおうとともに、生活にリズムを生ませてもらった。

川越から電車を乗り継ぎ一時間半程かけて浜松町の会場に向かう中、少しずつ気持ちが解けて行くのが心地好かった。（ここ最近では又若干仕事に追われ始め、原稿提出が遅れ他のメンバーに申し訳ない気持ちを多分に抱えてではあるのだが）

このようにして川越を離れ自分と向き合えるフリーな時間を持つこと、それも自分の尊敬する方々と準備不足は覚悟の上で、日頃感じていることをぶつけあって討論し合えたことは、感謝にたえない次第である。特にエイジフリーというテーマの持っている深さも手伝ってか、WG2のときとは違った意味でオネストになって自分の見解を紡ぎ出して行く作業（自画像書きなど）は、この9月に56歳になる私にとっては、これから入って行くエイジング（年輪を重ねる）の日々のあり方に大きな示唆というか知恵を与えてくれた。エイジフリーの定義は別途記してありますが、WG3を終えるに当たっての心境は、「エイジフリーとは何よりも具体的に手触り感覚で楽しい日々」そして「WG3 そのものがエイジフリー」であったという感じがしている。

最後に当WG3への自分なりの責務として、「幅広に、しかし焦点を見定めつつ討議してきた、この実り豊かであった論議のプロセス」を整理できればと約束しながら果たせないことをお詫びいたします。ありがとうございました。

5.9 荒井康全「長い旅の末(主査としての感想)」

「自画像」ということ
脳内景観を共有すること
問題として捉える意識構造
問題意識構造の探索
内在する問題意識構造
エイジフリーへの提案として
本 HEART の会ワーキンググループの流れの中で
去来と謝辞

「自画像」ということ

「この世代のひとたち個々人の多様な希望や蓄積してきた経験等が有機的に結合され活用され、また多様な選択肢を持った社会参画・就業等の機能と構造を持った社会を、仮に「先進エイジフリー社会」とよびますと、世界に誇れるこの“自画像”を描くことは意義ある、・・・」

平成11年11月18日発足のこのWG3「先進エイジフリー社会を目指して」の趣旨である。

これは、当時本会の事務局長であられた北畠道俊理事やWG2の主査をしておられた石岡領治氏等と、折に深夜、新しいワーキンググループ(WG)の起案についてファックスをやりとりしたなかで、この「世界に誇れるこの“自画像”を描く」に収束していったものであることを記す。もしかしたら、これで新しいWGがができるかもしれないというなにかがからだの中からこみ上げてくる気を感じたように思う。世界でもっとも早く高齢化社会に入ろうとしている日本が自らに対して、また世界に対して、その姿を具体的に描き出そうという野心的な試みとなる可能性を秘めていると感じたからであった。この時点で、エイジフリーの定義はなにか、自画像とはなにか、また自画像を描くがどういう意味があるのかと考えるとまことに覚束なかなったのではあるが 妙に内心に樂觀させるものがあったと思う。

脳内景観を共有すること

ところで「問題」とはどういう概念であろうか。うっかりするとハムレットの「為すか、為さざるか、それが問題」という次元にとびこんでしまうのであろうが、例えばこういうのはどうであろうか。「海の鯛が資源としていまどうなっているか」という問いを考える。鯛の群れという対象があって、それを資源として見る(「事象」あるいは「表象」)意識が人間側の観察者との間に形成される。このときに問題が形成されたとみよう。そうすると、「エイジフリー」と仮に与えた「事象」にたいして、参加者の持つそれらの事象をつなげて見ようとする意識が何であるかを抽出することが、WGとしての問題の形成であ

り、作業の出発点となるだろうという結論になった。大分、回りくどい説明にはいったが、エイジフリーといったときにわれわれの脳裏にある意識の景観（脳内景観）をみよう。そういう「景観」を「問題」としてとらえようということであったと思う。

したがって、募集趣旨に賛同して集まったメンバーがその時点において、素朴に意識していることがらを出し合うことから始まった。

問題として捉える意識構造

当初に思い当たる事象として、社会経済と人間意識の二つが上げられたが、その何を意識するのが見えていない。つまり、「問題として捉える意識構造」（「問題意識構造」と呼ぼう）が見えてくるかということである。

ところで、メンバーの北畠道教氏の整理によると参加者16名（発足時点）の年齢構成は、1918年（大正7年）生まれにはじまり、1956年（昭和31年）生まれにある。そして平均は1935年生で、平均年齢で68歳（平成15年現在）となる。このことはわれわれの考える事象として自身が対象としての資格をもつこと、自分自身のなかに現われる事象に対する意識をみるという考えにいたる。

つまり第一ステップは「自分の研究」である。

とはいえ、やぶから棒にではやりましょうというわけには行かない。

問題意識構造の探索

取られたステップは、まず簡単な自己紹介とこのWG3に加わってもらった動機や目的を話してもらい、話してもらったことはともかく紙にして資料登録をした。（登録資料は、316通に及んでいる）

また、上記資料を使って、ここに現われた表現が、その人の意識にある「なにか」を表象しているものであろうとして、これを単語化してKJ法的な描画上に載せてみた。（WG1以来の伝統か）WG3としてのこの時点の脳内景観とってよい。

ここでは つぎの三つにまとめられた。

1. 高齢者の社会制度上の問題意識構造
2. 高齢者に内在する問題意識構造
3. 情報ネットワークへの問題意識構造

制度問題と内在問題のふたつについては、当初、ふたつのサブグループで作業がおこなわれた。しかしながら第1章にも触れたように、「エイジフリー社会」への到達方法は一定の方法があるわけではない。1. については取り組みに対しての関心はつよくはあるが、専門の研究機関が行う種類の体系構築的な方法展開が必要であり、これと敢えて競合することは止めて、むしろ各人が持っている考え方を基本にした展開を取る方がこのWG3のもつ特徴を活かすものでありまた、分かり易いという事から 2. の内在意識に焦点を合わせることにした。3. については、本WG3の課題からは別の企画で扱うこととして、検討対象から除くことにした。WG3の過程で、体験実習コースを富士通(株)佐藤芳男氏の

好意で提供していただいた。この体験はメンバーの情報リテラシーを向上させるきっかけとなり、その後、WGのカルチャーを一変するほどの効用をあらわしたことを特記とした。氏にお礼を述べたい。

内在する問題意識構造

ここからつぎの5つの作業に入っていった。

1. 自己紹介をじっくり聞かせてもらう（自画像を書く）
2. 身の回りの感じ方と事象を上げてもらう（アンケートA）
3. 参考になる考え方（文献、著作類が中心になるが）（アンケートB）
4. 上記の過程から考察した見方や考え方を「わたしのワンポイント」エッセイの形で執筆提供する。（自分がいる風景画となろうか）
5. 上記の過程で現われたいくつかの用語について、足下をかためるという意味で、議論し、定義群として登録した。

これらもかならず紙にしてもらい登録番号を付した。特に自己紹介として丁寧に話し、これを聞くことを通じてメンバーの顔ぶれが定着し、出席率が高くなったと思う。素朴なおもしろさがではじめたようである。とにかくそのひとがどのように生きてきたかは迫力がある。勝負は自分自身をどこまで正直にだせるかであるが、たとえば、わたしの「コンサルタント失格の弁」（わたしのワンポイント）などが、メンバーによききっかけをあたえ、相乗作用が出始め内容的に楽しめるものへと行って行ったと思う。（HONEST）がWGの合言葉になった。

エイジフリーへの提案として

問題の意識構造を探るということは、その問題の共有と検証、そして解決法の提案ということになる。本WG3は、基本的にはわれわれに内在する問題意識構造を個々のなかから抽出し、出来るかぎり明示的にしようということに終始した。したがってここからの発信という形で第4章に提言を行っている。発信先は二つある。

- ひとつは 同年代への「わたしたちへのメッセージ」であり、
 - もうひとつは 若いひとへの「きみたちへのメッセージ」である。
- このような意識で提案をお読みいただきたい。

本HEARTの会ワーキンググループの流れの中で

さて、今回のWS3「先進エイジフリー社会を目指して」は、先陣の藤田慶喜グループ「人間活性化と環境～自立社会を目指して」（平成8年7月）をWG1とし、石岡領治グループ「汎用材料と環境問題～プラスチック材料が環境問題を克服するための方向を探る」（平成11年4月）をWG2とし、それに続くワーキンググループである。HEARTの会は、これまでのワーキンググループを経て、いくつかのことがエスプリとして継承し、

会の文化として共有されてきたと思っている。

たとえば、つぎのことを上げよう。

- *地球市民の立場から考える
- *自分を相手の立場に置き換えて考えるのがよい
- *考えることを楽しくする材料を投げかけるのがよい
- *専門の立場は、大いに結構である
- *いつも簡単な検証を付す立場がよい
- *なによりも、一度笑ってしまうのがよい（エスプリとよぶ）

われわれのWG3は、エスプリを継承し、つぎのものを共有することになった。

- *可能なかぎりにおいて自分にHONEST（誠実）であることをひそかに誓う
- *自由に話してもらったことは、ドキュメントで残してもらう
- *いま、話していることは、誰の視線であるかを意識しておく
- *これまで生きてきたことにおいて、これから生きることに意識する
- *自分の中で認める自分の価値・評価と他人が認めるそれらを意識する
- *強者と弱者問題の視線をもつ
- *意識と非意識問題の視線をもつ

去来と謝辞

さて、WG3は、平成11年11月18日発足以来、あしかけ5年を経過し、この間、実に全員が、39回の会合をこなし、文字通り雨の日も、風の日もこの作業に通い詰めてもらった。提出された報告書も300通を越えている。このようなメンバーの努力に深甚なる敬意を表するものである。また、HEARTの会の理事会の応援も感謝したい。

メンバーにとっては、生涯のまとめの作業であったと思うこと、HONEST（誠実）に語ることによる深い充実感のあれかしと願うものである。一方、まとめることからくる終末安堵感を享受してしまうことも否定できないと思うが、ここから「動的な」エイジフリーが始まるのでなければ、世界に向けて投掛ける「自画像」とはならないであろう。

本報告書がそのための一里塚であることをメンバーともども確認するものである。

なお、本ワーキンググループのメンバーではないが、参加協力をいただいた方々、有山清、石岡領治、関弘之、佐藤芳男、吉川俊郎（五十音順、敬称略）には深甚なる謝意を表するものである。

平成15年5月20日

第6章 主査のまとめ

第6章 主査のまとめ

荒井 康全

さて、ここで 本WGの作業全体のまとめを述べなければならないが、以下に 複数のメンバーから寄せられたまとめの所見をお読みいただきたい。

まとめ1

私たちの作業は「自画像」を描くことによって、“エイジフリー社会は何か”を探る作業であった。私自身を描くことは、私が生き抜いてきたこれまでの長い時代との関わりを描くことでもあった。私は時代に育てられながら、時に時代に反発し、また協力しつつ、あるべき姿を、あるべき時代の形に重ね合わせて求めてきたように思う。

メンバーの方々の自画像から紡ぎ出された“あるべきエイジフリー社会”の姿は、それぞれの人生経験から選択されたかけがえのない指標であり、表現こそ違え、納得し共感できる共通の目標社会それぞれの姿であると強く感じている。

まとめ2

私たちは、議論の末、今後の日本社会が経験豊富な高齢者、活動力豊かな若者もともに協力しあって、自然と共生しながら生活していく活力ある社会へ変革していく必要があるとの共通の認識で一致した。現在の日本の現状はこの目標から大きくずれているので、目標達成は容易ではない。

近道があるわけではない。またその作業は誰か外国人がやってくれることではなく、日本人自身が行わなければならない作業である。

私たち一人一人が自分で考えて、自分で出来ることを見つけ、それを実行していく以外に方法はないと思う。そのために、皆が共通の目標を持ち、目標達成のために大いに議論を重ねる必要がある。私たちの自画像はその場合に大いに役立つと信じている。

まとめのまとめとして

わたしたちの作業は、「この世代のひとたち個々人の多様な希望や蓄積してきた経験等が有機的に結合され活用され、また多様な選択肢を持った社会参画・就業等の機能と構造を持った社会を、仮に『先進エイジフリー社会』とよびますと、世界に誇れるこの“自画像”を描くことは意義ある、・・・」とし、この報告書の表題を「先進エイジフリー社会を目指して」とし、副題を「自画像からの提言」とした。

自画像とはなにか、レンブラントは何を語ろうとしたかなどあらためて問うことにもなるが、この形からくる提言はあくまでも個々の自画像から読みとっていただきたいと思う。

上のふたつのまとめは、お読みいただく方からの反応を求め、問い掛けているものごと

理解いただきたい。諸賢の忌憚なきご意見及びご批判をいただければ幸甚です。

「いま、01. 9. 11の同時多発テロに始まり、アフガニスタン侵攻があり、そして米英軍によるイラク侵攻が始まった。また北朝鮮からの安全脅威も含め世界的な安全保障の危機の気配を予感せしめるものがある。」

これは、この章の草稿を書いた平成15年3月末の事態であった。その後の推移はご承知の通りであるが、事態の深刻さはむしろ進行しているようである。

先が見えない。このときこそ、冷静に見据えて、事象を問題意識構造として捉え、無意識にある潜在的ななにかを 意識に顕在化し、できることを具体的な形で発信していくこと、そういう叡智がもとめられているように思う。エイジフリーである・

平成15年5月20日

WG3 主査 荒井康全

添付資料 ハートの会WG3資料

HEART の会WG 3 資料

- WG 3-000 人間環境活性化研究会W/G 3 資料 (99/11 稿)
- WG 3-001 荒井康全 WG 3 へのメモ(99/11/18) ”先進エイジフリーを目指して”一少子高齢化など新時代の構造化を探り、それぞれの社会参画、適応などについて考える一 99/11/18
- WG 3-002 藤井勲 (EIS 環境情報メモ) 人間環境活性化研究会W/G 3 「熟年の社会参加」のあり方について 99/7/8
- WG 3-003 (有) 環境情報システム 経歴書: 藤井勲 [(有) 環境情報システム代表取締役] 1999/5/24
- WG 3-004 森山憲夫 自己紹介 99/11/18
- WG 3-005 関 弘之 自己紹介 99/11/18
- WG 3-006 佐藤芳男 自己紹介資料 99/11/18
- WG 3-007 荒井提供 資料 (日経 エルダー経済日本 99/9/12、/31、/14、/16、/7、/8、/9、/10、/11、)
- WG 3-008 荒井提供 資料 (大橋勇雄 「高齢者雇用を見直す」 学士会報 NO. 1999-10)
- WG 3-009 荒井提供 資料 (長谷川徳之輔 「変わる土地不動産」 学士会報 NO. 1999-10)
- WG 3-010 人間環境活性化研究会事務局 第2回W/G-3 集会のお知らせ 99/12/3
- WG 3-011 人間環境活性化研究会事務局 (W/G-3 募集案内) 99/10)
- WG 3-012 有山 清 「先進エイジフリー社会を目指して」参加自己紹介 99/12/14
- WG 3-013 吉川俊郎 「自己紹介」 99/12/14
- WG 3-014
- WG 3-015 北島道教 「自己紹介」 99/11/25
- WG 3-016 栗原 一 「自己紹介」 99/12/12
- WG 3-017 荒井康全 W/G 3 に加わるに当たっての吾が状況について 99/11/17
- WG 3-018 北島道俊 自己紹介 W/G-3 にて 1999/12/17 99/12/7
- WG 3-019 安達勝雄 先進エイジフリー社会を目指して 一自己紹介一99/12/17
- WG 3-020 寺川 彰 自己紹介 99/12/16
- WG 3-021 石岡領治 自己紹介 99/12/17
- WG 3-022 圓山壽和 「W/G-3 先進エイジフリー社会を目指して」に参加するに当たって 99/12/20
- WG 3-023 圓山壽和 ハートの会 W/G-3 の新企画に当たって 99/12/20
- WG 3-024 連絡文書「中高年者と情報化時代、Q&A. の集い」

- WG3-025 荒井康全 わたしの「自己紹介」99/12/16
- WG3-026 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(1)(99/12/20稿)
- WG3-027 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(2)「ハイデッガーの3つの退屈」(99/12/20稿)
- WG3-028 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(3)「W/G-3作業計画レジメ(00/1/20案)」(00/1/20稿)
- WG3-029 荒井康全 W/G-3自己紹介からのKEYWORDS構成-1(00/1/20)
- WG3-030 森山憲夫 「中高齢者の方のパソコンについてのアンケート(99・11)」
- WG3-031 荒井康全 W/G-3サブグループ案(00/1/20)
- WG3-032 石井登喜男 自己紹介(00/1/20)
- WG3-033 石井登喜男 「栗原一様、奥様」(00/1/20)
- WG3-034 北畠道俊 W/G-3へのMEMO-(1) 「中高年と情報化時代、Q&Aの集い」の実施案内のこと
- WG3-035 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(9)「高齢者問題、身のまわりの事象と感じ方 例」(00/1/31稿)
- WG3-036 荒井康全 [PCの進め/WEBの勧め](00/2/16)
- WG3-037 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(7)「科学と技術の適用(役にたてるための)構造」(00/2/29稿)
- WG3-038 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(5)「弱者問題の構造モデル」(00/2/29稿)
- WG3-039 北畠道俊 W/G-3 2000-2-29 「中高年と情報化時代、Q&Aの集い(1)」(2000.2.22の概要報告)
- WG3-040 藤井勲「持続可能社会への転換のために」(00/2/23)
- WG3-041 石井登喜男「自分探しの旅その2(21世紀を覗く)」(平成9年末作成)
- WG3-042 植竹俊夫「Age-Freeとは何か?」(00/2/23)
- WG3-043 荒井康全 参考資料(自由、責任) 岩波「哲学・思想事典」(00/23/29)
- WG3-044 石井登喜男 「自己雇用と言うこと」(2000/1/20)
- WG3-045 北畠道俊 「W/G3-0015」[当日発言時間切れのもの](2000/1/20)
- WG3-046 北畠道俊 「作業2. アンケートAの提出(1)」(00/3/29)
- WG3-047 安達勝雄「Age d Peopleの役割」(00/3/29)
- WG3-048 北畠道俊「作業2アンケートBの提出」(00/3/29)
- WG3-049 石井登喜男 「植竹氏の「エイジフリー論」について」(00/3/29)
- WG3-050 栗原 一 資料(00/3/29)(自己中、共生、循環等)
- WG3-051 寺川 彰 「W/G-3 課題」(00/3/29)

- WG3-052 藤井 勲 資料(「挑戦する企業経営者」 SOLVE 2月号/2000年)(00・3・29)
- WG3-053 人間環境活性化研究会事務局 「WG3集会についての連絡事項」(00/3/2)
- WG3-054 安達勝雄 「作業2. アンケートA」(老人組合、老人の入院患者、核家族)(00・3・29)
- WG3-055 安達勝雄 「作業2. アンケートB」(人生後半の戦略を考える46のヒント、高齢者の後見、外国人労働者の受入)(00・3・29)
- WG3-056 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(4)「ハイデッガーに答える? モーパッサン ~19世紀からの返書~00/01/30」(00/5/9)
- WG3-057 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(8)「ことばの定義もしくは説明(GLOSSARY) ; [暗黙知]」(00/5/9)
- WG3-058 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(6)「「ある」ということの構造モデル~00/01/31」(00/5/9)
- WG3-059 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(10)「事例 キーワード「科学哲学」からの始まる連結」~00/01/31」(00/5/9)
- WG3-060 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(11)「ことばの定義もしくは説明(GLOSSARY) ; [パラダイム]」(00/5/9)
- WG3-061 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(8)「ことばの定義もしくは説明(GLOSSARY) ; [新科学哲学]」(00/5/9)
- WG3-062 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(8)「ことばの定義もしくは説明(GLOSSARY) ; [科学的リサーチ・プログラム]」(00/5/9)
- WG3-063 荒井康全 エイジフリーについて、切り口と連想(14)「お稽古事のまとめ~ `わたしの羊よ`、声楽レッスンの10年に思うことごと」(00/5/9)
- WG3-064 荒井康全 身近の事象と感じ方アンケートA回答集(00/5/9)
- WG3-065 荒井康全 WG-3サブグループ名簿(00/5/9)
- WG3-066 石井登喜男 エージフリー社会を目指して(00/5/9)
- WG3-067 石井登喜男 ”日本再生はIT革命と正面から向き合うことから始まる” 寺島実郎(三井物産戦略研究所所長)(00/5/9)
- WG3-068 北畠道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連するノート(1)(00/5/9)
- WG3-069 安達勝雄 アンケートA 身近の事象(00/5/8)
- WG3-070 寺川 彰 現象と感想(00/5/9)
- WG3-071 寺川 彰 WG-3集会についての連絡事項(00/4/2)
- WG3-072 圓山壽和 新世紀を語る(朝日新聞2000-5-1)

- WG3-073 事務局 WG-3集会についてのご連絡事項(平成12年5月12日)
- WG3-074 石井登喜男 金子勝氏の「セーフティネットの政治経済」を読んで
00/6/5
- WG3-075 北畠道俊 W/G-3. 2000 6-9 [エイジフリー、人間環境の問題構造
を考える]に関連するノート(2)
- WG3-076 圓山壽和 塩野谷祐一 「発展の成果」の認識深めよ(日経 99/12
/31)
- WG3-077 圓山壽和 島田晴雄 「失業が怖くない社会創れ」(日経 00/5/12)
- WG3-078 石井登喜男 WG-3グループ1・3(00/6/5)作業報告 「エ
ージフリー社会構造・情報化社会を考える基本的事項」00/7/11
- WG3-079 a 荒井 WG-3グループ2・4(00/6/5)作業報告 {老人は弱
い、でも大丈夫} 00/7/11
- WG3-079 b 事務局 身近の事象と感じ方 アンケートA(WG3-064増補)
- WG3-080 荒井康全提供 glossary of Kant's techni
cal terms ~カントによる技術用語の定義~
- WG3-081 安達勝雄 AgeFree社会になった場合の老人の問題
00/7/11
- WG3-082 北畠道俊 WG3 20007-11「エイジフリー、人間環境の問題
構造を考える」に関連するノート(3)00/7/11
- WG3-083 石井登喜男 「エイジフリー社会を目指して」(その3)00/7/11
- WG3-084 事務局 WG-3集会についてのご連絡 平成12年6月11日
- WG3-085 圓山壽和提供 陣内秀信 (ベネチアの時間・地上の楽園・海辺の散歩・
古道の力) 朝日新聞 時のかたち欄 平成12年6月20日、2
1日、22日、23日
- WG3-086 石井登喜男 WG-3グループ1・3(00/7/11)作業報告 「エ
ージフリー社会構造・情報化社会を考える基本的事項 規範とすべき
もの」00/8/5
- WG3-087 荒井 WG-3グループ2・4(00/6/5)作業報告「うたを忘れ
たカナリヤは、」 00/7/11
- WG3-088 荒井康全 章立ての検討 WG3報告書00/8/7
- WG3-089 石井登喜男 「規範」についての提案 00/8/7
- WG3-090 北畠道俊 W/G-3 2000-8-07集会 「エイジフリー、人
間環境の問題構造を考える」に関するノート(4)00/8/7
- WG3-091 北畠道教 (W/G3-0015)サブグループ1 エイ
ジフリー、社会構造の問題構造(点)を考える 00/2/29
- WG3-092 北畠道教 (W/G3-0015)サブグループ2 エイジフリー、
人間環境の問題構造を考える 00/6/6

- WG3-093 事務局 第8回WG-3集会についてのご連絡事項 00/7/14
- WG3-094 圓山壽和 WG-3 先進エイジフリー社会を目指して これまでの議論を振り返ってのメモ 00/8/7
- WG3-095 荒井 通産公報 No. 14314~14317 「躍動する個人の確かな国家を目指して」(1)~(4)
- WG3-096 事務局 第9回WG-3集会についてのご連絡事項 00/8/12
- WG3-097 圓山壽和 川越市教育委員会 市立大学設立準備事業推進における基本的視点 00/8/1
- WG3-098 圓山壽和 「躍動する個人と確かな国家」要点メモ 00/8/12
- WG3-099 圓山壽和 村田 治 生涯学習時代における大学の戦略 ナカニシ出版 99/3/31発行
- WG3-100 北畠道俊 W/G-3 2000-8-07集会 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考えるに関連するノート(5) 00/9/21
- WG3-101 石井登喜男 アンケートAの分類 00/9/21
- WG3-102 (欠番)
- WG3-103 藤井 勲 「先進エイジフリー社会を目指して」について想うこと 00/9/21
- WG3-104 荒井康全 「書林浴は、如何？」 武蔵工業大学図書館報 No. 25 2000.6
- WG3-105 事務局 第10回WG-3集会についてのご連絡事項 00/9/28
- WG3-106 寺川 彰 第11回WG-3集会資料(私のエイジフリー社会の定義参考論文) 00/10/26
- WG3-107 石井登喜男「産構審：21世紀経済産業政策の課題と展望」を批判的に読む 00/10/26
- WG3-108 石井登喜男 エイジフリー社会を目指して(その3) 00/10/26
- WG3-109 北畠道俊 W/G-3 2000-10-26集会 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考えるに関連するノート(6) 00/10/26
- WG3-110 栗原 一氏 提供資料(エイジフリー社会とは 身近の事象「日本人の忘れたもの」 朝日 声欄 00/8/2
- WG3-111 藤井 勲 よくわかる廃棄物処理法「実質100条」の規制法 80 日経エコロジー 2000年11月
- WG3-112 寺川 彰 アンケートB;参考文献 00/10/26
- WG3-113 石井登喜男 アンケートAの追加 00/9/30
- WG3-114 圓山壽和 エイジフリー社会 00/10/26
- WG3-115 圓山壽和 WG-3 「エイジフリー社会を目指して」 00/9/24
- WG3-116 第11回WG-3集会における資料送付及びご連絡事項

- WG3-117 北畠道俊 W/G-3 2000-11-28集会 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考えるに関連するノート(7) 00/12/20
- WG3-118 藤井 勲 アンケートA 最近の新聞記事から 00/11/28
- WG3-119 寺川 彰 アンケートA 身近な事象と意見 00/11/28
- WG3-120 北畠道俊 資料105 (12.9.28) の宿題 私のエイジフリーの定義
- WG3-121 石井登喜男 WG3報告書のまとめについて 00/11/28
- WG3-122 圓山壽和 朝日夕刊 00/6/30 論壇時評00/11/28
- WG3-123 圓山壽和 「ハートの会」ワーキンググループIII メインテーマ・「エイジフリー社会を目指して」の一検討素材として (資料115)
- WG3-124 事務局 第12回WG-3集会における資料送付及びご連絡事項
00/12/12
- WG3-125 栗原 一 「生きる道」ある教育者の悲劇 添付資料(山口多賀司 「大競争時代のキーワード」 日刊工業 私の主張 00/12/18
- WG3-126 北畠道俊 W/G-3 2000-10-26集会 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考えるに関連するノート(8) 00/12/20
- WG3-127 圓山壽和 エイジフリーへ向かって ~私のパラダイム転換の歩み~ 00/12/20
- WG3-128 寺川 彰 第13回WG-3集会における資料送付及びご連絡事項01/1/22
- WG3-129 寺川 彰 第14回WG-3集会資料(エイジフリーの定義) 01/1/22
- WG3-130 石井登喜男 時代の影響を受けた私の仕事01/1/22
- WG3-131 北畠道俊 先進エイジフリーについてのワーキンググループ参加動機と自己紹介 01/1/22
- WG3-132 北畠道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連するノート(9) 01/1/22
- WG3-133 藤井 勲 アンケートA 最近の新聞記事から 01/1/22
- WG3-134 藤井 勲 ぜみなーる 01/1/22
- WG3-135 藤井 勲 よくわかる廃棄物処理法④日経エコロジー/2001年2月号 01/1/22
- WG3-136 石井登喜男 エイジフリーの定義について 01/1/22
- WG3-137 圓山壽和 エイジフリーの定義について 01/1/22
- WG3-138 安達勝雄 AGE FREE 社会とは 01/1/22
- WG3-139 藤井 勲 「エイジフリー」の定義について 01/1/22
- WG3-140 荒井康全 章立ての検討 01/1/22
- WG3-141 圓山壽和 地球と人間の世紀 日本経済新聞/2001年1月8日号

01/1/22

- WG3-142 森山憲夫 俺の20世紀には何が起こったか 01/1/22
- WG3-143 寺川 彰 第14回WG-3集会における送付及びご連絡事項 01/2/26
- WG3-144 北畠道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連するノート(10) (エイジフリーの定義) 01/2/26
- WG3-145 北畠道俊 「わたしのエイジフリー、わたしの自画像」01/2/26
- WG3-146 石井登喜男 報告書のまとめ第3章 2) グループ1, 3の作業結果について 01/2/26
- WG3-147 石井登喜男 第5章 エイジフリー社会実現のための私の提案 01/2/26
- WG3-148 寺川 彰 第15回WG-3集会における資料送付及びご連絡事項 01/3/28
- WG3-149 藤井 勲 「わたしの自画像」 01/3/27
- WG3-150 北畠道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連するノート(11) (W/G-3 2001.03.27集会) 01/3/27
- WG3-151 北畠道俊 エイジフリー社会実現のための私の提案(アプローチ版)(W/G-3 2001.03.27 ノート(11)*2該当 別紙提出資料)
- WG3-152 安達勝雄 AGED FREE社会に関する私の提案01/3/26
- WG3-153 栗原 一 エイジフリー社会の実現のための私の提案01/3/28
- WG3-154 寺川 彰 エイジフリー社会を目指して 01/3/28
- WG3-155 藤井 勲 ハートの会/WG-3懇親研修会のご案内
平成13年参月19日
- WG3-156 圓山壽和 エイジフリーへ向かって・私のパラダイム転換の歩み NPOマインドの発見と自由な遊び心 -自己蘇生へ向けての自分への旅-
〔「ハートの会」(WGⅢ)・課題
「エイジフリー社会を目指して」の検討素材〕 01/3/28
- WG3-157 寺川 彰 第16回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項
01/4/22
- WG3-158 石井登喜男 WG-3 報告書のまとめ方について(アプローチ版) 01/4/22
- WG3-159 北畠道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連するノート(12) 01/4/22
- WG3-160 北畠道俊 エイジフリー社会実現のための私の提案(前回のアプローチ版の修正、完) 01/4/22
- WG3-161 北畠道俊 身近の事象と感じ方 アンケート A 分析の結果(検討稿)
01/4/22
- WG3-162 植竹敏夫 「大失業時代」を読む 01/4/22

- WG3-163 荒井康全 わたしたちへのメッセージ、君たちへのメッセージ」01/4/22
- WG3-000 (164) 荒井康全 人間環境活性化研究 W/G3資料 01/4/22
- WG3-165 寺川彰 第17回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項 01/5/28
- WG3-166 北島道俊 2001-4-22 終日集会のコンピュータ写真 01/5/28
- WG3-167 北島道俊 エッセイ 01/5/28
- WG3-168 安達勝雄 「エイジフリー社会とは」 01/5/28
- WG3-169 寺川彰 「私のエイジフリーとは」 01/5/28
- WG3-170 石井登喜男 用語の定義 01/5/28
- WG3-171 北島道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連する
ノート(13) 01/5/28
- WG3-172 圓山壽和 「エイジフリー社会」の定義 01/5/28
- WG3-173 圓山壽和 “スウェーデンに両立の道” 日本経済新聞(2001-5-
16) 01/5/28
- WG3-174 寺川 彰 第18回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項 01/7/2
- WG3-175 安達勝雄 僕の記録 01/7/2
- WG3-176 栗原 一 私の自画像 01/7/2
- WG3-177 北島道俊 「エイジフリー、人間環境を考える」に関連するノート(1
4) 01/7/2
- WG3-178 石井登喜男 用語の定義 01/7/2
- WG3-179 栗原 一 用語の定義「自己中」01/7/2
- WG3-180 石井登喜男 エイジフリーの定義について 01/7/2
- WG3-181 圓山壽和 私の自画像 サブタイトル・・最近の心境 01/7/2
- WG3-182 寺川 彰 第19回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項
01/8/4
- WG3-183 栗原 一 私の自画像を書き終えて 01/8/4
- WG3-184 藤井 勲 私の自画像(その1) 01/8/4
- WG3-185 寺川 彰 私の自画像 01/8/4
- WG3-186 安達勝雄 参考になる文献 01/8/4
- WG3-187 北島道俊 エイジフリー社会実現のための私の提案 01/8/4
- WG3-188 北島道俊 先進エイジフリー社会を目指して私の提案 01/8/4
- WG3-189 寺川 彰 第20回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項
01/9/21
- WG3-190 北島道俊 大學(旧制)時代(昭和20年・1945~昭和23年) 01/9/21
- WG3-191 藤井 勲 わたしの自画像(その2) 01/9/21
- WG3-192 栗原 一 用語の定義「共生」 01/9/21
- WG3-193 栗原 一 用語の定義「自己中」 01/9/21
- WG3-194 石井登喜男文献紹介:「歴史とは何か」岡田英弘、文春新書、13.2.20

01/9/21

- WG3-195 寺川 彰 先進エイジフリーに向けて私の提案 01/9/21
WG3-196 荒井康全 A dictionary by and any other name is not so sweet 01/9/21
WG3-197 圓山壽和 セーフティネットの定義 01/9/21
WG3-198 圓山壽和 “今日と違う明日：堺屋太一” 01/9/21
WG3-199 圓山壽和 “日本人の劣化「脳」：養老孟司” 01/9/21
WG3-200 圓山壽和 “私の履歴書：村上信夫、日本経済新聞” 01/9/21
WG3-201 圓山壽和 “自由と秩序他、：猪木武徳、Sunday Nikkei 読書欄 01/9/21
WG3-202 寺川 彰 第21回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項

01/10/8

- WG3-203 北島道俊 会社勤務1、研究開発昭和2職務時代（昭和23年1948～昭和47年） 01/10/8
WG3-204 藤井 勲 「先進エイジフリー」へ向けて 私の提案 01/10/8
WG3-205 圓山壽和 自由と秩序：猪木武徳著 の抜粋 01/10/8
WG3-206 森山憲夫 顛末書/今田美奈子お菓子教室 01/10/8
WG3-207 寺川 彰 第22回 WG-3 集会における資料送付及びご連絡事項

01/11/3

- WG3-208 栗原 一 私の今 私の自画像を完結する為に 01/11/3
WG3-209 北島道俊 会社勤務2. 関連会社役員時代（昭和48年・1973～平成2年）

01/11/3

- WG3-210-1 北島道俊 石油危機、そしてわれわれの今後の課題（1974.6 No.41）

01/11/3

- WG3-210-2 北島道俊 企業と社会的責任と徳石(1975.9 No.45) 01/11/3
WG3-210-3 北島道俊 最高から最効へ(1976.8 No.49) 01/11/3
WG3-210-4 北島道俊 青春は感動する(1978,新春 No.53) 01/11/3
WG3-210-5 北島道俊 低成長時代の課題(1978.12 No.56) 01/11/3
WG3-210-6 北島道俊 溶剤市場の開発(1982.新春 No.63) 01/11/3
WG3-210-7 北島道俊 1983新春 徳石の基本体質について 部分 01/11/3
WG3-210-8 北島道俊 昨年の成果の上に(1984.新春 No.68) 01/11/3
WG3-210-9 北島道俊 工場長退任のご挨拶(1984.12 No.69) 01/11/3
WG3-210-10 北島道俊 交わりを原点とする業容の拡大(1985.新春 No.70) 01/11/3
WG3-210-11 北島道俊 異分野との接点(1985.9 No.72) 01/11/3
WG3-210-12 北島道俊 再びよろしく(1985.12 No.73) 01/11/3
WG3-210-14 北島道俊 品質で信頼される徳石に(1987.12 No.81) 01/11/3
WG3-210-15 北島道俊 技術開発センター完成を機に開発体質の飛躍的革新を(1990.新春 No.89) 01/11/3
WG3-210-16 北島道俊 役員退任にあたり(1990.5 No.90) 01/11/3

- WG3-211 圓山壽和 公共的理性の定義 01/11/3
- WG3-212 圓山壽和 川越シティカレッジ講座 環境問題基礎コース 03/1/10
- WG3-213 石井登喜男 「自由と規律」を読んで 03/1/10
- WG3-214 圓山壽和 「エイジフリー社会へ向かって」・私の提案を書くにあたって
(これまでに提出された提案を集めた資料) 02/1/10
- WG3-215 石井登喜男 WG-3に参加して学んだこと 02/1/10
- WG3-216 圓山壽和 グローバル化という試練：朝日新聞 13.12.5 (水)
第1回大佛次郎論壇賞大野健一氏：朝日新聞 13.12.4 (火)
「21世紀私たちは」から：朝日新聞：1999.12.5
- WG3-217 圓山壽和 思潮21：朝日新聞夕刊 13.2.2 02/1/10
- WG3-218 荒井康全 荒井康全 (Augustine Berque Where is Knowledge?
獨協国際交流年報第14号, 2001 獨協大学) 02/1/10
- WG3-219 藤井 勲 「バイオテクノロジーの最新動向セミナーと親睦会」ご案内
02/2/12
- WG3-220 北畠道俊 2.9. 会社勤務3、常勤顧問時代(平成2年・1990
～平成5年) 02/2/12
- WG3-221 圓山壽和 エイジフリー社会実現のための私の提案・提出資料一覧
02/2/12
- WG3-222 荒井康全 A1431 自分の研究資料(その1) セコンドの職業から自
己を振り返ること 02/2/12
- WG3-223 寺川 彰 第26回WG-3集会における資料及びご連絡事項 02/2/12
- WG3-224 北畠道俊 3/30(土)「横浜山手方面散策懇談会」のご案内 02/2/12
- WG3-225 石井登喜男 エイジフリー社会実現のための私の提案 02/2/12
- WG3-226 北畠道俊 学問の創造—科学と人間の未来—：福井謙一 02/2/12
- WG3-227 圓山壽和 自画像 エイジフリーへ向かって・私のパラダイム転換の歩
み —自己蘇生へ向けて自分への旅—02/2/12
- WG3-228 安達勝雄 WG-3参考になる文献 02/4/20
- WG3-229 栗原 一 よこはま瓦版—神奈川新聞(平成14年4月2日版) 02/4/20
- WG3-230 寺川 彰 第27回WG-3集会における資料及びご連絡事項 02/4/20
- WG3-231 寺川 彰 第28回WG-3集会における資料及びご連絡事項 02/5/25
- WG3-232 栗原 一 私の主張、最近のニュースより 02/5/25
- WG3-233 圓山壽和 NPOに人生の可能性をみる今の私 市役所人生30年の職
歴を記しつつ胸に去来するもの 02/5/25
- WG3-234 寺川 彰 第29回WG-3集会における資料及びご連絡事項 02/6/30
- WG3-235 石井登喜男 WG-3報告書のまとめについて(アプローチ版) 02/6/30
- WG3-236 荒井康全 WG-3報告書のまとめについて(アプローチ版) 02/6/30
- WG3-237 荒井康全 2001年国際収支；日本経済新聞2月14日 02/6/30

- WG3-238 寺川 彰 第30回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 02/7/24
- WG3-239 荒井康全 メール 02/7/24
- WG3-240 寺川 彰 アンケート A : 身近な事象の考え方 02/7/24
- WG3-241 寺川 彰 学習の感想 02/7/24
- WG3-242 北島道教 学習の感想 02/7/24
- WG3-243 栗原 一 技術者 'Essay 02/7/24
- WG3-244 寺川 彰 第31回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 02/8/24
- WG3-245 北島道俊 「わたしのエイジフリー、わたしの自画像」 02/8/24
- WG3-246 藤井 勲 「わたしの自画像」まとめ 02/8/24
- WG3-247 安達勝雄 参考になる文献 02/8/24
- WG3-248 北島道教 学習の感想 02/8/24
- WG3-249 圓山壽和 学習の感想—WG3に参加して得たもの—02/8/24
- WG3-250 藤井 勲 長い旅の末 ; 学習の感想 02/8/24
- WG3-251 北島道俊 アンケート A のまとめかたについての石井氏へのメッセージ
02/8/24
- WG3-252 北島道俊 アンケート A に関する経緯 (過去資料の摘出) 02/8/24
- WG3-253 北島道俊 身近な事象と感じ方 アンケート A 分析の結果 (検討稿)
02/8/24
- WG3-254 藤井 勲 身近な事象と感じ方 (アンケート A) 02/8/24
- WG3-255 藤井 勲 「出版本」を前提とした「タイトル」と「章立て」(案) 02/8/24
- WG3-256 寺川 彰 第32回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 02/10/6
- WG3-257 寺川 彰 私の自画像 (修正) 02/10/6
- WG3-258 栗原 一 私の自画像 (修正) 02/10/6
- WG3-259-1 栗原 一 用語の定義 (1) 「自己中」 02/10/6
- WG3-259-2 栗原 一 用語の定義 (2) 「共生」 02/10/6
- WG3-259-3 栗原 一 用語の定義 (3) 「循環」 02/10/6
- WG3-260 栗原 一 エイジフリー社会実現のための私の提案 02/10/6
- WG3-261 栗原 一 長い旅の末 : 学習の感想 02/10/6
- WG3-262 栗原 一 日本登山界の父、ヨコハマパンチ、とんぼと遊ぼう 02/10/6
- WG3-263 安達勝雄 WG-3に参加して 02/10/6
- WG3-264 北島道俊 身近の事象と感じ方 アンケート A の分析 02/10/6
- WG3-265 北島道教 私の自画像と私のエイジフリー 02/10/6
- WG3-266 北島道教 H.9.8.31 付「省庁大編成6」を読んで 02/10/6
- WG3-267 石井登喜男 目次 02/10/6
- WG3-268 寺川 彰 第33回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 02/11/8
- WG3-269 植竹敏夫 植竹敏夫個人歴 02/11/8
- WG3-270 荒井康全 WG3 (荒井自画像原稿案 021027) 02/11/8

- WG3-271 荒井康全 予備コンテクスト 02/11/8
- WG3-272 北島道俊 エイジフリー社会実現のための私の提案 02/11/8
- WG3-273 北島道俊 長い旅の末；学習の感想 02/11/8
- WG3-274 北島道俊 写真 02/11/8
- WG3-275 北島道俊 参考資料（岩村信二氏） 02/11/8
- WG3-276 栗原 一 よこはま瓦版「日本山岳界の父」賞賛 02/11/8
- WG3-277 石井登喜男 荒井さんへの連絡事項 02/11/8
- WG3-278 荒井康全 報告書目次並びに構成案 02/12/10
- WG3-279 全員 報告書目次案 02/12/10
- WG3-280 北島道俊 採用した言葉の注 「免疫」・「自己と非自己」 02/12/10
- WG3-281 寺川 彰 第34回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 02/12/10
- WG3-282 寺川 彰 第35回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 03/2/10
- WG3-283 北島道俊 新日鉄研修センターにおける写真 03/2/10
- WG3-284 安達勝雄 私の自画像（安達） 03/2/10
- WG3-285 荒井康全 習作自画像 03/2/10
- WG3-286 安達勝雄 参考になる資料（文献）—1、参考になる資料（メンバー作品）—2 03-1-10 03/2/10
- WG3-287 石井登喜男 目次 03/2/10
- WG3-288 荒井康全 先進エイジフリー社会を目指して 03/2/10
- WG3-289 圓山壽和 川越シティカレッジ懸賞論文—入選作品集— 03/2/10
- WG3-290 寺川 彰 第36回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項 03/3/20
- WG3-291 石井登喜男 “先進エイジフリー社会を目指して” 03/3/20
- WG3-292 石井登喜男 第2章 参考になる見方、考え方 03/3/20
- WG3-293 北島道俊 WG-3 第2章 参考になる考え方の一項目の原稿として提出
03/3/20
- WG3-294 植竹敏夫 自由論 03/3/20
- WG3-295 北島道俊 「エイジフリー、人間環境の問題構造を考える」に関連する
ノート（14） 03/3/20
- WG3-296 栗原 一 よこはま瓦版 神奈川新聞 2003年2月4日 03/3/20
- WG3-297 藤井 勲 「森林と里山の再生と保存」に関する意見（案）について
03/3/20
- WG3-298 寺川彰 第37回 WG-3 集会における資料及びご連絡事項
- WG3-299 北島道俊 写真(2002.12.1代々木倶楽部で撮影)
- WG3-300 森山憲夫 [私の出来事]と[日本の出来事]
- WG3-301 荒井康全 図1.1～1.3:先進エイジフリーを目指して
- WG3-302 荒井康全 第6章主査のまとめ～長い旅の末；学習の感想
- WG3-303 藤井勲 消費&マーケティング

- WG3-304 石井登喜男 先進エイジフリー社会を目指して(まとめ資料)
- WG3-305 寺川彰 第38回WG-3集会における資料及びご連絡事項
- WG3-306 荒井康全 人間環境活性化研究会WG3資料(2001/04/21)
- WG3-307 // (つづき)
- WG3-308 藤井勲 環境・エネルギー・廃棄物コンサルタントとしての[視点]⑱
- WG3-309 // ⑲
- WG3-310 石井登喜男 目次
- WG3-311 石井登喜男 第2章 参考になる見方・考え方
- WG3-312 石井登喜男 自画像 略歴
- WG3-313 荒井康全 第6章主査のまとめ～長い旅の末；学習の感想
- WG3-314 北島道俊 報告書で気がついたこと
- WG3-315 荒井康全 コラボ・ブックス
- WG3-316 荒井康全 題名 今井さん荒井康全です

著者略歴

1. 北畠道教 1918 年生、大田区在住
元国家公務員(郵政 OB)
2. 安達勝雄 1925 年生、横浜市磯子区在住、
元日本プラント協会理事、
人間環境活性化研究会 常務理事
3. 北畠道俊 1925 年生、横浜市南区在住、
元徳山石油化学(株)専務、
人間環境活性化研究会 代表代行
4. 寺川 彰 1927 年生、横浜市青葉区在住、
元(株)エス・ディーエス・バイオテック理事、
人間環境活性化研究会 常務理事
5. 栗原 一 1934 年生、横浜市中区在住、
元(株)山下設計取締役北海道支社長
6. 石井登喜男 19385 年生、千葉県佐倉市在住、
元ライオン化学(株)工場長
7. 藤井 勳 1936 年生、東京都小平市在住、
元新日鉄(株)
(有)環境情報システム 代表取締役
8. 森山憲夫 1937 年生、神戸市在住、
元バンドー化学(株)
武蔵工業大学沼田研究室
9. 荒井康全 1938 年生、町田市在住、
元昭和電工(株)数理技術部長、
東京工業大学資源化学研究所特別研究員
10. 圓山壽和、1946 年生、川越市在住、
川越市役所市長室理事
11. 植竹敏夫、1946 年生、横浜市戸塚区在住、
(株)ゾンテム建築企画研究所代表

HEART の会

発行 平成 15 年 10 月

発行元 人間環境活性化研究会(略称 HEART の会)

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-11-14 赤坂ベルゴ 907

Tel : 03-3586-4183 FAX03-3586-4393

郵便振替口座番号 : 00100-2-577239

e-mail : heart-y@ag.wak.wak.com

ホームページ : <http://www.icrc.co.jp/heart/>

人間.....**H**uman..... 人生
環境.....**E**nvironment..... 共生
活性化..... **A**ctivating..... 再生
研究..... **R**esearch..... 探索
会..... **T e a m**..... 出合
名称と略称の由来です どの言葉にも本質に『心』があります

人間環境活性化研究会